

科学技術全盛時代に精霊の居場所は

はなみつき

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

あんまり無いけど無い事もない。

目次

泣き虫人魚姫

野良精霊

壱世壊

I : P

壱世壊の代用世界

イラストストーリー

お願い

精霊抜け

風の巫女だった人形 (前編)

風の巫女だった人形 (後編)

潜水融合

木越て林超えてもはや森

聖天樹の大母

デュエル部

トレーディング・カード

三枚

サイバース精霊界

S・F

女怪盗

ログアウト

始めの壱歩

オリパ

壱世壊へ

襲撃

1

5

9

14

19

26

30

35

41

47

53

58

63

69

74

79

87

92

98

105

110

118

124

お兄ちゃんの選託	322
お兄ちゃんの選択	312
オルフェゴール・リリース	300
オルフェゴール・アタック	283
星遺物へ誘う悪夢	266
……の塔	259
最後のトロイメア	252
嬉しくない再会	243
ハツカーの証左（ガバ）	237
アザナー事件	231
迷いフェニックス	225
ドラゴンメイド喫茶	215
バード・ストライク	207
ハノイの騎士（裏）	196
ハノイの騎士（表）	191
妹のイグニス……？	184
兄の愛はAIより遭いし	177
黄色のユニコーン	171
鳴らないオルゴール	164
ありがたい、さようなら	158
世壊を渡る者	148
壱世壊の未来	143
ライフポイント	136
影の行進	129
壱世壊の王	

囚われの姫と怪盗二人

Eメール

住所特定

SOLtIS

映え

カードの精霊

2／3の答え

サイバース拉致

太陽と月

チャレンジ成功ッ！

光属性サイバース族

夜の追跡者

小さな騎士

作戦会議

モンスターを操るデュエル戦士。自律型精霊シャドール「ミドラー
シユ」を駆り、セキュリティ・フォースに強襲を仕掛ける。その姿は、
正に悠々自適の如し。

正義

脱出

封印されしカード

Into the VRAINS

人攻智能

スキル

S Force

デュエルモンスターの精霊として

485

476

469

461

454

443

433

427

420

413

408

400

394

387

380

373

364

359

352

346

339

332



泣き虫人魚姫 野良精霊

人々の意識がネットワーク空間内で過ごせるようになったのはいつだろうか。

技術は進歩した。

人間はネットワーク空間内で仕事をし、遊んで、買い物をして、デュエルをするようになった。もちろん、現実世界でも仕事をして遊んで買い物をしてデュエルをすることが無くなったかと言うと、別にそんな事もないのだが、確実にその頻度は少なくなつて来ている。

『ここから私達を出してください』

『そのアンタ！ 私達の事見えてるんでしょ！』

『……お願い……』

そんな世界に完全に適応出来ず、未だに紙でデュエルをするために紙のカードを求めて実店舗に足を運んでしまうのは俺が所謂転生者と言うやつだからだろうか。デジタルカードゲームは前世からある分野ではあったが、やはりデュエルモンスターズはどこまで行っても対戦相手と面と向かって紙のカードを握りしめてやるものであるという固定観念に囚われてしまっているのかもしれない。

『出してよお……』

『なんで、無視するのよ……』

『……ダメ……かな……』

俺は一度こことは違う世界で死んだ。事故だった。はつきりと覚えてる。だが、次の瞬間に気が付いたときには遊戯王VRAINSの世界に生まれていた。

また赤ん坊からやり直しと言うのは少し堪えたが、特別家族に問題があつた訳でも無かつたし、大きな事件に巻き込まれたなんてことも無かつた。平々凡々だけでも何も不自由のない二度目の人生を16年ほど過ごしてきた。

時々人に見えないモノが見えてしまうという事を除いて。

『うつ……うつ……』

『なんとか言いなさいよお……』

『……………グスン……………』

大切にされたカードには精霊が宿る。

それは前の世界でもこの世界でも多くのデユエリストが何となく知っている事だ。それと同時に前の世界でもこの世界でもそんな事を完全に信じている奴なんて居ないというのは皮肉な共通点だと思う。

だが時として、特に大切にされた訳でも無く、パックから出てすぐの美品状態でショップに売られたようなカードにも精霊が宿っている事がある。

俺はそいつらの事を野良精霊と呼んでいる。

詳しい事は分からないが、そう言った精霊は人間界への興味や特別な事情から精霊界から自身の依り代となるカードの一枚に渡って来る事が多いそうだ。

そんなカードの精霊をこんなにもはつきりと視認できてしまうのも、やはり俺が転生者だからなのだろうか。

泣き出した3人の涙は真珠へと形を変えてボロボロを音を立てながら落ちていく。あんまりにも泣きすぎて真珠がショーケースの中を埋め尽くしそうさ。

「……………店員さん。こいつら下さい」

「まいど〜。ん？ このカードなんだっけ。ああ、融合モンスターパーツか。あんまり人気ないからまとめて買ってくれるならサービースしとくよ」

そうして俺はティアラメンツ・メールウ、ティアラメンツ・シェイレイン、ティアラメンツ・ハウフニスカードをそれぞれ三枚ずつ合わせて500円ポツキリで買い取ったのだった。

☆

「さて、これで君達も自由だ。君たちが求める決闘者^{マスター}の所にでも行く

と良い」

『『え？』』』

この世界にカードの精霊は少ない。

オカルトを全面に出していた遊戯王GXでもそうポンポンカードの精霊が居た訳では無いが、VRAINSの世界ではそれ以上にカードの精霊と言うものが少ない。

今時のデュエルモンスターズのカードはクラウド上にデータ化された物を使ってデュエルするのが基本だ。そうなってくると、デュエリストの血と汗と涙を死ぬほど吸って絆を育むようなカードは少ない。つまり、俺が時々見るようなカードの精霊は野良精霊がほとんどと言う事になる。野良精霊になるような奴らは好奇心旺盛で、すぐに俺のような普通の高校生からは離れて行ってしまふのである。

俺が自分の力に気が付いたときはそれはもう喜んだ。なぜなら一人の遊戯王プレイヤーとして、自分のデッキのカードの精霊とコミュニケーションをとるのは一つの憧れだったから。昔はショップで精霊付きのカードを探し回ったが、上記の理由で俺がショップで見つけて買ったあいつらはみんな俺の所から居なくなってしまった。

きつと今頃あいつらも楽しくやっているのであろう。別に喧嘩別れた訳ではないから辛くはない。辛くはないが、そんな事があったので俺としても最近は積極的に精霊付きのカードを集めるようなことはしていない。

これは余談だが、どうも精霊が宿ったカードがショップのストレージやショーケースにあった場合はそこから離れることが出来ないらしい。変な所でカードとしての性質を受け継いでいるせいでやたら悲壮感たっぷり声を掛けてくる精霊達を見過ごせず、買い取ってはこいつらを好きにさせてやっているのだ。

……中には野に離すのは拙かったような奴らも居たような気もしないでもないが、大丈夫だと信じたい。

『えつと……その……もうしばらくあなたの所に居させては頂けないでしょうか？』

メルルウが言う。

「ん？ 君たちは人間界に興味があつてこちらの世界にやつて来たんじゃないのか？」

『違うわ。私達は……あの世壊から逃げて来たのよ』

シェイレーンが言う。

『……あそこは……地獄だった……だから、もう戻りたくない……』

ハウフニスが言う。

「……そうか」

どうやら彼女たちは特別な事情故に人間界を訪れたタイプの様だ。そう言った子達も今までいたが、皆同じようにどこかに行つてしまつた。

きっと今回も同じだろう。俺はそう思つて彼女達がどこかに行つてしまうまでの間だけでもデツキを組んで使うことを決めたのだつた。

壺世壊

この世界、と言うよりもこの頃の遊戯王では融合、シンクロ、エクシーズ、ペンデュラムの既存の特殊な召喚方法を使うテーマは人気が低かった。

それは何故か？ 俗にリンクショックと呼ばれるルール改定によってリンクモンスターを前提として既存のエクストラデッキのカードは展開しないといけなくなっただからだ。

エクストラデッキから召喚したモンスターは六番目のモンスターゾーンであるエクストラゾーンとリンクモンスターのリンクマーカーの先にしか召喚することが出来ないと言う縛りがある。そうなるとう既存テーマはリンクモンスターを採用しなければエースであるエクストラデッキのモンスターを展開出来なくなるという訳である。

多くのデュエリスト達はミラフオなんかよりもよっぽどこのルール改定によって底知れぬ絶望の淵へ沈められたものだ。

製作者の意図としては高速化し過ぎたデュエルの低速化とか、新しく作ったリンクモンスターを既存プレイヤーに売るためとか、まあ理由は分からないでもない。結局そのルールは不評過ぎて後に変更されるわけだが、今俺が生きているこの世界でそんな事が起こる可能性は低い。

とまあ、何でこんなことをつらつら説明しているかと言うとだ、つまり、現環境においてシンクロ、エクシーズ、ペンデュラムは勿論、ティアラメンツが属する融合テーマは人気が低いという事だ。(儀式？ ドライトロンと組んでなさい)

「人気が低いという事は、関連カードも安くて助かるな」

『私達を安い女とでも言いたい訳！』

「そこまで言っていないが？」

シエイレーン、メルウ、ハウフニスを使ってデッキを組むと決めた俺はすぐにカードショップを梯子して関連カードを探し求めた。そしてようやく見つけた一枚が『壺世壊Ⅱペルレイノ』。

ティアラメンツモンスターカードをサーチする発動時効果、特定カードの攻撃力をアップさせる永続効果、そして条件を満たせばフィールドのカードを一枚破壊できる起動効果の三つの効果を兼ね備えた中々優秀、いやかなり優秀なカードだ。効果だけを見れば決して30円ストレージに眠っていて良いカードではないが、やはり融合テーマのパーツなうえ、汎用性が無いと言う事であまり売れないのだろう。

『私達は……私達はあ……安くない、つてえ……』

「いや言つてないが？」

『泣かないで下さい、シェイレーン』

『よしよし……酷い人ね……』

「だから言つてないが？」

涙を真珠に変えながらボロボロと泣き出すシェイレーン。普段は気の強い性格のようだが、ふとした瞬間に今みたいに突然泣き出してしまう。困ったものだが、彼女達が未だに話してくれない身の上を考えると仕方がないのだろうか？

「なあ。ところで、この『ヴィサスⅡスタフrost』つて……」

『うえくん……』

『……ぐすん……』

『……………スん』

「……はあ、またか」

そして気が付くと三人揃って泣き出すものだから俺の周りはいつも彼女達の涙で出来た真珠で埋め尽くされてしまう。

どうやらまだまだメンタルケアが必要なようだ。

「おう、世良！ 何一人でブツブツ言つてんだ？ ……つて、なんだ？

また紙のカード広げながらデツキ組んでんのかよ」

「島か」

精霊達のメンタルケアについて頭を悩ませていた俺に声を掛けて来たのは部活動仲間の同級生、島直樹だった。あ、世良って言うのは俺の苗字な。

「世良はまーたデツキを組み直してるのかあ？」

「まあな。色々あつてね」

『誰？ この無神経そうな男』

『悪い人じゃ無さそうですけど』

『……単純そうね』

島が声を掛けて来た瞬間に泣くのを止めて俺の後ろに回って姿を隠す三人娘。ティアラメンツ 精霊の姿は島には見えていないからその行動は無駄だ
と思う。そしてそつと俺の影から顔を出して見た三人の島への評価
はマイルウ以外は結構酷いものだった。

悪い奴じゃないんだよ？ うん、悪い奴ではない。

「ダメダメ、そんなんじや全然ダメエ！ デュエリストたるもの、己の
信じたテーマを貫き通すべきだぜ！」

おつと、その発言はこの世界の主要キャラクターの何人かにぶつ刺
さるからそれ以上はいけない。

「そういう人も居るよな」

「だろお？ 俺なんか長い事探し続けた三枚目のグリーン・バブーン
をお前から貰ってから初手でグリーン・バブーンを引く回数が確率以
上に増えた！ ……気がするんだぜ！ これはきつとカードを愛し
続けた俺に代えてデッキに精霊が宿っているに違いない!!」

「ははは、そうかもな」

『あら？ この男、やっぱり気が付いているのかしら？』

『うーん……でも、私達に気付いた様子はありませんでしたよ？』

『……グリバブもしょんぼりしてる』

そう、俺が島に渡した森の番人グリーン・バブーンは精霊付きだ。

まだ俺が精霊付きを探し回っていた時に見つけた一枚なのだが、彼
も俺に使われる事に何かしっくり来なかったみたいで新しい決闘者マスター
を探すように相談（ボディーランゲージで）された。そして、彼のお
眼鏡にかなったのがデッキに投入する三枚目のグリーン・バブーンを
探していた島と言う訳だ。

残念ながら島には精霊を認識する能力は無いが、グリーン・バブー
ンも島の事は気に入っているのか今の環境に十分満足しているらし
い。

「ふーん、モンスターの効果で融合召喚が出来るんだな。面白い効果だと思うけど、このテーマのエースカードは持ってんのか？」

『気安く触らないでよ』

シエイレーンのカードを掴んで効果を流し読みしていた島が俺に聞いて来る。ていうか、シエイレーンの島に対する当たりが強くて笑える。

「いや？ 持ってないけど」

「はあ!? ダメじゃん！」

そう、俺が買えたティアラメンツカードはシエイレーン、メイルウ、ハウフニスの下級モンスターとフィールド魔法の4種類。純デッキを組むなんてまだまだ遠い夢だ。

「別に急ぐ必要もないからゆっくり集めるさ」

「たはー！ お前は本当に暢気だなあ。ネットショップでサクツと買えよ」

「バカお前。それは礼儀に反するだろ」

「いや、何の礼儀だよ。意味分かんねーよ」

ネットで検索すればテーマカードまとめて買えるだろうって？

まあ、それはそうなんだが、それじゃあ味がないというか、面白くないというか……分からないかなこの気持ち。

ネットワークで何でもできるこの時代を生きる者として非合理的なのは理解しているがね。

「ったく、めんどくさい奴だな。なら俺もショップでそれっぽいの見つけたら教えてやるよ」

「おう。助かる」

無神経で単純な男だが、島と言う男は悪い人間ではないのだ。

『ひっぐ……変な男に無神経に触られたあ……』

『シエイレーンちゃん……』

『かわいいそう……』

……その反応は流石にあんまりだと思うな、俺は。

LINK VRAINSは大企業SOLテクノロジー社が作り上げたVR空間。

何故か島はこの場所をやたら神聖視して実力のあるデュエリストしか足を踏み入れてはいけなみたいに考えているが、実際の所そんなことは無い。

このネットワーク上の土地にはデュエルモンスターズをやっていない人がリモートワークの場として使っていたり、田舎住みの若者が都会気分を手軽に味わうためにショッピングを楽しんだり、様々な人が利用している。

そしてもちろんデュエリストもその中の一人と言う事になる。

もはや社会インフラとして機能しているLINK VRAINSもそうやって考えてみれば超巨大なソーシャルネットワークサービスなのだ。

と言う訳で、今日俺は巷で話題のLINK VRAINSに来ている。

「おっとっと……相変わらず慣れないなあ」

自分じゃない自分になるという感覚。俺はリアルの身体からそこまで身長等の身体的特徴を弄っているわけではないのだが、それでも違和感と言うものは拭えない。中にはもはや人型をしていないアバターを使いこなしている人たちもいるのだが、正直あれは凄いなと思う。鳥のアバターで空を飛ぶってどういう感覚なんだろうか。

「さーとと、何か面白い事でもあるかな」

俺は前世で生きてきた分、VRネイティブと言う訳ではないため未だにこの空間に対してしっくりこないことも多い。だからと言って、この世界で最も便利なツールを使わない手はない。

ここにはあらゆる物が集まって来る。デュエルモンスターズだけではなく、音楽、アイドル、ゲーム、イラスト、そして情報。

この場所で手に入らない物はほとんど無いと言っても過言ではないだろう。

「お、あのゲームの新作出るんだ。後で予約しておくかな」

あてもなくふらふらと歩くだけでどんどん情報が流れ込んでくる。もはや情報を取捨選択するのも難しくなるくらいに情報が溢れたこの空間は少し苦手だが、嫌いじゃない。

「ん？」

そんな時、向こうから手を振りながらこちらに向かってくる人影が見える。

『おい、ラッセさん！ なんだかお久しぶりですねえ！』

「そうかもな。ここには毎日来るわけじゃないから」

あ、ラッセっていうのは俺のアカウントネームね。

俺はその人物が誰かを確認すると同時に一定範囲内にしか俺の声が聞こえないようにする特殊なミュートモードへと切り替える。
LINK VRAINS
こんな場所だから彼女の服装が浮いているという事もないのだが、彼女の姿を認識することが出来る人間は……未だに俺以外に見たことは無い。

ローラースケートを巧みに操りながら俺の目の前で急停止した彼女は『I：Pマスカレーナ』。そう、カードの精霊だ。

データの世界であるLINK VRAINSに精霊が居る事を不思議に思うだろう。普通のカードの精霊はこの空間には居ない。最近は雛鳥のようにいつでもどこに行っても俺のあとについて来るティアラメンツ達がこの場に居ないのが一つの証拠だ。

だが、例外となる種族が一つある。ネットワーク空間で生まれ、ネットワーク空間に生きる者達と絆を育み、ネットワーク空間に適合した種族。

サイバース族。

そんな彼女もちろんサイバース族だ。

実はこのLINK VRAINSには意外と精霊が存在している。きっと彼ら・彼女らは純粋に絆を育んできたのだろう。サイバース族を生み出したAI達と。

現実世界よりも仮想世界の方が絆を育んでこつちの世界にやって来た精霊の数が多いというのはいつそ皮肉的とも言える。

『ところで……あのお話、考えてくれましたか？』

「魅力的な提案だけだな、それは少し問題があるから無理なんだわ」

『えー！ そんな事言わずにく。どうか私を使ってくれませんかねえ』

「そう焦らずとも、俺以外にもっと相応しいマスターが現れるさ」

『・()』

マスカレーナとは少し前に知り合ったわけだが、その時に『I:P マスカレーナ』を使ってくれと頼まれたことがある。初めてコミュニケーションが出来る人間と触れ合えて嬉しかったのだろう。それに、彼女も好奇心旺盛そうな精霊だし、人間界に興味があるのかもしれない。

その申し出が嬉しくなかったと言えばウソになる。

彼女の能力は非常に強力で一人のデュエリストとして垂涎ものだし、精霊側から求めて来てくれたというのも大きい。

ただ、一つ問題があるとしたら彼女がサイバース族と言う事である。

サイバース族は特別な種族だ。

遊戯王VRAINSのストーリーの根幹を成す自我を持ったAI達が作り出したデュエルモンスターの新たな種族がサイバース族。そして、そのサイバース族を所持しているのは創造主であるAI達と主人公を始めとした主要キャラの数人のみ。

そんな特殊な種族のカードを一般人の俺が使っているのを誰かに見られでもしたらとんでもない事件に巻き込まれる事間違いないのである。

「そんな顔するなよ。こうやってちよくちよく話すくらいしてやるって」

『約束ですからね！』

×Dってな感じの顔をしながらローラースケートで器用にピョンピョンと跳ねるマスカレーナ。

やはり絆を育んで宿るタイプの精霊達はこういった触れ合いや関わり合いのような関係を求める質の様だ。

『あ、そうだ。ラッセさんは知ってますか？ Playmakerって人の事』

「Playmaker?」

ああ！ それって藤木遊作？

って答えても良いんだが、速攻で話の腰を折るのも申し訳ないので少しだけ聞いてあげることにした。

「確か、最近話題になってるヒーローだよな」

『そうですそうです！ 彼はクラッカー集団であるハノイの騎士達をデュエルでちぎっては投げ、ちぎっては投げしているそうですよ』

「ほー、そいつは相当強いんだな」

『それはもう！ 彼が私の姿を見ることが出来ていたら即売り込みに行ってましたよ』

残念だったな主人公。君がいつも通りの遊戯王主人公としての能力を有していたなら、強力な仲間を得ることが出来ていただろうに……。

『そんな彼に関するビッグな情報があるんですよお』

「ほーん」

『今なら私をデッキに入れるだけでこの情報をゲット出来ますよ？ メリットしかないですよ?』

「いや、別にPlaymakerの情報とか必要ないし……」

全部知ってるからな。

『えー。そんな態度で良いんですか？ 彼がラッセさんと同じ高校の生徒だって言ったら……どうですか?』

「藤木遊作でしょ」

だって俺の通ってる高校に島直樹が居たし、そうなると藤木遊作ももちろんいるよね。別に彼らと同じ高校を目指そうと思って目指した訳では無いんだけどなあ。偶然って言うのは恐ろしいね。

『な、なんで知ってるんですか……実は超凄腕のハッカーだったりします? 情報屋だったりします?』

「まあ、色々あってね」

『うぐう……このネタならきつと食いついてくると思ったんですが

……ますますラッセさんに興味が湧いてきましたよ』

「そりやどうも」

そんな感じで色々な話題を話しているうちにいつの間にか結構長い時間ログインしていたみたいだ。

「つと。んじや、俺はそろそろ落ちるわ」

『ありや？ もうそんな時間なんですか？ もういつそのこと、ここで一生過ごしませんか？』

マスカレーナが手を叩いてさも名案かのように地味に恐ろしい事を言う。

「そりや勘弁だな」

『そうですか、残念です。あ、そうそう。ラッセさんの家から西に二駅行った場所の駅前のカードショップにお探しのモノがあるかもしれませんよ？ この情報はサービスです』

「ん、サンキュ。次の休みにでも行ってみることにするよ。それじゃあな」

『さよなら〜』

俺がログアウトする直前に見たの笑顔で手をブンブンと振るマスカレーナの姿だった。

☆

意識が浮上する。

現実世界から仮想空間へ移動するときの感覚に慣れていないと来れば、その逆もまた未だに慣れない物である。

「……ん、んん……んん？」

『……』

『……』

『……』

現実^{ティアラメンツ}にログインした瞬間に見たのは無言で涙をボロボロと流しながらお通夜みたいな雰囲気になっている三人娘だった。

壹世壊の代用世界

「えーっと……何があったんだ？」

LINK VRAINSから戻って来た俺を迎えたのはいつもの如く涙を真珠へと変えながらポロポロと泣き続けるシェイレーン、メルウ、ハウフニスの三人娘だった。

状況が理解できず真っ白になった頭を何とか働かせて紡ぎ出した言葉が上記の一言である。

『……んだかと思った……』

「え？　なんて？」

『アンタが死んじゃったんじゃないかと思ったの!!』

『アナタが不思議な機械を頭に付けて不思議な言葉を呟いてから、私達が何を言っても反応しなくなってしまったので……』

『……とても心配した』

あ、あー。

そう言えば彼女たちに特に何も説明もせずLINK VRAINSにログインしてしまったんだ。

LINK VRAINSにログイン中は意識がネットワーク世界に飛ばされる。そうなるとう基本的なその間自分の身体は動くことは無い。

しかし、万が一現実世界の方で何かがあった時、それに気が付かずにログインを続けてしまつては危険である。そんな事はSOLテクノロジーも理解しており、現実世界の肉体に対する物理的な接触や呼びかけがあった際はログイン中のアバターからでも分かるように出ている。ただ、それは物理的な接触や現実聞こえる声や音に対してのみなのだ。

精霊であるティアラメンツの声がログイン中の俺に聞こえなかったのも納得である。

そして、彼女たちの声や素振りに全く無反応となった俺は……うん、死んだように見えるな。

「ごめん」

『ふん！ 謝ったって許さないんだから！』

そう言つてシェイレーンはそっぽを向いてしまう。

しかし、後ろを向いていても未だに真珠がコロコロと転がっているのが見える。先ほどちらつと見えた目元は随分と赤く腫れぼったくなっていた。

随分心配させてしまったのだろう。

「ホントにごめん」

『もう大丈夫ですよ。何事も無くて安心しました』

ほにやつと笑つたメールウはそう言つてくれた。

シスターみたいな見た目のメールウにそう言われるとなんだか許されたような気持ちになるが、やはり彼女の目元も赤くなつておりその事が俺の罪悪感をチクチクと刺激する。

うう……本当に申し訳ない……。

「心配させてしまったお詫びつて言うのもなんだが、俺に出来る事だったら何でもしようじゃないか」

『……本当に？』

最初に食いついてきたのはハウフニスだった。

彼女は他の二人に比べると感情がはつきりと表に出るタイプではなく、目元が赤くなつていたりはしないが、今も地面に転がつている真珠の総量を考えるとシェイレーンとメールウだけの物とは思えない。

俺の言葉を聞いた三人は顔を突き合わせて何事かを相談している。

『それなら私達もアンタが行つてたりんくぶれいんず？ つて場所に連れて行きなさいよ』

「すまん、その願いは俺の力を超えている」

『なんでダメなのよお……』

「泣かないで……」

お願いを拒否されたと思つたのかシェイレーンは再びポロポロと泣き出してしまう。

俺としても彼女のお願いを聞き入れてあげたいのはやまやまなのだが、出来ない事は出来ない。

LINK VRAINSにも精霊は居る。それじゃあ現実世界のカードに宿る精霊がLINK VRAINSに行くことは出来るのか？

そんな事はとっくに試したことがある。しかし、結果は駄目だった。

現実世界の精霊たちが宿っているのはあくまで実体のカード。そして、LINK VRAINSに持ち込んでいるのはカードの情報だけだ。そうすると、俺がLINK VRAINSで使うことが出来るのは情報としてのカードだけでそのデータに精霊が宿ってはいないのである。

『えつと……それじゃあ、そのLINK VRAINSに行く時はちゃんとやって下さいね？ 心配になってしまうので』

「ああ、それは勿論。だが、そんな事でいいのか？」

『私はそれで充分ですので』

メールウのお願いはお願いとも言えないような細やかなものだった。

しかし、それは俺も次からはそうしようと元々思っていたことだ。これだけで済ましてしまおうと言うのは自分の気持ちとしても物足りない。

『……なら、あれを私達に頂戴……』

「ん？ あれをか？」

ハウフニスがそう言いながら指をさした物は俺の部屋に置いてある大きな大きな水槽だった。その大きさは半端なものではなく、小柄な人間なら4、5人押し込めてしまいそうな程の大きさである。

元は趣味で親父が飼っていた熱帯魚を容れていたアクアリウムだが、最後の1匹が死んでしまったからにはただのガラスのケースと化していた物だ。しかもそのデカさから親父が「邪魔だからスマンがお前の部屋に置いといてくれ」とか言って押し付けられた物でもある。

邪魔だがショーケースとしてのポテンシャルは高かったため、今は俺が適当にフィギュアやレアカードの置き場所として使っていた。

「良いけど、あれをどうするんだ？」

『……あれに水を容れてくれるともっと嬉しい……』

「……あれ一杯にか？」

『……うん。あれ一杯に』

なるほど……あの巨大水槽を満たす程の水か……。

とは言え、わざわざバケツを使って手作業でやる必要はない。家のどっかの蛇口にホースを繋げて水を溜めればいい。それにしてもかなり時間がかかりそうだ。

「よし、分かった！ 何の為かは知らんが、少し待っててくれ」

『……わーい……』

とりあえず、中の物を移動させることから始めるとしよう。

☆

『ふう……やっぱり水の中は落ち着くわね』

『気持ち良いですう』

『……ブクブク……』

数時間かけて水が満たされた水槽の中には今、三人娘テイアラメンツが入っていた。

「そう言えば君たちは水族だったね」

思い返してみれば彼女達のカードの背景は水中や水の上とかだったな。種族やカードイラストから鑑みるに彼女達の本来の生息域は地上と言うよりは水中の方がメインなのかもしれない。

水槽の縁に手を掛けて上半身を水面から出したシエイレーン。

逆に頭の先と目くらいしか水面から出ていないハウフニス。

水槽の縁に腰かけて足を水に沈めるメイルウ。

三人は思い思いの方法で楽しんでる。

ていうか、実体を持たない精霊である彼女達が現実世界の水を感じられるのだろうか？ 実際、メイルウは足をぶらぶらさせているが水面はピクリとも動いていない。きつと精霊の三人は水のエレメント的なサムシングを感じる事が出来るんだろう。知らんけど。

やはり精霊というのは不思議で一杯だ。

あ、このままだと水が腐ってしまいそうだし、循環装置のスイッチも入れておこう。少しでも水流がある方が彼女達にとっても良いかもしれない。

でもまあ、彼女達が満足しているようで俺も嬉しい。

こうしてアクアリウムとしての役割を再び全うできるようになった水槽に新たな住民が出来たのだった。

イラストストーリー

「さてと、そろそろ出かけるとするか」

『あら、どこかに行くのかしら?』

『私達もついて行きます〜』

『……丁度暇してたところなの……』

すっかりテイアラメンツ達の溜り場となつてしまった巨大水槽から顔を出す3人娘。朝目を覚ますと視界に入る水槽の中に少女たちが浮いている光景は何度見ても異様としか言えないが、人間とは慣れる生き物である。いつの間にかそれが自然になつてしまった事になると恐ろしい事か。

久しぶりに水を満たしたアクアリウム。俺から見たらそんな光景であるが、俺以外から見ると何もいない水たまりである。俺の部屋に入つて来た親父に「……ミジンコでも飼つてるのか?」と言われた時はなんて答えるか悩んだ物だ。

ミジンコ呼ばわりされてテイアラメンツ達が怒っていたが、親父には見えて居ないのだから許してあげて欲しいものである。

果たして、水槽に少女を飼っている(ように見える)人間と水槽に砂も水草も水生生物も飼わずに水だけ容れている人間、どちらの方がヤバイのかと言う話は永遠に忘れるようにしよう。

「知り合いの情報によると少し遠くのショップにお目当ての物が有るんだと」

『ふーん。なら早く確かめに行きましょう!』

ふわりと舞い上がって水槽から飛び出すと、俺の横に並ぶようにして浮かぶシェイレーン。メールウとハウフニスもそれに続く。

「とりあえず、最寄りの駅まで行くことにしますか」

精霊三人を引き連れてマスカレーナの情報の真偽を確かめることにした。

「えーつと……ここで良いのか？」

『随分寂れた店ね』

『趣があつていい店だと思えますよ？』

『……ボロ……』

西に二駅行った場所の駅前のカードショップ。それは築何十年み
たいなビルの一室に入っている小さなカードショップだった。ビル
の外壁もボロボロだったが、中もまともに手入れがされていると思
えない。

最寄駅から西の方向に行く電車が二本あつたからどつちか分から
ず適当に選んだが、もしかして間違つたか？ しかし、実際に駅前に
カードショップはあつた訳だし……いやでも、この世界にカード
ショップなんてコンビニの数ほどある。この店が正解かどうかもわ
からん。

「まあ、折角ここまで来たんだ。入らないって選択肢はないだろ」

『ちよ、ちよつと不気味ね』

『シエイレーンは昔から怖い話や場所が苦手でしたね』

『こ、怖くなんてないわ……』

『……』

そう言いながらもすでに涙目なのだが、かわいそうだから指摘する
のはやめておこう。ハウフニスの無言のジト目がシエイレーンに突
き刺さっているが、本人が怖くないというのだから怖くないんだろ
う。

シエイレーンの覚悟も決まったようなので俺はショップの扉を開
けて中に入る事にした。

意外、と言つては失礼な話だが、扉の向こうはいたって普通のカー
ドショップだ。

各種新品のパックが並べられたレジ周り。スリーブ、デツキケー
ス、デュエルディスク等のサプライ品。目玉の高額カードが並んだ
ショーケース。1000円から10000円位の値段が付いたカードが
まとめられた棚。そして無造作にカードが箱に詰め込まれた30円
ストレージ。

建物のボロさに少々ビビりはしたが入ってみればなんて事はない。

「おっかなり種類が豊富だな」

だが、気になるのは客が俺達（実際は俺だけ）しか居ないのと店員の姿が見えない事だ。

これだけ品ぞろえが豊富な店なら客入りも良さそうなものだが？

『きつと私達のカードはあの辺りね！』

そう言つてシェイレーンは高額カードが並ぶショーケースの方へと飛んでいく。いやあ……言いにくいけどそこには無いんじゃないかなあ……。

『……無かつたわ……』

「ま、まあ、ああいうのは限定品とか希少価値が高いカードが中心だからな。仕方がないさ。ほら、そっちの値段が付いてる棚のどこかにあるんじゃないか？ みんなも探すの手伝ってくれよ」

『うん……』

『わかりました』

『……任せて……』

という訳で、すっかり一枚一枚カードが展示されているフロアの探索は彼女たちに任せて俺はストレージボックス漁りでもしますかね。

適当に一束掴んでサツサツとカードを捲つて流し見をしていく。

通常モンスター、通常モンスター、古代のバーンカード、古代のライフ回復カード……。

まあ、ストレージボックスなんてこんなものである。

VRAINSの世界は攻撃力至上主義みたいなどころがあるGXとは違い、攻撃力が低かろうと効果が有能であれば高い評価が与えられ、攻撃力がいくら高かろうが使いにくければロマンカードの評価を与えられる世界である。伊達に手札発動泡影マルチフェイカーがその辺を歩いている世界ではない。

だが、このあたりの考え方は前世と同じなため、結構馴染み深いものだったりする。

「……『テラ・フォーミング』、『おろかな埋葬』か。もう持ってるけど

こんな何枚あっても困らないから買いだな」

多くのデュエリストが使うような汎用有能カードと言うのは再録も多くされる。そうすると市場で流通する数も自然と多くなる。つまり、お手頃価格で購入することが出来るという訳だ。

特に今組もうとしているティアアラメンツにも使えるこれらのカードは必要だろう。すでに持っている物は他のデッキに採用しているし、デッキを変える度に抜き取って入れ替えるのは手間なのだ。……まあ、1枚2000円くらいするような高額汎用カードは中々そうもいかないのだけだね。

その点はデータ化したほうがデッキの管理は楽だったりするのだが……魂にまで染み付いた癖は中々抜けないものである。

購入候補のカードを抜きとりながら箱の中のストレージを次々と確認していく。この作業もすつかり慣れたものだ。

「……ん？」

そしてずっと流し見していたことで頭がぼーっとして来た頃、カード名に「壺世壊」の文字が見えた。壺世壊はティアアラメンツカードを指定するフィールド魔法、『壺世壊Ⅱペルレイノ』と同じ冠名だ。という事は、ティアアラメンツカテゴリーのカードの可能性が高い。

『壺世壊ティアアラメンツ・メタノイズに軋む爪音』……。ふむ、やっぱりティアアラメンツカードだ」

ティアアラメンツの罨カード。

イラストには三人娘と謎の男キャラとSDキャラが描かれている。ティアアラメンツ達

「どれどれ……なるほど、相手モンスターを裏側にする……つて事はリンクやシンクロ、エクシーズ召喚を妨害することが出来る……ほんで、デッキからティアアラメンツを墓地に送る……そうか、これで彼女達の効果を発動させる訳だ」

妨害と展開を同時にこなすことが出来るのは優秀だな。罨カードと言うのは今の時代でもすでにやや遅い印象を受けるが……しつかり引き込めれば強力なカードだ。

「また『ヴィサスⅡスタフロスト』か……。ティアアラメンツカテゴリーでも無さそうなのにこのカードでも指定されている……そうか、イラ

「ストストーリーの主人公か」

デュエルモンスターズ、いや敢えて遊戯王カードと呼ぼう。遊戯王カードのイラストにはストストーリー仕立てになっているものがいくつが存在している。

ガスタ、リチュア、シャドール、星遺物、そして烙印等々。どのストリーもその……なんだ……非常に趣深い話な訳なのだが……まあそれは今は置いておこう。

その中でも烙印世界の主人公『アルバスの落胤』は世界観を共通する複数カテゴリーで指定されていた。

つまり、この壺世壊に軋む爪音に描かれている『ヴィサス』スタッフロスト』もまたそう言う存在なのだろう。

「イラストストーリーか……」

ティアラメンツカードを集めて行けば彼女達の事情というものもいずれ分かってくるかもしれないな。

『……何の成果も得られなかったなんて……うう……』

『大丈夫ですよ、シエイレーンちゃん。きつとあの人がしっかり探してくれそうですから』

『……残念ね……』

そんな事を考えているうちにみんなも一通りカードを探し終えたようだ。まあ結果は……お察しだな。

「お疲れさん」

『うう……ごめんなさい……』

「そう気にするな。こつちでまた一枚見つけた」

俺が見つけたティアラメンツ罨カードを三人に見せる。

『また安い箱の中……ぐすん……』

『あはは……やっぱり私達って……ぐすん……』

『……しよんぼり……』

そしてきめぎめと泣きだす三人。

カードの精霊にとって関連カードが高額で取引されることは大事なことなのだろうか？ 人間の俺にはよく分からない感覚だが、とりあえず慰めておくことにしよう。

「お前らが高額カードに負けなくらい強いつて事は俺が知ってるから心配するなつて。んじゃ、ちよつくら清算してくるから」

『……もう一回あつちの棚を見直してくるわ』

『私も念のため……』

『……私も……』

「あ、うん。じゃあちよつと待つてな」

涙目になりながら値段が付いたカードが並んだ棚を舐めるように見直している三人は置いてレジへと向かう。

「これ、お願いします」

「……」

いつの間にかレジに立っていた黒髪のバイトっぽい兄ちゃん。俺がストレージ漁りに熱中しているうちに出て来ていたのだろうか？

その店員にストレージから掘り出してきたカードを渡す。

「90円です」

「はい」

小銭で丁度90円。

それと引き換えにしてレシートと4枚のカードを受け取る。

……あれ？俺が買ったのは3枚のはずだ。30円ストレージのカードが3枚で90円。値段もそう言っている。

あ、そつかどれかのカードに引つ付いちやってたんだ。古い中古のカードにはよくある事だ。

「あの、このカード……」

間違えて持つて来てしまいました、と言おうとした俺の言葉を遮るように店員は言う。

「そのカードを、君に託す」

「え？」

どういう意味だ。

頭の上にハテナを浮かばせながらも俺に託すと言われたそのカードに目を落とす。そのカードの名前は、

『ティアラメンツ・キットカロス』

間違いなくティアラメンツテーマのエースモンスターだ。

「あの！ これって……居ない？」

店員から目を離れたのは一瞬だった。その一瞬の内にその男は消えてしまっていた。

「これは一体……」

訳の分からない事が起きている。

だが、一つ確かなことはこのキトカロスのカードには精霊が宿っていないという事だ。

*

「行くぞ」

「ホントにあんなガキに任せて大丈夫なのか？」

「彼なら上手くやるだろう」

「ふーん、そうかよ。お前が何を考えてるのか俺には解らねーよ。なあ、ヴェィサスよお？」

お願い

謎のカードショップ店員から受け取った『ティアラメンツ・キトカロス』のカードを家に帰ってから三人娘ティアラメンツに見せていた時の事だ。

『キトカロス様だわ……』

『……キトカロス様……』

『キトカロス様は……大丈夫でしょうか……』

「どうということだ？」

三人のキトカロスのカードを見る表情は久しぶりに同郷の友人に会えた時の喜びでもなければ懐かしさのようなものでもなかった。むしろ、心配や恐れのようなものだった。

『私達があの世界から逃げて来られたのはキトカロス様のおかげなのよ』

『世壊を出ようとしていた私達を見逃してくれたんです……』

『……私達は今こうしていられる……』

「みんなの恩人なんだな」

『ええ……』

俺は彼女達の世界の事はよく知らない。

知っているのは今まで手に入れたカードのイラストの情報だけ。彼女達の世界がペルレイノと呼ばれている事。彼女達はいずれストーリーの主人公であるヴィサスⅡスタフロストと出会うという事。たったこれだけだ。

ティアラメンツカードを集めて行けばいずれ彼女達のストーリーも把握することが出来るだろう。いや、わざわざそんなことしなくとも、彼女達自身から話を聞けば良いだけだ。

だが、俺は過去の失敗から彼女達の世界の話聞くことを躊躇してしまっていた。今思い返してみても苦い思い出だ。

あの時と今では状況が違うのは確かだ。それは、俺が『あの子』の背景ストーリーをよく知っていたという事。だからこそ対応を誤った。

それが原因だったんだろう。あの子は居なくなってしまった。彼

女が何を思っただけで俺の前から姿を消してしまっただけか、今ではもう知ることは出来ない。

それ以来、俺は精霊たちの過去ストーリーと未来について触れないようにして来たんだ。

俺には彼女達の問題を解決できるような能力は無い。俺にある力は所詮精霊達を視ることが出来る、という事だけ。俺から精霊たちに触れることも出来なければ、サイコデュエリストのように実体化させることも出来やしない。

やってあげられる事と言えば、せめて今この瞬間を穏やかに過ごさせてあげるくらいだろう。

『……………』

沈黙が部屋の中を包みこむ。

彼女達が涙を真珠へと変えながら泣くことはいつもの事だ。しかし、今日の涙はいつもよりも重い気がした。

確かに彼女達はこの世界に来て少しは安らぎを得たかもしれない。確かに彼女達は俺と過ごす短い時間の中で少しは楽しみを見出してくれたのかもしれない。

それでも、彼女達がこの世界にやって来た理由は興味や好奇心ではなく、特別な事情によるものと言うのもまた確かだ。

だから……

「みんなは……どうしたいんだ」

聞いてしまう。

『私達は……………』

『キトカロス様を……………』

『……………助きたい……………』

「……………」

俺は何も言わず、彼女達の言葉を聞く。

こうしてティアラメンツの事情に踏み込んだ後だというのに、情けない事に怖くて怖くて仕方がない。不安だ。一体自分に何が出来るというのだろうか。分からない。

そもそも俺が何もしなくてもストーリーの主人公である『ヴィサス

『スタフロスト』が全部解決してくれるのではないだろうか？ いやでも、遊戯王のストーリーって大抵ろくでもない事になる場合が多いから全く油断は出来ない。そして、そんなストーリーに俺なんかの介入で果たしてどうにかなる物なのだろうか？

『でも、私達だけではあいつには太刀打ちできない……悔しいけど……』

『あの人の力はとても強大で、恐ろしいです……』

『……あの世壊では誰も逆らえなかった……』

だとしても、だ。

『『だからッ……お願い！ 私達を……助けて!!』』

精霊達に願われて、無碍に断るなんて事は……出来ない。

「分かった」

精一杯の虚勢。「俺に任せろ」と言う事が出来ない自分の不甲斐なさに嫌気がさすが、彼女達のお願いを引き受けたという事実は変わらない。

「……だが待てよ……大きな問題が一つある」

『問題って?』

しかし、彼女達に協力するにあたって避けられない問題がある。この問題を解決しない限り手伝いすら出来ない大問題。

「どうやってペルレイノに行けばいいんだ?」

『『……』』

あのお……啖呵を切った手前三人同時にそんな目で見られるとても恥ずかしいのですが……。

だ、だつてさ? 俺は精霊じゃなくて人間だし? 精霊界への行き方なんて授業で習わなければネットにも書かれてないんだぜ? 知ってる訳無いんですわ。

それに、彼女達がアニメで出て来たユベルみみたいに尋常じゃない力を持っていて、人間を精霊界に引きずり込むような力業が出来るようには見えない。

『はあ……アンタはホント……』

『ま、まあ……あの人もキトカロス様を殺すような事はしないはず
す』

『……時間は多くはないけれど、無いわけじゃない……』

「焦っても仕方がない。ペルレイノへの行き方を何とかして探そう」

決意を新たに、俺達は目標を定めた。

彼女達を虐げ、ペルレイノの王を自称する『レイノハート』を討つ

！

「そろそろデッキを完成させないといけないな」

万全を期すために、俺はあの失敗以来使う事を避けていたカード達
を手に取った。

精霊抜け

ティアラメンツのカード効果を読んだ時、最初に頭に思い浮かんだ相性の良さそうなカード群はライトロードだ。ライトロードは『自分のデッキの上からカードを○枚墓地へ送る』という誘発効果が特徴のカード群である。これはティアラメンツと文字通り同じ効果であり、墓地へ送られることで効果を発動するティアラメンツとの相性はとても良いと言える。

一つ気になった点があるとすれば、ティアラメンツ・ライトロードデッキだとティアラメンツの効果による融合をティアラメンツ融合モンスターもしくは素材ガバガバの实质汎用融合モンスター達にしか使えないことだ。それにキトカロスの融合素材はティアラメンツモンスターと水族なため、ライトロードモンスターを融合素材として活用できないのが痛い所でもある。

彼女達の融合効果は別にティアラメンツ融合モンスターだけに限定された物ではない。つまり、ティアラメンツを実質的な『融合』カードとして使い、別カテゴリの融合体エースモンスターの召喚に繋ぐ事が出来ると言う魅力は捨てがたい。

だが、俺はそんな相性が良さそうなカード群に思い当たる物があつた。

それはシャドール。シャドールもまたティアラメンツと同じ融合テーマであり、さらに『このカードが効果で墓地へ送られた場合に発動できる』という条件でもう一つの効果を起動できる点もシナジーとなりうる。

また、ライトロードはデッキからライトロードモンスターを墓地に送るだけ送ってエースモンスターである『ジャッジメント・ドラゴン裁きの龍』を召喚するのが目標であるため、デッキから墓地に送られることで効果を発動するモンスターも居なくは無いのだが、その数は意外と多くない。

その点、シャドールカテゴリのモンスターは全員墓地に送られることで発動する効果を持っているためティアラメンツの墓地送り効果も無駄なく使うことが出来る。

二つ目の理由はシャドールの融合素材はシャドールだけを指定するものだけではなく、属性で指定するものが多いという事。

これによってティアラメンツを融合素材にしつつシャドールの融合体を召喚することが出来る。

ティアラメンツの属性は闇。シャドール+闇属性の融合体はとても強力なカードであり、このカードを無理なくフィールドに立てることが出来るというのは非常に大きい。

そして、シャドールを選ぶ最後の理由。

それは俺がすでにシャドールカテゴリのカードを多く持っているから組みやすいという事だ。

『ねえ、その箱の中には何が入っているのかしら?』

「ん? ああ。カードだよ。ここにあるカードと君達でデッキを完成させようと思ってね」

『私達関連のカードを集めるのはもう止めるの?』
「いや、それも続けていくぞ?」

キトカロス救出を決意した俺はインターネットでのカード探しも解禁してカードの搜索をしていた。そもそもが俺の個人的な信条と急ぐ理由もないという事から実店舗でカードを実際に見て買うようにしていただけであり、急ぐ理由が出来た今となっては俺の信条なんてものは二の次で良い。

だが、壱世壊カテゴリーのカードを探しても俺が持っている物以外のカードは見つからなかった。もしかしたら現在販売されているティアラメンツカードは全種類集めたのかもしれない。

なら、デッキ構築用に二枚目三枚目の同名カードを購入しようと思っただが、探してみるとどこにも売っていない。ペルレイノや軋む爪音、キトカロス等、かつて販売されていた形跡はあるのだが、すべて売り切れや販売サイトが無くなっていたりしたのである。これは紙のカードだけでなくデータの方でも同様だった。

この世界のカードのデータ販売は欲しい人が全員データを購入できる訳では無い。希少性の維持の為なのか、もしくはこの世界の人間にとってカードは個人のアイデンティティと直結しているところが

あるから同名カードを無限に作るような事はしないのか。

理由は分からない。

ちなみにカードのデータを一回でも無許可で複製なんてしようものなら次の日には家にポリスがやって来るだろう。

それはそれとして、もしかしたらテイアラメンツテーマは随分昔に作られたテーマで、今は刷られていないのかもしれない。そのせいで誰もテイアラメンツカードを取引しない、もしくはデータ化されたカードを使うのが普通となる時代より前に販売されて、データ化されたテイアラメンツカードの数が少ないのか。

「何にしてもデッキは作っておこうと思ってね」

俺が手にした箱に入っているのは特に思い出深いカード達。

かつて短いひと時でも行動を共にした精霊達に関連したカードが納められた個人的に特別な意味を持つ箱である。時々箱から出してはみんなの事を思い出すのがちよつとしたお気に入り時間の時間だったりする。

そして、その中にはかつて精霊が宿っていたカードも含まれている。

精霊との別れは島に『グリーン・バブーン』を渡したように精霊付きのカードを誰かに渡すことが多い。しかし、中には精霊界に帰るなどしてカードから精霊が抜けた者も居るのである。

「この中のカードは思い出のカードだね。まあ、この箱の中にあるカードの精霊達は既にみんなどこかに行ってしまったんだけど」

『あ、このカードから少しだけ精霊の気配を感じます』

『え？ そうかしら？』

『……シエイレーンは鈍感だから……あ、これも精霊付きだったのね……』

『はあ!? 私にだってそれくらい分かるわよ! ……これなんかそうじゃないかしら!』

箱の中からカードを一枚一枚並べていく。

メイルウとハウフニスはかつて精霊が宿っていたカードをピンポイントで当てているが、シエイレーンは元精霊付きのカードと特に精

霊が宿ったりはしていなかったが関連カードだから一緒にしまっていたカードとの区別がついていないようだ。

そして、箱の中から目当ての一枚を取り出す。

『あー、このカードは元精霊付きね！ 私にも分かるわよ！』

そう言つてシェイレーンが指を差したのは今俺が手に持っているカード。

『エルシャドール・ミドラーシユ』

それがこのカードの名前だ。

シャドールモンスターと闇属性モンスターを素材にして融合召喚する事が出来るこのカードはお互いの特殊召喚を一回までにすると言う極悪ロツク性能を持っており、前世でも大暴れしていたものである。

特殊召喚を多用してリンクマーカーの数を増やしていくこの世界では刺さりに刺さるメタカードとして機能する。また、このカードは効果破壊に対する耐性を持っており、先行で立ててしまえばステータスの低い展開用のモンスターでは絶妙に太刀打ちできない2200打点も偉過ぎる。

「……」

『？ アンタ、どうしたの？』

『なんだかとても悲しそうな顔をしています』

『……大丈夫？ ……』

「ああ、ちよつと思ひ出しちゃつてさ……」

それは俺の中の苦い思ひ出。

まだ精霊付きのカードを積極的に集めていた時の思ひ出。

『……よしよし……』

「ありがとう、ハウフニス」

どうやら過去を思ひ出していた俺はあまりいい顔をしていなかったようだ。頭を撫でるハウフニスの手の感触を感じることは出来ないが、心が軽くなったような気がする。

『その……余計なお世話かもしれませんが、あなたのお話を聞かせては頂けませんか？ 誰かに話せば少しは気が楽になるかもしれません』

ん』

『そうね。話を聞くくらい、してあげても良いわよ?』

「メイルウにシェイレーンも、ありがとうな」

そう言えば、あの時の事を誰かに話した事は無かったかもしれない。
い。

親父やオカンは勿論、人間の知り合いにもカードの精霊を視ることが出来る人は居ない。そんな人たちに話をして頭がおかしくなつたと思われまいだろう。

精霊の友達ももちろん居るが、そう言った話をするような流れにはならなかった。何より、俺自身があれ以来精霊達との関わり方に気を遣っていたからというのも大きい。

「あんまり面白い話じゃないけどな……それでも良ければ」

思い出すのはミドラーシュを歩きつけのカードショップで見つけた日の事。

今から10年位前だったか。

それは、無駄に知りすぎていたバカな転生者の話。

風の巫女だった人形（前編）

あれは今から100年位前だっただろうか。

当時の俺はお小遣いが貯まったらカードショップに赴く平均的な小学生だった。いや、ネットショッピングが主流のこの時代にわざわざ店舗に足を運んでカードを買いに行っていたという点では珍しい子供だったかもしれないな。

行きつけのカードショップに行った俺が目にしたのはやや高額なカードが並べられたガラスケースに納められた『エルシャドール・ミドラーシユ』のカードとそのケースに腰かけるように佇む彼女だった。

「こんにちは」

『……』

「君は誰かを待って居るのかい？」

『……』

「それともここが気に入っている？」

『……』

俺が声を掛けても彼女が返事をするどころか身じろぎすらしなかった。

ミドラーシユと言うモンスターはその出生というか成り立ちからおしゃべりな娘だとは思っていなかったが、今までカードの精霊に何らかのアクションを仕掛けて無反応だったのは初めてだったので少し驚いたのを今でもよく覚えている。

色々あって少し大人びていた子供時代の俺は精霊の承諾なしにその精霊が付いているカードをかうような事はしていなかったのだが、ミドラーシユを購入したい理由はいくつもあった。

一つ目は単純にその効果が強力だから。特殊召喚を制限する能力はリンク召喚が重要な位置を占めているこの世界では有用だ。実際、ミドラーシユは人気のない融合カテゴリーでありながらも汎用的に使うことが出来るという事で高額カードとして扱われていた。

二つ目は一つ目の理由と大分被るが、その時シャドールデッキを作

ろうとしていたから。シャドールデッキを作るならやはりミドラーシユは必須だ。リンクモンスター全盛の時代にわざわざシャドールデッキを作ろうと思った理由は単純に前世で使い慣れたデッキだったからなのだが、この情報はティアアラメンツ達に話す必要はないな。そして、三つ目。それは、なんだか彼女がつまらなさそうにしていたからと言った所だろうか。カードショップにそのまま居たいのか、どこか別の所に行きたいのかは分からなかったが、少なくとも表情の変化が乏しい事を踏まえても彼女が現状に満足しているとは思えなかったんだ。

「でも残念だ。今日の手持ちじゃ君を仲間にする事は出来ないね」
『……』

シングルカードで800円という金額はバイトをしている高校生や大学生、社会人なら少し躊躇うが手が出ないような金額では全くない。しかし、小学生にとって四桁に届きそうなその金額は大金だ。

「またね」
『……』

そうやって俺が一方的に彼女に話しかけ続ける日々がしばらく続いた。

その店はレンタルデュエルディスクがあつて親にデュエルディスクを買って貰えない子供たちの溜まり場にもなっていた。当然俺も友達を引き連れて放課後はよくそこで遊んでいたものだ。

もうその頃になると俺はミドラーシユを購入する事は若干諦め気味になっていた(30円ストレージでもちよくちよく漁っていたら貯金なんて貯まらないからな)し、個人的にはその店の看板娘くらいに思うようになっていた。

「やあ、こんにちは」
『……』

友達に不審がられないように自分から注意が外れているうちに彼女に声を掛けるのがルーチンみたいになっていたな。

「今日はデュエルをするから、気になるなら見てみると良いよ」
『……』

それまでも同じように誘っていたし、これまで一度もその誘いに乗ってデュエルを見に来ることも無ければ、彼女の定位置と化しているガラスケースの上から腰を上げることが無かった。

☆

「つしやあああ！ 俺の新しい最強モンスターを見せてやるぜ！ 魔法カード『ドラゴンズ・ミラー龍の鏡』を発動！ 墓地のドラゴン族5体を除外して、E Xデッキからドラゴン族の融合モンスターを特殊召喚する！ 現れろ！ 『ファイブ・ゴッド・ドラゴンF・G・D』!!」

「ええ!? そんなカード持ってたっけ?」

「ふふん、お年玉を前借りしてこの間買ったのさ」

「お年玉の前借りとは??」

俺の相手をしていた友人の新しい切り札。その威容に慄きながらもワクワクしていた。

「行け！ F・G・D!! 世良の裏守備モンスターに攻撃だ！」

「セットモンスターは『シャドール・ヘッジホッグ』。このカードがリバースした場合、デッキからシャドール魔法・罠カード1枚を手札に加える。俺は影シャドール・フュージョン融合を手札に加える」

「へっ！ 何をしたって無駄だぜ。お前の手札は次のドロワーを合わせても二枚だけ。融合カードを手札に加えたみたいだけど、それじゃあ融合素材が足りなくて融合すら出来ないぜ」

「さくどうだろうな」

「まあいいさ。俺はターンエンドだ」

「俺のターン、ドロワー! ……俺も新しい切り札を見せてやるよ」

「ほー、そいつは俺のF・G・Dを超えられるのか?」

ドロワーフェイスでデッキからカードを一枚加えながら、俺はニヤリとほくそ笑む。

「魔法カード『シャドール・フュージョン影融合』発動！」

「え? でもお前の場にも手札にもモンスターは……そうか! 『龍の鏡』みたいに墓地のモンスターを素材にする気か!」

「いいや、俺が融合素材を供給する場所は……デツキさー！ 『影依融合』は相手のフィールドにEXデツキから特殊召喚されたモンスターが存在する場合、自分のデツキのモンスターも融合素材とする事ができる」

「は？ なんだそのインチキカード」

友人のそんな言葉と冷めた顔は、まあとても理解できるものだったが、許してほしいとは今でも思っていない。

「俺はデツキの『シャドール・ドラゴン』と『超電磁タートル』を墓地に……どわああ!!」

「ん？ どうした？」

シャドールデツキのキーカード、『影依融合』を発動してエースモンスターを召喚しようとした時、ふとずれた視線が目にしたのは俺のすぐ横に佇むミドラーシユだった。

今まで彼女の前でシャドールデツキを使った事はあったが、それでも無反応だった。それなのにその日に限っては動きを見せた。今思えばきつとそれは俺が直前に手に入れた新しいエースモンスターが原因だったのだろう。そのカードには別に精霊が付いていた訳では無いのだが、彼女を動かす理由としては十分だった様だ。

「い、いや。何でもないよ……興味あるのか？」

『……』

「……まあ、いいか」

彼女がこちらに興味を示した理由を小声で問うてみたのだが、やはり返事は返っては来なかった。

「続けるぞ。俺は二体のモンスターを墓地に送り、『エルシャドール・ネフィリム』を融合召喚！」

現れるのは巨大な人形の天使。

影の軍団の司令塔の姿は悍ましくも美しかった。

「な、なんか不気味なモンスターだな……」

「そうか？ カワイイだろ」

「え？ あ、うん……」

カワイイだろ？

「融合素材として墓地に送られた『シャドール・ドラゴン』の効果発動！ お前の魔法・罠カードを一枚破壊する！」

「げげ！ 俺の聖バリが!？」

「さらに、ネフィリムの効果でデツキから影依シャドールの偽典を墓地に送らせてもらう。そして、手札から『シャドール・ハウンド』を攻撃表示で召喚。これで決めるぞ、バトルだ！」

「いやいやいや、お前のネフィリムの攻撃力は2800だろ？ F・G・Dには全然……ん、ちよつと待て、何だこの効果！」

友人がデュエルディスクの対戦相手の場のカード効果を見る機能を使ったらしい。そう、ネフィリムの前では特殊召喚されたモンスターは（ほとんど）無力なのだ！

「ネフィリムの第二の効果を発動！ このカードが特殊召喚されたモンスターと戦闘を行うダメージステップ開始時にそのモンスターを破壊する！」

「うわああああああ!! 俺のF・G・Dがああああああああ」

F・G・Dは限定的な戦闘破壊耐性を有しているが、効果による破壊に対しては無力である。

ネフィリムから伸びた影系がF・G・Dを縛って身動きを取れなくしたと思ったら弾けて消滅していった。

『シャドール・ハウンド』でダイレクトアタック！」

「あー!! 負けた!!」

こうして新たなエースカードであるネフィリムの初陣は勝利で終わった。

「デュエル、どうだった？」

そして、俺にしか見えない観客へと声を掛ける。

『……』

「は、ははは……。やっぱり返事は返してくれないか……」

ミドラーシュが初めて見せた反応に少しだけ期待した俺だったが、それと同時にやはりダメかという諦めもあった。

そうしてその日は後何戦かデュエルをして、ストレージのカードをしばらく漁ったらお開きの時間になる。いつもの様にミドラーシュ

へと別れの言葉を告げる。

「それじゃあ、またね」

『……ねえ』

カードショップから出る間際。聞き覚えの無い少女の声に驚いて振り向く。その声の主はミドラーシユだった。

「な、何？ どうした？」

まさか今になって声を掛けられるとは思っていなかった俺はあり得ないくらい挙動不審な返答をした気がする。

『私に、私の事を教えてくれる？』

それが彼女との契ファースト・コンタクト 約だった。

風の巫女だった人形（後編）

ミドラーシユ自身の事を教える。

俺は彼女にどこまで話すべきか判断に迷った。

彼女の事はイラストストーリーを含めて考察まで結構調べていたため、その歴史を話すこと自体は可能だった。

彼女は生前『ガスタの巫女ウインダ』と呼ばれていたという事。ウインダは神の復活の余波でその命を落とした事。その死後、転生するはずの魂が囚われたためにミドラーシユ自体は肉体だけが現実世界に実体化した存在であること。そこに自我はほとんど無く、正常な生命として生まれ変わることをお願い続けた悲しき存在であること。

そして、かつての仲間達、子孫たちやその仲間達と戦い、最後にはウインダとして復活するという事も。

過去も、現状も、未来も知っていた。

だが同時に、彼女がその過去を経験してきた精霊ではないという可能性もあった。

精霊界に住むカードの精霊は俺達がカードのフレーバーテキストや背景ストーリーから読み取れる存在とは違う事があるという事を知っていたからだ。

彼女がどつちの存在かは分からなかったが、どちらにしてもそんな彼女にその話を一気にするべきでは無いと考えた。

そんな俺がその時出した結論は、先送り。

今テイアラメンツとやっている様にテーマカードを集めて背景ストーリーを見て、知って行こうと。俺は彼女の過去を知らない振りをした。

ただ、それは俺にとって全く無意味な提案だった訳では無い。その時のシャドルデッキはまだまだ完成したとは言いがたく、下級シャドル何枚かに影依融合、ネフィリムだけと言う状態だったため、どうせカードを集めていく事に変わりはなかったのもある。

時間を掛けて少しずつ彼女の過去を詳らかにする事によって多少でもショックを和らげることが出来ないかと思ったんだ。

……ああ、勘違いしないで欲しいんだけど、俺は君ティアラメンツ達の過去や未来かもしれないストーリーは全く知らないよ。ティアラメンツカテゴリーを知ったのは君達と出会ってからだからね。

そうして俺は精霊付きの『エルシャドール・ミドラーシユ』を何とか購入し、彼女と行動を共にし始めた。彼女は無口で、基本的に話しかけてくるようなことは無かったが、こちらからしつこく話しかけていくうちに少しずつ反応を示すようになっていった。

デュエルをしてフィールドに出せば気のせいかもしれないが、そんな雰囲気を見せていたような気がした。結局最後まで人形の身体である彼女の表情を読み取る事はほとんど出来なかったけどね。

時が流れるうちにたびたび手に入るシャドールカードを見ては彼女は何かを思い出そうとする仕草を見せた。特に早々に手に入った『影依の原核』シャドール『堕ち影の蠢き』なんかに対しては強く興味をひかれていた様だったな。

だが、そんな時間も長くは続かなかった。

魔法カード『神エルシャドール・フュージョンの写し身との接触』をミドラーシユが見た時、変化が起きた。

『……このカードを……探して……もっと』

「神の写し身との接触か……」

そのカードにはミドラーシユ自身が描かれている事からも分かる通り、彼女にとって大きな意味を持つカードであることは明白だ。そして、イラストストーリーとしてもその一枚は大きな転換点でもあった。

その時の俺は彼女がどうしてそのカードのみを集めるように言ってきたのか理由は不明だったが、デツキ構築と言う点からも（三枚は少し多いかもしれないが）悪くないと思っただけ素直に従った。

一枚目は偶然カードショップのストレージの底で見つけた。

二枚目は友人からトレードで貰った。

そして、最後の三枚目は偶然見つかった。おみくじ程度の感覚で購入したカードショップのオリジナルパックから。

「は、やっぱりオリパなんて買うもんじゃないな……あれ？ この

カード……」

『……』

「神の写し身との接触だ……そんな事もあるんだな……」

とうとう手に入れた目的のカードの三枚目。

何となしにデッキから残りの二枚を取り出して机に並べたその時、突然カードが光り出した。

「!? なんだー!」

『あっ……うう……』

手に入れたのはただの融合系魔法カード。

精霊が宿っているなんてことは無い。そもそもカードの精霊というものはモンスターカードに宿るものだ。

だから俺は勘違いをしていた。

モンスターカード以外で不可思議で非現実的な精霊にまつわる現象は起こらないと。

俺は知らなかった。

どんなカードにも微量ながらも様々な世界の力が宿っているという事を。それも関連が深い『エルシャドール・ミドラーシュ』という精霊が傍に居る状況も悪かった。

『あ、ああ……そんな……そっか……私は……』

「どうしたミドラーシュ! 大丈夫か!」

『神の写し身との接触』のカードから放たれた光を浴びたミドラーシュは今までの人形のように無感情なものではなく、明らかに狼狽えた様子だった。

『私は……死んだ……戦った……かつての仲間たちと……そして、生き返った……ウインダとして……』

「ミドラーシュ……」

途切れ途切れの言葉は彼女のストーリーを端的に表したものであると言えた。

俺が話せなかったイラストストーリーの話。そして、まだ俺達が追いきれていないイラストストーリーの話の内容も含まれていた。

簡単に言ってしまうえば『神の写し身との接触』は世界のシステムを

構成する神との接触のシーンをイラスト化したカード。そんなカードの影響を受けた彼女は知ってしまったのだろう。

世界の話を。

『だったら……私は……誰……？』

「……」

『ウインダは生き返った……でも私はここに居る。世界のシステムから外れ、魂が無い肉体だけの存在の私が……でも、私にはこうして自我がある……魂も肉体もウインダとして存在しているはずなのに……なら……私は一体……何？』

「君は……」

今まで見た事のない彼女の苦悶の表情。

そんな彼女が発した質問に、俺は答えられなかった。

そうして、彼女は俺の前から姿を消してしまった。何も言うことも出来ないまま別れてしまったんだ。

☆

「俺の中途半端な行動は、彼女にモンスターカード『エルシャドール・ミドラーシユ』の精霊としての性質と影依の軍勢の一人『エルシャドール・ミドラーシユ』としての性質を与えてしまったんだろう。その結果、彼女は自身がどういう存在なのか規定できなくなった……」
俺が彼女をただの精霊として扱い、デュエルや言葉を交わして交流し、絆を育んでいけばカードの精霊として存在する事が出来たかもしれない。

俺が彼女のストーリーを隠すことなく話しておけば、結果は変わらず消失だったとしても、シャドールとしての役割を終えた彼女は憂いや苦悩もなく消えることが出来ていたかもしれない。

でも、俺はそのどちらもやってしまった。

その中途半端の結果、彼女を無駄に苦しめて、悩ませて……泣かせて……。

『……そんなに思い悩まないで下さい。結果は……その、残念でした

けど、約束を守っただけですよね?』

「そうかもしれないね。間違った事はしていなかったのかもしれない。だけど、それは確かに失敗だったんだよ」

今になって思えばだけど、と力なく笑いながら答える。

それから俺は精霊にされるお願いは無理な事柄でなければ素直に叶えるようにして来た。そこに俺の解釈は挟まずにだ。

だから、三人娘テイアラメンツに問うた「みんなはどうしたい?」という質問は自分にとってかなりギリギリの言葉だった。俺が彼女達にやってあげたいからではなく、彼女達からの明確なお願いを聞いてから行動するための言い訳の言葉だった。

『……もしかして、私達との関係もまだ悩んでる? ……』

「そうかもね。少なくとも最近知り合った精霊達と比較したら君達の事情に踏み込み過ぎて居るかもしれないと思ってる」

今もミドラーシユとしていたように関連カードを集めてストーリーを追って行っている。ミドラーシユとの一件以来そんな事はしなかったのに、無意識のうちにそうしていた。また同じ過ちを犯すかもしれないというのに。

彼女達の「しばらく傍に居させて」という最初のお願いだけなら少なくともそんな事をする必要は無いのにな。

『……関係ないわ』

「え?」

メールウ、ハウフニスの話聞いた後、シエイレーンはそう断じた。

『アンタがミドラーシユについて今も思い悩んでるって事は分かる。でも、それは私達には関係ないわ』

「まあ、そうかもしれないけど……」

『私はアンタの事を友人だと思ってる。二人もそうでしょ?』

『はい』

『……うん……』

「……友人……」

精霊との関係として友人という括りになる事は意外と少ない。

彼ら・彼女らは基本的に自分に相応しい決闘者マスターを求めているから

だ。

マスカレーナとの今の関係は友人関係に近いかもしれないが、彼女も俺によくデツキに入れることを要求している。本質的には決闘者^{マスター}を求めている事が分かるだろう。

まして、精霊の方から「友人」であると言われたのは初めてだった。

『最初は確かに、狭苦しいショーケースから出るために私達の事が見えるアンタを頼った。でもね、キトカロス様の件に関してはアンタが信頼できる友人だと思ったからこそ頼ったのよ』

「……」

『そして、アンタも難しい事は考えずに友人である私達を手伝いなさいー！』

『シエイレーンちゃん、それはちよつと凶々しいんじゃない？』

『……そうかしら……』

『……どうかな？ ……』

『え……私凶々しい……？ あれ？ ……もしかしてアンタは私達の事……友人だと思つてない……？』

友人だから。

そつか、それだけで良かったんだ。

シエイレーンの言葉は俺をハツとさせるのに十分だった。

俺は精霊との関わり方に変に拘り過ぎたのかもしれないな。

ミドラーシユの事はもう悩まない、とはまだ言えない。

それでも、三人娘^{ティアラメンツ}との関係については……。

とりあえず、何故か今にも泣きだしそうなシエイレーンを落ち着かせるためにもはつきりさせておかないといけない。

「君たちは友達だよ」

それで良いと思えた。

潜水融合

この十年の悩み事を初めて他人に話すという事で多少は気が楽になった今日この頃。

壱世壊Ⅱペルレイノに行く方法を色々と考えているのだが、やはり思いつかない。GXだったなら次元の歪み的な場所から精霊界へと行っていたような気がするが、それはデュエルアカデミアの特殊過ぎる立地が関係していたはずだ。

5D'sではデュエルモンスターの精霊に導かれて龍可が精霊界へと訪れていたはず。使えるところならそっちの手法だろう。しかし、俺は龍可みたいにシグナーという訳ではなければ三人娘ティアラメンツも人間を精霊界に連れて行くようなことは出来ないらしい。

という訳で、ペルレイノを訪れる方法探しに関しては八方塞がり気味だった。

「いつもありがとうございます。またお願いします」
「どうも」

そんな時に気分転換に来るのが原作キャラの溜り場こと、Caf・Nagiである。

出来立ての美味しいホットドッグが食える店が他にあるならそこに行くのだが、探してみると意外とないもので、食いたくなったらここに来るしかない。

原作キャラに会わないなんて事は主人公勢と同じ高校に進学した時点で無理なわけだし、好き好んで事件に巻き込まれたい訳では無いが、かと言って避け続けるのも無理な話。

それなら食いたいものを食って満足すれば良いという結論に至ったのは今は昔の事で、俺はこの常連となっていた。

そうして今日はCaf・Nagiが出しているイートインスペースの4人掛けテーブルを占領して一休みいれている。

『ねえ、それ美味しいのかしら?』

「ん? 美味しいよ。流石に紙袋まで食い尽くす程じゃないけど」

対面に座っている(ように見える)シェイレーンは俺の持つホット

ドッグに興味があるようだが、残念ながら精霊の彼女にこの味を体験させる術を俺は知らない。

『とても美味しそうですね〜』

『……食べてみたい……』

「そう言われてもなあ……」

ホットドッグをデュエルディスクの上に置いたらホットドッグ召喚とか出来ないだろうか？ 仮に出来たとしてもこんな公衆の面前でホットドッグをデュエルディスクの上に置く変な人間にはなりたくない。

彼女達と話すのは耳にインカムをつけて「ハンズフリー通話ですよ〜」って顔でやってるからまだセーフなはず。

「うーん……君達の方でホットドッグの霊的で精神的な何かを取り出すとか出来ないの？」

『はあ？ そんな訳分からない事出来る訳無いじゃない』

「でしようね」

まあ、知ってた知ってた。最初からそんな事が出来るとは思ってたかったさ。

『あ！ それだったら、これならどうでしょうか！』

そう言っただけで立ち上がったメイルウがこちらを向く。

『……えい！』

「うわっ！」

かと思ったら突然俺に向かって飛び込んできた。咄嗟の出来事に流石にびつくりしてしまい、イスをガタリと動かし大きな音を出してしまう。

「お客さん？ どうかしましたか？」

「あ、いえ！ すいません、その……突然大きな声を出されて驚いたもので」

「ああ、そうでしたか」

言いながら耳に付けているインカムを指で叩いて主張する。

適当な言い訳だったが、どうやら草薙さんに不審がられることは無かったようだ。

「あれ？ メールウはどこに行った？」

『ふふ……私はここですよ』

「え？」

飛び掛かって来たメールウはいつの間にか姿が見えなくなったのだが、声は聞こえてくる。

前を向いても口をパクパクしているシェイレーン、右を見ても『……なるほど、そんな手が……』と一人呟くハウフニス。さっきまで俺から見て左の席に居たメールウはやはり居ない。

『ここですつてば』

「……えっ」

今度はメールウの声が聞こえてくると同時に動かしたつもりがない俺の手が持ち上がり、指が俺自身の方向を向いている。

「な、何これ……」

『忘れてるかもしれませんが、私達は融合する事で真価を發揮するんですよ！』

「人間に憑りつく……いや、人間と融合する事なんて出来たのか」

『流石に普通の人にはやりませんし、そもそも出来ませんけどね。あなたには私^{テイアラメンツ}達との繋がりがあって、私達と親和性があるからこそ出来る技なんです』

俺とお前で超融合、つて事!?

「大丈夫？ 融合事故とか起きたりしない？」

『大丈夫です。あなたは私達を視ることは出来ますが、触ることは出来ません。それくらいの精霊との親和性なら、うっかり一つの存在になっちゃうなんて事はないはずですよ。……多分』

「そっかあ……多分かあ……」

なんか一つまみ程の不安はあるが、俺が精霊をどうに出来るほどの能力を持っていないのは自分が一番よく分かっている。その能力の才能として精霊との親和性っていうものが必要なら、確かに俺はそこまでの親和性は持ち合わせてはいないのだろう。……多分。

『ほあ、これはホットドッグというのですか。サクサクパリパリでとても美味しいです』

『ず、ずるいわよー!』

手に持つホットドッグを意識せず食べている。

動かすつもりが無いのに勝手に身体が動くという不思議な体験だ。俺がメイルウの動かそうとする意識に抵抗すれば簡単に抗える所をみるに、主導権みたいなやつは俺が持っているらしい。

「ん? ていうか、俺が食べてるのにメイルウは味が分かるのか?」

『はい。この状態ならあなたが見て、聞いて、嗅いで、触って、そして味わった感覚は私も感じる事が出来るのです』

「は、精霊ってのは色々なことが出来るんだなあ」

精霊に対する新たな発見に感動を覚えながらも身体は勝手にホットドッグを食べ続ける。うん? なんだこれ。思考と行動がちぐはぐ過ぎて変な感じがするな。

『……じゃあ、次は私の番……』

『きやん!』

すると今度はハウフニスが俺の方へと飛び来んで来る。二度目の事だったので跳ねるほどびっくりはしなかったが、普通に驚くのであるなら一声かけてからやって欲しいものである。

そして、ハウフニスが飛び込んでくると同時に俺の中から弾き出される様にして飛び出て来たのはメイルウだった。

「あれ? メイルウが出て来たぞ」

『あいたたた……どうやらあなたの中に入る事が出来るのは一人までの様ですね』

「ふーむ、それも精霊との親和性ってのが関係してるのかな」

しかし、精霊が人間の意識にダイブするような事が可能とは。これはティアラメンツ固有の能力なのか、それともシャドルーみたい同じ融合テーマのモンスターなら可能なのか。考えれば考えるほど謎である。

この技を名付けるとしたら人間の意識に潜る潜水融合と言った所か。……口には出してこそいないが、技名を付けるとかこっぴどくしないな。

そんなどうでも良い思考をしながらもやはり俺の身体はホット

ドッグをパクつき続けていた。

『……うまうま……』

「満足そうで何よりだよ」

Caf・Nagiのホットドッグに舌鼓を打つハウフニスのは心なしか弾んでいる様に聞こえた。

『じゃ、じゃあ……私も』

「ちよつと待て、シエイレーン」

流石に三度目だからな。

『え……二人は良くて、私との融合は、駄目……?』

何を勘違いしたのか、イスから立ち上がったままの態勢でポロポロと涙を流し出すシエイレーン。

「いや、違う違う。いきなり飛び掛かれるとびっくりするから、やる前に一声かけて欲しいと思ったんだって」

『そ、そう……。私だから嫌って訳じゃないのね』

「そんな仲間外れみたいな事しないって」

理由を説明して納得してくれたのか、シエイレーンは無事に泣き止んでくれた。

そのまま彼女は俺の前に立つ。ハウフニスはその間に俺の中から抜けていたようだ。

『それじゃあ、その……良い?』

「お、おう」

事前に言うように頼んだのは俺だが、そう躊躇いがちに許可を取られると何だか無性に緊張してしまうな。

そんな俺の緊張はよそに、シエイレーンは俺の中へと潜り込む。

『ゴクリ……』

「……」

『……』

「……えい」

『!?!』

いつまで経っても食べようとしないシエイレーンにしびれを切らした俺は彼女が身体を動かすのを待つのを止めてホットドッグを口

に放り込む。

ひとかけらと呼ぶには少し大きかったが、何とか一口に収める事が出来た。

『~~~~ツ』

「どうだ、美味しいだろ」

口の中のホットドッグをしっかりと飲み込んでから自分の中に居るシエイレーンに語り掛ける。

『か、かりやいわ……』

「ありや、シエイレーンはマスタード駄目だったか」

裏ではDen Cityの広場にあるモニターでPlaymakerとハノイの騎士のデュエルが始まった所らしいが、そんな事は俺には関係なく彼女達の事をまた一つ知る事が出来た一日だった。

木越て林超えてもはや森

朝起きて、高校に行き、部活に顔を出さなければ放課後にカードショップの品揃えが何か変わっていないか確認しに行く。

それが俺の毎日のルーティンと言っても過言ではない。おそらく既に絶版になっているであろうティアラメンツカードを手に入れるためには結局のところ小まめに足を使うのが一番早いのだ。知らんけど。

『今日も特に収穫は無かったわね』

「いや、そうでもないさ。地味に今まで持ってなかった『簡易融合』が1800円で手に入ったのはデカイぞ」

簡易融合はライフを1000払ってレベル5以下の融合モンスター1体を融合召喚扱いで特殊召喚出来る超有能カードだ。前世で子供の頃は攻撃も出来なければターン終了時に破壊されるのに意味あるのか？　なんて思っていたものだが、遊戯王をよく知れば知る程こんな有能カードはそうそうない事が分かる。

召喚権を使わずに場にモンスターを供給出来るのはリンク召喚が実装されたこの時代ではそれだけで偉いし、融合召喚扱いで特殊召喚するという事は蘇生制限も満たすという訳で、後で死者蘇生なり何なりで墓地から蘇生して使う事も出来る。それがたつたのライフ1000で使えるというのだから破格と言っても良いだろう。

有能カードでありながらそこそこ安価な値段で手に入る事を考えると、ライフポイントが4000のこの世界では1000のライフコストの重みがそれほど大きいという事だろう。

そして、このレベル5というのが絶妙でキトカロスやミドラーシユの特殊召喚に対応しているのである。この二枚のカードは効果で墓地に送られることをトリガーに効果を発動させることが出来るカードであり、本来デメリットであるターン終了時の破壊効果を有効に使う事が出来る。デメリットをメリットへと変えて活用していくのがやはり遊戯王の醍醐味と言えよう。

『ところで、今日はどこのカフェに行くのかしら？』

『この前のケーキはとても美味しかったです!』

『……ラーメン食いたい……』

「うーん……」

俺の身体を使えば色々楽しい事が出来ると分かった三人娘ティアラメンツは事あるごとにダイブしてはこの世界の飯の味を楽しんでいた様子ばかり飯の虜になってしまっていた。

シエイレーンとメルウは特に甘いものが好きなようで出かける度にスイーツが食べられるカフェに行くように言ってくる。一方でハウフニスは甘いものよりも濃い味付けの物が好きなようでラーメンだとか焼肉だとか主に主食になるようなものを要求してくることが多い。まあ、甘いものが嫌いな訳ではないようだが。

「最近結構外食してるから金がなあ……」

『そんなあ……』

『シユン……』

『……今日はお預け……か……』

バイトでもしようかしらねえ……。

彼女達のしょんぼりした顔を見てしまうと何とかしてあげたいと思ってしまうのは俺の悪い癖なのだろうか。

でも一応うちの高校はバイト禁止だから、それがバレでもしたら面倒なことになる。それは勘弁願いたいものだ。

どこかに素性がバレずに簡単お手軽で高収入なバイトは無いものだろうか？ まあ、そんなものが本当にあつたら怪しいお仕事一択な訳だが。

『ね、ねえ。あれ見てあれ』

『わあ……』

『……森……』

「何？」

頭の中で良いバイトは無いものかと考えては却下を繰り返しながら歩いていた所、三人娘が何かを見つけたらしい。

「え？ 何……ええ……その、何？」

彼女達が見つめる方向に目を向けてみる。そこに見えたのはもは

や森としか言いようのない景色。

こんなビル群の真ただ中で森なんてある訳がない。しかし、確かに俺の眼には森としか形容出来ない物が映っている。であるのに、周りの通行人は何の違和感も持っていないかのように普段通りの日常を過ごしている。そのちぐはぐが俺にとつては果てしない違和感だった。

「ん？　ありや……：：：：：サンアバロン 聖天樹だ」

うっそうと茂った樹木にしか見えなかったそれだが、よくよく見てみると全部知っている樹だった。というか、デュエルモンスターのモンスターだった。

「精霊か。それも野良精霊じゃなくて、しつかり人に憑いてるな。珍しい」

『ふーん、確かにあの精霊達は全員その男を意識しているわね』

「あ、決闘者マスターは男なんだ。俺には森が濃すぎて人影しか見えん」

『随分愛されているみたいですね。お互いに』

『……幸せならおっけー……』

野良精霊と絆を育んで人に憑いている精霊というのはその精霊の雰囲気や何気ない行動を見ることである程度判別することが出来る。

精霊が極端に少ないこの世界でも野良精霊の宿ったカードを偶然手に入れる人間は居る。しかし、その精霊は持ち主に対して基本何の感情も抱いていないため、持ち主ではなく物珍しい人間界の景色を見まわしていたり、持ち主から離れてフラフラしている事が多い。

一方で人に憑いた精霊というのは決闘者マスターしか見ていないし、その周辺から離れてフラフラするようなことは無い。それは人間が精霊の事を認識する事が出来て居なからうと、精霊にとつては決闘者マスターの傍に居られるだけで嬉しいと言った感情が何えて来るものだ。

そう言えば、島のグリーン・バブーンも今はまだカードに宿った野良精霊みたいなものだが、もう少し時間が経って共に過ごしていけば決闘者マスターと人に憑く精霊という関係になる事が出来るだろう。何だかんだであいつは自分の気に入ったカードを大事にするやつだ。(藤木君のフェイクデッキは鼻で笑っていたが……)

そのうちサイバー流みたいに初手でグリーン・バブーンが三枚引けるようになるだろう。それがデュエルに有効かどうかは置いておくものとする。

『その人間』

(やべ、ちよつと見すぎたな。目を付けられたか……)

何度も言うがこの世界には精霊が少ない。そして、精霊を認識できる人間というのはもつと少ない。

この世界でカードの精霊というものにちよいちよい出会って来た俺が、精霊を見ることが出来る人間には出会った事が無い事を考えると、本当に少ない。もしかしたら俺以外居ないのかもしれない。

そんな状況で自分達を認識する事が出来る珍しい人間を見つけた時、精霊達が起こす行動というのは大抵同じである。

それは、何らかのアクションを取ってくるという事だ。

精霊とコミュニケーションをとるという事自体には当然忌避感はないのだが、人に憑いている精霊はちよつと拙い。

俺と精霊だけの関り合いなら別に良いんだ。例えば、相手が野良精霊なら彼・彼女らの望みを出来る範囲で聞いてあげるだけで良い。人間界を見てみたいというのなら、その精霊としばらく行動を共にして色々な物を見せてあげればいい。

だが、人に憑いている精霊となると、俺と精霊に加えてその精霊が憑いている決闘者^{マスター}も入って来る。そして、そんな精霊のするお願いというものは決まってその決闘者^{マスター}に関わる事なのだ。

で、結果出来上がる空間は精霊が見える俺と精霊が見えない決闘者^{マスター}(しかもお互い見ず知らずの初対面)である。

話が噛み合う訳もなく、俺がどれだけカードの精霊について熱弁しようがそんなものの存在を信じる者は居ない。表面上は「信じる」と言っても心の底では何を考えているやら……。

精霊の存在を話して心から信じてくれるのは、強いて言えばまだ何色にも染まっていない子供くらいだろう。

そしてその空間の結末は、「カードの精霊が」とか言う変な人間(俺)とひたすら困惑する決闘者^{マスター}とちよつとしたお願いすら叶わない

精霊って訳。

そんな誰も得しない空間を俺はもう作り出したくはない。(二敗)
今までの経験からその地獄空間を作り出さないようにする方法は決まっている。

(無視だ、無視。俺は何も見えていないし、聞こえていないぞ)

『あんだ、声かけられてるわよ』

『うわあ……見てください！ 綺麗なお花が満開ですよ』

『……花粉が凄そうね……』

『人間、あなたが私達を認識できている事はすでに分かっています。なぜなら、あなたの傍に居る精霊達の反応はあなたが精霊を見ることが出来ている前提の物だからです』

(……くうあゝゝ、こんのアホ娘達がゝゝ)

俺が意図して『サンアパロン・ドリユアトランティエ聖天樹の大母神』の呼びかけを無視していたというに、台無しである。

はあ……

気付かれているなら仕方ない。

俺はまた地獄空間が形成されるのを覚悟のうえで母なる神の樹の話聞くことにした。

聖天樹の大母

「で、あなたは何をしたいんです？ 先に言っておくけど、俺にも出来る事と出来ない事があるぞ」

決闘者に憑く聖天樹サンアハロン・ドリユアトランティエの大母神の精霊に目を付けられてしまい、声を掛けられた事に関してはもう諦めた。ならば出来る事と出来ない事を考えて、なるだけ誰も損しない地獄空間を目指すしかない。

『構いません。わたくし私の願いは一つ。あの子に伝えて欲しいのです』
「何て言えばいい？」

『たまには家に帰って来なさい、と』

「あ~~~~~……」

滅茶苦茶個人的な事情に踏み込みそうな内容だった。

彼女のマスターがどういった事情で家に帰れていないのかは知らないが、少なくとも何かしらの理由があつての事だろう。それが仕事関係だろうが、家庭の事情だろうが、絶対見ず知らずの人間に突っ込まれるようなモノではない。

「……それを伝えるだけでいいか？」
『ええ』

ふむ……。さて、どう伝えたものか……。

相手は初対面の知らない人。そんな相手に対して「久しぶりに家に帰ってみてください」と角が立たずに済む方法は……。

『さあ、こちらです』

ドリユアトランティエがそう言いながら伸ばしてきた蔓は俺の腕へと絡まり、近くのカフェテラスへと引っ張られる。

「ちよちよちよっ！ まだ心の準備が……ん？ ……は？ ……ていうか、何で精霊が俺に触れられる!？」

精霊に物理的な接触を受けるといふ生まれて初めての経験。

それは動物にあるような熱は感じず、ひんやりとした冷たさでありながら、生命としての温かみがあつた。それは確かな堅さがありながら岩やコンクリートの様に無機物には無い柔らかさがあつた。

実際の樹木に触れているような感覚。

『ちよつと！ こいつに何かしたら私達が許さないわ！』

『ご心配なさらずとも、乱暴は致しません。では、我々の息子にどうぞよろしくお願い致します』

彼女がそう発言した瞬間、今まで森を形成していたサンアバロンの精霊達は一斉に姿を消した。それによつて今まで輪郭くらいしか認識する事が出来なかった決闘者^{マスター}の顔を拝むこととなる。

「んん？ 君は誰ですか？ 私に何か用でもあるのですか？」

左から盛り上がった銀髪に、白を基調としたスーツを着た男。

口調は丁寧だが、突然自身の前へと飛び出て来た俺に対する警戒心をビリビリと感じる。まあ、当然だよね……。

それはそれとして、俺はこの人物について知っている。

それは何故か。遊戯王VRAINSに出てくる主要キャラだから。しかも、何気に物語の根幹に関わる事件と密接に関係する重要人物。LINK VRAINSでリアルバターを使うという、一見ネットリテラシーが無いように見えながらも最後まで実名が明かされずに個人情報を保護する事に成功した数少ない人物の一人。

アカウント名、スペクター。

今巷で話題のハノイの騎士の幹部が街中で優雅にコーヒープレイクをしているとは誰も想定出来ないよ……。

正直、サンアバロンの精霊という時点で嫌な予感はしていた。彼が使うテーマはサンアバロンだし、何よりこの世界では珍しい精霊が憑いていそうな人物だから。

それでもこの広い世界、彼以外にもサンアバロンを熱狂的に愛するデュエリストが居ないとも限らないじゃないか。

……居ないかな……居ないか……。うん、段々自分が迂闊だっただけな気がして来た。

「えー……つと、あー、その……んん！ 今から俺が言う事は別に信じてもらわなくていいです。気にしてもらわなくて結構です。変な奴の戯言と思つて下さい」

「？ 何ですか、本当に。意味が解りませんね」

昼休憩を突然邪魔された形になるスペクターの表情は明らかにイ

ラついている様だった。怖すぎる。

さあ、言うぞ。そして、それだけしゃべったら即バイバイだ。

「サンアバロン・ドリユアトランティエ聖天樹の大母神の精霊からの伝言です。たまには家に帰ってこい、と」

「はあ？」

俺の意味不明な発言に虚をつかれたのか、彼の眉間に寄っていた皺は無くなり、細められていた目は大きく開かれる。

「それだけです！　じゃ、そういう事で！　休憩中お邪魔しましたね！」

『お待ちなさい』

『あ痛たたた！』

「こ、今度は何ですか……」

最大限の予防線を張ったうえで言う事だけ言つてこの場を去ろうと思つたのにドリユアトランティエの蔓によつて腕を締めあげられてしまった。その力はさっきの優しいながらも逆らえないぐらいの強さではなく、明確に痛みを感じる程の強さだ。

おい！　ティアラメンツ三人娘よ！　これは俺、乱暴されてるんじゃないかな

！　助けてくれー！

『！　この木のみ、意外と美味しいわ』

『甘くて、とつてもジューシーです』

『……今まで味わつたことのない不思議な味……悪くない……』

駄目だ！　なんかいつの間にかドリユアトランティエに突つてる果物食いながら女子会してやがる！

そして、突然痛がる様子を見せる俺に普通に困惑するスペクター。うん、意味不明な状況に放り込んでしまつて素直に申し訳なく思つてしまう。

『まさか、それだけですか？』

「言う必要がある事は全部言つたじゃん！　大体、突然そんな事を見ず知らずの人間に言われて「はい、そうですか」と納得する奴なんて居ないんだよ」

『なるほど……確かに、突拍子もなければ真実味もなく、信じるに値し

ないかもしれませんね』

「おや？　もしかして、可哀そうな人でしたか。それならもういいですから、私の前から早く去りなさい」

精霊に腕を締め上げられている様子を普通の人が見たら、俺が一人で変な踊りをしている様にしか見えない。しかも、周りを気にすることなくドリユアトランティエと会話をしてしまったためにスペクターからとんでもない評価を受けている。

その時の俺は彼のおんまりな評価に気が付くことが出来なかったのは幸いだった……のだろうか？

『では、我々の息子にこう伝えなさい。書斎の机の上から二段目の引き出しの二重底の中にしまつてある者からの伝言である、と』

なんだそのエロ本の隠し場所みたいなのは。しかも、母親にしっかりと把握されてるみたいでなんか可哀そうだな。まあ、そこが彼女の居場所なら知っていて当然か。

腕から彼女の蔓が離れ、ようやく解放される。

「いちち……跡が残りそう……残ってないな。えーつと、何だっけ……ああ、そうそう。これは書斎の机の上から二段目の引き出しの二重底の中にしまつてある者からの伝言です」

「!?　君は……本当に何者ですか……」

サンアバロン・ドリユアトランティエ

聖天樹の大神の置き場所を正確に言い当てられて、スペクターも多少は聞く耳を持つようになったらしい。だが、可哀そうな人を見るような何となく優しい表情からまた厳しい表情に変わってしまった。

怖すぎる。

「いいですか！　一度家に帰って、お袋さんに顔見せた方が良いでしょう！　わかりましたね！」

だが、もう俺はやけくそだった。

「じゃあ！　今度こそ、そういう事で！」

「待ちなさい！」

『あ、待ってよ！』

『置いて行かないでくださいー！』

『……意外と速い……』

スペクターの止める声も振り切つて、俺は人ごみの中に紛れるようにしてその場を後にした。

何故サンアバロン・ドリユアトランティエ聖天樹の大母神は人間の俺に物理的に接触することが出来たのか。

それは俺が精霊界に赴くための一つのヒントになる。

☆

「……行ってしまいましたか。それにしても……精霊……？ まさか……いや、しかし……もし、本当に精霊が存在しているというのなら、私は……」

その先の言葉を彼は口には出さなかったが、この後の彼の行き先はここ最近通い詰めている非現実世界ではなく、ただ寝るために借りたアパートの一室だった。

『感謝します。精霊と心を通わす者』

母なる大樹は静かにほほ笑んだ。

『あ、これ。あの樹の女神から。お礼だつて』

「なんで、シェイレインから受け取って俺もさわれるんだ……」

『その木の実、とつても美味しいわよ！』

『あなたも是非食べてみてください！』

『……オススメ……』

「う、うーむ……」

その果実の見た目は人間の俺からするとあまり食欲をそそられるものでは無かったが、味は筆舌に尽くしがたい程の美味だった。

これもまた経験か……。

デュエル部

息子思いなオカンのお願いを何とか叶え、久しぶりの全力疾走で体力を減らした俺は夕飯も食わずにあっさりと眠りに落ちて気が付けば次の日。

例え愛情重たため精霊に絡まれるという少し珍しい事件に巻き込まれようが、新しい日が来ればいつも通りの生活を送らなければならぬ。

『暇ね〜早くしてくれないかしら』

『今はガツコウという時間ですし、邪魔したらダメですよ』

『……眠たくなってきた……』

(集中出来ねえ……)

俺の身分は学生だ。

であるならば、基本的に一日の大半は学校で過ごしている訳で、さらにその四分の三以上の時間は学ぶための時間である。いつもいつも放課後はカードシヨップに入り浸っているが、やらなければいけない事は普段からしつかりこなす優等生で通っている。

だが、そんな事はこの三人娘ティアラメンツには関係がない。メールウはある程度理解を示してくれているが、シエイレーンとハウフニスは俺が話しかけ無くなると逆に騒がしくなる傾向にある。猫かな？

シエイレーンは俺の周りを落ち着きなくフワフワと浮いているし、ハウフニスは今でこそ眠たくなって来たとか言っているが、午前中は俺の視界を遮ってみたり、クラスメイトにちよつかいを出そうとしてみたり(彼女達はドリユアトランティエの様に人間に触れることは出来ないから何の意味も無いが)と、それはもう騒がしかった。動きが。

……でもまあ、ちゃんと予め授業中は返事が出来ない事を伝えたのに俺が返事をしなくなつてオロオロし始めたうえ、いつもの様に涙をポロポロ零していた最初の頃を思い返せば大分成長したもんである。

「……という所で、この授業は終了とする。今日は特に伝達事項も無いからS H Rは省略するぞ。みんな帰ってヨシ」

歴史の担当教諭兼このクラスの担任の一言にクラスメイトが沸き

立つ。学生にとって例え数分のSHRだろうが無くなる事で得られる僅かな時間は貴重なのだ。

思っていたよりも早く自由の身となれた学生達は各々好きなように行動をし始める。家に帰る者、部活に行く者、そのまま教室で友人と駄弁り始める者。

『あら？ やっと終わったのね。さあ！ 今日も街へ行くわよ！』

『今日も良いカードが見つかるの良いですね〜』

『……zzz……』

そして教諭が放った解散の号令に反応したのは人間だけでは無かったようだ。

教室は喧騒に包まれているため、少し声の音量を落とすくらいであり気にせず三人娘に語り掛ける。

「いや、今日は久しぶりに部活に行くからシヨップ巡りはなしかな」

『ふーん、そうなの。だったら今日はデュエルの日かしらね』

『私達も頑張りますよ！』

『……あれ？ もう終わった？ ……』

『おはよう、ハウフニス』

『……おはよう……』

「まあ、デュエルするかどうかは分からないな。とりあえず部室に行こう」

カバンに持ち帰る物を詰め込んだら部室に出発だ。

☆

俺が所属する部活はもちろんデュエル部。

俺と島はクラスが違うが、デュエル部に所属しているために交流があつた訳だ。

デュエルがそこかしこで行われるこの世界でわざわざ学校のデュエル部に入る必要は余りないのだが、今年の部長、これがまたかなり凄い人なのである。

細田部長は全国ハイスクールデュエル選手権四位の実力者であり

ながら、昨年度デュエル戦術討論会優勝と言う理論にも精通した若手の雄とも呼べる存在だ。俺も去年の討論会の中継をネット放送で見ていたが……うん、感動したよね。奇想天外な組み合わせでありながら実用性に足るあの戦術は見事だった。なーんか、見た事ある人だなーって思いつつ、アニメで出て来た部長だと気が付いた時はとても驚いたものだ。

そして、この高校に進学してデュエル部と部長の存在を認知した瞬間に入部を決めたのである。

「お疲れ様です……って、まだ誰も居ないか」

「……あのグリーン・バブーンの仲間は居ないわね？ よし」

『シェイレーンちゃん……それは流石に……』

『……グリバブが可愛そう……』

『ハ、ハウフニスちゃんも……』

SHRを省略したことで少し早めに部室に来たことで、他の部員たちはまだ来ていない様だ。

「島の事嫌い過ぎでは？」

『ふんっ！ あんな無神経に人の事を触るような男はこれで十分よ！』

シェイレーンは初対面でカードを握る様に持たれてからまだ島に對して苦手意識を持っている。ていうか、普通に嫌っていた。

「まあ、程々の所で許してやってくれ。さて、誰も居ないならデッキの調整でもするか」

カバンの中に入った予備のカードを広い机の上に置き、デュエルデッキに納められたデッキのカードはモンスター、魔法、罫ごとに並べ替え、採用カードが分かりやすいように並べる。

「とりあえずショップのストレージボックスから墓地に送られた時や墓地にある時に効果を発動する類のカード、後はデッキからカードを墓地に落とせるカードをかき集めて来たが……ちよつと適当に買い過ぎたか？」

『何だかんだ沢山ありますね』

ここ最近カードショップに頻繁に通い、使えるカードをいくつか

買って来た訳だが、それ以外にも使えそうなカードと言う事でとりあえず買って来たものも多数ある。

しかし、その中でデッキに採用できるカードがどれだけあるかという、その数は実際の所かなり少ないだろう。この無数の選択肢から自分なりの戦略を考えてカードを選ぶのがまた楽しいんだけどな。

その少ない枠に採用するカードを選定するのにかなりの時間がかかっていた。

『クリバンデット』の何でも魔法・罫サーチは優秀だが、発動するタイミングがちよつと遅いんだよなあ……あ、でもティアラメンツの融合は墓地のカードをデッキに戻して融合する事が出来るからリリースしても融合素材として使いまわせるのは良いな……』

『あー！ このカエルさんとても可愛いですね。それに効果もとても強力じゃないですか？』

『ティアラメンツは水族だし、マイルウはレベル2だから使えそうではあるけど……他のレベル2の供給をどうするかだなあ……さらにカエルをつぎ足すというのも……デッキがちよつとごちゃごちゃになりそうだ。ティアラメンツが水属性だったらバハシヤが使えたのに……』

『私達が闇属性で悪かったわね』

『いや、まあ。でも君達が闇属性だからこそ出来るコンボもあるわけだしな』

『……簡易融合ってどんな味なんだろう……』

『……千円分くらいの美味しさはあるんじゃないか？ 知らんけど』

そんな感じでいつもの様に三人娘の意見を聞きながらデッキの調整をしていた所、ドアが開かれる音が聞こえて来た。

『どうやら一番乗りは世良君のようですね』

『部長、お疲れ様です』

我等がデュエル部部长、細田先輩である。

『今日もしっかりデッキ調整していますね。思考を止めない事が成長への鍵ですよ』

『はいー』

『なんかアンタ、この人の前だと妙に素直でちよつと気持ち悪いわね』

良いだろ別に。俺はこの人を普通に尊敬してるんだよ。決闘者デュエリストとしても、人としてもな。

「おや。それが最近君が集めているテーマカードのエースですか」

部長は机の上に並べているカード、特に最近手に入れたばかりのキトカロスに気が付いたのか、俺に言う。

部長は島の様にカードを手に取る事なく、机の上のカードに少し顔を近づけるだけでその効果を読んでいる。

「召喚・特殊召喚をトリガーにしてデッキからカードを墓地に送り、効果で墓地に送られる事で融合召喚をする。少々運が絡む要素が大きいです、中々楽しそうなテーマですね」

「そうなんですよ。後はどの汎用カードを採用しようか迷っているところでした……」

「ふむ。では、このカードはどうですか?」

そう言って部長は雑多に並べられたカードの中から一枚を指差す。

『『ライバル・アライバル』ですか?』

「ええ。見たところ、このデッキで召喚権を使いそうなのはこの『ティアラメンツ・メールウ』と場合によってシャドールモンスター。そこで、通常の召喚権はシャドールに全て渡してしまい、敢えてメールウは抱えておく。返しのターンで相手の動きを見てから『ライバル・アライバル』を発動し、メールウの効果でその状況に合った融合モンスターを出すことが出来れば……」

相手が高い攻撃力のモンスターを場に出していれば『エルシャドール・アプカローネ』が有効な壁となってくれる。アプカローネじゃなくとも『エルシャドール・ネフィリム』を出せばそれだけで相手にかのりの圧力をかけることも出来るだろう。

逆に攻撃力は低いがこちらのモンスターを問答無用で破壊してくれるようなモンスターを出されたならミドラーシユが大きく活躍してくれる。

「苦しい展開を返せるかもしれませんね」

「そして、バトルフェイズにそんな動きをされてしまえば、相手は難しい対処を迫られます。場合によってはそのバトルフェイズは何もせ

「ず終了せざるを得ないかもしれません」

「確かに、バトルフェイズ中は強力な効果を持つ通常魔法やメインフェイズにしか使えないモンスター効果は使えませんから」

「そう言う事です。なんなら、『ライバル・アライバル』を自分のターンに使えば、追撃の一手とする事も可能ですよ」

守りの一手にも攻めの一手にも使えるという事か……。それを聞くとき確かに悪くないかもしれないな。

「うーん、しかし、それをするにも上手い事テイアラメンツモンスターをデッキから墓地に落とす必要がありますよね？」

「そこはあなたの決闘者力次第ですよ、世良君？」

「あ、やっぱりそこは運次第なんですね……」

普段理詰めでデュエルをしている部長が最後は『運』と言い切っている姿はなんだか面白かったが、結局それがカードゲームの真理だった。

トレーディング・カード

デュエリスト
決闘者がカードを入手する方法はいくつもある。

パックを剥いてランダムな五枚が手に入る。他人が売ったカードをショップを介してバラで購入する。友人とカードをトレードする。なら、求めている一枚のカードを手に入れるためにはどうするか。偶然買ったパックから目的のカードを手に入れる。とても運命的だ。

ふらつと寄ったカードショップに有るストレージボックスの中の大量のカード。そこから適当に掴んだ一束に偶然紛れ込んでいる。これも運命的だ。

自分の友人が偶然欲しいカードを持っており、その友人はそのカードを必要としないためにトレードに応じてもらえる。やはり素晴らしく運命的だ。

つまり、決闘者がカードを手に入れるという事は偶然から生まれる一種の運命だとも言える。

……え？ 検索ボックスに「カード名 販売」と入力して検索する？ それは運命的じゃないなあ……。別に絶対の否定はしないけどね。

部室で部長とデュエルモンスターズについて話しているうちにやって来た他の部員たち。その中にはもちろん島も居た。

久しぶりに部活に顔を出した俺を見つけた彼は挨拶もそこそこに話しかけて来た。

「なあ、世良。お前が集めてるカードって壱世壊いちせかいってやつだよな？」

「壱世壊いちせかいな。もしくはティアラメンツと読む。……もしかして、どこかで見つけたのか？」

「おうよー！」

「ほんとかー！」

『……グリバブのマスター、やるじゃん……』

『ウホッ♡』

どうやら島はこの間言っていたようにティアラメンツカードを探してくれていたみたいだ。

実を言うとそのまで期待はしていなかったのだが、まさか島が本当に見つけてくれるとは。やはり持つべきものは友達だね。

「で、どこのカードショップだ？」

「……いやー、それがなあ。散歩中に適当に入った店だからどこの店だったかと聞かれると………忘れた！」

「……」

『……ダメじゃん、グリバブのマスター……』

『ウホン……』

……まあ、島だしな。仕方ない。

少なくともこいつの行動範囲のどっかのショップにある事は判明したのだ。まあそれで良しとするか………って思ったけど、カードショップなんてコンビニの数ほどあるから特定はほぼ不可能だな。

うん、やっぱダメだわ。

シエイレーンはともかく、メイルウからも微妙な視線を向けられている事に気が付けない島はある意味幸せ者だな。

「ねえ世良君。もしかして、これもそうじゃないかしら？」

「！ 財前さん、それっ」

『あー！ ペルレイノのカードじゃない』

『何だか随分久しぶりに私達のカードを見つけられましたね』

ティアラメンツ
三人娘が言うように、財前さんが持っていたカードは『壺世壊Ⅱペルレイノ』だった。

財前さんはこのむさ苦しいデュエル部の紅一点。アニメでも主要キャラとして描かれているブルーエンジェルその人だ。

今を時めくアイドル系カリスマデュエリストが実はクラスメイトだったとか、普通だったらそれだけで物語が始まりそうなのに主人公である藤木遊作とリアルでそこまで関りが無いのがVRAINSというアニメの凄い所だよな、ホント。

なんで財前さんがこの部活に入ったのか、アニメを見ていた時はずっと謎だったけど、彼女も部長とよくデュエルの戦術について話し

ている姿をよく見かけるので、きつと細田部長の凄さに惹かれて入部を決めたのだろう。多分な。知らんけど。

「家のカードを整理してた時に見つけたのよ。世良君がこのテーマのカードを集めてるっていう話を島君から聞いてたから持って来たいの」

なんと。遠回しに島が役に立っているんじゃないか。

あいつの軽い口もこういう時には役に立ってくれるな。まあ、大抵は変な内容に変質した噂話が周囲に拡散するだけの事が多いのだが。

「それトレードしてくれないかな?」

「私は構わないけど、もうこのカードは既に持ってるんじゃないの?」

財前さんは俺が広げているカード群の中にペルレイノがある事に気が付いたようだ。

「いや、ペルレイノは出来れば三枚欲しいんだ」

ペルレイノはフィールド魔法だ。

フィールド魔法は処理されるまで場に残り続けて永続的に些細な効果を発揮し続けるものなので、複数枚採用する必要性は薄いと考えるだろう。

昔のデュエルモンスターズだったなら、な。

最近のカードには「このカードの発動時の効果処理として」という文言が使われることがある。主に永続カードやフィールド魔法で見られるものであり、昔と比べて永続系のカードがデッキによく採用されるようになった理由の一つと言えるだろう。

この発動時効果があるおかげで永続系のカードを通常の魔法・罠カードの様に複数枚投入する意義が生まれたのである。

そして、ペルレイノにも発動時効果がある。ティアラメンツモンスターをサーチすると言う余りにも重要な効果だ。また、ペルレイノがフィールド魔法であるという事も良い点である。

例えば永続魔法の場合、発動時効果を使うために発動すれば魔法・罠ゾーンに残り続ける。もう一枚使えば当然その分魔法・罠ゾーンの枠は圧迫される。

しかし、フィールド魔法は自分のフィールド魔法ゾーンに一枚しか

置くことが出来ない。二枚目を発動すれば先に発動していたものを墓地に送って張り替える事になる。これならば魔法・罨ゾーンを圧迫することなく発動時効果を心置きなく使う事が出来るという訳だ。

最近のフィールド魔法は昔の『森』とか『山』とかの時代を考えるとあり得ないくらい強くなったものだが、それを差し引いても強力な発動時効果が優秀であり、そつちを主目的としてデッキに採用するまでである。

「何か欲しいのはある?」

「……じゃあ、これを」

そう言つて財前さんが指を差したのは偶然普段から持ち運んでいるストレージに偶然紛れ込んでいた『悪夢の拷問部屋』だった。普段持ち歩いているデッキ調整用のストレージはシナジーのある可能性がありそうなカードしか居れていないのだが……バーンデッキを組んでいた時に入れてから抜き忘れてたのかな?

「あつ……ふーん」

『この娘、顔に似合わず怖いカードを欲しがるのがね』

『人は見かけによらないんですね……』

『……もしかして、そういう趣味が……?』

まあ、三人娘が言いたいこともよく分かるが、彼女がLINK V RAIN Sで使っているカードを考えると、何も不自然ではない。

トリックスターデッキと悪夢の拷問部屋による無限チクチクバーンをライフ4000のこの世界でやられたら大変なことになってしまう。

「何?」

「いや、別に。じゃ、トレード成立だ」

「うん、ありがとう。かなり古いカードだったから探すのに苦労していたのよ」

俺が持つ『悪夢の拷問部屋』は財前さんへ、財前さんが持つ『壹世壊IIペルレイノ』は俺へと渡される。

LINK V RAIN Sに持ち込んでいるようなカードだったらアカウントとカードデータの紐付けの解除だったり面倒な手間が

増えるが、今回のトレード対象となったカードはそういったことは無いのでお互いがカードを渡し合うだけでトレードが成立する事になる。

よし、これで二枚目のペルレイノを手に入れることが出来た。

そう思いながら財前さんから『壺世壊Ⅱペルレイノ』を受け取った瞬間、俺が見る景色はいつもの部室から非現実的な世界に変わった。

『ツ……………んは……………』

一面に広がるのは水。

少ないながら陸もあるようだが、この世界を構成する物質のほとんどが水らしい。よく見てみると、水の中には水の煌めき以外の何かキラキラと光っている様子も伺える。

そして、水中から天へと一直線に伸びる樹。その樹には水の傘が広げられているよう……………とでも言えばいいのだろうか。言語化するのは非常に難しいが、この景色を端的に説明するなら、そう……………

『ペルレイノだ……………』

カードのイラストと全く同じ世界が広がっている。

「世良君？　どうかしたの？」

「えっ……………」

財前さんの声を認識した瞬間、水で満たされた世界の景色は切り替わり、再び部室へと戻っていた。

「……………今、何か見えなかったか？」

「？　別におかしなことは無かったわよ？　急に安心してた様だけど、何かあった？」

「……………いや、気のせいだったみたいだ」

財前さんのこの反応。十六年間生きて来て何度か似たような反応を貰ったことがある。それは、俺が精霊関連の話題を精霊と気が付かずに出してしまった時の反応だ。

だとするとやはりあの光景は……………精霊界。

三枚

財前さんから二枚目のペルレイノを受け取った後、なんとなく具合が良くないと適当な理由を部長に告げて俺は部活を早上がりして家に帰って来ていた。

『それで、アンタがペルレイノに行く方法が分かったかもしれないって、どういうことなの？』

「まあ、まだ決まった訳じゃないけどな……」

学校から家への帰り道の途中、ティアラメンツ三人娘に俺が見た光景の話は既にしていた。それに加えて、今回の件から予想できる壱世壊へ行けるかもしれないという事も。

「メイルウは以前、俺に言ったな。俺には精霊に対する親和性は言葉を交わす程度しかないって」

『？　はい、確かに言いましたね』

『まさか……アンタの精霊との親和性を今から上げるって言うつもり？』

『……出来るかできないかで言えば……出来る。でも……』

『それにはとてつもない時間が掛かってしまいます……』

まあ、そうだろうな。彼女達の言う通り、俺自身の力を底上げするという事は可能なのだろうが、それには長い時間が必要になるだろう。

筋肉みたいにどうすれば鍛えられるかという事が分かっている訳では無い、精霊との親和性というあやふやな物を鍛える方法なんて見当もつかない。考えられる事と言えば、精霊達とコミュニケーションをよく取ったり、デュエルをして絆を深めていくとかだろうか？

「俺の精霊への親和性を今から上げるのは難しいだろう。でもその逆なら出来るかもしれない」

『逆？』

『私達精霊人間からあなたへの干渉力を高めるといふ事でしょうか？』

「まあ、多分そういう理解であつてと思う。自分でもなんて表現すれば良いか分からないんだけどな……」

俺から精霊達に対する働きかけの方向ではなく、精霊から人間^俺への働きかけの力を強めれば良いのではないか。

それがここ最近の経験から予測した俺の推測だ。

「さつき、二枚目のペルレイノを手に入れた時。俺は確かにペルレイノという世界を見ていた。だけど、その時目の前に居た財前さんは「俺が安心していい」という認識でしかなかった。つまり、俺自身は別の世界に移動したという事では無かった」

あの時、俺はペルレイノに居た訳では無く、文字通り見ていただけだったのだろう。

『壱世壊Ⅱペルレイノ』というカードを壱世壊への扉だとしたら、少しだけ開いた扉の隙間から向こう側を覗き込んでいただけで、扉の向こう側に超える事は出来ていなかったんだ。

『それじゃあ……アンタがペルレイノに行く方法って……』

『……カードを集める……』

「そう言う事だ」

それに、思い返せば俺は自分が思っている以上に精霊から影響を受けたことが何度か有るじゃないか。

一つ目はスペクターの聖サンアバロン・ドリュアトランティエ天樹の大母神。

ドリュアトランティエが俺に触れる事が出来たのも、スペクターが同名カードを何枚も所持していたからこそ、彼女の人間への干渉力というものは普通の精霊よりも強力だったのだろう。

これは完全にイメージの話になってしまいが、あの男ならサンアバロンカードを無限回収しても全くおかしくはない。

二つ目は他でもない三人娘^{ティアラメンツ}。俺は彼女達を最初に買った時にそれぞれ三枚ずつ購入している。

いくらティアラメンツが融合テーマだったとしても、俺の身体に融合して感覚を共有したり、限定的とはいえ俺の身体を自由に動かしたりするというのはやはり何かがおかしい。

俺と彼女達との繋がりが強いからというのも間違いではないのだろうが、彼女達にそんな事が可能な大きな理由はやはり三枚のカードがこの場が集まっている事によって人間への干渉力が強くなっている

たからなのだろう。

そして、三つめは……『エルシャドール・フュージョン神の写し身との接触』のカード。

あの時の効果の対象は俺に対してでは無かったが、あのカードが三枚揃った時、カードの持つ力が強まっていたのは間違いなかったはずだ。

その結果、ミドラーシユが全てを理解したと言っても過言ではないのだから。

「せめて後もう一枚……。三枚、ペルレイノのカードを集めれば俺も向こうの世界に渡ることが出来る……。気がする」

『……なんだかはつきりしないわね』

そう言わないで欲しい。残念ながら、確証があつて言っている訳では無いのだ。

二枚でペルレイノの扉は隙間が出来るくらいには開いたのだ。なら、もう一枚あれば半開きくらいになって人間の一人くらい通れそうなんだろう。

『でも、光明が見えてきましたね』

『……今までは手掛かりも何も無かったから随分マシな状況……』

メールウとハウフニスの言うように、今まではどうすれば良いのか、何をすれば良いのかすら分からない状況だったのだ。それを考えれば目的がはつきりしたという事に間違いは無いのだから。

「よし、そうと決まったらペルレイノのカードを探すぞ！」

『結局のところ、これまでと方針は変わらないって訳ね』

『ふふ……今までやって来た事は間違つてなかったって事じゃないですか』

『……物は考えよう……』

やるべきことは確認できた。

しかし、今もそこそこ力を入れてティアアラメンツカードを探しているが、あまり成果は出ていないのが現状だ。

となると、少し趣向を変えてカード探しをしなければいけないかもしれないな。

既に足を使つての搜索は行っている。

友人の伝手を使って気にかけてもらおうようにはしている。

あまり使いたくない手だが、インターネットの力も利用している。
となると、あと俺に出来る手段は……

「ダメ元で精霊に聞き込みでもしてみるか……」

とは言え、多くの野良精霊達は人間世界に存在するカードの情報なんて持ち合わせては居ないだろう。

強いて言えば、マスカレーナは力に成ってくれそうだ。彼女がどういった方法で人間界の情報を手に入れているのか不明だが、かなりの事情通な事は確かである。秘匿されているPlaymakerの正体を把握しているところからも、何らかの手段で情報入手する手段を持ち合わせているはずだ。

他に聞き込みするべき精霊は決闘者に憑いている精霊か。そういった精霊達なら人間のマスターについて回る事で人間界にあるカードの事情に詳しい可能性がある。

だが、俺がかつて所持していた精霊付きのカードを譲渡した人達で、今もコンタクトが取れるのは島くらいだ。

なぜなら、俺が精霊付きのカードを渡した人物は知り合いとは限らないからである。精霊達がどういった基準で決闘者^{マスター}を決めているのかは知らないが、精霊を連れて街を歩いているとある日突然「私はあの人について行きたい」と言い出すことがあった。

俺からすればただの通行人の他人だ。だが、彼・彼女達からすれば運命の人みたいなものなのだろう。

そんな時は精霊と別れを告げた後、勇気を振り絞って「ラツキーカードだ。こいつが君のところに行きたがっている」とかGXの遊戯みたいな事を適当に言いながらカードを決闘者へ無理やり押し付けて姿を消すというのを数回やったものだ。

そんな訳で、俺はあいつらのマスターについて詳しい事は知らないし、連絡先だって知らない。

そう考えると俺の知り合いである島に譲渡された『グリーン・ブーン』は極めて珍しいケースであると言える。

だけど、グリーン・ブーンは人間の言葉を話せないからなあ……

こっちの言葉を理解してはいるんだろうけど……。聞き込みをする相手としては不適切だろう。

あれ？ となると、もう会いに行く相手はほとんど決まってるみたいなものじゃないか？

「今度マスカレーナに会いに行ってみるか……」

とりあえず、次LINK VRAINSに行くときは三人娘にしっかりと説明してから行かないとな。

サイバース精霊界

唐突だけど意識データって何？　ってそもそもみんな思わないだろうか。

この世界ではどうやってかは不明だが、AIが現実世界に実体化して人間の意識データを直接ぶっこ抜くとかいう事件が起きたりする。AIが実体化というだけでも意味不明だが、人間から直接引き抜くことが出来る意識データというものは一体何なのか。

この世界に来てからSOLOテクノロジー社が発表しているLINK VRAINSの公式説明なんかを一読してみたのだが結果は……

俺にはよく分からん。

という訳なのだけど、流石にそれだとちょっとアレなので、自分なりに考えてみたことがある。

意識、というものは結局のところその人物の経験から形成された物だと思う。つまりそれは記憶と言い換えても良いものではないだろうか。自分が考える自分自身。所属、特技、好きな物、嫌いな物から歩き方や言葉、技術等々……。そういったものをこねこねして一塊にしたものが意識だと思っただよ。

もし、意識というものが魂に刻まれるような物だったらこの世界の技術でもそれを機械で読み取ってどうこうするなんてことは出来ないはずだ。まあ、脳に記録されているそれらを読み取ってどうこうする事が出来るというのもしかたかなりおかしい話だとは思っけど……。だから意識、つまり記憶を取られた人間は眠ったような状態になる。所謂意識を失うという状態だ。

逆に呼吸の仕方や心臓の動かし方といったことは生まれたての赤ん坊ですら出来る事であり、これは経験によって獲得したものである。なく、生物としての人間が初めから所持しているものである。そのため意識を失ってもこれらが止まることは無い。

さて、ここで何で突然俺がこんな事を考えているのかという話になる。

(ふーん、ここがそのLINK VRAINSって場所なの。変な格好の奴らが一杯居るわね)

「それは思っても言っては駄目な奴なんだぜ」

それは、精霊シエイレインをLINK VRAINSに連れてくることに成功したからである。

ティアラメンツ三人娘の潜水融合状態というのは言わば俺の意識に彼女らの意識が混ざり合ったような状態だ。別にこの状態の俺が彼女達の記憶を有している訳では無いし、彼女達のように人魚の如く水中を泳ぐことは出来ない。

だから正確には俺自身が「自分に今ティアラメンツが融合していると認識している」という状態である。

それにより、融合状態の俺の意識を読み取った機械が俺を介してLINK VRAINS上に精霊の意識を構築して再現している……のだと思う。

だからこの場所で彼女は精霊として姿を現すことが出来ず、常に俺の中から声が聞こえてくる状態だ。もう一人の僕みたいなもんだな。

ちなみに、彼女の声がマスカレーナのようにLINK VRAINS上に存在している精霊に声が聞こえるかは……まだ試していないので謎である。

「それにしても酷い争いもあったもんだな……」

(何よ？ 私達の勝負に文句でもある訳？)

「いや……」

俺が融合できるティアラメンツは一人まで。つまり、それはLINK VRAINSに来ることが出来るのは一人までという事を意味していた。それを知った三人娘はそれはもう争った。流石に武器までは持ち出していなかったが、一生キヤットファイトが続くかと思っただものだ。

女の子って本当にああいう風に喧嘩するんだなあ……。

(それで、誰に会ったか知ら?)

「LINK VRAINS在住のマスカレーナさんだ」

(いや、誰よ)

誰と言われてもそれ以外に説明する事なんて無いんだけどなあ
……

「まあすぐに分かるさ。きつとその辺に……あ、いたいた」

俺がLINK VRAINSにログインすると決まって数分後くらいに彼女は自慢のローラースケートを転がしながら俺の前にやって来る。

もしかなくても俺のログイン情報とか監視されてたりしないよね？ ちよつと怖くなってくるな。

『やあやあラッセさん！ ご無沙汰ですね！』

「おつすおつす。突然なんだけど、今日はマスカレーナに聞きたいことがあるんだ」

『はいな。ラッセさんは今ティアラメンツというカードを探しているんですよ』

「何で知ってるん??？」

流石に怖くなってくるぞ。

『結論から申し上げますと、今の所それに関する情報は持ち合わせていません』

(役に立たないわね)

「……こら」

『おやおや、随分失礼な人魚さんですね』

「え？ マスカレーナにはシェイレーンの声が聞こえているのか？」

『まあこれでも同類精霊ですから。一体その人魚さんがラッセさんとナニをして、今そんな事になっているのか、私は追求はしませんよ』

「別にやましい事はしてないが……」

『……』

マスカレーナは意味深にウインクしながらそう言うが、本当に変なことはしてないぞ。そんなチラチラしたって特別面白い話なんて無いぞ。

(???)

シェイレーン、君は何も知らないままの君で居てくれ。うん。

『で、話を戻しますね。私は情報屋ではなく、運び屋です。仕事柄色々

な話を聞くことはありませんけど、情報収集が専門ではないのです』

「あれ？ そうだったんだ」

てつきり彼女は情報屋みたいなものだと思っていた。

『ですけど、私には知り合いが沢山居るのです』

「なるほど。つまり、知ってそうな人を紹介してくれるって事か」

『そう言う事です』

よし。

少し遠回りになりそうだが、少しずつ目的に迫っている感覚があるぞ。

「そういえば、君はどうやって人間界の情報を集めているんだ？」

『それは企業秘密です』

「あ、はい」

『ですが、彼女達に会わせてあげるのには条件があります』

「それは？」

『私をラッセさんのデツキに入れて下さい！』

ふむ、やはりその条件を付けて来たか。

彼女をデツキに入れて運用するにあたって問題になるのは、彼女がサイバース族であるという事だ。今、この世界でサイバース族を使うものなら、どこからともなくサイバース絶対殺すマン^{騎士}がやって来て因縁を付けられるに決まっている。そうしたら面倒な事件に巻き込まれるのは確定的だろう。

この世界で使えば、であるが。

ペルレイノのカードを集め、向こうの世壊に行った時、俺は三人娘を虐げて居る者と対峙する事になるだろう。そして、その世壊でならハノイの騎士に察知されるような事もないはずだ。

そうなると、マスカレーナの力は貴重だ。

自分のエースリンクモンスターに耐性を付けるもよし、相手ターンにリンク召喚をして一妨害を構えるもよしの彼女の効果はとても強力である。ペルレイノでの大仕事を手伝って貰えれば幸いと言える。

その後の事は……後で考えればいいか！

「いっよ」

『まあ、ラッセさんなら断ると思つて……え？ 本当に？』

「ああ。ただ、LINK VRAINSでは君の事を使う事は出来ない。少なくとも今はな。それと、今後訪れる精霊界で起こるであろう戦いで力を貸して欲しい。身勝手なことを言っているのは理解している。それでも、出来れば手伝って欲しい。逆に俺がお願いする立場だ。頼む」

マスカレーナに頭を下げる。

彼女が俺とどういった関係を望んでいるのかいまち掴めないところがある。彼女がここで決闘者と一緒にデュエルで活躍する事を望んでいるのならきつと断られてしまうだろう。

だから俺に出来る事はこうして頭を下げてお願いする事しかない。

『ふーむ……なるほど。その戦いとやらはその人魚さんに関わる事なんでしょうね』

(その人魚さんって呼び方は止めなさい。私はシェイレーンよ)

『では、シェイレーンさん、と』

「どうだろうか？」

『良いですよ』

「本当か！」

いつの間にか俺と彼女の立場が逆転したみたいだな。

『ええ。すぐにデュエルで使ってくれないのは少し寂しいですが、私は人間界というものに興味があるので、ラッセさんについて行ければとりあえずはそれで満足です。それに、私の知る精霊界とは別の世界というのも中々面白そうですし』

「……そうか……。ありがとうな」

『いえいえ。これはお互いにメリットのあるお話、と言うやつです』

マスカレーナが居れば出来る戦術も増える。

これは俺にとつても非常に心強い。

『さて、そうと決まれば一緒に行きましょうか。彼女達に話を通しておく必要もありますしね』

「行くつて……どこに行く？」

マスカレーナが言う情報に詳しい人物が誰の事を示しているのか

は分からないが、ここからどこかに行く必要があるらしい。しかし、精霊である彼女の知り合いならその人物もまた精霊という事になりそうだが……？

『ふっふっふー。ところでラッセさん。私達サイバース族の精霊にとってLINK VRAINSはどのような場所だと思えますか？』
「え？ うーん……ここがサイバース族にとっての精霊界って事じゃないのか？」

サイバース族はAIが作り出した新しいデュエルモンスターの種族。ネットワーク上で生まれ、ネットワーク上で絆が育まれた彼女達にとってLINK VRAINSが自身の世界という訳ではないのだろうか。

『それは間違いなんです。サイバース族にとってここは、他の種族のデュエルモンスターの精霊にとっての人間界みたいなものです』

「ほえー。そうだったのか」
『ところでラッセさん。LINK VRAINSはあなたにとってどのような場所ですか？』

「んー？」

何だか哲学的な話みたいだな。

「ここは俺にとって大事な所だ！」的な事をマスカレーナは聞いている訳では無いだろう。原理的な話であれば、ここは俺の意識だけが存在出来る場所……って感じだろうか？

『ラッセさんにとってここは、精霊にとつての人間界のようなもの。この空間において私とラッセさんは同じような存在なんです』

「えっ、そうなの？」

『そうなんです』

「そうなのか……」

そう……なのか……？

ま、まあ、本当の所の話は分からないし、そう言う事にしておこう。

『LINK VRAINSは謂わば人間界とサイバース精霊界の中間地点』

「サイバース精霊界……」

『世界を分ける仕切りの部分みたいなものです。普通の人間はこの仕切りの向こう側に行くことは叶いませんが、向こう側の住人の手引きがあればコツソリ飛び越える事が出来るんです!』

「まさか、こんな身近に精霊界の一つがあつたとは……」

だが、確かにあり得ない話でも無さそうだ。

言ってしまったここはGXのデュエルアカデミアの様に特殊な空間なんだろう。人間界と精霊界の距離が近い空間。だから、少しの後押しだけで人間が精霊界に足を踏み入れることが出来る。

「……ん?じゃあマスカレーナはどうやってその仕切りを超えて来たんだ?」

『私はスペシャルなので』

「なるほど……」

教えてはくれないのね。

『では、早速出発しましょう! ラッセさんは目を瞑ってください』
「おう」

そう指示を出したマスカレーナ。

目を瞑った俺には彼女の姿は当然見えないし、精霊の彼女の気配を感じる事は出来ない。

(ツ! ちよ、ちよつと! どんな触わり方してるのよ!)

『へへへ……良いではないか良いではないか』

(く、くすぐったいんだけどおおお!!)

だが、声は聞こえる。

右の方から聞こえるマスカレーナの声と俺の中から聞こえるシェイレインの声。

シェイレインによると、どうやらマスカレーナは俺に触れているようだ、当然その感触は俺には無い。ていうか、俺の中のシェイレインはマスカレーナに触れられる感触が分かるのか……。やはり、精霊同士だからだろうか。

新発見だな。

「ん？」

突然何かに引かれる様にして動く俺の身体。

そして、気のせいかもしれないが何らかの壁の様なものを超えた気がした。

それと同時に俺の右手に感じる誰かの手の感触。

「もう目を開けても良いですよ」

「な……ん、ここは」

目の前に広がる世界はLINK VRAINSによく似ていた。だが、確実にLINK VRAINSではない。

その事を如実に示しているのは知らない言語が書かれた看板だろうか。

ネオンに彩られたビル群は妖しく光り輝いている。

「いらっしやい、ラッセさん。ようこそ、サイバース精霊界へ」

そして、そこに居たのは透けて向こう側が見える精霊状態ではなく、実体を持ったマスカレーナだった。

見渡す限り立ち並ぶ高層ビル。

そこに掲げられる様々な煌びやかな広告は街に不慣れな若者たちの注目を集めて止まないだろう。

街の光が明るすぎて気が付かなかったが、空を見上げてみれば今は夜らしい。現実世界の時間とはずれがあるようだ……それとも、この世界は一日中夜の世界なのかもしれない。街の光にかき消されて微かにしか見えない星の光は奇しくも科学技術が発達した俺達の世界と同じだった。

「さぎ、ラッセさんにこの街の案内をしてあげますよ〜」

「何と言うか……見慣れた風景とよく似ているのに、明確に違うって分かるもんなんだなあ」

「そうですねか？　ならラッセさんがここに住むことになっても問題ありませんね!」

「いや、問題あるだろ。そんな事にはならないと思うけど……」

マスカレーナに繋がれた手を引かれながら街を巡る。

俺は見知らぬ世界の光景に人並みの好奇心がうずいていた。

確かに街並みという意味では人間界とよく似たものかもしれない。空中に浮かぶディスプレイだってLINK　VRAINSだったら見慣れたものだ。

だが、この街を歩く人は人間ではなく、全員精霊だ。カードのイラストで見たことがあるような奴らもチラチラ見受けられる。

「あ、そうそう。ここならシェイレーンさんも精霊体ではなく、実体を持つことが出来ると思いますよ?」

(あ、確かにそうね。私からすればLINK　VRAINSもここも大して違いが無かったから、あんまり精霊界って気がしなくて気付かなかったわ)

彼女がそう言うと、俺の中から何かが抜けるような奇妙な感覚がした。

「んんんんんんんんん……。こうして実体を持つのは久しぶりね」

「おー」

俺から出て来たシェイレーンはいつも見慣れた半透明な精霊状態ではなく、髪に、服に、装飾品に、そして身体に確かな重みを感じる物だった。

「へー、いつも触れることが出来なかった精霊にこうして触れる事が出来るって言うのは何だか新鮮だなあ」

「ちよ、ちよつと……あんまり触らないですよ……くすぐったいじゃない……」

「ああ、ごめんごめん」

物珍しさからうっかりシェイレーンの手を取ってその感触を確かめるように握りしめてしまっていた。慌てて手を離れたが、彼女に少し距離を取られてしまった……。

「おーい、ラッセサーン？ 私はー？」

「あ、そうだった。もう精霊のマスカレーナに触れてたんだったな」

シェイレーンに触れるために無意識に離れたマスカレーナの手。その手が再び俺の手を取り触れ合うことが出来るという事をアピールしていた。

二人とも人間の少女の様に柔らかい肌の感触と確かな熱を感じる物だった。

「……」

「あれ？もしかしてラッセさん、照れてますか？」

「……まあ、少しだけ……」

最初は彼女達はデュエルモンスタースターの精霊という意識が先行していたため特に思う所は無かったが、こうして確かに触れ合う事で女の子な部分を認識してしまうと……少々恥ずかしいものだ。

「……イヤらしい……」

「……何も言えぬ……」

俺も男の子です故……。

「ねー、ラッセさんはえっちですねー」

「あなたにも言ってるんだけど！ さつきこいつが目を瞑っている時の触り方は完っ全に変態のそれだったわよー！」

「い、いったいどんな触られ方をしていたんだ、俺は……」

「それは秘密ですね〜」

目を瞑っていた時、俺はマスカレーナに一体どんな事をされていたんだ!?

「それと、シエイレーンさんに注意点が一つ。ラッセさんは人間界に戻る時はLINK VRAINSからログアウトする時と同じ方法で戻る事が出来ますけど、シエイレーンさんはその時ラッセさんの中に居ないと置いて行かれちゃうと思うので気を付けてくださいね」

「ひえっ……」

ここに取り残された時の事を想像してしまったのか、俺から少し距離を取っていたのから一転、今度はピタツと身体がくつつきそうになるくらい近づいてきた。

そして、思わずと言った感じに目元から一粒の涙が零れる。彼女の顔から離れた涙の雫はいつもの様に真珠へと変化する。

「んしょつと……いつもはいつの間にか消えてた真珠もこの世界ではそのまま残るし、やっぱり触れるんだな」

「おー！ 綺麗ですね〜」

地面に落ちたシエイレーンの涙の真珠を拾い上げ、掌で転がしてみる。

その真珠は夜の街のネオンの光を反射していつも以上にキラキラと輝いているように見えた。真珠の白に様々な光が映り込み、虹色の様に輝くそれは、マスカレーナが言うようにとても綺麗だった。

「記念に貰っておくか。まあ、持ち帰れるとは思えないけど」

「……恥ずかしいから捨てて欲しいんだけど……」

えー、折角綺麗な物なのだし、流石にそれは勿体ない。

「さて、それでは目的の人物がよく居るバーにでも……あ、マズイ」

目的地に案内してくれようとしていたマスカレーナが何かに気が付いたのか、渋い顔をしながらそう呟いた。

「何かあったか?」

「お二人とも！ ほんの少しだけ私はこの場から離れます！ すぐに戻って来ますのであまりここから動かないで居て下さいね！」

「え、ちよつと……行つちやつたな」

「何をあんなに慌てていたのかしらね？」

早口でそれだけ告げたマスカレーナは自慢のローラースケートを全速力で転がしながらこの場から離れていく。あつという間にその姿が見えなくなつたのと同時に、俺達は誰かに声をかけられた。

「そこのお二人さん！ 今ここに、この娘が居ませんでしたか!？」

〔セキュリティ・フォース
「S—Force 乱破小夜丸」!〕

それは俺が前世で知っていたカードテーマ、セキュリティ・フォースのカードの精霊だつた。

彼女達のカードイラストの中で小夜丸とマスカレーナは追う者と追われる者の関係だつたはずだ。今も彼女はマスカレーナの人を小ばかにしたような「あつかんべえ顔」の写真を俺達に見せて確認を取つて来ている事からも間違いではないだろう。

「あつちらへんに行つたよ」

俺はマスカレーナが逃げて行つた方向から微妙にずれた方向を指差しながらそう答えた。

「あつちですね！ ご協力感謝致します、精霊さんと人間さん！

………人間さん!? どうしてこんな所に人間さんが!？」

やはり、精霊界で人間は珍しいのか、小夜丸は目を大きく見開いて驚愕の表情をしている。身体全体でリアクションを取っているあたり、随分愉快的な娘なようだ。

しかし、この世界の治安組織と思われるセキュリティ・フォースに目を付けられるのは面倒事を招く可能性がある。ここは不自然でない理由を答えるべきだ。

「観光ですよ」

「なるほど、観光ですか」

外国の入国審査は大抵これで何とかなるつて英語の教科書で学んだが、何とかなるもんだな。

「ぜひ、このEden Cityを楽しんで行って下さいね！ それでは、私はこれで失礼します！」

「Eden City?。」

俺の疑問に答えることなく小夜丸はマスカレーナ追跡のために走り出して行ってしまった。

「アンタ、今平然と嘘ついたわよね」

「人聞きが悪いじゃないか、シェイレーン。確かに彼女はあつちらへんに逃げて行ったさ」

まあ、そのまま真つすぐ追いかけて行っても追いつくことは出来ないと思うけどな。

「いや、セキュリティ・フォースをだまくらかすなんて、ラッセさんも中々のワルですねえ」

「うわっ、びっくりした。どこから出て来てるんだよ……」

「すぐに戻るって言ったじゃないですか」

俺に話しかけて来たのは足元のマンホールから頭を出して周囲を確認するマスカレーナだった。

追手が居ない事を確認すると、怪しまれないうちに素早く地下から飛び出て来る。

「とんだ邪魔が入りましたが、今度こそ行きましよう！」

追跡者を振り切り、気を取り直して前を歩きだすマスカレーナ。

俺とシェイレーンはそんな彼女について行きながら夜の街を歩いて行く。

女怪盗

「そういえば、サイバース精霊界って言ってたけど、ここに居る精霊はサイバースだけじゃないんだな。確か小夜丸は戦士族だったはずだ」
「おや？ ラッセさんは彼女の事を知っていたのですか」

小夜丸と遭遇した後、マスカレーナの案内の元、街を歩く俺は気になつたことを聞いてみる事にした。

『セキユリテイ・フォース』
『S—F—o—r—c—e 乱破小夜丸』というモンスターはサイバース族ではなく戦士族だ。

彼女が所属するセキユリテイ・フォースはその名前から一見サイバース族で構成されたテーマカードの様に思えるが、実は戦士、サイキック、サイバース、機械、魔法使いと様々な種族で構成された集団だったりする。

そんな戦士族の小夜丸がこのサイバース精霊界と呼ばれる場所に居る事が不思議だったのだ。

「そうですね。ここに居る精霊達はサイバース族も多いですが、他の種族の方達も沢山居ますよ。私はここをサイバース精霊界と呼んだりしますが、実際の所この世界に決まった名前は無いのです」

「それじゃあ、さつき小夜丸が言つてたE d e n C i t y っていうのもこの別名みたいなものか」

「ですね。精霊達の中にはよく聞く人間界の街の名前であるD e n C i t y からもじつてこの街のエリアをそう呼ぶ者達が居ますので」

この精霊界はサイバース『の』精霊界というよりはサイバース『な』精霊界と言つた所だろうか。

そう言う事ならサイバース族だけではなく、背景ストーリー的に科学技術に適性がありそうなモンスターの精霊が居るのも不思議ではない。

「あー！ ラッセさん！ あの二人は知っていますか？」

そう言いながらマスカレーナが指さしていたのはとあるビルに掲げられた広告に写っている二人組だった。

「あ、あれは！ マグネツツ1号&2号！」

「いや、彼らではなくてですね……ていうか、何でそつちに注目したんですか？ まあ確かに彼らも人気配信者ではありますけどね」

「え？ あのダサそうな二人組が……人気？」

そこに描かれているのは古代の遊戯王カードのモンスター、『マグネツツ1号』と『マグネツツ2号』。シエイレインの言う通り、現代の感覚からすれば少しやぼったいデザインかもしれない。だけど、それは思っても言葉にしたら駄目だぞ？

まあ俺もあの二人組が人気配信者としての立ち位置を獲得している事には驚きを隠せないんだが。

「ていうか、生粋の戦士っぽいあの二人はこんなサイバースな世界でやっていけるんだよな……。ちよつと意外」

「あの二人はマグネツツのコスプレですから本人じゃないですよ？」

「コス……プレ……マジ？」

「マジです。ちなみに彼らの正体は情報通の私ですら把握できていないです」

そういうマスカレーナの表情は少し悔しそうであった。もしかして、あの二人の正体を探ってみたことがあるのかもしれない。

いや、それよりもまさかあのマグネツツの二人組が本人じゃなくてコスプレだったとは。

だが、それはそれでどうしてコスプレのお題としてマグネツツを選んだのか、その意図が不明過ぎてもっと怖い気がするぞ。

「つて、そうではなくて！ 見て欲しいのはその隣です！ 色々なモニターに彼女達が映っているじゃないですか！ 逆にあの中からマグネツツの二人組を見つけ出したラッセさんに脱帽ですよ」

いや、まあ……昔から遊戯王を遊んでいた人間としてはあの二人をスルーする事は出来なかったし……。ある程度はわざとだったのだから、やはりマスカレーナが言いたかった二人組というのは彼女達の事なのだろう。

マグネツツ1号&2号は遙か昔のモンスター達だが、とあるカードの背景に描かれたことで一時界限を騒然とさせた事があった。

そのカードは……

「Live☆Twinだな。もしかして、会わせてくれようとしてる精霊って彼女達の事か？」

それは精霊界に訪れた瞬間数多く目に入るモニターで映し出されている二人組の女の子。

ピンク髪の澆瀨そうな女の子はキスキル。

水色髪のダウンナー系の女の子はリイラ。

二人組のヴァーチャル配信者というなんとも世相を反映したモニターカードと言える。

だが、それは彼女達の表の姿。裏では盗みを生業としている女怪盗コンビ、Evil★Twin。

確かに彼女達ならマスカレーナも有していない情報を手に入れることも出来るかもしれない。

「……ラッセさんは本当に色々な事を知っていますね……。これじゃあ私要らないんじゃないですか？」

「そんな事は無いさ。確かに彼女達の事を多少は知っているが、俺はこの街のどこに彼女達が居るのかなんて知らないからな」

「そうですか？ それなら良かったです……と、到着しましたよ」

マスカレーナが立ち止まった建物は煌びやかなビル群と比較すると随分と質素な物だった。高い建物に囲まれたその建物は周りに比べると小ぢんまりとしており、この賑やかな街を目的もなく歩いていれば見逃してしまいそうな程だ。

知る人ぞ知る店、とはこういうのを言うのだろう。

「今日はあの二人も居るはずですので」

俺はこういった一見さんお断りっぽい雰囲気のお店に入った経験が無く、少し尻込みしてしまうが、マスカレーナは慣れたものなのか何の気負いもなく扉をくぐり抜けていく。

そんな彼女に置いて行かれないように俺とシエイレーンは急ぎ足で追いかける。

「あ、居た居た。おい、そこのお二人さん」

「んん？ あら、誰かと思ったらマスカレーナじゃない！ 何だか随分久しぶりじゃない？」

「そう言えば、最近はこの街で見かけなかったね」

マスカレーナが声をかけた二人組はコウモリのような様な羽を持ち、チロチロと動く悪魔のような尻尾が臀部から伸びている。

彼女達がLive☆Twinの中の人、キスキルとリイラだ。

「おやおや？ マスカレーナがここに人を連れてくるなんて、珍しいわね」

「お友達？」

「はい。ラッセさんとシェイレーンさんです」

俺は二人に「初めまして」と軽く挨拶をする。俺が挨拶をしているのを見てか、シェイレーンも渋々と言った感じで軽く会釈をしている。

シェイレーンは人見知りの気があるからか、その後は俺の後ろへ回り込んでしまった。

……ん？ でも、その割にはマスカレーナとはすぐに打ち解けていたような気もするな？ 彼女の光のギャルみたいな雰囲気は充てられたのかな？

「実は、今日は二人に頼みたい事があるんだ」

俺はそう言っ事の事情を簡単に説明した。

☆

「なるほど……。それで君はそのシェイレーンちゃん達に関連したカードを集めている訳ね」

「ああ。特に『壺世壊Ⅱペルレイノ』ってカードを探して欲しい」

「依頼内容はそれらのカードを手に入れる……って所かしら」

「あ、いや……流石にそうすると問題がありそうだから、所在だけ知れたらそれでいい」

キスキルとリイラの質問に答えながらも、俺は彼女達が果たして協力してくれるのか、少し不安だった。

彼女達は怪盗だ。それも主なターゲットは宝石のような現金的な価値のある物なような気がする。そんな彼女達がこんな盗みではな

く情報収集の様な仕事を引き受けてくれるのか？

「ふくん、あんまり面白そうな仕事じゃないね」

リイラはそう答える。

うぐつ……やっぱりか。何となくそう言われるような気がしてたんだ。

「でも、マスカレーナの紹介だし、手伝ってあげても良いわよ」

「本当か！　ありがとう！」

だが、キスキルは承諾してくれる。それを見てリイラの方も「ま、いか」って感じで同じように承諾してくれた。

「ただし！　私達を動かすのならそれ相応の報酬を頂くわよ」

「こんな感じでお願いなね」

リイラが親指と人差し指を合わせて逆OKのジェスチャーをしてくる。まあ、つまりは金もしくは金目の物という訳だ。

「アンタ、そんな物持つてるの？」

「う、うーむ……」

現実世界に帰れば貯金を崩して何とかする事も出来るが、ここは精霊界。この場にはLINK　VRAINSのアバターの状態で来ているため、実際にはLINK　VRAINS上で持ち合わせている物で支払わなければならない。

それに、金目のものと言ったが、精霊である彼女達が満足するような物とは……。

俺はデュエルディスクを操作して何かないか探してみる事にした。

「お、これはどうだ？」

「……何これ？」

「……お……宝……??」

『『王の右手の栄光』だ』

それは黄金と宝石で出来た様々な宝が描かれた一枚のカードだった。

原作遊戯王ではこれをもってペガサスに勝利することが出来れば多額の優勝賞金と引き換えることが出来る交換券みたいなものだった。

まあ、俺が持っているのはこの世界で行われたデュエルモンスターズの大会で配られたプロモカードなのだが……ワンチャン精霊界だったら財宝って事にならんかね？

「……………」

キスキルとリイラはお互いを見合わせた後、腕を交差してバツテンを作っていた。

「どうやらダメらしい。」

「うーん……他のものとなると……お？」

苦し紛れにアバターのポケットをガサゴソと漁っていると、手にかが当たる感覚がした。

「これならどうだ？」

「あら、随分大きな真珠じゃない」

「いいね」

それは精霊界に來た時にシェイレーンが落とした涙の真珠だった。

「あ！ それはシェイレーンさんの涙が変化したやつですね！」

「へく！ じゃあこれは正真正銘の人魚の涙とも言わべき代物な訳ね」

「マスカレーナが言うなら信用できる」

マスカレーナの補足説明もあり、Evil★Twinの二人の印象はとても良さそうだ。

「これならどうだろうか？」

「もちろん！」

「おっけー」

「よっしゃー！」

「……………ねえ、私の恥をあまり広めて欲しくはないのだけど……………」

微妙な顔をするシェイレーンを何とか宥めすかし、彼女の涙の真珠と引き換えにキスキルとリイラに仕事を依頼することが出来た。

これで今回の目的は達成出来たな。

ログアウト

「さて、仕事の話はこれくらいにして、この出会いを祝して一緒に飲みましょう！」

「私達が奢ってあげるよ」

「わーい、やったー！」

「マスカレーナは自分で払いなさい」

「ちえー、ケチですねえ……」

カウンターの空いている席に俺達を誘うキスシルとリイラ。二人は既に何かを飲んでいる様子だったが、グラスに残った分をさっさと飲み干し新たにドリンクを注文していた。

そんな彼女達の好意に素直に従う事にした俺とシエイレーンはE
vill★Twinの二人の横に座ったマスカレーナの隣に座る。

「お二人は何か飲んでみたいものはありますか？」

そう言つてマスカレーナがこの店のメニューを渡してくれるが、残念ながら俺は精霊界の文字を読む事が出来ない。そのため、商品の名前が書かれているであろう文字の横にあるイラストから物を予想して注文する事にした。

「じゃあ、オレンジジュースを」

「私も同じの……」

俺と同じようにこの店のメニューを渡されたシエイレーンだが、彼女も頼むものを決めかねていたらしい。それとも、こういった場所では何を頼めば良いか分からなかったのだろうか？

とりあえず、俺と同じものを頼めば変な事にはならないと思つたのか、彼女もオレンジジュースを注文していた。

「おやおや、ラッセさんとシエイレーンさんはお子様ですね。大人がこういう店で頼むものつて言うのは決まってるんですよ？」

酒だろうか？ 人間に対する法律も何もあつたものではない精霊界では未成年の俺が酒を飲んでも問題になることは無いだろうが、単純にあんまり好きじゃないからなあ。

コーヒーや紅茶でも良かったのだが、今はなんとなくオレンジ

ジュースを飲みたい気分だ。

「店主！ 私はカシスオレンジジュース！」

「カシオレか……ってジュースじゃねえか」

女子大学生みたいなチョイスだなんて一瞬思ったらマスカレーナも結局ジュースだったことに思わず突っ込みを入れざるを得ない。

カシスオレンジジュースって……それはもうほとんどオレンジジュースと変わらないと思うのだが、気のせいだろうか。

「うん、美味しい！」

「あ、はい……ん、普通にオレンジジュースだな」

「美味しい……帰ったらまた飲みたいわね」

何故かしたり顔のマスカレーナを適当にあしらいながら、目の前に出されたグラスに恐る恐る口を付ける。

精霊世界のオレンジは実は俺が知っているオレンジと違う可能性も考えていたが、そんな事は杞憂だったらしい。

甘みと酸味が交わったオレンジ色の液体は正しくよく知るオレンジジュースそのものだった。

この果汁1%以下っぽいわざとらしいオレンジジュースの味は大人になっても楽しめるものだと、俺は思うな。

「果物と言えば……ドリュアトランティアの実は美味かった……。あれをジュースにして飲んでみても良かったかもしれない」

「……え？ ちょっと待って、ドリュアトランティアってあの聖天樹の大母神の事!？」

俺の何気ない呟きに凄いい勢いで食いついてきたのはカウンターの一番左に座っているキスシルだった。

「？ そうだけど？」

「か〜く〜くっ！ 君、中々ぶっ飛んだ事してるわねー」

「聖天樹の大母神の果実はとんでもない貴重品だよ？」

「そうなの？」

キスシルの右隣りに座っているリイラも話に加わって来る。彼女達によると、どうやら俺が口にしたあの果実は結構貴重な物だったらしい。

「まず、あの大母神様がその果実を他人に与えるなんて事はほとんど……いや、ほぼ絶対無いんだから！」

「市場に出回る事もなく、ただただその味だけが伝説みたいに広がっている。あれを売ったらこの世界で一生遊べるほどのお金が貰えたかもね?」

「俺はそんな物を口にしたのか……」

キスキルとリイラが興奮気味にそう捲し立てるが、既に美味しい果物として食べてしまった俺からすると全く実感が無い。

というか、あの時三人娘ティアラメンツはそんな物をムシヤムシヤ食ってたのか。

ドリュアトランティアは気が付いていなかったのだろうか? もしかして、あの時精霊が見える俺というイレギュラーに気を取られていたのかもしれないな。

「まあいいんじゃない? その経験はラツセ君をこの世で何人も居ない大母神の果実を口にした人物にした訳だしね」

「貴重な経験だね」

Evil★Twinの二人もこう言っているし、深く考えずに貴重な経験をしたという事にしておこう。

……無断で果実を食ってた三人娘には後で謝りに行かせるべきだろうか……?

そんなこんなでいくらか時間が経過した頃。

静かな店に似つかわしくない元気で真つすぐな声がこの場を満たした。

「開ける! セキュリテイ・フォース S—Forceだ!」

「あら? この声は……」

「あいつらだね」

突如店内に響いた少女の声。

キスキルとリイラは心当たりがあるらしい。そして、俺もその声には聞き覚えがあった。

「小夜丸か?」

『セキュリテイ・フォース S—Force 乱破小夜丸』

先ほど街中でマスカレーナを追跡していた少女がどうやらここま
で追って来たらしい。

「マスカレーナ、あんたつけられたんじゃないの？」

「そんなへマはしきないですよ。腐ってもセキユリティフォースの乱波忍者
は伊達ではありませんねえ」

「え？ 何で三人ともそんな余裕なの？ これマズインじゃない？」

追われていたマスカレーナは勿論、怪盗コンビであるEvil★T
Winの二人もセキユリティフォースに追われる立場の人間だと思
うのだが、その当事者達は今でも余裕の表情を崩さない。

むしろこの場で俺が一番慌てているまであるな。

「へーきへーき。だってあの娘はおバカ……な位に真面目ちゃんだか
らね」

「鍵もかかってない店のドアを叩いて呼びかけるだけで、店主が出て
来るまで入ってこないそのバカ……真面目な所は偉いよね」

「ああ……」

哀れ小夜丸。

どうやらキスキルとリイラからはおバカな娘としてしつかり認知
されてしまっているらしい。

「あ、ちよつと待ってラッセ君。はい、コレ」

「これは？」

「これは私達と連絡が取れるホームページのアドレスよ。人間界に
戻ったら三日後くらいにブラウザからそのページにアクセスして
ちよーだい」

「それくらい時間があれば依頼も完了出来てるはずだから」

キスキルに渡された紙に書かれていたのは一つのURLだった。

形式も俺達がよく知る物であり、これが人間界で有効なアドレスで
あるという事を示していた。紙に書かれたURLをデュエルデイス
クに記録し、人間界に戻っても使えるようにしておく。

「ありがとう、二人とも」

「また会いましょう」

「またね」

二人に別れの挨拶を済ませると、彼女達は店の裏口から出て行った。

「さてと、セキュリティティフオースも来ちゃったことですし、私達もそろそろお暇しましょうか。ラツセさん、シェイレーンさん」

「マスカレーナも自分の飲み物をすっかり飲み干してから席を立ちあがり、俺にそう言うて来た。」

「確か、シェイレーンと一緒にログアウトすれば良いんだったな」

「はい、それで直接人間界に戻ることが出来ます。そうそう、ラツセさんが人間界に戻ったらメインアカウントのメールボックスを確認してください。プレゼントを用意しておきますから!」

「プレゼント?」

「中身は……すぐに分かるので、ここでは秘密にしておきます」

「メールを見れば良いんだな。分かった」

「マスカレーナが言うプレゼントとやらも気になるが、今はこの場から離れる事を優先しよう。」

「シェイレーン、帰るぞー」

「……ふえ!! あ、待って! 置いて行かないで!」

「さつきから静かだったシェイレーンは出されたオレンジジュースをちびちび飲むことに夢中になっていたらしい。」

「俺の帰る発言にそのままだどこの世界に置いて行かれることを思い出した彼女は急いで俺の中に融合してくる。」

「……そんなに気に入ったのなら戻ってから飲ませてあげよう。」

「先ほどまでは元気に扉を開けるよう告げていた小夜丸の声が段々気弱な物に変わってきたのを横目に……横耳に? 俺達は人間界に戻る。」

「ログアウト!」

「遠のく意識。」

「それはLINK VRAINSからログアウトする時と全く同じ感覚だった。」

「……んん……」

今日は久しぶりに随分長くログインしていたような気がする。固くなった身体の節々を伸ばしながら起き上がる。

『あ！ 戻って来たんですね！ おかえりなさいです』

『……おかえり……』

「ただいま」

部屋に置いてある巨大水槽で休んでいたメイルウとハウフニスを迎えてくれた。

「そう言えば、メールを見るとか言ってたな」

マスカレーナの言葉を思い出し、パソコンからメインに使っているメールアドレスのメールボックスを確認する。

「何だこりゃ。知らないメールアドレスからやたらデータ量の多いメールが来てるな」

普通だったら即ゴミ箱に突っ込むような不審なメール。しかし、そのメールの題名に書かれた『マスカレーナより』という一文を確認した俺はメールを開いてみる事にした。

「うわっ、何か勝手にデータのダウンロードが始まったぞ！」

すわウイルスか!? とビビった俺だが、そのデータの正体はすぐに判明する。

『じゃじゃーん！ プレゼントは私でした〜!!』

データのダウンロード完了と同時に姿を現したのは、精霊姿のマスカレーナだった。

何だかまた部屋が狭くなった気がするなあ。

これから賑やかになりそうだ。

「そうやって自分をメールで人間に送れるなら俺に頼まなくても人間界を見て回る事が出来たんじゃないか？」

『ラッセさんは差出人不明で謎に容量があるメールを開きますか？』

「……開かずに即ゴミ箱行きだな」

『そう言う事です』

「そう言う事か」

始めの歩

「正に灯台下暗しだな」

『まさか三枚目のペルレイノがアンタがいつも通ってる店にあるなんてね』

Evil★Twinの二人の情報によって『壱世壊Ⅱペルレイノ』がある場所が判明した。そこは俺がいつも放課後に通うカードショップだった。

☆

これは今から一時間前。

そして、サイバース精霊界を訪れた三日後の事。

キスキルに言われた通りに渡されたURLをブラウザで入力すると、画面に映し出されたのは動画投稿サイトのホームページの様だった。

『Live☆Twinチャンネル』……か？』

楽し気なサムネイルが数多く並んでおり、ついついクリックして動画を再生してみたくなるような工夫が凝らされている。サイト上の文字は精霊世界の言語で書かれているため、やはり俺には読むことは出来ない。だが、ホームページの構成やサムネイルの雰囲気からどんな動画か何となく理解できるのが面白い。

『え……このピンク色のと水色のがあの二人……？』

『そうですよ。二人はサイバース精霊界のトップ配信者でもあるんです』

中の人を直接知っているシェイレーンが驚きの声をあげる。リアルとバーチャルのギャップに戸惑いを隠せない様だ。

この三日間ティアラメンツで三人娘とマスカレーナは随分馴染んでいた。三人の中で対人関係という点で一番の難関であるシェイレーンを一番に攻略する事が出来ていたマスカレーナにとって、人当たりの良いメイルウとああ見えて好奇心旺盛なハウフニスと打ち解けるのにそう時間はかからなかった。

『シエイレーンちゃんがあつたつて言うキスルさんとリイラさんの事ですか？ いいなく私も会ってみたかったです』

『……ずるい……』

「まあ、あの二人も毎日飲んだくれてる訳じゃないだろうからな」

シエイレーンとLINK VRAINSに行つた後、当然のようにメルウとハウフニスもLINK VRAINSに連れて行くようにお願いされたため、順番に彼女達を連れて行つたのが一昨日と昨日の事。

マスカレーナの手伝いもあつて再びサイバース精霊界に赴き、色々見て回つたりもしていた。あの店に顔を出してみたが、残念ながらE
v i l ★ T w i n の二人に再び会うことは出来なかつた。

『……ん？』

しばらくホーム画面のまま何も操作をせずに放置していた所、画面の端から『Live☆Twinキスル』と『Live☆Twinリイラ』が歩いて来るアニメーションが流れ、画面のど真ん中で立ち止まるところ言つた。

『ちよつとちよつとく。折角このページを見に来てくれたんなら再生数くらい増やして行きなよ！』

『……☆もよろしく』

「動画を再生せずにホームのまま放置していると専用のアニメーションが流れるのか？ 凝つてるなあ」

視聴者を逃がさない工夫までされている事に俺は素直に感心していた。

『おーい！ ラツセ君？ もしかして何か勘違いしてや居ないかい？』

『……私達は今、君に話しかけてるよ』

『……え？ もしかして今話してる？』

『あつたり前よ』

記録されたアニメーションが指定されたプログラム通りに再生されたと思つていたキスルとリイラはリアルタイムで会話をしているようだ。

精霊と科学技術の塊であるパソコンを通して会話を……している？

「精霊が人間界の物に干渉する事なんて……君達はそんなに干渉力が強い精霊なのか？」

『ん〜、まあある意味では正解かな』

『……私達サイバース族はネットワークに対する干渉力に優れる種族。LINK VRAINSを介してなら人間界の物にアクセスする事も可能』

サイバース族の生まれ故郷とも言えるLINK VRAINSに對してならサイバース族はある程度の干渉力を有するという事か？だからマスカレーナはデータ化された自分のカードを俺にメールで送るといふ手法を取ることが出来た訳か。

『まあ、残念ながら君以外の人間には、この画面は真っ白に見えてるんだろうけどね』

『……人間の視聴者を取り込めればもつと再生数が増やせると思うのに……残念』

アニメチックなオーバーアクションで『残念』という感情を表すキスキルとリイラ。こうしてLive☆Twinの姿を見ていると、実際に会った時と随分印象が違って見える。

どうやら、人間の精霊に対する認識力というものはパソコンの画面を介していたとしても必要らしい。

人間に気が付かれずに精霊達がネットワークと繋がった物に干渉する事が出来るとしたら、この世の原因不明のバグ等の何割かはもしかしたら精霊の仕業だったりするのかもしれないな。

『おっと。本題を忘れるところだったわ』

『……ペルレイノの在処が分かったよ』

「おおー！」

流星は精霊世界を股にかける大怪盗だ。

この程度の情報を入手すること位訳ないという事だろうか。

『そこはね……』

☆

そのカードショップの名前を聞いた俺はすぐさま家を飛び出して
現在に至る。

『今まで何度もこの店には来ていましたけど……全然見つからなかつたですよね?』

『……見過ごした? ……』

「まあ、その可能性は無いとは言えない。小さい店だけどストレージボックスのカードの枚数は尋常じゃないからな。それに、表に出していないだけで倉庫にある場合もある。もしそうだったら店員に聞くしかないな」

ショーケースの中のカードの入れ替わりはそこまで激しいものではなく、また数も少ないため確認は容易だ。

しかし、一山いくらずで売られるようなストレージの中のカードを全て検めるには中々の根気が求められる。また、そう言ったカードは頻繁に補充が行われ、日々その内容は入れ替わっている事だろう。それに、そんなカードの内容や倉庫に眠っているであろうストレージ候補のカードを店員が詳細に覚えているとも思えない……。

だが、先にも言ったようにここは俺の行きつけのショップである。そのストレージを漁った回数は親の顔よりなんとやらである。そんな俺でも『壱世壊Ⅱペルレイノ』というカードを見つけたのは初回の一度だけ。

やはり、表に出ているストレージでペルレイノのカードを取りこぼしたというのは考えにくいと言わざるを得ない。

「Evil★Twinの情報だと、この店に買い取られたペルレイノのカードはまだ残っているという話だったけど……」

『それじゃあ、ショーケースでもストレージでもなく、別の所に分けられてるって事ですか?』

「て言う事は……」

ショーケースの中でもなく、ストレージの中でもない。

ショップで中古のカードが売られる場所で考えられるもう一つの場所。

「オリパか……」

正式にはショップオリジナルのパック。

基本的には売値以上の内容のカードがランダムで封入されており、購入者が金銭的な意味で損をするという事は無い福袋の様なものだ。しかし、そんなパックに入れられるカードと言うのは得てして大当たりカード以外は売れ残りであり、それらを売りさばくための体のいい言い訳に過ぎない……って言うのは少し言い過ぎだが、購入者が満足出来るカードを手に入れる事はほとんど無い。

精々運試し程度に買うくらいが丁度いいものである。決して欲しい一枚のカードを手に入れるために手を出すものではない。

だが、この状況……、まるで……

一枚目は偶然カードショップのストレージの底で見つけた。

二枚目は友人からトレードで貰った。

そして、最後の三枚目はおみくじ程度の感覚で購入したカードショップのオリジナルパックから手に入れた。

まるで、ミドラーシユの時と同じだ。

「よし。決めた」

真の決闘者^{デュエリスト}は運命に導かれる。

部長もそう言っていた。

あれ？ 違ったかな？ 部長は運次第って言っていたような気がする……。でも運命に導かれるの方がカッコいいからそういう事にしておこう。

だとしたら、今俺がやるべきことは一つだけだろう。

「精霊達^{みん}にも選んでもらうか」

後ろに控えるシェイレーン、メイルウ、ハウフニス、マスカレーナに向き直り、彼女達にもパックを選ぶようにそう告げた。

オリパ

この店で売っているオリパのバリエーションは大きく分けて三つ。3000円で売っているローリスクローリターンのパック。このパックは一パック十数枚で販売されているが、よっぽど上振れない限りは普通にストレージのカードを十枚選んで3000円支払った方が良い。

1000円、3000円、5000円の一番バランスが取れていて、意外と面白いカードが当たったりする松竹梅の竹的存在のパック。この価格帯のオリパは実戦級のカードが結構手に入るため、買ってみる価値はある。しかし、結局数千円払うのならシングルで買った方が良さも多い。悪くは無いがおみくじ感覚なのは変わらない。

そして、最後は20000円のハイリスクハイリターンのパック。このパックで出るようなものは実戦で使えるカードと言うよりはプロモカードや美術品としての価値の方が高そうな昔の美品レアカードだったり、ビジュアル的に人気のあるカード等だ。このパックの大目玉はこの店での販売価格が50000円以上もする様な超レアカードと言えるような物ばかりだ。例えそれらが外れたとしてもプリズマシークレットというデュエルモンスターズで最高レアリティ仕様のカードがその値段に見合う程度に入っている。まあ、プリシクのシングル価格はピンキリだから一概には言えないのだが……。

「みんなには好きなパックを一つ選んでもらう」

だが、今回狙うカードは価値のあるカードでもなく、実戦で役に立つカードではない。『壹世壊IIペルレイノ』というこの世界ではあまり評価されていないカードだ。

それだつたら一番下のグレードのパックをひたすら買いまくるのが良いかとも思ったが、場合によってはオリパの中身が見えないようにするための目隠しにされていたり、嵩増しのために高額パックに混ぜられている可能性がある。

俺だつたら絶対に買わないようなパックにペルレイノが入っていたとしても、ティアラメンツの彼女達なら何らかの繋がりから察知し

てピンポイントで選べるかもしれないという我ながら浅はかな考えだ。

そして、マスカレーナには別テーマの精霊としてまた違う結果が出るかもしれないという事を期待している。

「どれがいいと思う?」

『『『これ』』』』

「……」

嘘だろ……? 絶対一番高い奴の中身を見てみたいだけだろ。

四人が指を差したのは20000円オリパだった。高額オリパは普通の高額カードと同じようにショークースの中にしまわれており、在庫のパックが綺麗に陳列されていた。その中の四パックを彼女達は誰一人被らずにそれぞれ指差している。

流星に合わせて80000円の出費は俺の貯金が持たない。

「……その中で一番自信があるやつだけを買おう」

とは言え、彼女達の意見を無碍にするのも悪いので、妥協案として一つだけ買う事にする。

『じゃあ、私が選んだこれって事で良いわね』

俺の言葉を聞いた四人は話し合いの末、シェイレーンが選んだパックにする事に決めたようだ。

ていうか、じゃんけんで決めていたけど、本当にそれで良いのか?

そのパックの中に本当にペルレイノ入ってると思ってる???

もしかしたら彼女達に選ばせるのはあんまり意味は無かったかもしれないな……。まあいいけどさ。

『私はこの後ろから三番目です!』

『……じゃあこれ……』

『うん……では、私はこれにしましょう』

メルウは10000円パック、ハウフニスは50000円パック、マスカレーナは30000円パックの中から一つを選ぶ。俺は彼女達が選んだオリパを手に取り、確保しておく。

「俺はこれで良いか……」

30000円オリパが適当に投げ込まれた段ボールの中から一つを手

に取る。彼女達四人が選んだものだけで既に29000円の出費……。それに加えて俺も高額オリパを買う勇氣は出なかった。

駄目で元々のこの企画。最初からこれでペルレイノが当たるとは思っていないし、この後30円ストレージを隅から隅まで探しまくる予定だ。

無間地獄みたいな後の事を考えれば景気づけに丁度いい。

俺は選んだパックをレジに持って行き、ついでに20000円オリパをショーケースから出してもらおうように店員に告げる。

久々のデカイ買い物に財布の中身がさみしくなることを実感しつつ店内に設置されている休憩スペースの一角に座り込む。

「開けていくか……」

最初はメルウが選んだ1000円パック。

厚みから五枚位のカードが入っているだろうか。

「お、『超融合』か。これは良いカードだ」

『良いカードが当たりましたか？ それなら良かったです』

『超融合』は相手のフィールド上のモンスターも融合素材にすることが出来る速攻魔法の融合系カードだ。

OCGでこのカードが初めて出た時は融合モンスターのバリエーションも少なく、手札コストが必要なこともあってあまり評価されたカードでは無かったが、時代が進み、融合素材に緩い条件を持つ融合モンスターが多数登場する事で厄介な敵モンスターを除去する札として活躍するようになる。

そして、何よりの強みはこのカードの発動に対して相手はモンスター・魔法・罠カードを発動する事が出来ない事だ。この効果によって『超融合』は融合テーマにおける万能除去札として使うことも出来る。

「何だかんだまだ持ってなかったから丁度いいや。サンキューな、メルウ」

『えへへ』

アニメ遊戯王GXではこのカードを巡って大変なことが起こったが、この世界では普通にカード化されている。

……精霊界で使ったら大変なことになるとかは無いよね？ 無いと信じよう。

「次はマスカレーナのパックを開けるか」

『何が出るかワクワクしますね〜』

今度のパックは先ほどよりもやや薄い。二〜三枚程度だろうか？

オリパというのは基本的に入っているカードの枚数が少ない方がシングルでの価値が高いカードの事が多い。大当たりカードの場合はそれだけしか入っていない事もざらにある。

これは少し期待できるかもしれないな。

「ん！ 『トロイメア・ユニコーン』か！ こいつはラッキーだ！」

『トロイメア・ユニコーン』

リンク3のモンスターであり、手札を一枚捨てる事で相手フィールドのカードを一枚デッキへ戻すことが出来る。

このカードなら破壊耐性を持ったカードに対する有効手段となるし、手札では無く、デッキに戻すことによつてそのカードの再利用を遅らせることが出来る優秀なカードだ。

何より、マスカレーナの相手ターンにリンク召喚する効果と組み合わせる事によつて相手ターンに一妨害することが出来る有名なコンボカードでもある。

優秀な効果と、何故かこの世界でも再販が未だにされていない事もあり、シングルで買うと3000円以上する高額カードだ。欲しい一枚ではあるが、こんな機会でもない中々買う事を躊躇ってしまうカードの代表格と言つても良いだろう。

『あれ？ このカード……』

『……精霊の気配……』

『確かに弱いながらも感じますね』

「え？ 本当に？」

『え？ そうかしら？』

『トロイメア・ユニコーン』のカードを見たメイルウ、ハウフニス、マスカレーナの三人はこのカードに精霊の気配がすると言う。そして、

相変わらずそう言った気配には疎いのか、シエイレーンはピンと来ていない。

俺も精霊の気配を感じ取ることは出来ないためよく分からないが、精霊抜けのカードを見抜ける彼女達が言うのならそうなのだろう。

「精霊抜けのカードか。このカードの前の持ち主は何を思つて売りに出したんだろうな」

ユニコーンの精霊が野良精霊だったのか、決闘者に憑いた精霊だったのかは分からないが、最終的に持ち主の手を離れたこのカードに精霊が宿っていない事に一抹の寂しさを感じてしまう。

「……まあ、考えたつて仕方ない。次はハウフニスの選んだやつを開けるぞ」

『……おー……』

オリパの割には今の所良いカードばかり引けているが、今回の目的はペルレイノだ。

このあたりの価格帯のパックにペルレイノが入れられている可能性は低いと思うが、緩衝材代わりにされている可能性も無くはない……。三人娘にはこんな事言えないけどな。

「枚数は五枚程度……高額パックにしては多いな」

普通なら残念がるところだが、今回の俺の目的だとこれは逆に熱い可能性がある。

「プリシク五枚セットか……」

どうやら比較的安価なプリズマシークレットレアのカードのセットだったらしい。レアリティとしてはどれも最高のものだが、残念ながら現状俺がデュエルで使うような物は無かった。

『……使えるカード？ ……』

「まあ、正直俺のデッキに採用するカードはないな」

『……がつくし……』

「けど、プリシクは持つてるだけで満たされるからな」

カードはデュエルに使うだけでなく、コレクションとしてローダーに入れて飾ったり、友人とのトレードの弾とする事も出来る。

それがトレーディングカードゲームというものだ。

「さて……最後は問題のパックだな……」

『早く開けなさいよ。気になるじゃない』

……こんな超高額オリパを開けた経験は無いから少し緊張してしまおう。

しかも、パックを手を持った感じ、中に入っているのは一枚じゃないか、これ？ 普通に考えたら激熱確定演出みたいなものだが、既にペルレイノチャレンジは終わった気がする。

「あ、開けるぞ」

『ぐくり……』

シOPPオリジナルのスリーブに納められたカードをゆっくりと、傷がつかない様に慎重に取り出す。

最初に見えたのは通常モンスターを表すクリーム色のカードの枠。

「は？」

『通常モンスターですか？』

次に目に飛び込んできたのはカード名より目立った水属性を示す青色のマーク。

「……は？」

『……弱そう……』

一件カード名がダイヤモンドカット箔のためシークレットレアのように見えるが、よく見るとイラスト部分には格子状の加工は無く、ホイル加工がされている。

「………は？」

『ラッセさん……これって……』

現行のカードよりも文字サイズが大きく書かれた攻撃力と守備力はそれぞれ1200と2000。今の環境を考えれば通常モンスターでこれだとお世辞にも強いと言えるステータスではない。

『ねえ、アンタ何でそんな遠くを見るような目してるのよ？』

「………」

『ちよ、ちよつともしかして、そんなに酷いカードだったの!? ……お金無駄に使わせちゃったの!? ぐ、こ、こ、め、ん、……』

シエイレーンが今までにないくらい大声を上げながらわんわんと

泣き出したことで正気に戻った俺は、震える手を何とか抑えながら今引いたカードを改めて見る。

「……ヒュ……」

『うわー！ ラッセさんが凄い声出してます！ 気を確かに』

カード名『アクア・マドール』。

少しばかり守備力が高い以外は何てことないバナラモンスターだ。このカードが出たばかりの時なら攻撃力が高い『岩石の巨兵』として運用できる良カードだったろうが、今となってはデッキに採用する決闘者はほとんどいないだろう。だが、問題はこのカードの特殊なレアリティだ。

ウルトラシークレットレアと呼ばれるそのレアリティはシークレットレアと同じカード名のダイヤモンドカット箔とスーパーレアやウルトラレアと同じようなイラストのホイル加工の二つのレアリティの特徴を併せ持つ特殊なレアリティであるという事。

このレアリティはイベントなどで配布されたプロモカードであることを示す。それもはるか昔に行われたイベントだ。

それらのカードの美品は今となっては非常に貴重であり、市場では数十万で取引されている。

この一枚だけで今日の出費を取り返せるだけでは無く、収支を一気にプラスに持つて行くともんでもない一枚だった。

「……シエイレーン」

『ひう……ぐ、ぐめんなさい……』

「お前凄いな……本当に凄い……次も一緒にパック買いに行こうな」
『え？』

物欲センサーとか、ビギナーズラックとか、そう言う事なんだろうけど、是非ともその豪運にはあやかりたいものだ。

「はー……良い物見たわ……何だか今日はもう満足しちゃったな……あ、そう言えば俺も買ってたんだった」

完全に存在を忘れていた俺が買った300円パック。

正直もう今日はストレージを漁ってペルレイノを探すような気分でなくなってしまったのだが、折角買ったのだからこれも開けておこ

う。

『『『あつ』』』』

ストレージのカードを適当に十五枚程突っ込んだであろうそのパック。

三枚目の『壱世壊Ⅱペルレイノ』。

俺達は目的のカードを手に入れた。

壱世壊へ

「やして……」

レンタルしたカード実体化装置を使ってマスカレーナのカードデータを実体のあるカードに変換してEXデッキに差し込む。

持ち物はデュエルディスク、デッキ、それといくらかの食料をバッグに詰める。部屋の中だが外靴に履き替え、これから移動する場所に備えておく。

これから赴く土地にはそれだけで十分だ。

『準備は出来たかしら?』

「うしー」

ティアラメンツの世界、ペルレイノに行くための準備は整った。

しばらく家に帰れない事も考え、連休を使って部活の合宿に行くと両親には説明している。

『ラッセさんが言っていたのでペルレイノのカードを集めていましたけど、この後はどうするんですか?』

「……」

『えー！そこはノープランだったんですか!?!』

いや、何となくこうすれば良いという方法は思い浮かんでいるんだけどね？ 本当にそれでペルレイノに行くことが出来るのかと改めて聞かれると……。

「そ、そんな事はないさー！ペルレイノをこうやって三枚持ってだな……」

ゴホン、と喉の調子を整えて大きく空気を吸い込む。

三枚のペルレイノを手に持ち、天へと掲げる。

「開け！壱世壊への扉！」

「……」

「……」

「……」

「……」

「あれ？」

何も起きない。今までの経験から、こう言った意味のあるカードが三枚集まった時点で何かが起こっていたから精霊世界と繋がる事が出来ると思っていたのだが……。

『え？ 今で行けると思ってたんですか？』

「うん」

うん。

『バカね』

そんな事言わないで……。

『えーと……あはは』

笑って誤魔化さないで……

『……………』

せめて何か言つて！

ティアラメンツ

三人娘の何とも言えない視線がもの悲しい。

流石のマスカレーナもフォロー出来ないのか、呆れた表情をしている。

『という事は、まだ何か足りないんじゃないですか？』

「でも、ペルレイノを二枚集めた時点で向こうの世界を覗き見ることが出来たんだよなあ」

『その時と今とで違う条件を探してみればいいんじゃないですか？』
「なるほど」

確か、二枚目のペルレイノを手に入れた時は部室でトレードして手に入れたんだよなあ。あと、部長や、島、財前さん等の部活メンバーと共に居た。

その前は部長とデュエル談義をして、さらにその前は手持ちのカードを広げてデツキの調整をしていたはずだ。

『精霊界に向かうためには向こう側の住人の後押しが必要なんじゃないですか？ ほら、私がラッセさんをサイバース精霊界に連れて行ってあげたように』

「でも、ここにはペルレイノと関わりがある精霊が三人も居るんだぜ？ まだ繋がりが足りないのかな」

ペルレイノへ行くための門は三枚のペルレイノのカードが、ペルレ

イノに行くための道標は三人娘がその役割を果たしてくれと思っていた。何かまだ足りないものがあるのか……。

『どうでしょうか、今の彼女達はカードと言う肉体に魂が宿った状態です。その状態だとペルレイノとの繋がりが普段より弱くなってしまうっているかもしれません。自分が精霊界に帰るだけならともかく、人間を連れて行くとなると……』

「なるほどな……あれ？ ……」

二枚目のペルレイノを手に入れた時、デッキ調整のために他のカードと一緒に並べていた一枚のカード。

手に入れた時は精霊が宿っていなかったため、関連テーマカードの一枚としてしか認識していなかった。そのカードに精霊が宿っておらず、その残滓すら感じられなかったことは三人娘に確認済みだ。

しかし……いや、だからこそ、向こうの世界から俺を引っ張ってくれたのかもしれない。

「もしかして……君か？」

俺はEXデッキから引き抜いた『ティアラメント・キトカロス』のカードを見つめる。

「うっ！」

『な、何！』

『この光は……』

『……感じる、精霊の力を……』

『どうやら正解のようですよ！』

キトカロスのカードと三枚のペルレイノのカードが集まった時、それらのカードは突然輝き出し、その光はこの部屋に居る全員を包み込んだ。

俺は誰かに優しく手を引かれながら、水中に潜る様な感覚を受ける。

そうして、光に包まれた俺達は人間界から離れた。

☆

「起きて！　ねえ、起きてよ！」

「う、うーん……んん？」

寝ていた俺の身体を揺らして起こしたのはシェイレーンだった。

「ああ、良かった目が覚めたんですね。こつちに来たらいきなり水の中であなたが溺れていた時はどうなるかと思いましたよ……」

「……かなり水を飲み込んだ……」

「そうだったのか……みんなが助けてくれたんだな。ありがとう」

まさかペルレイノに来ていきなり溺れてエンドでは洒落にならない。

俺も別に泳げないという事は無いのだが、普段通りに呼吸をしていたらいきなり水中に移動したために水を飲み込んでしまったようだ。溺れた人間を一人引き上げるとは、人魚の面目躍如と言った所だろうか。

「はあ……ペルレイノに来て初っ端水浸しとは……ついてないなあ」

「うう……本当ですよ……」

マスカレーナも俺と同じようにびしょ濡れになってしまったのか、手足をピツピツと振って水気を落としていた。普段はサラサラのツインテールも大量の水を吸ってしんなりとしている。

「でも、こうしてペルレイノに来ることは出来たな」

一面に広がる水、水、水。

多少の陸と、風変りな樹の様なもの水中から伸びたこの景色は以前見たペルレイノそのものだ。

樹の様なものからは水が滝の様に流れ落ち、その中に水の煌めきとは違う何かが混ざっている。以前はそれが何かは分からなかったが、見ればそれは真珠だった。

(綺麗な世界……と言つて良いのだろうか?)

俺は彼女達の真珠がどう言う意味を持っているのか知っている。それは彼女達の涙だ。

この真珠の数だけこの世界に居る彼女達の仲間が涙を流しているという事を意味している。そんな景色に対して素直に綺麗だと感想

を言うのは、俺には憚られた。

「さて、これからどこに行けば良い？」

この世界には彼女達を虐げる元凶、レイノハートが存在している。そいつをデュエルでぶっ飛ばして止めさせるのが今回の目的となる。だが、俺はそいつがどこに居るのかは知らない。

ここからは三人娘の案内が必要となるだろう。

「あの男の居城は一番大きなペルレイノの樹の下。水中にあるわ」

「水の中か……」

これは困った。

人魚がテーマの精霊世界に来たからと言って、人間が水の中で呼吸をする事は出来ないと言う道理は変わらないということを図らずも先程確認したばかりだ。

こうなると何らかの手段で水中で呼吸をする方法を見つけるか、レイノハートを陸に引きずり出すしかないか。

俺がうんうん悩んでいると、シエイレーンが大きなため息をついたあと、何かを呟き始めた。

「……………仕方……………ない……………の……………仕方ないことなの!! これ!!」

「どうした、シエイレーン？ 何か方法が有るのか？」

「アンタはちよつとそこで待ってなさい」

それだけ言うと、彼女は水辺まで近づき掌に一杯の水を掬う。ここからでは彼女の後ろ姿しか見えないため、何をやっているのか詳しく見ることは出来ない。

掌に溜めた水に顔を近づけて何かをしている様だが……。

「い、良い!? 何も聞かずに! この水をの、の、飲みなさい! それで水の中も平気になるから!」

「もしかしてシエイレーンちゃん……」

今まで見たことがないくらい顔を赤らめたシエイレーンがすごい勢いで捲し立ててくる。水を掬った腕は重い物を持っているわけではないのにぶるぶると震えていた。

「え、何それ? そんな魔法みたいなのも使えるのか?」

「何も聞かずにって言ったでしょ!!」

「へぶっ!」

シェイレーンは手に溜めた水を俺の顔面に叩きつけるようにして無理矢理飲ませる。あまりの勢いにほとんどの水は溢れてしまったが、いくらかは口の中に入り込み、また掌が顔にぶつかる衝撃に対する驚きのあまり、口の中に入り込んだ少量の水をつい飲み込んでしまった。

「ゲホッ! ゲホッ! な、何するんだよ……」

「これでいいの! これに対する質問は禁止!」

取り付く島もないシェイレーンに何を聞いても教えてはくれなさそうだ。

「……えい……」

「うぷっ!」

俺の隣ではマスカレーナがハウフニスによって何故か口の中にハウフニスの指を突っ込まれていた。

彼女が指をマスカレーナの口に突っ込む直前、自分の指を舐めていたような気がするが、その時丁度俺はシェイレーンに実質顔面ビンタを御見舞いされてしまったのであれは見間違いだったかもしれない。

どう言った原理かは不明だが、シェイレーンが言うにはこれで水中でも呼吸が出来るようになったらしい。

「貴女達! どうしてここに!」

そんなことをしていると、一人の女性の声が聞こえてきた。

さっきまでその方向には誰も居なかったはずだ。しかし、その人物は水中から接近して来たために、俺は気が付くことが出来なかった。

水の中から頭だけ出してこちらに話しかけて来た人物は、ティアラメンツのエースモンスター、キトカロスその人だった。

襲撃

キトカロスの衣装はシェイレーン、メイルウ、ハウフニスの三人の物と比べて装飾が豪華な印象を受ける。

陸に上がった彼女にイラストで描かれていたような優し気で、儂げな雰囲気は無く、厳しい目つきで三人娘を見つめていた。

ティアラメンツ

「侵入者が居ると思つて来てみれば……まさか貴女達だったなんて……この世壊から出たんじゃなかったのですか？」

「キトカロス様、私達はあなたを助けるために……」

「必要はありません」

「でも！ キトカロス様だけこのままなんて……」

「私は平気です」

「……せめて、一緒に……」

「くだいです。私の事を気にする必要はありません。今すぐこの世壊から立ち去りなさい。その貴女と人の子もです」

三人娘の発言も遮つてマススレーナと俺にもこの世壊から出るように言ってくる。人間の俺がこの場に居るのが不思議なのか、キトカロスは怪訝な表情を浮かべている。

彼女が俺も含めて皆の事を心配している事はよく分かる。しかし、ここまで来て何もせずにごすごす帰る訳にはいかないのだ。

キトカロスに軽く自己紹介として名乗った後、俺は気になる事を聞いてみる事にした。

「どうして、そこまで彼女達の思いを無碍にするんだ？」

「人の子には関係の無い話です」

「ああ、そうだな。俺は所詮外野で、これは君と彼女達ティアラメンツの話だ。だからこそ、彼女達にはちゃんと話す必要があるんじゃないのか？」

俺の言葉に思う所があったのか、キトカロスは少しの間何かを考えるそぶりを見せ、その重い口を開き始めた。

「……今、あの方はとても苛立っている。そんな状況で私まで居なくなつてしまつては、本当に抑えが利かなくなつてしまいます」

あの方、か。

三人娘が言っていた元凶、この世界の王を自称する『レイノハート』という人物の事だろう。そんなことまで知っていると、もしかしたらキトカロスやレイノハートに近い位置に居る人物なのかもしれない。

「それって……もしかして私達がこの世壊から逃げ出したせいで……」

「いえ、それは違うでしょう。確かにその件に関してもあの方は怒っていたけれど……もつと別の理由……まるで何かに対する恐れを紛らわせる為に苛立ちを見せている様でした」

自分たちが原因となってキトカロスがさらに大変な目に遭ってしまったことを心配する三人娘だが、キトカロスは否定する。

彼女によると、レイノハートは何かを恐れている様だったという事らしいが、残念ながらそれ以上の情報は得られそうに無かった。

「なら、そいつを止めれば良いんだろ？ 俺も協力して……」

「黙りなさい、人の子。それは余計なお世話というものです」

「キ、キトカロス様!？」

いつの間に取り出したのか、キトカロスはステンドグラスの様な装飾が施された剣を俺に突き付けて来た。その時に少し頬に触れたのか、切り傷特有のヒリヒリした感覚がある。

大きな傷では無いが、綺麗な切り口から溢れ出る血液の生温い感じが気持ち悪い。

垂れる血液を拭い取る。手に付着した自分の血液とこの痛みがこれは確かに現実なのだと言えかけて来た。

怖いかな怖くないかで言えば当然怖い。普通に高校生をしていたらこんなデカイ刃物を突き付けられる経験はしないからな。それに、精霊と関わるにあたってこういう状況に陥る可能性だって当然予想出来ていた。だから全てを諦める程怖いかというと、そこまででは無かった。

痛みや恐怖は俺を止める理由にはならない。何故なら、俺はそんな事よりももつと耐え難い事を知っているからだ。

「ラッセさん!」

「大丈夫、こんなの大したことないさ……」

マスカレーナが駆け寄って来てキトカロスに対峙する姿勢を見せるが、そんな彼女の肩に手を置き止めさせる。俺の意図に気が付いてくれたのか、彼女は俺とキトカロスの間から少しずれて事の成り行きを見守ってくれるようだ。

「キトカロス、余計なお世話だっけ言うのは俺だっけ重々承知の上だ。それでも俺はここに来ている」

「何故、そこまで……」

「友達の為だ」

「友達……ですか……」

誰の事を言っているのか察しが付いているのか、キトカロスは三人娘の方に視線をずらしている。

その時、キトカロスの鼻がピクリと動いたような気がした。

「……血に混じるこの匂い……彼に施したのはシェイレーンですか」

「え!? えーと……そのお……はい……」

「そう、あのシェイレーンがですか……。随分と変わりましたね」

彼女は何かの匂いに気が付いたのか、シェイレーンにそう語る。

俺には何の事を言っているのか分からないが、彼女達だけに伝わる何かがあるのだろう。

「貴女達はそこまで彼の事を信用しているのですね……」

突き付けていた剣を降ろし、表情から険が取れたキトカロスは一つため息をつく。

「貴方達の決意が揺るがない事は分かりました。であるならば、せめてこの世壊にいる間は危険な目に遭わないよう、私も……きやつ!」

「ああ! キトカロス様!」

「何だ!?!」

キトカロスが言葉を言い終える前に、水の中から穂先の付いた鞭の様な物が彼女を捕らえ、水中へと引きずり込んで行った。

さらに水中から同じような鞭が複数現れるが、不意を突かれる事の無かった三人娘は各々の武器で撃退していく。

マスカレーナは持ち前の身軽さでひよいひよいと襲い掛かる攻撃

を避けている。

「シェイレーンちゃん！ この攻撃は……」

「あいつね……」

「……間違いない……」

「あいつ？ ……まさか！」

この攻撃はレイノハートによるものか！

「あ」

精霊達は自分達の手で迎撃する能力を持ち合わせているが、残念ながら俺にそんな能力は無い。あつけなく腕を鞭で掴まれた俺はキトカロスと同じように水中へと引きずり込まれる。

「ちよ、このバカ！」

そんな俺を見かねてシェイレーンがすぐさま追いかけて来てくれているのが見えた。

咄嗟に息を止め、水を飲み込まない様に集中している俺は今の状況を頭で上手く整理する事が出来ない。

(くっ……もう……無理……)

「せいー」

腕に絡まる鞭を陸上と同じ動きで振るわれたシェイレーンの剣が切り裂く事で、底へ底へと引き込まれて行く感覚は無くなった。

「落ち着いて。大丈夫。今のアンタなら水の中でも生きる事が出来るから」

「ぶはあー！ ……あ、あれ？」

息を止める我慢の限界がとうとう訪れ、口から漏れた空気が泡となって水面へと昇っていく。肺に水が満たされる感覚というのだろうか、本来ならあり得ない不思議な感覚だ。

それに、水の中だというのにシェイレーンの声がやけにはつきりと聞こえた。

「どうして……」

「さっき言ったじゃない。今のアンタは水の中でも息が出来なくて死ぬことは無いわ」

どうやら陸上での一連の行動で本当に水の中でも平気なようだ。

どういった原理かは全く不明だが、これなら何とかかなりそうだ。

「大丈夫ですかー！」

「……安心した……」

「ラッセさんラッセさん！ これ凄いですね！」

後から追いかけて来たのか、メイルウ、ハウフニス、マスカレーナもこちらへ来ていた。

マスカレーナは水中で自由に活動できるという新しい感覚に興味津々の様だ。こんな状況も楽しめるマスカレーナは大物だな。

「見えて来たわ」

未だ襲い掛かる鞭を三人娘が処理しながら、しばらく水底へと降りて行くと、大きな城の様な建物が見えて来た。

先ほど俺達を襲った鞭もその建物の傍から伸びて来ていたことが確認できる。

という事は、この鞭を操っていた人物もすぐそこに居ると言う訳だ。

壹世壊の王

水底へ降り立った俺達が見たのは、鞭によって拘束されたキトカロスとさつきまでこちらに攻撃を仕掛けて来た下手人の姿だった。

そいつはティアラメンツのみんなと似た意匠の鎧を着こみ、長髪が特徴の男。奴がレイノハートだろう。

レイノハートは薄笑いを浮かべながら、ティアラメンツ三人娘に目を向けながら言葉を発した。

「おやおや。逃げ出したと思っただけだが、わざわざ戻って来るとは……中々感心な奴隷達ではないか」

「……奴隷？」

奴の言っている事がすぐには理解できなかった。

だが、奴が話し始めてからシェイレーン、マイルウ、ハウフニスの三人は明らかに表情が固くなり、緊張している事が分かる。そして、その奴隷というのが一体誰の事を示していたのかも。

「くっ……皆！ 今すぐ逃げなさい！ でなければ……」

「お前は黙っているろ、キトカロス」

「あ……うう……」

「ああ！ キトカロス様が……」

キトカロスを拘束してた鞭によって彼女はレイノハートの方へと引き寄せられる。奴がキトカロスの身体に手をかざすとまるで身体が溶けるかのように崩れ去り、レイノハートの左手へと吸収されていく。

「こいつ……」

「しかし、この世壊によそ者を招き入れたのは褒められた事では無いな」

勝手に話を進めて行くレイノハートは今度は俺の方に目をやると、今までの薄笑いの表情から一転、こちらを威圧してくるような傲慢な表情へとなる。

「人間、その物達をここまで連れて来た功績に免じて、この場を去る権利をやる。私の気が変わらぬ内に、さっさと消え失せるがいい」

「ふざけるな……」

好き勝手言い放つレイノハート。挙句の果てに三人娘を置いて行けと言う。

彼女達が普段からどんな扱いを受けていたのか、そう言った詳しい話は敢えて聞くことはしなかった。そんな事をして、嫌な思いを再びさせるだけだと思っていたからだ。そして、その予想はどうやら正しかったようだ。

国が変われば常識も変わる。世界が違えばそれはもつとだろう。

もしかしたらこの世界では三人娘には耐えられない何かが常識で、彼女達は少しだけ我慢出来なかっただけという可能性もほんの少し考えていた。

それだったら、お互い腹を割って話し合えば状況を打開出来たかもしれない。

だが、三人娘は尋常じゃない程怯えていた。それは俺が人間だから分からない認識のずれとかそんな物ではなく、確実に許されざる行いによる事が原因だ。

あくまで穏便にレイノハートを抑えようとしていたキトカロスすらも手を掛けられた。彼女と言葉を交わしていた時間は僅かだったが、少なくとも彼女はレイノハートの事を悪く言ったりすることは無かった。

そんなキトカロスですらも、奴にとってはその程度の存在とでも言うかのように。

間違いない。

こいつは俺が思っていた以上に度し難いクズ野郎だ。

「人間、口を謹め。あまり私を怒らせるのは賢い選択では……」

「レイノハート、俺と決闘しろ！俺が勝ったらみんなを自由にしてもらう！」

「……決闘？この私がよそ者と……」

何故か躊躇う様な素振りを見せたレイノハートだが、それも一瞬の事で元の傲慢そうな表情へと戻る。

「ふっ……バカバカしい事だ。この私に決闘を挑むとは。だが、良い

だろう、最近暇を持て余していた所だ」

レイノハートは鞭を柄ヒルトの部分に収納し、それをそのまま左腕に装着する。ステンドグラスの様な装飾が施された籠状のヒルトが延長し、デュエルディスクの形状を取る。

「覚悟しろ、人間。このデュエル、負けた者は全てを失うものと心得よ！」

「当たり前だ」

俺も腰に装着したホルダーからデッキを取り出し、デュエルディスクに挿入する。デッキを読み込んだデュエルディスクは自動でリアルソリッドビジョンによるディスク盤面を展開する。

レイノハートが話し始めてからまともに喋ることも難しそうだった三人娘。

シェイレーンが俺の服の裾を力なく掴んでいる事に気が付いた。

「絶対勝ちなさいよ」

メイルウが不安げな表情でこちらを見つめている。

「無茶はしないで下さい」

ハウフニスが気合いを入れるように俺の背中を一叩きする。

「……勝とうね……」

マスカレーナはいつもの調子で俺に言う。

「あんな外道はさつきとのしちやいましょう！」

四者四葉の言葉を受け、

「ああ、任せろ」

いつか言えなかった一言。

こんな状況でありながら、何故か今日はすんなりという事が出来た。

シェイレーン、メイルウ、ハウフニス、マスカレーナは俺のデッキに眠る自身のカードへ力を宿すために実体化した姿を消す。

「デュエル
「決闘!!」」

世良 VS レイノハート

LP4000

LP4000

「先行は私だ。手札から『ティアラメンツ・レイノハート』を召喚」
『ティアラメンツ・レイノハート』

レベル4 ATK1500 水
フィールドに現れたのは奴自身。

対面しているレイノハートと同じように薄ら笑いを浮かべ、右手には鞭、左手に溢れんばかりの真珠を握りしめている。

(奴自身のカードか。効果は……ッ！ 確認できない!?)

デュエルディスクに搭載されている相手のカードを表示して確認する機能が使えなかった。ここが異世界だからか、はたまた奴が使うカードがデュエルディスクの情報に無いからなのか……。

理由は不明だが、知らないカードが使われた時に効果の確認が出来ないのは厳しいと言わざるを得ない。

それなら、今までの自分の経験とデュエリストとしての勘に従ってデュエルをするだけだ。

「そしてこのカードの召喚に成功したため効果を発動する」

「レイノハートの効果にチェーンして手札のハウフニスの効果を発動する！」

「何？ 小癩な真似を……」

俺は手札に有ったハウフニスを手札に見せて発動を宣言する。

「相手がフィールド上の効果を発動した時に発動し、このカードを手札から特殊召喚する」

『ティアラメンツ・ハウフニス』

レベル3 DEF1000 闇

『……ふんす……』

ハウフニスは自身の武器である二本の短剣を構え、防御姿勢を取る。

「さらに、俺はデッキの上から三枚墓地へ送る」

デッキトップから三枚のカードを引き抜き、確認したらそのままデュエルディスクの墓地ゾーンへと置く。

墓地へ行ったカードは『ティアラメンツ・メールウ』、『シャドール・ビースト』、『影依融合』。

俺のカードの効果処理が終わり、今度はレイノハートのカードの効果処理が行われる。

「ふん、私はデツキからこのカード以外の「ティアラメンツ」モンスター一体を墓地へ送る。デツキから『ティアラメンツ・シェイレーン』を墓地へ送る」

『あいつ……私のカードを……』

精霊体で現れたシェイレーンはレイノハートに自分のカードが使われている事を知り、苦虫を噛みしめたような表情をしている。

「私の所有物をどう使おうが私の勝手だろう？ シェイレーンが効果で墓地に送られたことで効果発動。墓地のシェイレーンを含む融合素材モンスターを手札・フィールド・墓地から好きな順番で持ち主のデツキの下に戻し、融合モンスターを一体をEXデツキから特殊召喚する。素材とするのはシェイレーンとフィールドの私自身！」

「いきなり使って来たな」

相手の墓地のシェイレーンとフィールドのレイノハートがデツキに戻って行く。

これこそティアラメンツデツキの真骨頂。

普通の融合召喚は融合素材となるモンスターと『融合』を消費する事で行うことが出来る特殊召喚方法。普通にやれば三枚以上のカードを必要とするため手札消費が激しい召喚方法だ。

しかし、ティアラメンツは融合系魔法カードを使う事無く融合召喚を可能とするため、少ない手札消費で融合召喚をすることが可能。しかも、墓地へ行くことで効果を発動するティアラメンツはその性質上リソース不足に陥ると思われるが、ティアラメンツの効果で融合素材としたカードはデツキに戻るため、リソース回復も同時にこなすことが出来る。

「融合召喚！ 現れろ、水底の王にひれ伏す忠実なる我が僕。『ティアラメンツ・キトカロス』！」

『ティアラメンツ・キトカロス』

レベル5 ATK2300 闇

現れたキトカロスは顔の上半分を隠すようなバイザーを付けてお

り、その表情を確認することは出来ない。

唯一見える口元は、真一文字に結ばれており、先ほど言葉を交わした人物とは似ても似つかない。

あれは本当にキトカロスなのだろうか？

「だが、俺もハウフニスの効果で墓地へ送られたマイルウとビーストの効果を発動する！」

シャドール・ビーストも効果で墓地へ送られた時に発動する効果を有している。そして、マイルウの効果はここで使える！

「ビーストの効果で一枚ドロウ。さらにマイルウを含む融合素材をデッキの下に戻し、EXデッキから融合召喚する！」

ティアラメンツの融合を使うことが出来るのは何もレイノハートだけではない。

俺のデッキも奴と同じくティアラメンツデッキ。モンスター効果によるアド損の少ない融合召喚はこちらも得意とするところだ。

「墓地のビーストと闇属性であるマイルウをデッキの下に戻し、融合召喚！」

ここで一つ気にかかる事があった。

それは、奴が召喚したキトカロスがEXモンスターゾーンでは無く、メインモンスターゾーンに置かれた事だ。その配置方法は前世で所謂リンクシヨックと呼ばれた新マスタールールが数年後に改定された事によって可能となった行為である。まさかティアラメンツは未来のカードとでも言うのだろうか？

しかし、俺のデュエルディスクはVRAINS世界、つまりEXデッキから召喚されるモンスターはEXモンスターゾーンに置かなければならない世界の物。

相手は改訂版マスタールールが適用されているが、果たして俺もそのルールに準じているのか。早急に確かめる必要がある。

「影に魅入られし風の巫女、今その軛を逃れて再び羽ばたけ！ ツ……………」

デュエルディスクが示す召喚可能なゾーンはEXモンスターゾーンのみ。やはり、俺は改定前の新マスタールール下でデュエルを行う

必要がありそうだ。

こんな変則マツチはやった事が無いが……やるしかない！

「融合召喚！ 現れる、『エルシャドール・ミドラーシュ』!!」

『エルシャドール・ミドラーシュ』

レベル5 ATK2200 闇

水底でありながら光が差すこの空間に出来ている俺の影。それがデュエルフィールドにまで伸びたかと思うとそこからミドラーシュが出現する。

「ミドラーシュがモンスターゾーンに存在する限り、その間はお互いに1ターンに一度しかモンスターを特殊召喚出来ない」

「厄介な人形だ。だが、問題は無い。私は融合召喚に成功したキトカロスの効果を発動する。デッキから「テイアラメンツ」カード一枚を選び、手札に加えさせて貰う。そして、カードを二枚伏せてターンエンド」

相手の場にはキトカロスと伏せカードが二枚で残り手札が二枚。

一方で、1ターン目先行である相手のターンにも関わらず、俺はフィールドにミドラーシュとハウフニスを立てつつ、手札は四枚。

まだターンが回って来ていない後攻0ターン目とも言える段階でこれだけの盤面を築けているのは上々だが、相手の伏せカードも油断ならない。

何より、まだ俺の知らない何かがあるような気がしてならない。デュエリストとしての嫌な予感を感じる。

まだ決闘は始まったばかりだ。

影の行進

世良 VS レイノハート

LP4000 LP4000

「俺のターン、ドロロー！」

通常ドロローで手札に加えた『壺世壊Ⅱペルレイノ』を横目に思考する。

俺の場にミドラーシユが居る限り、特殊召喚は一回までしか出来ない。これは相手だけに適用される効果では無く、俺にも及ぶ。これを回避するには、ミドラーシユをフィールドから退かしたり、『月の書』等で裏側守備表示にする必要がある。

キトカロスの攻撃力が2300と、ミドラーシユの攻撃力より100だけ上だが、『壺世壊Ⅱペルレイノ』を発動させればミドラーシユの攻撃力は500上昇し、キトカロスを戦闘破壊する事も出来る。ミドラーシユがキトカロスを破壊するとなれば、罠であろう伏せカードを使わせることが出来るかもしれない。

そして、メインフェイズ2で次のターン以降に向けて妨害を構える。

現代遊戯王ではカードをプレイする順番も大事になる。展開が止まるようなマストカウンターを受けない様にするためにも、如何に重要なカード以外で妨害を使わせるか、という事だ。

「フィールド魔法、『壺世壊Ⅱペルレイノ』を発動する。発動時効果で『ティアラメンツ・シェイレーン』を手札に加える」
「好きにしろ」

盤面を強固にするのも一つの手だが、ミドラーシユの攻撃力はペルレイノによって500アップしているため、ここは仕掛けて相手の出方を見る。

「バトルフェイズ！ ミドラーシユでキトカロスを攻撃！」

ミドラーシユが持つ杖から伸びる影系がキトカロスに襲い掛かる。

「リバースカードオープン。『ティアラメンツ・メタノイズ壺世壊に軋む爪音』」

「使って来たな」

レイノハートのフィールドに伏せられていた一枚のカードが表になり、罨カードが発動される。

『ティアラメンツ・メタノイズ壱世壊に軋む爪音』は私のフィールドにティアラメンツモンスターが居る時に発動できる。貴様の場のミドラーシユ人形を裏側守備表示へ変更する」

「くっ……」

『エルシャドール・ミドラーシユ』

レベル5 DEF800 闇

ミドラーシユが攻撃表示から裏側守備表示に変更されることによって、バトルは発生しない。

だが、これで俺も特殊召喚制限は解除される事になる。

「さらに、その後、デッキからティアラメンツモンスターを一体墓地へ送る。私が選ぶのは二枚目のレイノハート私自身だ」

効果でティアラメンツモンスターを落とされたか……。三人娘には共通効果で墓地へ送られると融合召喚する効果を持っている。となれば、レイノハートにも同じ効果が備わっていると考えた方が自然だろう。

「レイノハートの効果発動。このカードを特殊召喚し、手札からティアラメンツカードを一枚選んで墓地へ送る」

「何!?!」

レイノハートの効果は自身の蘇生効果!

しかも、この特殊召喚によってデッキからまたティアラメンツモンスターを墓地に送ることが出来る。融合召喚効果を起動させつつ、素材を確実に供給するコンボか。

「私は『ティアラメンツ・メールウ』を墓地へ。さらに、レイノハートの召喚に成功したことでデッキから『ティアラメンツ・ハウフニス』を墓地へ送る」

『うう……私まで……』

『……好き勝手してくれる……』

シエイレンだけでなく、メールウとハウフニスまで……。

「そして、墓地へ送られたメールウの効果発動! 墓地のメールウとこのカード

ハウフニス、そしてフィールドのレイノハートをデッキの下に戻す」
「素材三体による融合モンスター……ッ！」

俺が知っているティアラメンツの融合モンスターはキトカロスのみ。複数テーマの混合デッキで無ければ今から出てくるモンスターは俺の知らないティアラメンツモンスター。

「壱世壊を統べる水底の王。その威容を以って全てを支配する……融合召喚!! 現れろ、『ティアラメンツ・カレイドハート』!!」

『ティアラメンツ・カレイドハート』

レベル9 ATK3000 闇

ティアラメンツを三体素材にして現れたそのモンスターは怪物化したレイノハート。戦士然としていたレイノハートとは打って変わって悪魔の様相を呈している。

「フハハハハハ！ 素晴らしいだろう！ これが王の姿というものだ!!」

その悍ましい姿に俺は思わず後ずさりしてしまいそうになる。だが、こんなところで引く訳には行かない。

「さらに！ カレイドハートの効果発動！ このカードが特殊召喚に成功した時、相手フィールドのカード一枚をデッキに戻す。私が選ぶのは『壱世壊Ⅱペルレイノ』」

「くっ……」

「そのカードは厄介なので消えてもらおうか」

カレイドハートはレイノハートの時に持っていた物とよく似た鞭を振るい、俺のフィールドに置かれたペルレイノを薙ぎ払う。ペルレイノがある状態でフィールドのティアラメンツモンスターがデッキ、EXデッキに戻った場合に発動できる破壊効果を警戒しての事だろう。

墓地が第二の手札と呼ばれ、シャドールやティアラメンツの様に墓地に行くことで効果を発動するカードが増えた昨今では再利用がしにくいデッキバウンスは非常に強力な除去方法の一つと言える。

「バトルフェイズはそのまま続行する！」

「余りの恐怖で狂ったか？ 貴様の場には無力なハウフニス小娘一匹しか

居ないだろう」

「そんなことは無い。俺は手札から速攻魔法、『神の写し身との接触』エルシャドール・フュージョンを発動する。フィールドのミドラーシユと手札の『超電磁タートル』を墓地に送る！」

裏側になったモンスターを使うことが出来ないリンク召喚やシンクロ召喚、エクシーズ召喚と違い、融合召喚は裏側守備表示のモンスターも素材とすることが出来る。そして、現在EXモンスターゾーンを埋めているミドラーシユを素材にする事によって改定前マスタールールの制約を潜り抜けて行く。

「輝石の力を受け継ぐ影の姫。輪廻から外れた者達を導く光となれ！」

融合召喚！ 現れる、『エルシャドール・ネフィリム』!!」

俺のエースカード、ネフィリム。

巨大な人形の天使が裏側になっていたミドラーシユの影から現れる。

「また人形か？ つまらん男だな」

「バカにするなよ。特殊召喚に成功したネフィリムと墓地へ送られたミドラーシユの効果発動。まず、ネフィリムの効果によってデッキからシャドールカードを一枚墓地へ送る。俺が選ぶのは影光の聖選士^{レイシャドール・インカーネーション}。そして、ミドラーシユの効果によって墓地のシャドール魔法・罨カードを手札に加える。俺は『影依融合』シャドール・フュージョンを選ぶ」

デッキから墓地へ、墓地から手札へとカードの移動が起こる処理を終え、俺は少年時代にいつも助けられたネフィリムの力を使う。

「バトルだ！ ネフィリムでカレイドハートを攻撃する！ この時、ネフィリムの効果発動！ ダメージ計算を行わずにカレイドハートを破壊する！」

ネフィリムが持つ特殊召喚されたモンスターに対する強力な戦闘耐性。特殊召喚されたモンスターと戦闘を行う時、ダメージステップ開始時にそのモンスターを破壊する効果。

これなら攻撃力で勝るカレイドハートを破壊することが出来る。

「甘いな。攻撃力が低いモンスターで攻撃するとは……何かありますと言っているようなものではないか！ カウンター罨、

『ティアラメンツ・クライム
壺世壊に澄み渡る残響』！」

「何だ、あのカードは……」

開かれたリバースカードは俺の知らないティアラメンツ罨カードだった。しかし、そのカードのイラストは黒い靄で覆い隠されているかのようにあり、そのイラストを確認することが出来ない。

「フィールドにティアラメンツモンスターが居る時、貴様のモンスター・魔法・罨カードの発動を無効にしデッキに戻す。そして、手札からモンスターを一体選んで墓地に送る」

「なっ！」

ネフィリムの効果が無効化されるだけでなく、EXデッキに戻されてしまう。しかも、墓地に送られなかったために墓地からカードを回収する効果も使うことが出来ない。

「墓地に送るのは『ティアラメンツ・メールウ』だが、既にこのターン効果を使用しているため効果は使えない。貴様の場のモンスターはその役立たずだけになったな？ さ、どうする？」

「……メイン2へ移行」

だが、これでレイノハートの手札はゼロ枚、伏せカードも使い切った。

ボードアドバンテージこそ負けているが、手札の数を考えればまだまだ戦える。

ネフィリムがデッキに戻ってしまったのは痛い、それによってEXモンスターゾーンが空くことになった。相手の場にEXデッキから特殊召喚されたモンスターが居るため、『影依融合』によるデッキ融合も可能だが……。

ここは彼女に手助けしてもらおうことにしよう。

「手札の『ティアラメンツ・シエイレーン』を特殊召喚し、手札からモンスター一体を選んで墓地に送る。俺は『シャドール・ビースト』を選ぶ」

『私の出番ね』

「その後、デッキから三枚のカードを墓地へ送る」

墓地へ送られたのは『壺世壊Ⅱペルレイノ』、『ハーピィの羽箒』、『死

者蘇生』。

これはついていない……。デツキトップからランダムに墓地に送る都合上、こう言う事もあるだろう。だが、とりあえず問題は無い。「そして、墓地に送られたビーストの効果で一枚ドロウする」

引いたカードは二枚目の『影依融合』。このカードは1ターンに一度しか使えないため、二枚持つていても使いどころは限られる。

俺のフィールドにはシェイレーンとハウフニスの二体。

「現れる！ 想いを繋げるサーキット！」

俺の宣言により、空中にリンク召喚を表すマーカーが出現する。

「召喚条件はリンクモンスター以外のモンスター二体！ シェイレーンとハウフニスをリンクマーカーにセット！ サイバース世界を自由気ままに駆け巡る。彼女が運ぶはこの世の全て！ リンク召喚！

リンク2、『I:Pマススカレーナ！』

『I:Pマススカレーナ』

リンク2 ATK800 闇 リンクマーカー：左下、右下

「ほう？ イイ女を連れてきているじゃないか。貴様を消したらその女を私の物にしてやろう」

『ひよええ……ラツセさん、あんな気持ち悪い奴はさっさと倒しちゃってください！』

下卑た目でマススカレーナを見つめるレイノハートに堪らずマスカレーナは俺の後ろに隠れるように移動する。

「そんな事にはさせないさ。さらに、手札から『影依融合』を発動する

！ デツキから『シャドール・ヘッジホッグ』と『影依ノエルシャドールの巫女エリアル』を墓地に送り、融合！」

『デツキ融合か』

『影依融合』は相手フィールドにEXデツキから特殊召喚されたモンスターが居る時、デツキからも融合素材を選ぶことが出来るシャドール専用の融合魔法。

ミドラーシュを融合召喚するためにデツキに戻したヘッジホッグと真空管に囚われたウインダのかつての友人のあり得たかもしれない姿を模したカードを融合の素材とする。

「儀水の果ての果て……例えその姿を変え、魂を変質させようとも、確固たる意思は変わらない。融合召喚！ 現れる、『エルシャドール・アップカローネ』!!」

『エルシャドール・アップカローネ』

レベル6 DEF2000 闇

「墓地に送られたヘッジホッグとエアリアル、そしてアップカローネの効果を発動！ ヘッジホッグの効果でデッキから二枚目の『シャドール・ビースト』を手札に加え、エアリアルの効果でお前の墓地に存在する『ティアアラメンツ・メタノイズ』、『ティアアラメンツ・クワイム』、『ティアアラメンツ』に軋む爪音』、『ティアアラメンツに澄み渡る残響』、『ティアアラメンツ・メールウ』を除外だ！」

俺の墓地から現れた黒い手がレイノハートのデュエルディスクに伸びて行き、奴の墓地に存在する三枚のカードを除外していく。理想はティアアラメンツの融合素材となるモンスターが三枚墓地にある時に使いたかったが、相手のフィールドにキトカロスが居るため、墓地のメールウの効果を利用させない必要があった。

「さらに、アップカローネの効果でカレイドハートの効果を無効にする！」

「貴様……」

アップカローネが持つ儀水鏡の杖から伸びた影糸がカレイドハートに繋がり、何かの力が抜けて行く様子が伺える。

デュエルディスクで奴のカードの効果が確認できない今、未知の能力を持つ可能性があるカレイドハートの効果を無効にしておく。

「俺はターンエンドだ」

ライフポイント

世良 VS レイノハート

LP4000 LP4000

1ターン目が終わり、お互いにライフが削られていない状況。

高速化した現代デュエルにおいて1ターン目は先攻プレイヤーにとっては攻撃が可能となる後攻プレイヤーの猛攻を防ぐための妨害をどれだけ立てられるかが勝利への鍵となり、後攻プレイヤーにとっては相手が展開した妨害をどう躲していくかが肝となる。

先攻のレイノハートは再びターンが回って来て、後攻の俺は攻撃には失敗したものの相手の妨害を？がしたうえで防御を固めるという展開に持つて行くことが出来た。

そういう意味ではどちらも1ターン目の目的は達成できたとも言える。

「私のターン、ドロロー」

2ターン目に入り、レイノハートもモンスターによる攻撃が可能となる。これからが俺の真の防御ターンとも言える。

『強欲で金満な壺』を発動。EXデッキのカードを六枚ランダムに裏側で除外し、二枚ドロローする」

「手札増強か……」

奴の手札は先のターンでゼロ枚になっていたが、これで二枚。手札が一枚しかないか、二枚あるかでは出来る事の幅が増えるため警戒が必要だ。

EXデッキのカードを五分の二を失ってもする価値がある二枚ものドロローは貴重だという事である。

「魔法カード、『簡易融合』インスタントフュージョン。ライフを1000払い、EXデッキから『レア・フィッシュ』を融合召喚する」

レイノハート

LP4000 ↓ LP3000

『レア・フィッシュ』

レベル4 ATK1500 水

「む……」

『レア・フィッシュ』。

遙か昔の融合モンスター一枚であり、効果も無ければステータスも貧弱。今更正規の方法で融合召喚する人なんて居ないだろう。しかし、様々な召喚方法が実装され、正規の方法以外での召喚が容易に可能な現在ならかつてのバニラ融合モンスターは手軽に特殊召喚出来る素材モンスターとして活躍する事がある。

（『トロイメア・ユニコーン』を今使って素材の内にデツキへ戻すか……。だが、効果は無効化されているとはいえ、優秀なステータスを持つカレイドハートや蘇生効果を持つキトカロスが残っている。誘いの可能性もあるから展開を最後まで見て考えるのが良いか）

俺はマスカレーナの効果は使わず、レイノハートの動きを見極めることにした。何より、戦闘耐性を持っている『エルシャドール・アップカローネ』をこのタイミングでリンク素材にして良いものかというのも大きな理由だ。

「さーに手札から『ティアアラメンツ・グリーフ壺世壊に渦巻く反響』を発動！ デツキからティアアラメンツモンスターである『ティアアラメンツ・レイノハート』を特殊召喚し、そのモンスターと同じ種族または属性のモンスターを一体を墓地へ送る。私は『ティアアラメンツ・キトカロス』を墓地へ送る」

「またイラストが見えないカードか……」

またしてもそれは俺の知らないティアアラメンツカードであり、やはりそのイラストは靄に覆われていて見ることは出来ない。

再びデツキから現れた『ティアアラメンツ・レイノハート』がデツキに鞭を差し込む。

「特殊召喚されたレイノハートの効果と墓地へ送られたキトカロスの効果を発動！ デツキから『ティアアラメンツ・シエイレイン』を墓地に送り、デツキの上からカードを五枚墓地へ送る」

レイノハートはデツキからカードを五枚墓地へ送る。通常公開情報である墓地はデュエルディスクの機能で確認できるが、そういった相手の情報に関する機能が動作していない現状ではその確認すらできない。

「折角枯らした墓地がまた……」

「貴様の涙ぐましい抵抗など、無意味！ デツキか墓地へ送られた

ティアラメンツ・メタノイズ

『壺世壊に軋む爪音』と墓地へ送ったシェイレーンの効果を発動！

ティアラメンツ・メタノイズ

『壺世壊に軋む爪音』効果によってキトカロスをEXデツキに戻す。

そして、墓地のシェイレーンとマイルウをデツキの下に戻し、融合！

再び現れる、我が僕！ 『ティアラメンツ・キトカロス』！」

どうやら今墓地へ送られた五枚の中に融合素材となるマイルウも居たようだ。

墓地へ送られても再び現れるバイザーを付けたキトカロスはカレイドハートに付き従うかのように後ろに立っている。そんな姿を見て居られないのか、三人娘は何か言いたげだ。

「そして、特殊召喚に成功したキトカロスの効果によって、デツキから

ティアラメンツ・サリーク
『壺世壊に奏でる哀唱』を手札に加える」

レイノハートが手札に加えたカード。それは俺の知らないティアラメンツカードだったが、今までとは違い、そのイラストははつきり見ることが出来た。

そのイラストは三人娘を守るキトカロスと彼女を痛めつけて笑っているレイノハート。そして、臨戦態勢をとるこの世壊の主人公、『ヴィサスⅡスタフロスト』が描かれていた。

（酷いイラストだッ……。ん？ このカードも俺は知らないが、何でこれは普通に見えている？）

ふとした疑問が頭をよぎるが、今もデュエルは続いており、レイノハートのターンは終わっていない。

「さらに私はレベル4の『レア・フィッシュ』と『ティアラメンツ・レイノハート』をオーバーレイ。二体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築。エクシーズ召喚、『深淵に潜む者』」

『深淵に潜む者』

ランク4 ATK1700↓2200 水

水属性モンスターをX素材としているためATK500アップ。

『『深淵に潜む者』!? まずい！ そのカードを残す訳にはいかない！ マスカレーナの効果を発動！ 相手ターン中にこのカードをリン

ク素材としてリンク召喚する！」

『深淵に潜む者』はX素材を一つ取り除く事で、そのターン相手は墓地のカードの効果を発動できなくなるカード。しかも、この効果は相手ターンでも発動できるため、俺のターンでこの効果を使われてしまつてはティアラメンツもシャドルも完全に機能不全に陥ってしまう。『深淵に潜む者』の召喚を許す前に『レア・フィッシュ』を処理しておかなかつた俺の判断ミスだ！

「どうやらこのカードの効果は知っているようだな。だが、遅い！その効果にチェインして『深淵に潜む者』の効果を発動する。X素材を一つ取り除き、効果を発動する」

「くっ……現れるー！ 想いを繋げるサーキット！ 召喚条件はカード名が異なるモンスター二体以上！ マスカレーナとアプカローネをリンクマーカーにセット！ リンク召喚！ リンク3、『トロイメア・ユニコーン』！」

『トロイメア・ユニコーン』

LINK3 ATK2200 闇 リンクマーカー：左、下、右
『深淵に潜む者』の召喚に対してマスカレーナの効果を発動し、『トロイメア・ユニコーン』をリンク召喚する。

「このカードがリンク召喚に成功した場合、手札を一枚捨て発動。フィールドのカード一枚をそのカードを持ち主のデッキに戻す。戻すのは『深淵に潜む者』だ！」

『トロイメア・ユニコーン』によって『深淵に潜む者』は私のデッキに戻るが、このターン貴様は墓地のカードの効果を使うことは出来ない。『超電磁タートル』が墓地にある事は知っているぞ」

『深淵に潜む者』の効果が残存しているためアプカローネの墓地効果も使えない……。

「バトル！ キトカロスで『トロイメア・ユニコーン』を攻撃！」
「ぐっ……」

世良

LP4000 ↓ LP3900

マスカレーナを素材にしてリンク召喚されたモンスターは効果破

壊に対する耐性を獲得するが、戦闘破壊に対しては無力だ。

ユニコーンはキトカロスが振るったナイフによってあっさりと切り捨てられる。

「カレイドハートでダイレクトアタック!!」

「……ッー」

目の前に迫った水底カレイドハートの悪魔はその鞭を振るい、巨大な穂先が俺の身体を貫通した。

「がッ!! ……う……ぎ……」

世良

LP3800 ↓ LP900

普段行うデュエルで受ける仮想ダメージとは比べ物にならない程の激痛に、俺は言葉にもなっていない音を口から漏らす事しか出来ない。

残り僅か900のライフポイントが実際に自分に残された命と同じである事を直感的に理解した。

心臓を穿たれたような激しい痛みには俺は仰向けになる様にして倒れ込んでしまう。

そんな状況でも手札のカードを放さなかったのは意地だったのかもしれない。

『ああ……駄目……』

『倒れないで下さい!』

『……そんな……そんな事……』

『ラッセさん!!』

「終わりか。久々の戯れがこの様な幕引きとは、興ざめだな」
俺の意識は深い闇の中へと落ちて行く。

壱世壊の未来

(何をしていたんだったかな……)

頭がぼんやりとしていて上手く思考が出来ない。

夏の暑さをやり過ぎす木陰の様に涼しく、冬の寒さを耐え忍ぶかま
くらの中の様に温かいこの空間は眠るのに丁度いい暗さだ。暗いが、
それは完全に真つ暗な闇という訳では無く、光があるからこそ出来る
薄暗さ。まるで影の中に居る様でここはとても心地が良かった。

(このままここに居るのも良いかもしれない……)

ゆっくりと瞼を閉じ、もう寝てしまおう。

そう思った時、どこからか声が聞こえてくる。

『まだ駄目だよ。彼女達を悲しませてしまうから』

彼女達? ……ああ、そうだ。

まだ、俺は眠る訳にはいかない。

世良 VS レイノハート

LP900

LP3000

「ぐ……うう……ま、まだ……終わって、ないぞ……」

『やった! 起きたわ!』

『うう……もうダメなのかと思いましたあ……』

『……全部終わったら、一杯褒めてあげる……』

『良かった……』

「心配……かけたな……」

「その様でよく言うものだ。カードを一枚伏せて、私はターンエンド。
さっさとしろ」

全身が痛む。

デッキからカードを一枚引くだけの動作すらもいつもの様に満足

に行えない。

「俺の……くっ……」

痛みで腕が持ち上がらない。

これではカードを引く事すら出来ない。このままアクションを起こせなければタイムアウトで自動的に敗北してしまうだろう。

「……え？」

何とか腕を持ち上げてカードをドロウしようとしていた時、ある瞬間を境に突然身体が思うように動くようになった。

いや、少し違うな。まるで何か糸の様な物で腕が吊り上げられている感覚だ。不思議とさっきまで感じていた痛みも和らいだ気がする。

だが、今は細かい事はどうでも良い。これでデュエルを続行することが出来る！

「俺の、ターン！」

引いたカードは『シャドール・ハウンド』。

リバーズすると墓地のシャドールカードを一枚手札に加える効果を持つ。持ってくるカード次第では逆転の切っ掛けになり得るか……？

墓地に『超電磁タートル』もあるとはいえ、守りがそれだけというのは少し心もとない。もう一度『影依融合』を使ってさらに守りを固めた方が無難かもしれない。

「俺は……」

手札の『影依融合』に手を掛けた時、頭の中に直接響く声が聞こえる。その声は三人娘でもマスカレーナでもない、男の声だ。

（勝負を焦るな）

「だ、誰だ!？」

『どうしたの?』

精霊体のまま傍に立ってくれているシエイレインが突然の俺の発言に驚いているところを見るに、彼女には謎の男の声は聞こえて居なかったらしい。

（焦るな。機を待て）

（お前は誰なんだ?）

(今そんな事を気にする必要はない。勝ちたいのなら自分を信じる。仲間を信じる。デッキを信じる。世壊は君の味方だ)

それ以降男の声は聞こえなくなった。

男が一体何者なのか。それは分からなかったが……世壊が俺の味方とは一体……。

考える。

ここで下手にカードを使用して、防御を固めるとする。守備を固めたとしても『超電磁タートル』の効果が何らかの方法で使え無くされたらどちらにしる負ける。そのターンは凌げたとしても次の俺のターンもギリ貧になる可能性が高い。

だが、少ない手札消費で奴のターンを凌ぎ、次の俺のターンが回って来た時、『影依融合』があるか無いかで取れる手段も大きく変わって来る。

『えー！ 何でシャドールの融合を使わなかったの！』

『モンスター一体だけじゃ……』

『……何か考えが？ ……』

「ふっ、とうとう苦し紛れに壁を立てるしかなかったか。私のターン、ドロー……。バトルだ」

「相手のバトルフェイズ中に墓地の『超電磁タートル』を除外して、発動！ そのバトルフェイズを終了する」

「悪あがきだな。どうせ次の貴様のターンで全てが終わる。精々次のドローに賭けるのだな。ターンエンド」

ターンが回って来た！ まだ希望はある！

「俺のターン……ドロー！」

これがラストターンだろう。俺は今引いたカードに目をやり、まだやれることを確信する。

「魔法カード、『貪欲な壺』を発動！ 墓地のミドラーシユ、マスカレーナ、アップカローネ、ビースト、トロイメア・ユニコーンをデッキに戻し、二枚ドロー！」

ドローカードは『超融合』と『ティアラメント・シェイレーン』。

このまま相手の妨害を全部踏み越える！

「手札から『影依融合』を発動！ デツキから『影霊の翼ウエンデイ』
と『シャドール・ビースト』を墓地に送り、融合！」

現れるのは霊獣使いの女の子が影に落とされた姿。

「かつてその力を恐れられた鬼才の少女。影に落ちようとその本質は
守りの力。融合召喚、『エルシャドール・ウエンデイゴ』！」

『エルシャドール・ウエンデイゴ』

レベル6 DEF2800 風

「さらに、墓地に送られた『影霊の翼ウエンデイ』の効果でデツキから
『シャドール・リザード』を裏側守備表示で特殊召喚！ 『シャドール・
ビースト』の効果で一枚ドロ……このカードは……」

ビーストの効果でデツキから引いたカードは……

『テイアラメンツ・ハートビーツ 壺世壊を揺るがす鼓動』。

俺の知らないテイアラメンツカードであり、当然デツキに入れた覚えもない。そんな物が今デツキから現れたという事は、考えられる原因はさっきの謎の声によるものだろう。

(世壊が味方、か……ははっ、そう言う事か)

カードイラストはある種世界の未来と言える。このカードに記された未来は立っている『ヴィサス ユニタフロスト』と倒れ伏す『テイアラメンツ・レイノハート』。

どういう経緯でこうなったのかは分からないが、この光景は一筋の光だ。

(やはり、諦めるにはまだ早い！)

レイノハートの伏せカードはおそらく先のターンでキトカロスの効果で手札に加えた『壺世壊に奏でる哀唱』。どんな効果かまでは確認できなかったが、種類は永続罫カードだった。それなら何とかなるかもしれない。

しかし、このカードを使うタイミングは今ではない。

「俺は『シャドール・ハウンド』を反転召喚！ リバース効果により、墓地から『神の写し身との接触』を手札に加える。さらに、墓地の『影光の聖選士』とウエンデイを除外してインカーネーションの効果を発動する！ 自分フィールドの裏側守備表示のモンスターを

表側守備表示にする。表になったのは『シャドール・リザード』！
リザードの効果でカレイドハートを破壊する！」

「ふん、愚かな。1ターンに一度、効果で墓地へ送られたカレイドハートは墓地から特殊召喚する。そして、デツキからティアラメンツカードを墓地へ送る」

『ティアラメンツ・カレイドハート』

レベル9 ATK3000 闇

「自己蘇生効果!?!」

破壊したカレイドハートは再び墓地から復活する。しかも、一度破壊されて改めて特殊召喚されたことで、アップカローネの効果無効の影響も無くされてしまう。

「墓地へ送ったレイノハートを効果により自身を特殊召喚し、手札から『ティアラメンツ・シエイレーン』を墓地に送る。さらに、特殊召喚されたカレイドハートの効果により、貴様の『エルシャドール・ウエンデイゴ』をデツキに戻す」

『ティアラメンツ・レイノハート』

レベル4 DEF2100 水

カレイドハートの効果によってウエンデイゴはデツキへ戻されてしまった。理想を言えばウエンデイゴが墓地へ行った時に発動する効果を使いたかったところだが、仕方がない。

しかし、これで妨害を一つ使わせることが出来たうえ、俺のEXモンスターゾーンは空いた。

「レイノハートが特殊召喚されたことで、デツキから『ティアラメンツ・ハウフニス』を墓地へ送られたハウフニスの効果！墓地のハウフニスとレイノハートをデツキの下に戻し、二体目の『ティアラメンツ・キトカロス』を融合召喚！キトカロスの効果によつてデツキから『壺世壊に澄み渡る残響』^{ティアラメンツ・クライム}を手札に加える」

相手のフィールドには上級モンスターが三体と下級が一体。対してこちらは下級シャドールが二体だけ。

圧倒的不利な状況だが、俺にはまだ手札が残されている。

「現れる！ 想いを繋げるサーキット！ 召喚条件はリンクモンス

ター以外のモンスター二体！ ハウンドとリザードをリンクマーカーにセット！ リンク召喚！ 再び現れる、リンク2、『I:Pマスカレーナ』！」

『I:Pマスカレーナ』

リンク2 ATK800 闇 リンクマーカー：左下、右下

マスカレーナのリンクマーカーによって後二体のモンスターをEXデツキから召喚できるようになる。

「なんだ……デツキが光って……」

『ラッセさん。私が運ぶみんなの想い。繋げて下さいね』

「……ッ。ああ！」

シエイレーンもハウフニスもメイルウも。

みんな俺の勝利を信じている。

三人娘も、キトカロスも、これから悲哀の真珠は作らせはしない。

「速攻魔法『超融合』！」

『『超融合』だと！』

「手札を一枚捨てて自分・相手フィールドから融合素材となるモンスターを墓地に送り、融合召喚する！」

「だが、カレイドハートは融合素材には出来ないぞ！」

「俺が素材に指定するのはお前の場のキトカロスと、レイノハート！」
「何!？」

素材の条件としてはティアラメンツモンスターであるレイノハートと水族モンスターであるキトカロスによって俺のデツキに居る『ティアラメンツ・キトカロス』を呼び出すことが出来る。

だが、今から俺が召喚するモンスターはキトカロスではない。

これから示すのは壱世壊の未来だ。

「虐げられし水底の姫は戦う決意を胸に世壊の力を受け継ぐ女王となる。現れ出でよ！ 『ティアラメンツ・ルルカロス』!!」

『ティアラメンツ・ルルカロス』

レベル8 ATK3000 水

その姿はキトカロスとよく似ているが、持っていたナイフは長剣へ

と変わり、物憂げだった表情は決意に満ちた物へと変わっている。

「何だそいつ……キトカロス……なのか……」

雰囲気キトカロスの時と随分変わったからか、レイノハートのその変化に戸惑いを露わにしている。

「チツ……だが、墓地に送られた私のキトカロスの効果によってデッキトップからカードを五枚墓地へ送る。そして、今墓地へ送られたメイルウの効果を発動！」

「その効果にチェインしてルルカロスの効果発動！ モンスターを特殊召喚する効果を含む効果の発動を無効にし、破壊する！」

「無駄だ！ リバースカードオープン！ 『壱世壊に奏でる哀唱』！」

テイアラメンツモンスターが場に居る時、相手のモンスター一体の効果が無効にする！ 対象にするのはそのルルカロス忌々しい女だ！」

「そうはいかない！ 速攻魔法『壱世壊を揺るがす鼓動』！」

「そ、そのカードは……」

このカードのイラストを見たからだろうか、いつも飄々として余裕そうな雰囲気を崩していなかったレイノハートがかつてない程に狼狽している。

「フィールドの魔法・罨カードを一枚デッキに戻す。デッキに戻すのは当然『壱世壊に奏でる哀唱』！ 永続罨はフィールドに存在していなければその効果を適用することは出来ない！」

「この……」

『壱世壊に奏でる哀唱』がデッキに戻る事によって、ルルカロスの効果は無効化されず、奴が発動したメイルウの融合効果は無効化される。

「その後、手札・フィールドのテイアラメンツモンスターを一体墓地へ送る。俺はルルカロスを墓地へ送る」

「何？ ……いや、まさか！」

「墓地へ送られたルルカロスの効果を発動！ このカードを特殊召喚する！」

自己蘇生効果。

それはまさしくレイノハートやカレイドハートが持つ力。ルルカロスはレイノハートの力を受け継いだ後のキトカロスの姿だと言え

る。

「さらに！ 『ティアラメンツ・メイルウ』を通常召喚！ 効果でデッキの上から三枚を墓地へ！」

メイルウの効果で墓地へ送られた三枚のカードの内的一枚。それはハウフニス。

「墓地へ送られたハウフニスの効果を発動！ このカードとフィールドのメイルウをデッキの下に戻し、融合！」

「まさか……まさかこの私に歯向かうというのかあああああああ
!!!」

「心優しき水底の姫、仲間の危機に今立ち上がれ！ 融合召喚！ 現れる、『ティアラメンツ・キトカロス』!!」

『ティアラメンツ・キトカロス』

レベル5 ATK2300 闇

俺のフィールドに現れたキトカロスはイラスト通りの彼女。バイザーを付けて無表情の彼女ではない。

『『キトカロス様！』』

『貴女達……心配を掛けてしまいましたね……。人の子、いえ、セラ殿にも』

「気にするな」

『私も覚悟を決めましたから』

戦闘態勢を取るキトカロス。俺もそれに応えるように効果の発動を宣言する。

「キトカロスの効果！ デッキから『ティアラメンツ・シェイレーン』を手札に加え、シェイレーンを特殊召喚！」

『ティアラメンツ・シェイレーン』

レベル4 ATK1800 闇

『これで決めるわよ！』

「ああ！ そして、手札からモンスターを一体を墓地へ送り、デッキの上から三枚墓地へ送る」

ひっそりと初手で引いてから腐っていた『PSYフレーム・ドライブ』を手札から墓地へ送る。

デツキトツプから墓地へ送られたのは『ティアラメンツ・ハウフニス』、『シャドール・ドラゴン』、『テラ・フォーミング』。

また『シャドール・ドラゴン』が墓地に落ちたが、魔法・罨カードを破壊する効果の為、今回も使えない。

「墓地へ送られたハウフニスの効果発動！ このカードとドラゴンを融合！」

ルルカロス是一次墓地へ送られてから特殊召喚されたため、メインモンスターゾーンにおかれている。そのため、今はマスカレーナのリンク先はまだ一つ空いていた。

「融合召喚!!! 来いっ『エルシャドール・ミドラーシュ』!!」

『エルシャドール・ミドラーシュ』

レベル5 ATK2200 闇

「馬鹿な……あり得ない……」

「バトルだ！ レイノハート！」

全ての準備を終え、バトルフェイズに突入する。

「ルルカロスでカレイドハートを攻撃！」

ルルカロスの長剣がカレイドハートの心臓を穿ち、カレイドハートの鞭がルルカロスを刺し貫く。

攻撃力はお互い3000のためどちらも破壊される。

「キトカロスでレイノハートのキトカロスを攻撃！」

どちらも引けを取らない激しい剣戟。

全く同じ技、同じ威力、同じ武器。その結末はどちらも同じ。お互いの胸にお互いの剣が突き刺さる。

こちらも攻撃力はお互い2300なのでまたしても相打ち。

残ったモンスターは俺のフィールドのマスカレーナ、ミドラーシュ、シエイレーンだけ。相手のフィールドはがら空きのため、ダイレクトアタックが可能となる。

「ミドラーシュでダイレクトアタック！」

「ぐはあっ！」

レイノハート

LP3000 ↓ LP800

「シエイレーンで留めだ！」

『はああああああああああああああああああ!!』

「うおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

レイノハート

LP800 ↓ LP0

シエイレーンが持つ剣がレイノハートを切りつけ、全てのライフポイントを削る事でこのデュエルは終わりを告げた。

世壊を渡る者

「終わったな……」

シエイレーンの攻撃によってレイノハートのライフポイントを削りきり、デュエルは終了となる。

それによってデュエルの中のモンスターとして存在していたシエイレーンやマスカレーナ、ハウフニスにメールウも実体化して姿を見せてくれる。

「やりましたよ！ シエイレーンちゃん！」

「……勝ったね……」

「……え？ ホントに？ ……終わったの？」

圧倒的な支配者だったレイノハートに勝利したという実感が未だに無いのか、シエイレーンは困惑しっぱなしのようだ。

三人娘にキトカロスが合流したことで彼女も状況を改めて理解したのか、そこでようやく今まで張りつめていた気を緩める。

「くっ……まさか人間にこの私がデュエルで敗れるとは……」

「約束だ。みんなを自由にしよう」

「ふっ、心配せずとも、そう時間も経たないうちに私は消えるだろう」
シエイレーンのダイレクトアタックを受けた衝撃によって膝をつくレイノハート。デュエルに負けた直後からどんどんその力が抜けて行っているのか、今まで有った威圧感や存在感というものが薄れてきている。

「だが………貴様はせめて道連れにする!!」
「なっ！」

力なく項垂れていたレイノハートは突然立ち上がり、左腕にデュエルディスクとして装着していた柄を取り、そこから伸びた鞭を俺に向かって振るってくる。

先が尖った穂先が一直線に俺に向かってくる光景がえらくゆっくり見えた。

「危ない！」

「避けて！」

それに気が付いたシェイレーンとマスカレーナが俺に注意を飛ばしてくるが、自分の身体能力では避けきれない事を悟ってしまう。

「……………」

反射的に防御しようとして腕を前に構え、思わず目を瞑っていた。しかし、いつまで経つても予想していた痛みに襲われることは無かった。何が起きているのか、それを確かめるためにゆっくりと目を開く。

そこには自分の顔の目の前にまで迫ったレイノハートの鞭の穂先が見えた。しかし、その穂先にさつきまでの速度は無く、目の前で止まっている。

「あ……………」

さらによく見ると、鞭の部分に絡まる黒い糸のようなものが足元の俺の影から伸びている事が分かった。

それはデュエル中によく見たシャドールモンスターの影系によく似ている。ほとんどのシャドールモンスターは影系によって繋がれているだけであり、それを操作することは無い。

影系を操ることが出来るモンスターはシャドールの中でも限られている。

影の軍団の司令塔であるネフィリム。

あつたかもしれない存在のアプカローネ。

後は、エグリスタもそうかもしれない。

そして……………」

「ミドラーシユ……………」

シャドールの中でも特殊な立ち位置に居るエルシャドール・ミドラーシユ。

俺が知り合ったシャドールの精霊は彼女だけであり、今こうして俺を助けてくれたであろう存在の心当りは彼女だけだった。

ずっと消えてしまったと思っていたミドラーシユだけ。

「なんだ……………」

「……………」

「！」

十年ぶりに聞いた少女の声は忘れようがないミドラーシユの物。

彼女は俺の事を『マスター』と呼んだ。それはつまり、自身をカードの精霊のミドラーシユとして認めることが出来たという事だ。

今思えば、精霊の気配に鈍感なシェイレオンがミドラーシユのカードだけは精霊付きと見破れていたのも、ミドラーシユはずっとここに居てくれていたからだろう。

「ああ……ああ！ ミドラーシユ……ありがとう」

見えるのは自身の影から伸びる影系だけで姿こそ現してくれないが、彼女がそこに居るといふ事を確信する。顔を見せてくれないのは残念だが、その事実だけで俺は嬉しかった。

鞭を掴んだ影系が勢いよく引かれると、レイノハートの鞭は切断され俺の目の前にあった穂先は重力に従って地面へと落ちて行く。

「ぐはっ！」

「勝負がついた後も油断するな」

「!?」

突然聞こえて来た男の声。

俺に攻撃を仕掛けて来たレイノハートを地面に張り倒し、いつの間にかその後ろに立つ人物。

だが、俺にはその人物の声に聞き覚えがあった。

「デュエル中に声をかけて来たのはアンタだな、ヴィサスⅡスタッフrost」

「俺の名前を知っているか。まあ、それも当然か」

「お前も有名に成ったもんだな！」

この世壊の主人公。

本来シェイレオン達ティアラメンツと協力してレイノハートを打倒したであろう人物。前髪の一部に青色のメツシユが入り、宇宙の様な右腕が特徴的だ。

そんな彼に付き従うSDキャラみたいなのは……誰？ そう言えばティアラメンツカードにヴィサスと一緒に描かれていた気がする。

「貴様は……そうか……私の力が弱まったから……」

「どういう事だ？」

ヴィサスを見て一瞬驚愕の表情をしたレイノハート。しかし、何か

に納得したのか、全てを諦めたかのような表情へと変わる。

奴は一人で納得しているようだが、俺には何のことかさっぱり分からない。

「俺はある目的のために世壊を巡っている。だが、こいつが張った世界の所為でこの世壊に入ることが出来なかった。そこで、偶然見つけたティアラメンツと言葉を交わす君に賭けてみることにした。キトカロスのカードを渡したのはそのためだ」

「キトカロスのカードって……あ！あの時の店員!？」

キトカロスのカードを手に入れたカードショップ。そこで働いていた不思議な店員の事はよく覚えている。しかし、その時の恰好はいったって普通であり、目立つ青色のメッシュも無ければ右腕も普通の人間と変わらない物だった。服装だって今の様なフアンタジーな物では無く、店の名前が入ったエプロンを着ていた。

「だあーはっはあ！あの時のヴィサスのエプロン姿は傑作だったな！」

「黙っている」

「はっ」

SDキャラの彼（名前はライトハートというらしい）が店員の真似事をしていたヴィサスの事を思い出して笑っていたが、一言で一蹴されている。彼らの関係というものが見えた気がする。

「君を利用した形になってしまった事、素直に謝罪しよう」

綺麗な姿勢で頭を下げるヴィサス。その姿が意外だったのか、ライトハートは目を大きく開いてそんなヴィサスを見つめている。

「いいよ。ここに來ることを決めたのは俺だ」

「……そうか」

確かに大きな切っ掛けとなったのはあの時ヴィサスからキトカロスのカードを受け取った事だろう。だが、俺は彼からカードを受け取っただけで何かをしろと言われた覚えはない。

三人娘の事情を知って、協力しようと思ったのは俺自身の考えだ。ちよつと死ぬほど痛い思いをしたりはしたが、自業自得だしもう終わった事だ。

「それより、何でヴィサスはこの世壊に来ることが出来なかったんだ？」

ティアラメンツのカードには決まって彼も一緒に描写されていた。それは本来であれば彼がこの世壊に訪れてティアラメンツと関わるはずだったたという事。

「おそらく、これが原因だろう」

「これは……」

ヴィサスが俺に手渡してきたのは辺りに散らばったレイノハートのデツキのカード。

そのカードは『ティアアラメンツ・クライム壺世壊に澄み渡る残響』と『ティアアラメンツ・グリーンフ壺世壊に渦巻く反響』。先のデュエルでは見えなかったイラストが今ははつきりと見ることが出来る。

それにはヴィサスとカレイドハートの対峙、キトカロスに後ろから刺されるカレイドハート、そして、レイノハートの力がヴィサスとキトカロスの持つナイフに宿るシーンが描かれていた。

「そうか……じゃあこれも……」

俺はいつの間にかデツキに紛れ込んでいた『ティアラメンツ・ハートビート壺世壊を揺るがす鼓動』のカードを見る。

このカードの時系列はクライムとグリーンフの間、二人の勝負に決着がついたシーンであろうことが予想できる。

「奴はどういう手段でかは分からないが未来を知ったのだろう。そして、脅威になり得る俺がこの世壊に侵入出来ないよう結界を施した」
「……ああ、そうさ。まさかあいつらが人間を連れて来るとは思わなかったがな……」

ペルレイノは『壺』世壊。となれば、弐や参の世壊がある事が予想できる。レイノハートは別の世壊から来る人物を警戒していた訳だ。だが、まさか人間界から侵入者が来るとは予想していなかった。

キトカロスが言っていた、奴が最近イラついていた原因もこの未来を知っていたからだろう。

「クク……そろそろ私も終わりか……。まあ、いい。お前たちはこの私を消したことを必ず後悔する……これは餞別だ」

そう言つてレイノハートは一枚のカードを投げ渡してくる。

「ツ！ これは……」

受け取ったカードの名前は『ティアラメンツ・スクリーム壺世壊を劈く弦声』。

そこには鎧武者の様な何かとルルカロスが鏝ぜり合うイラストが描かれている。それは新たな脅威がこの壺世壊に訪れることを意味していた。

もしかしたらレイノハートの結界は新たな脅威の侵入も防いでいたのかもしれない。

「だが、未来は変わる」

そうだ。ヴィサスが言うように、未来は誰にも分からない。

ヴィサスに打倒されるレイノハートというこの世壊の確かな未来の一つは今変わったばかり。

皆が力を合わせればきつと光が見えるはずだ。

「ふっ……精々足掻くが良い……」

それだけを言い残すと、レイノハートは消え去り、力の残滓はグリーンフのイラストの様にヴィサスの右腕とキトカロスのナイフへと流れ込んでいく。

そして、俺の手には一枚のカード、『ティアラメンツ・レイノハート』が残った。

「全てを失う……か」

俺はデュエル前のレイノハートの言葉を思い出していた。

ありがとう、さようなら

ヴィサスにあげようとしたらやんわりと断られたレイノハートのカードをポケットに仕舞いながら、俺はキトカロスと三人娘に声をかけた。

「これで問題解決、かな？」

「……そうね。アイツはもう居なくなったから」

「あなたのお陰で私達も安心して暮らしていくことが出来ます」

「……お疲れ様。よしよし……」

背伸びをしたハウフニスが俺の頭を撫でて来る。もしかしてどこかのタイミングで言っていた沢山褒めるとはこのことだったのだろうか？

「セラ殿。今回の事、本当にありがとうございました。それに、大変な目にも遭わせてしまいました……。あの方の暴走を止められなかった不甲斐ない私を許してください」

「良いつて良いつて。俺がやりたくてやった事だし。それに、俺も上手くキトカロスを使ってやれなくて……その、すまない」

沈痛な面持ちでそんな事言うキトカロス。もしかしたら俺がデュエル中に受けたダメージに責任を感じているのかもしれないが、俺も勝利のために彼女に相打ちを強要させた身である。

正直な所お互い様といった感じだ。お互い様？ それはなんかちよつと違うか。

「私は気にしておりません。それでどうか、皆を代表してお礼を差し上げたいのですが……」

キトカロスはこう言っているが、彼女達に何かを望むと物というのも特には思いつかな……あつ。

「えーつとだな、それだったら人間界に帰る方法とか教えてもらえる嬉しいかなーなんて」

「アンタ……」

「もしかして……何も考えてなかったんですか!？」

「……おバカ……」

「壹世壊に行く方法を考えるだけで精一杯だったから……」

三人娘からヒシヒシと感じる呆れの視線。

背伸びをして頭を撫でるのに疲れたハウフニスはさつきまで俺の背中によじ登って頭を撫でてくれていたのに今ではペシペシと叩いて来ている。

一度サイバース精霊界から簡単に帰還出来た事から心の中で精霊界からの帰りは簡単だと何となく思っていたのかもしれないな。

よく考えたらサイバース精霊界はLINK VRAINSの延長線上みたいなものだったが、壹世壊はガチ異世界である。もう一度転生するくらいの何かが必要だったりするのだろうか!?

「もしかして……一生、人間界に戻れない……?」

「ええ!? いやあもしかして私ですか!?!」

「セラ殿とマスカレーナ殿がそう望むのであれば私達は歓迎しますが、そういう訳ではないのでしょうか?」

「まあ、それは」

「私も色々と仕事があるので」

「そうですね。私個人としては少し残念ですが、お二人が戻られる方法ならお任せください」

キトカロスによつて帰る手立てがあると知らされた俺とマスカレーナは安堵のため息を吐く。

水で満たされたこの世壊はとても美しく、また来てみたいと思えるものだが、一人の人間として人の社会に帰りたくなるほどまだ絶望はしていないし失望もしていない。

家族も友人も学校もある。帰れるのなら帰る方が良い。

「あの方の力を受け継いだ今の私なら……」

そう言つてキトカロスがナイフを構える。すると、今までナイフと呼べるくらいの長さの刃物は長剣へと変化する。ドレスの意匠も少し変わり、三人娘と共通の錠前のアクセサリーが消えてなくなる。

その姿はまさに、『ティアラメンツ・ルルカロス』そのものだった。

「おお……」

「壺世壊と人間界に繋がる道を開きます。そこを通ればあなた自身が行き先の道標となつて家へ帰る事が出来るでしょう」

「そっか、これで「安心だな」

帰る手段も保障された。

もうやり残したことは無い。強いて言えばこの世壊の飯でも食べて見たかったところだが、あまり長居し過ぎると浦島太郎の様になつてしまいそうだ。

「じゃあ、俺達は帰るか」

「そうですね。中々得難い経験もしたことですし、私も満足です」

未だに背中に張り付いていたハウフニスを降ろし、ルルカロスが開いてくれた道に向き直る。

「三人ともお別れかな」

「……え……」

「あつ……」

「それは……」

三人が人間界に来た理由も壺世壊に戻らない理由も無くなった今、彼女達が人間界に戻る理由もない。それは俺と彼女達との別れを意味していた。

「それともついて来るか？」

「……」

少し意地悪な質問をしてしまっただろうか。

自惚れでなければ、俺は彼女達と良好な関係を築いてきたと思っている。勿論俺も彼女達と別れるのは寂しい。しかし、彼女達にも成すべきことがあるはずだ。

今まで出会つて来た精霊達だって、自分の中にある何かに従つていたように思える。それは彼女達も例外ではないだろう。

「いいえ、私はここに残るわ」

「私も、ルルカロス様のお手伝いをしたいと思います」

「……同じく……」

「……そうだよな」

彼女達の意味を聞き、「やっぱり」という気持ちと「残念」という気

持ちが湧き上がる。だけど、それで良いんだという事は分かっている。

それが彼女達の決断だから。

「だけど！ アンタと私達の絆は消えないから！ アンタが私達のカードを持つている限りね！」

「きつとまた会えます。いつかまた」

「……また会う日まで……」

「……そうだな」

彼女達との最初の出会いは偶然だった。

だけど、今度は彼女達と育んだ絆が道標となってくれるだろう。

色々落ち着いたところにティアラメンツのカードを通してまたひよっこりと顔を出してくれるはずだ。その日を信じて楽しみに待つ。

それもまた悪くない。

「じゃあな、今日まで楽しかったよ。またいつか会えるその日を楽しみにしてる」

「みなさん！ お元気でー！」

マスカレーナと共に帰り道に歩みを進める。

「待って!!」

人間界に繋がるであろう次元の裂け目の手前、あと一步で世界を越えようという所でシェイレーンに声を掛けられた。

何か言い残した事でもあったのだろうか？ そう思った俺は振り返ると、目前まで迫って来た三人娘が目に入る。結構な勢いで走ってきたのだろう。その勢いのまま三人は俺に抱き着くような格好になり、もう少して後ろに倒れ込んでしまう所だった。

「ど、どうしたんだ？」

「……」

「えっ？」

いつものシェイレーンらしくないびっくりするほど小さな声を聞きとることが出来なかった。

だが、それもすぐに何て言ったのか理解した。

☆

自分の部屋はこんなに広くて静かだったのだろうか。

ベッドに寝転がりながら頭を傾けて見るのは再び住人が居なくなってしまう巨大水槽。その循環器の音だけが部屋に響いている。

まるで遊びに来た友達が自分の家に帰って行った時の様な寂寥感。

部屋に吹き込む風がふわりとカーテンを揺らし、陽の光がチラチラと顔に差し掛かる。

「もう二日も経ったのか……」

彼女達と別れた日のことを思い出す。

人間界に戻ってすぐにマスカレーナも「なんだかLINK VRAIN Sが騒がしいようなのでちよつくら様子を見て来ます；）」とか何とか言って行ってしまった。

まあ、彼女とはLINK VRAIN Sに行けばまたすぐに会う事が出来るだろう。

「よっと」

ベッドから起き上がり、机の上に置いてある精霊抜けたカード宝が仕舞われている箱を開ける。

今までその箱の中にはカードしか入っていなかったが、今では別の物も入っている。俺はそれを取り出すと、はたらくカーテンを開け放ち、窓から見える太陽にそれを翳す。

あの日着ていたシャツの胸ポケットにいつの間にか転がり込んでいた三つの真珠。

それはいつも哀しみに涙を流していた彼女達が、初めて哀しみ以外の理由で流した涙の真珠。

「また、いつか会えると良いな」

それは太陽の光を受けて様々な色に輝いていた。

「ん?」

ティアラメンツの真珠を少しずらすと、太陽の方向に何か空を飛んでいるのが見えた。いや、空を駆けていた。

最初は米粒ほどの大きさだったそれは段々と大きくなっていく。つまり、その何かはこちらに近付いて来ている?

「んんん??」

馬の様なフォルムに黄色のカラーリング。

頭部に一本の角が生えたその生き物は明らかに現実に存在するものではない。

ていうか、『トロイメア・ユニコーン』だった。

「うおー何だ!」

ユニコーンは俺の部屋の窓の前まで来ると、頭を大きく揺らして口に咥えた一枚のカードを投げて渡してきた。

色々ありすぎて俺の感覚も麻痺してきているが、何故こいつも当たり前の様に物を触れるのか……。

『オルフェゴール・ガラテア』?……あ」

そのカードの名前を確認してからもう一度ユニコーンを見てみると、その背中にはぐったりとして動かないガラテアの姿があった。

「……ああ」

科学技術全盛時代にも精霊は意外と居るもんなんだなあ……。

鳴らないオルゴール 黄色のユニコーン

科学技術全盛時代にも精霊は意外と居るもんなんだなあ……。

目の前の現実から目を背けるためにそんな事を必死に考えているうちに、ユニコーンははずかずかと部屋の中へと入り込む。精霊であるその身体を家の壁に遮る事が出来るはずもなく、知らない精霊の侵入を許してしまった。

デュエルでよくお世話になる『トロイメア・ユニコーン』だが、その出自の設定を考えると決して油断していいモンスターではない。

所謂、星遺物世界と呼ばれるストーリーにおいてラスボスと思われる機界騎士ジャックナイトのコアを利用して真のラスボスによって作られた六体の魔物の内の一体。それが『トロイメア・ユニコーン』だ。

まあ、そんな事を言い出したらミドラッシュだってストーリー上ではとんでも無いことをやらかしたモンスター筆頭だし、背景ストーリーとカードの精霊の性質は別物ということは勿論よく理解している。

だから、まず俺はユニコーンに対しても普通に対応することにした。

「何か困りごとでもあるのかな？」

精霊が見える人間に接触を凶ってくる精霊の行動理由は大抵これだ。そして、今回の場合は背中に背負っている機械の少女に関することであろうことは容易に想像ができる。

その機械の少女、『オルフェゴール・ガラテア』について一言で説明するのはとても難しいが、まとめて言うとするならば星遺物ストーリー後半において極めて重要なポジションに居る人物である。その運命もまた極めて厳しい物だが……今はいいだろう。

そんな少女と行動を共にしているユニコーンだが、本来この二人に接点はない。それは登場した時系列が異なるからだ。そんな二人（……二人？）が一緒に行動している今の状況は彼らのストーリーの外側の事情で動いているという事だろう。

『……』

ユニコーンは声も発さず、背に乗せたガラテアを部屋のベッドに静かに横たえる。そこにガラテアを寝かせられると俺が寝る時はどうすれば良いんだ……？ 触る事が出来ないから退かすことも出来ないぞ……。

すると、身を軽くしたユニコーンはおもむろに俺の方へと近づいて来る

（普通の馬以上の大きさを持つ生き物に目の前に立たれるとそれだけで少しの恐怖を感じるな……）

とは言え、正直な所俺はユニコーンに対して心の底から怖さを感じている訳では無い。それは以前に本気の悪意を向けて来る相手に対面したから分かるのだろうか、所謂『敵意』と言うものをユニコーンからは感じない。

ユニコーンは何も言わず、俺を見て、ガラテアを見て、そして俺の方を再び見つめてくる。

ふむふむ……なるほどな………え？

もしかしてなのだが、一向に動く気配を見せないガラテアをどうにかして欲しいのだろうか？

「……」

『……』

うーん……、どうもそうみたいだ。

そもそもガラテアは生きているのだろうか？ 機械の身体は呼吸の必要が無いのか、胸が上下するような動作も見えない。ガラテアが精霊体のせいで身体に触れて反射を見ることも出来ない。

まあ、その確認方法も機械の身体にどれだけ通用するのか分からないが。

「あー……もしもーし？」

悩んだ末の謎の呼びかけを行うも、当然ガラテアが反応を返すことは無い。

「んー……はああああああああああ!!」

今度は自分の掌をガラテアに向けて念を送る様な気持ちで気合を入れてみる。

精霊とそこそこ親和性があるらしいと巷で噂の俺ならば、初代遊戯王で出て来た魂バの力的な何かを使えるのでは？　そして、そういった精神的なものが不足しているからガラテアは目覚めないのではな
いか？　そういう考えの元行われた一見意味が無さそうな行為は無
事意味もなく終わった。

「すまん。万策尽きた」

『!』

「あ痛たたたた!!　痛い痛い!」

素直に出来ない事を謝罪したというのにユニコーンは俺の頭に噛みついてゴリゴリしてきやがった。

馬に噛みつかれるという事故はまあまああるらしいとどこかで聞いたことがあるが、馬より一回り大きく、空想上の生き物であるユニコーンに噛みつかれるという事故に見舞われた人間は俺しか居ないのでは無からうか？

「ていうか、何でお前は俺に触れるんだ!」

思わず頭に浮かんだ疑問をそのまま口に出してしまう。

そんな俺の言葉が聞こえたのか、俺の頭をゴリゴリしていた顎を止め、何かを伝えようとするかのようにこちらをじっと見つめて来る。

そんなユニコーンにつられて俺も相手の顔をじっと見つめ返してしまう。

黄色の体表に黄色の鬣。『黄華ジャックナイフの機界騎士』に由来する装備。そして顔面に装着された拘束具の様なフェイスマスク……ん？

ユニコーンに付けられたフェイスマスクはその眼を隠すように付けられているのだが、そのフェイスマスクに何かが挟まっているのだ。

その挟まっている物体をよく見ると……『トロイメア・ユニコーン』

のカードだった。しかも反対側にもう一枚の『トロイメア・ユニコーン』が挟まっている。

「クレジットカードマン!」

それはもうCMでよく見るクレジットカードを宣伝してくる変な人みたいな状態になっていた。

「な、なるほど……。自分の依り代となるカードを複数集めて人間界への干渉力を上げていたのか……」

『……』

ユニコーンは何も言わないが、そういう事で合っているらしい。何だか満足げな雰囲気を感じる。

仕組みとしてはスペクターの『聖天樹の大母神』と同じことだ。自身のカードを複数集めることで精霊への親和性が高い俺に物理的な接触を可能としている。

そう言えば、俺はシェイレーン達のカードを三枚ずつ所有していたが、彼女達は人間界で俺に触れることは出来なかった。その差は何なんだろうか？ 精霊としての力の強さだろうか？ それともまた別の要因が？ まあ、そんな事を考えても仕方のない事ではあるのだが。

しかし、『トロイメア・ユニコーン』のカードを仕舞って置く場所はそこしか無かったのだろうか……？ まあ、良いんだけどね……。

……あれ？ ていうか、もしかしてユニコーンが見えない人間からすると3000円×二枚が空を舞っている様に見えるのだろうか？ 俺の視界には常に精霊が見えているから何の違和感もないが、普通の人の視点が愉快なことになっていたのであるということを考えると少し見て見たくもあった。

「つて、おいおい何するんだ!」

そんなどうでも良い事を想像していると、ユニコーンは何を思ったのか俺の腰に装着しているデッキケースを口に咥えて奪い取る。

ユニコーンはデッキケースを咥えたまま再びこちらをじっと見つめてくる。

「もしかして、俺のデッキにガラテアの力になれる何かがあるのか？」

『……』

やはりユニコーンは何も言わない。しかし、その言葉を聞いたユニコーンは俺の手にデッキケースを渡してくる。つまりはそう言う事なのだろう。

今デッキケースに納められているのは未だシャドールティアラメント。

オルフェゴールやトロイメアはもちろん、星遺物やクロラー、パラディオンに関わる様なカードは一枚も採用していない。

正解のカードの見当がつかない俺は、ユニコーンに見せながら一枚一枚カードを捲っていく。

十数枚目のカードを捲った時、ユニコーンが動いた。

「これか？ ……え、っ……これ!? ……こらこらこらヤメロヤメロヤメロ」

反応を示したカードは『影依の原核』^{シャドールーツ}。このカードが見えた瞬間、ユニコーンは口で啞えて取り上げようとしてきたが、そうはさせまいと俺は必死の抵抗をする。

『影依の原核』^{シャドールーツ}。

これもシャドールのストーリーを追って行けば業の深いカードであることが分かる。言ってしまうえばこれはシャドルモンスターのルーツ。ストーリー上ではこのカードからシャドルモンスターが生み出されたと言われている。

ああ。確かにこのカードの力を頼れば眠ったままのガラテアは動き出すかもしれない。

でもなあ……それってつまりさあ……ねえ？

俺は嫌だよ。『シャドール・ガラテア』なんて悲劇の塊みたいなモンスターが生み出されるのは。

そんな悲劇を防ぐための結果として『影依の原核』^{シャドールーツ}を中心に俺とユニコーンによる綱引きが行われていた。

「つぎつぎ……いい加減離せ……あっ」

『……』

そんな俺達の綱引きは手汗によってカードが滑った俺のミスで終わりを告げた。だが、いきなり力が抜けたからか、ユニコーンの方もその勢いでカードを取り落とす。

ひらひらと宙を舞った『影依の原核』は一転、導かれるようにして何の抵抗も受けず一点に向けて落ちて落ちて行く。

その場所は俺の影の上であり、そのさらに向こう側にまで落ちて行く。

「ええ……」

『……』

『影依の原核』が俺の影に飲み込まれると、部屋のライトがちらついてる訳でも無いのに影がゆらゆらと蠢く。

その様子を見ていた俺とユニコーンは素直にドン引きしていた。

こんな事が出来るのは『彼女』しか居ないだろう。

レイノハートとの一戦。その時、今も彼女がそこに居る事を知った。そこに居ると認識したからだろうか、それ以来俺の影が俺の動きに反した動きをする事が時々ある事に気が付いた。

影に隠れた彼女が何らかの意思を以ってアクションを仕掛けてくれている。俺はそれを知り、見て居られるだけで嬉しかった。

「……………ええ……………」

『……………』

しかし、『影依の原核』を飲み込んだ俺の影が名状し難い感じにくにやぐにやの形に変化した後、「ぺっ」と言わんばかりに『影依の原核』を吐き出して来たのには流石の俺もユニコーンも何も言えずにいたのだった。

兄の愛はAIより遭いし

影の中から弾きだされた『影依の原核』^{シャドールーツ}はひらひらと舞いながら俺の手の中へと納まる。カードの見た目はさつきと何も変わらないはずなのに、何となく触った感じがしつとりしている気がするのは気のせいだろうか？ 気のせいだと思う。

「……………これいる？」

「……………」

ユニコーンは何も言わない。でも、多分あの顔は「要らない」と言っている。影の中で何が起こったのかは分からないが、既にユニコーンは『影依の原核』^{シャドールーツ}への興味が無くなっている。きつとミドラーシユが何らかの手段で『影依の原核』^{シャドールーツ}の持つカードの力を吸い取ってしまった……………んだと思う。

そもそも手持ちの『影依の原核』^{シャドールーツ}にそんな力があつた事すら知らなかったのだが……………。

「ところで、他にも何か方法が……………あれ？」

手元の『影依の原核』^{シャドールーツ}に落としていた視線をユニコーンへと向けると、既にそこにユニコーンの姿は無い。あるのは床に落ちた二枚の『トロイメア・ユニコーン』のカードだけだった。

「どこに行つたんだ？ それにガラテアはこのまま置いて行つちやつただけ……………」

ユニコーンが置いて行つたガラテアは今も変わらず俺のベッドに横たわっている。ここまで色々試してきたが、やはり彼女が動き出すような気配は全くない。

「……………とりあえず、この二枚は貰っておこう」

文字通り降つて湧いた6000え……………二枚の『トロイメア・ユニコーン』はカードホルダーにしつかり保管して置くことにした。

「……………」

別に現実から目をそらしていた訳では無いが、ユニコーンとの遭遇の後、ガラテアの事は一旦置いておく事にし、飯を食って風呂に入っ
てさあ寝るぞとなった時、改めて自分のベッドは今ガラテアが占拠し
ている事を思い出したのである。

「どこに寝れば良いんだ……」

ガラテアはカードの精霊。彼女に俺は触ることが出来ないため、
ベッドから退かす事も出来なければ横にずらすことすら出来ない。

俺が床に寝れば良いというのはまあ、それはそうであるのだが
……。今後もずっとガラテアが目覚めなければ床で寝る羽目になっ
てしまう。出来れば何らかの解決策は持っておきたい。

……。よく考えれば、カードの精霊は人間界では物に触れない。ユニ
コーンだつて家の壁をすり抜けてこの部屋に入ってきたしな。なら
ガラテアはベッドに横たわっている様に見えるだけで実際は宙に浮
いているのだろうか？

見ればベッドがガラテアの重みで沈み込んでいる様子は見られな
い。これだつたら別にベッドの上でなくとも、彼女を置く場所はどこ
でもよかつたのではないだろうか。

あれ？ もしかしてユニコーンは雰囲気のためだけにガラテアを
ベッドの上に置いて行つたのか？

「何だか考えるのに疲れて来たな……」

今になって思えば触れないガラテアが居るだけなら物理的にベッ
ドで寝られない訳じゃないし、もうこのままガラテアと文字通り重
なつて寝れば良いのでは？

夜も更けて、良い感じに眠くなつてきたせいで色々どうでも良くな
つてきたのは否めないが、それで何か問題があるかと聞かれれば別
に何も問題は無い訳で。

「それじゃあちよつと失礼して……」

ご丁寧にユニコーンはガラテアの頭の位置がしつかり枕に乗る様
に置いて行つたため、それはもうほぼ完全に俺の身体とガラテアの身
体が重なる。

なんだか幽体離脱してるみたいで変な感じだ。

別にガラテアと重なってる事で動けないだとか、呼吸がしにくいだとか、そう言った不都合は現状生じていない。とりあえずこれなら今まで通り普通に眠ることが出来そうだ。

「おやすみ」

聞こえているとは思っていないが、俺はガラテアに声を掛けてから夢の世界へと旅立つことにした。

その時、ガラテアの身体が淡く輝き出した事に気が付いたのは俺の影の中に居る存在だけだった。

☆

真つ暗な世界。

上も下も右も左もあやふやなこの空間で俺はポツンと立っている。先ほどベッドに横になって眠りに就いたことは覚えている。そして、朝を知らせる目覚まし時計によつて叩き起こされた覚えもない。そうなるここは夢の中だろう。だが、今俺は起きて居る時と同じように思考出来ているし、身体も思った通りに動かすことが出来る。自分の思う通りに行動できる夢。明晰夢とやつだ。

俺はこういう夢をよく見るから大して驚きはしない。その度に近くにある太陽と月のレリーフが刻まれたデカイ鏡を太陽が上に来るよう無理やり回転させて居たものだ。

そうすると良い夢が見られるからな。

「暗いな。それに、何も無い」

流石に例の鏡をグルングルンさせ過ぎてそろそろ夢の支配者に怒られるのだろうか？ 夢の支配者はおっかなさそうだからちよつと怖いな……。

そんな感じで身構えて居た俺に声をかける人物が居た。

『少年』

振り返ると、そこには明け方の空のような色をした髪の方がガラテアを横抱きにして立っている。そして、その髪色はガラテアのもの

よく似ていた。

民族衣装を身に纏ったその男はデュエルモンスターズで『星杯に誘われし者』と呼ばれる男だ。

精霊、なのだろうか。彼が俺に接触を試みて来る理由は……心当たりがあるとしたら今日出会った機械の少女。

『唐突な話で申し訳ないのだが、君に頼みたいことがある』

「それは？」

『この子、ガラテアについてだ』

思った通り、彼の目的はガラテアだった。

しかし、それには一つ不可解な点がある。確かに彼とガラテアには大きな縁があるとも言える。だが、『星杯に誘われし者』としての彼とガラテアに直接的な関係は無い事だ。

「どうして、あー……アンタがガラテアの事を気にしているんだ」

『私の事は好きに呼ぶと良い。今のこの姿に意味は無いからな』

『星杯に誘われし者』としか呼ばれていなかったために彼の事を何と呼ぶか迷った俺を見かねてそう告げる。さらにその姿を『星杯戦士ニギルス』、『オルフェゴール・ロンギルス』、『宵星ジャックナイツ・オルフェゴールの騎士ギルス』へと変化させると最終的に元の『星杯に誘われし者』の姿へと変わった。

恐らく、彼は全てを経験した後の彼なのだろう。であるならば、彼がガラテアの事を気に掛けるのも頷ける。

「それじゃあ、ギルスは俺に何をして欲しいんだ？」

『この子にこの子だけの未来を見せてあげて欲しい』

「未来？ それは……」

星遺物世界のストーリーを俺に語れと言うのだろうか？ それは余りにも……。

『いや、少年が思っているような事ではない。この子自身が世界を見て、聞いて、知って、感じて……そうして綴っていくこの子だけの未来だ』

「でも、最終的にガラテアは妖精になってギルスと共にあったんじゃないのか？」

『そうだな。だが、何の因果かガラテアはあの時のままこうしてここに居る。器として作られたあの時のまま……』

「……」

『私には出来なかった事だ。そして、今の私にも……。だから、恥を忍んで頼む。兄として、もう一人の妹の幸せのために』

ロンギルスは死んだ妹、イヴを蘇らせるためにその器としてガラテアを創造した。ガラテアという機械人形はイヴという少女を模倣して作られたものだ。

それは正にシリンダーに備え付けられたピンがメロディーを正確に奏でるオルゴールの様。オルゴールは正確にメロディーを再現するが、それはシリンダーが一周すれば始めに戻る。

つまり、ある地点より先未来を持っていないとも言える。

そんな彼女に自分だけの未来を……。か。

これはまた大きな願いを託されたものだ。

だが、彼の願いを断る気にはならなかった。

ここ最近の三人娘やミドラーシュとの経験があつたからだろう。

「分かった。彼女に色んなものを見せて、経験させて、そして彼女だけの未来を創る手伝いをしよう」

『……ありがとう』

ギルスは目を伏せて感謝の言葉を伝えて来る。ギルスの事をストリー上でしか知らない俺は初めて彼の柔らかい表情を見た気がする。

『なら少年、今から君もこの子のお兄ちゃんだ』

「ん?」

ん?..

『そして、後ろに居る夢幻の魔物』

「え? うわつ、お前いつの間!」

さっつまで一切気配を感じなかったが、ギルスが言うように俺の後ろにはユニコーンが居た。

『お前には因縁があるが……今までガラテアを守り、少年の元まで導いたのも事実。ジャックナイツのコアとの繋がりを感じたか? ま

「……」
「あ理由は何でも構わない。だが、お前にその意思があるのなら……」

「ユニコーンは俺の後ろから一步前へ出ると、その身体を星型の黄色い結晶へと変化させた。」

「それは黄色いジャックナイツのコア。」

「コアとなったユニコーンはギルスの前へと飛んでいく。」

「……ガラテアのためにその身を捧げるか……」

「ギルスはガラテアを片手で抱き直し、空いた右手をコアへと姿を変えたユニコーンへと向ける。」

「すると、黄華のコアはガラテアの中へゆっくりと入っていく。」

「かつてはいくら憎んでも足りない程の相手だったが、ガラテアのためその行動は、お前もこの子のお兄ちゃんと呼ぶに値する」

「ん？」

「黄華のコアを取り込んだガラテアはギルスの腕の中からふわりと離れると、光となって俺の腕に装着されているデュエルディスクへと消えて行く。」

「ジャックナイツのコアのエネルギーを得たガラテアはすぐに目を覚ますだろう。くれぐれも、ガラテアの事は頼んだぞ」

「ああ」

「誕生と死、そして転生。輪廻を経験した君は双星神あいつの祝福を受けている。これからの人生に幸多からんことを」

「!? 何でその事をー」

「ギルスは誰も知らない俺だけの秘密秘生を口にした。今までどんな人間にも精霊にもその事については知られたことは無かった。」

「そして、気になる事も言っていた。双星神とはきつと『双星神 a—vida』の事だろう。俺が転生したのには a—vida が関わっているのか？」

「だが忘れるな。その子の一番のお兄ちゃんは……私であるという事を!!!」

「ん？」

「新たに生まれた疑問。」

その事について詳しい話を聞こうと思っていたが、ギルスが最後に残した言葉のせいで全部吹き飛んでしまった。

☆

『……やん』

眠りから覚める直前の微睡の瞬間。

この時に二度寝を決めるのが最高なのだ。

『……いちゃん』

だが、確か今日は平日。

このまま寝続ける訳にはいかない。俺を起こそうとする音がしているという事は設定した時間に目覚まし時計が鳴っているという事を意味している。

『お兄ちゃん』

「ん？」

ん？

確かに聞こえた『お兄ちゃん』と言う声。

少なくとも俺はそんな単語を目覚まし時計の音声として設定した覚えはない。なら、その言葉を発している主は一体誰なのか？

その正体を確かめるため、重たい目蓋を開き周囲を確認する。

『お兄ちゃん』

「……えあ？」

そこには昨日まで全く動く様子を見せなかった『オルフェゴール・ガラテア』の姿があった。

だが、まあ。何はともあれこれだけは言わないといけなだろう。

「おはよう」

妹のイグニス……？

『お兄ちゃん』

目覚めて聞いたガラテアの第一声がそれだった。

昨日まで眠ったままだった少女が目を覚ましてくれたことは嬉しいのだが、第一声から俺を困惑させてくるのは止めて欲しい所ではある。

「お兄ちゃんでは無いんだけどなあ……」

『お兄ちゃん……？』

思わずお兄ちゃんであることを否定すると、ガラテアは不安そうな顔をしてこちらに問いかける様に聞いて来る。

俺の事をお兄ちゃんと呼ぶガラテア。

そして夢の中で俺の事をお兄ちゃん判定して来た本物のお兄ちゃん。

あれ？ もうこの時点で外堀は無くなってからもう自分が認めるだけで完全にお兄ちゃんという事になってしまっているのではないだろうか？

「お兄ちゃんです。はい」

『お兄ちゃん！』

という事で、取り合えず俺は自分の事をガラテアのお兄ちゃんという事にしておいた。

ガラテアもなんか知らないけど嬉しそうだし、まあいいか。

その後しばらくガラテアは俺の周りで『お兄ちゃん、お兄ちゃん』と言いながらクルクル回っていたと思ったら、今度は寝る前に机の上に置いていたデュエルディスクの中へと入っていく。

「あれ？ そう言えばガラテアのカードは何処に置いたっけ？」

ふとした疑問。

ユニコーンが俺に向かって『オルフェゴール・ガラテア』のカードを投げ渡してきた所まではしっかりと覚えている。しかし、その後ユニコーンと綱引きしたり『影依シャドールーの原核』が俺の影に吸い込まれたり、色々ありすぎてその辺の記憶が曖昧だ。

それでもガラテアは変わらずここに居る事を考えると、少なくとも依り代である『オルフェゴール・ガラテア』のカードはすぐ近くにある事は確かだ。

もしかしたら手癖でデツキに混ぜてしまったのかもしれないな。

「おーい！ いつまで寝てるの！！ 学校遅刻するわよ！」

「あ、やべ」

突然開けられた部屋のドア。

その前に立つ俺のオカンの声を聞いたらそんな考えも一瞬で吹き飛んでしまった。

寝間着から学校の制服へと最速で着替えた後、机に置いていたデュエルディスクを定位置である左腕に、デツキケースを腰に装着する。部屋から一階のリビングへと移動し、オカンに改めて「おはよう」と挨拶をする。父ちゃんはいつも通り既に仕事へ行ってしまったようだ。

いつも通りの朝のルーティン。

オカンに「おはよう」と言い、顔を洗って、朝飯を食って、学校へと行く。

今までと何も変わらない、何気ない朝的一幕。

『お兄ちゃん？』

ああ、そうだ。こうして精霊が傍に居る時は朝のルーティンに加えて彼・彼女達の俺にしか聞こえない声を聞きながら朝を過ごすこともあるな。

さつき部屋で俺のデュエルディスクの中へと消えて行ったガラテアはVRAINSに出て来る自我のあるAI、イグニスがやっていた様にデュエルディスク上部に付いている液晶画面を兼ねたソリッドビジョン発生装置ユニットから上半身だけをニユツと出した状態で居る。

……誰に教えてもらったんだか。ガラテアはこの場所が気に入ったのか、そのまま『お兄ちゃん』と声をかけて来る。

そうやって居られると、ガラテアが横にならない様に無意識のうちに腕を持ち上げてしまう。これは結構疲れるから自分で浮かぶなり

して欲しい所だ。
「行つてきまーす」

その時、俺は真つすぐ学校へ向かつたために見えて居なかつた。
俺の後ろでは顔を引きつらせながら息子の事を見つめているオカ
ンが居た事を。

☆

今日は何だか様子がおかしい。

そう感じたのはいつ頃だろうか。

登校中に前を歩いていた俺の知らない同級生が変な顔で俺の方へ
と振り返つて来た時？

俺が教室に入った途端にクラスメイト全員が騒めいた時？

授業中に「……端末はマナーモードか電源をオフにするように」と
普段はどの先生もしないような注意をして来た時？

よくつるむクラスの友人に「お前……どうした？ 悩みでもあるの
か？ 話ならいくらでも聞くぞ？」と謎の憐みの表情と共に声をかけ
られた時？

いや、違う。

俺が異変に気が付いたのは放課後、部活動中に島に掛けられた一言
が原因だった。

時は放課後。

場所はデュエル部部室。

周囲の様子が何だか妙な気がしなくもないと思いつつも気にし過
ぎだろうという事で一人納得しながら部活動に励んでいた。

いつもなら俺の勝ち確ダイレクトアタックの瞬間に分かりやすい
程悔しがる島なのだが、今日はそれも無く淡々とデュエルが終了し

た。

「なあ世良さあ……お前つて……あー、その……何だ？」

「いや、お前が何だよ」

いつも変だが今日の島はいつも以上に変だ。

ハッキリと物を言う所が良くも悪く島の特徴だというのに、さつきからやたらと歯切れが悪い。

「んん！ お前つてさー！ ……妹萌なの？」

「は？」

島は気合を入れ直すためか咳払いをした後、声を張り上げたかと思えば、結局最後の一言は俺の近くへと顔を近づけて耳打ちをして来た。

だが、俺は島が何を言っているのか分からない。いや、言っている意味は分かる。しかし、今、この瞬間、どうしてそんな話題になるのかが分からなかった。

「どうしていきなりそんな話になるんだ？」

「え？ もしかして何とも思っていないのか？ お前すげえな……ナチュラルにそれなのかよ……」

「だから何が……」

「それ」

島はそう言うと、俺の左腕付けているデュエルディスクを指差してくる。

そこにはデュエルが終わり、カードを置くスペースが収納されて待機モードとなっている俺愛用のカード収納式旧型デュエルディスクがあるだけだ。

強いて違いがあるとすれば、何が楽しいのかガラテアが未だに上半身だけの状態で居る事だが……

『お兄ちゃん？』

「それ!! それそれぞれそれ! それだよ!!!」

「うわ、うっさ」

突然叫び出す島の奇行に驚く。

島は「それ」と何度も俺のデュエルディスクを指差して強調してく

るが、そこにはガラテアが居るだけで……あれ？　なんかおかしくな
いか？

「……なあ島」

「なんだよ」

「……もしかして……今の声聞こえてた？」

「そりゃ騒がしい工事現場とかなら兎も角、デュエルディスクのス
ピーカーから普通に聞こえるくらいの音量だから聞こえるに決まっ
てるだろ」

「……………マジ？」

「マジ」

マ、マジで？

え、本当に？

それだとすると、知らない同級生が突然振り向いてきたのも、クラ
スメイトが騒めいたのも、先生が注意して来たのも、友人が変な目で
見て来たのも、さつきは言わなかったけどいつでもクールな財前さんの
雰囲気がいっつも以上にクール冷だめったのも……全部ガラテアの声が聞
こえてたから……って事!?

「……………」

「あー……世良よお。その……俺もデュエルディスクのサポートAI
の音声を変えて遊ぶこともあるし……あんまり気にするなよ。まあ、
サポートAIの3Dモデリングまでしてデュエルディスクのソリッ
ドビジョンシステムで投影までさせちゃう熱意は少しどうかと思う
けどな」

「はっ」

ちよつと待て、島はガラテアの声だけでなく、姿まで見えているの
か？

ソリッドビジョン？　一体島は何の話をしている？　ガラテアは
カードの精霊で、その姿を見ることが出来るのは精霊と親和性がある
一部の人間だけで……。

「はっ… はっ… はっ… はっ… はっ…」

「いやこえーよ。お前、まさかそんなに無意識のうちに……引くわあ

……」

カードの精霊である『オルフェゴール・ガラテア』がデュエルディスクの機能を使って人間界に疑似的に実体化していた……？

「ち、違うー！ これはガラテアが勝手に！」

「名前まで付けてんのかよ……」

おおああああああ。

このままじゃ何を言っても墓穴を掘ってしまうー！

ていうか、何でガラテアはこんなことが出来るんだ！

精霊の中にはそのモンスターの特性と相性によつては人間界の物に限定的に干渉する事が出来るのは知っている。人間界にある俺のPCにメールを送って来たサイバース族のマスカレーナが正にそうだ。

確かにガラテアは機械族だから同じ機械のデュエルディスクとの相性は良さそうだし、イヴという一人の人間をひっそりと学習して形成されたガラテアの人格はAIとよく似た成り立ちをしているかもしれないけど……って、条件としてはもしかして結構揃ってるのか……？

い、いやでも……いくら精霊としての相性が良かったとしても、ガラテアのみでこんな事まで出来るとは到底……

その時、夢の中での光景が俺の脳裏を過る。

—なら少年、今から君もこの子のお兄ちゃんだ。

あ、あいつかあああああああああ!!

妹狂いのあの男が施した何らかの一押しによつてこんな事になつてるんだ！

思い返してみれば、姿を消す時は自身のカードの中に入るような素振りを見せていた今まで付き合つて来た精霊達とは違い、ガラテアはデッキがセットされている訳でも無いデュエルディスクの中へと入つて行つた。

さらによく思い返してみれば夢の中でもガラテアはデツキケースでは無く、デュエルディスクの中へ入っていった様だった。

なら、朝から見つからなかった『オルフェゴール・ガラテア』のカードは見つからなかったんじゃないかと、俺のデュエルディスクと一緒になっちまったって事!?

ガラテアのお兄ちゃんとして外堀を埋められる所か盛り土し過ぎてもはや城壁になろうとしているこの状況。

『…………お兄ちゃん?』

「…………はあ…………」

まあ、大変な事になった気がするが…………純粹にこちらを心配している様な顔を向けて来るガラテアを見ると、許してしまえるのは俺がお兄ちゃんだからなのだろうか?

ハノイの騎士（表）

人の噂も七十五日。

時間という万能薬が今回の件も特別自分から行動して否定して周らなくても、しっかりと解決してくれるだろうと気楽に考える事にした。だが、「妹萌らしい」という噂が「妹が好きらしい」という噂に变质し、最終的に「妹が好き過ぎてデュエルディスクに縛り付けて拘束したらしい」という、もはや根も葉もなければ草が生える土壌すらなさそうな意味不明な噂にすり替わっていた事だけは解せない。

しかし、その件だけ強く否定すると逆に真実味が出て来そうで否定しようにも出来ない……。何とももどかしい限りである。

そんな噂が広がった所で面白がるのは結局俺とほとんど関係が無い他人だ。気にする意味もないし、わざわざそんな奴らの為に否定して周るだけ無駄だろう。

それはそれとして、今日は暇な休日の時間を潰すためにLINK VRAINSに遊びに来ている。そして、LINK VRAINSにログインしてからある事に気が付いた。

デュエルディスクはLINK VRAINSにログインする時に肉体とアバターを紐付けるデバイスとしての側面も持ち合わせている。そんなデュエルディスクの機能に組み込まれていると言っても過言ではないガラテアがLINK VRAINSでどうなるのか……

『……♪』

俺と一緒にしつかりLINK VRAINSに入り込んでいる。

見慣れない景色だからか、辺りを見まわしては楽しそうにニコニコとしている……。まあ、ガラテアは普段からニコニコしているけど、雰囲気はニコニコしているとも言った方が良さそうか。

そして、そんなガラテアだが現実世界とLINK VRAINSとで一つ違いがある。

現実世界ではスピーカーとソリッドビジョンというデュエルディスプレイの機能を使って疑似的に実体化していた。

だが、ここは仮想世界LINK VRAINS。仮想世界にある物は現実世界から見ればデータでしかないため触れず、熱も感じられず、重みすら無い幻の様な物だ。それが仮想世界の中で見るならば、そこにある物は触れて、熱を感じられ、重みもある。

この世界ではこれが本物なのだ。

では、そんな世界でガラテアはどうなるのかと言うと……

『お兄ちゃん！』

「おっとっと」

実体がある。

俺は肩に乗る様に飛び込んできたガラテアが滑り落ちない様に手で受け止める。

そう、受け止めることができる。

デュエルは現実世界でもやれるが、それでも敢えてLINK VRAINSでデュエルを行う事が大流行している一番の理由はやはり迫力だろう。仮想世界の中ではあらゆる事が現実として実感出来る。

モンスターの息遣いも、攻撃された時の衝撃もだ。それらは仮想世界の中だからこそ実現できるリアリティだろう。ガラテアに触る事が出来るのもこの世界の恩恵であると言える。

それと、LINK VRAINSならサポートAIを3Dモデルに搭載して連れ歩いている人も少なくはないので、俺もそう言った人物として周りから認識されるのも恩恵の一つだな。ここなら現実世界程変な目では見られる事は無い。さらにさらに、例えば俺が本当に妹萌だったとして、それをカミングアウトしたところでもっとえげつない趣味嗜好をした人間が練り歩いているのがネットワーク世界と言うものだ。勿論、公序良俗に反しない範囲でだが。

これならガラテアに「お兄ちゃん」と呼ばれているのを聞かれたとしても噂にすらならないだろう。

本来のガラテアはカードイラストから少女一人分くらいの大きさだと思っただが、今はデュエルディスクから上半身を出していた時と同じくらいのサイズ感。まるで『星遺物トークン』として描かれていたガラテアの様だった。

ガラテアも自分から物に触る事が出来るという感覚が楽しいのか、俺の身体をペタペタと触っていたと思ったらフラフラとどこかへ飛んで行つては近くにある木や地面、ベンチや柵など色々な物をペタペタを触れている。

「おーい、あんまり遠くには行つちやダメだぞー」

『〜♪』

また何か新しいものを見つけたのか、ガラテアは少し離れた茂みの奥へとフラフラと飛んでいく。

少し心配ではあるが、彼女ならちゃんとすぐに戻つて来るだろう。

「よっころせ」

さつきまでガラテアが触れていた近くのベンチに腰を降ろし、少し休憩を取る事にする。

LINK VRAINSは今日も快晴。

たまにはカードショップを冷やかしに行くのではなく、こうしてゆっくりと休日を過ごすのも良いものだ。

ここは人通りも少なく、騒がしくない。一息つくのにピッタリな場所だ。瞼を閉じれば小鳥の囀りさえ聞こえてきそうである。

ほくら、こうして瞼を閉じれば……

「ギギャアアアアアア!!!」

世界が割れるかのような甲高い音と共に聞こえる怪獣の鳴き声。

「な、何事!?!」

慌てて目を開けた俺が見たのは上空を飛ぶ黒く、鋭角なデザインが特徴のドラゴンだった。

「あれは……」

あのドラゴンは知っている。

『クラッキング・ドラゴン』。ハノイの騎士を象徴するカードの一枚だ。

そして、その僕たるドラゴンの頭部に立っている白いマントの男こそハノイの騎士。LINK VRAINSを脅かすクラッカー集団の一人。

最近Playmakerの噂をちらほら耳にするようになって来たから間もなくネットワーク世界を揺るがす大事件が起きる頃だろうとは思っていたが……。まさか休日にも出張って来るとは面倒な奴らだ！

あいつらが出て来たという事は、狙いは遊戯王VRAINSの主人公であるPlaymakerか？ いや、そうでなくともあいつらは一般人にデュエルを挑んでサイバース狩りをしていたな。

ここに居るのは危険だ。

確かクラッキング・ドラゴンが吐く炎に焼かれたアバターはアカウントが消滅していた記憶がある。アカウントが消えるだけならSOシテクノロジーに申請して再登録すれば良い。それに、カードはデータでは無く、紙で持つ主義だから例えばアカウントが消えても所持カードが消滅するなんて事も無い。

しかし、あのアバターの消滅の仕方は現実世界にある俺の身体に悪影響がありそうなフィードバックを食らう可能性が高い。ていうか、どう考えてもあるだろ、あれは。

進んで痛い思いをする変わった趣味は無い。さっさとログアウトした方が良いだろう。

「ん？ お前」

「えっ」

何故かこちらを見て来るハノイの騎士。

奴らに因縁を付けられる覚えがない俺は困惑する。

「ふむ。リボルバー様が下さった情報通り……ターゲットだな」

「何言ってるんだ？ 俺はアンタらに用は無いぞ」

「お前には無くとも、我々にはあるのだ。お前の持つサイバース、『I:P マスカレーナ』……だったか。そいつを狩らせてもらう!」

「な、何でその事を!」

「我々ハノイの騎士はネットワークの監視者。この程度の情報を得ることなど容易い」

マスカレーナだって?!

だけど、俺はこういう状況になりたくなかったからLINK VR AINSで『I:P マスカレーナ』のカードを使ってこなかった。

それなのにハノイの騎士がマスカレーナの事を把握している?

どういう事だ……どうしてバレたんだ……。

いや、今はそんな事を考えている暇はない。さっさとログアウトを……ガラテアは何処だ!? ……って、よく考えればガラテアは俺のデュエルディスクと繋がっている。それなら俺がログアウト処理すれば一緒にログアウトするから大丈夫か?

思考時間は一瞬の物だったが、それが不味かった。

「消え去れ、サイバース!」

「っ!!」

ハノイの騎士の号令と共にクラッキング・ドラゴンが炎のブレスを吐く。

まるでお伽話のドラゴンと対峙しているかのようなワンシーン。残念ながら、俺はドラゴンを討伐できる勇者では無く、成す術もなく焼き殺される一般村人の立場だという事だろう。

「くそっ!」

何とかログアウト処理を行おうとするが、このままではログアウトが完了するよりもクラッキング・ドラゴンの炎が俺のアバターを焼き尽くす方が早い。

『お兄ちゃん!!』

炎が目の前まで迫って来ていたその時、こちらに飛び込んで俺の身体を押すガラテアの姿を見た。

ハノイの騎士（裏）

視界の全面をクラッキング・ドラゴンの炎が埋め尽くした時に聞こえて来たガラテアの声。そして突如感じた横からの衝撃によって突き飛ばされた所までは覚えている。

そうになると、今はアバターをクラッキング・ドラゴンに無理やり消去されて現実世界に引き戻されたのか？

「むぐう……」

あれ？ 息が出来ない？

それに目を開けているはずなのに何も見えない？

必死に目を開けようとも前は見えず、どれだけ口を開けようとも肺に入って来る空気の量は微々たるもの。まるで顔全体に何かを押し付けられて圧力を加えられているかの様だ。

まさか……あの攻撃のフィードバックによる影響？！

ヤバイヤバイ……ハノイの騎士がヤベー奴らだとは思っていたが、こんなに重篤な影響を身体に及ぼすとは思っていなかった。舐めていたつもりはなかったがこんな事になるなんて……

「あいたたた〜いきなり突っ込んで来て押し倒すとは……ラッセさんも大胆ですねえ」

「んぐぐ……ん？！」

窒息死しない様に少ない空気で何とか呼吸をしながらも聞こえて来た声は聞き覚えのあるものだ。

「もう！ いつまでそうしてるんです……かっ！」

「おわー！」

ぐるりと身体がひっくり返されると同時に仰向けに倒れた状態になった俺の瞳には現実世界ともLINK VRAINSとも違う街並みの空が映し出されていた。一番決定的なのはビルに掲示されている広告に書かれた文字だろう。

「……精霊界？」

それはかつてマスカレーナによって連れてこられたサイバース精

霊界の物だった。

「どうやら怪我也無いようですね」

「マスカレーナ？」

「はい！　そうですよ」

仰向けになったままの俺を覗き込むようにして見下ろしてきたのはペルレイノから人間界に帰って来てすぐに精霊界に戻って行ったマスカレーナだった。

「いやはや……ラッセさんを助けるために精霊界こちら側に避難させようと思いましたが、かなりギリギリでした。彼女が居なければ今頃ラッセさんの身体の半分は燃えて無くなってたかもしれないですね」

「えっ、何それこわ……って、そうだガラテアは！」

あの一瞬で俺の事を突き飛ばして精霊界に飛び込ませたのはきつとガラテアだろう。

彼女の本質はカードの精霊だが、LINK　VRAINSではしっかりデータとして存在しているため、クラッキング・ドラゴンによる攻撃は命に係わる可能性がある。

「彼女ならそちらに」

「ああ、良かった……そっちも無事だったか」

マスカレーナが指を差した方向に向き直ると、そこには出会った時と同じ大きさになっているガラテアと……

『『トロイメア・グリフォン』？』

そこにはガラテアによって頭を撫でられているトロイメアの魔物の一体、『トロイメア・グリフォン』がそこに居た。グリフォンは俺の事をちらりと見ると、その姿を紫色の結晶、紫宵のジャックナイフのコアへと変容させる。

ガラテアは紫宵のコアを両手で受け止めると、以前夢の中でユニコーンの元となった黄華のコアがガラテアの中に吸い込まれて行ったのと同じ様に紫宵のコアもまたガラテアに取り込まれて行った。

一体いつガラテアはグリフォンと出会っていたんだらうか。もしかして、俺から離れて何かを見に行っていたのは、そこにグリフォンが居たからだったりするのだろうか。

ていうか、ガラテアがド突いたにしてはやたらパワーがあった気がしたのは、グリフォンの仕様だったからか……。まあ、あいつのお陰で助かったから文句は言えないが、これは現実世界で目覚めたらフィードバックのせいでむち打ちみたいになってるかもしれないな……。

そんな事を考えていると、ガラテアはトコトコとこちらに歩いて来ると、俺の手を握る。

「お兄ちゃん、私、が、守る、よ」

「お、おう……あれ？」

いつもは「お兄ちゃん」の一言だけで意思疎通を図っていたガラテアが、片言とは言え、しっかりと文章で意思を伝えることが出来ている。

ガラテアの見た目の様子は今までと変わりない。しかし、何か原因があるとしたらやはり紫宵のコアをその身に宿した事だろうか。

それなら……

「おやおや？　しばらくお会いしない内にラッセさんに妹ちゃんが！」

「ああ、これには色々と事情が……」

マスカレーナが茶々を入れてきたことによって俺の思考は中断される。彼女と別れてから起こった出来事を簡潔に伝えて今の状況を説明するも……

「なるほど。そういう経緯でラッセさんに妹ちゃんが出来たという訳ですか」

「……もうそれでいいや」

精霊に関する事も全部話すことが出来る相手であるのに最終的な結論がこうなってしまうのだからもう俺はガラテアとの関係をこれ以上説明することは出来ないのかもしれない。

マスカレーナがガラテアに「お姉ちゃんですよ」と、手をワキワキさせながらにじり寄るが、ガラテアは俺の後ろへサツと隠れてしまふ。

そんなガラテアの行動にショックを受けているが、マスカレーナは

気を取り直してこちらに話しかけてくる。

「あ、そうそう。ラッセさんに一つ謝らなければいけない事があったんですけど」

「なんだ突然？」

「マスカレーナはそう言うが、俺に心当たりは全くない。」

「マスカレーナと行動している時も、もちろんそれ以前やそれ以後だって彼女が謝らなければならぬような事をされた覚えは全くなかった。」

「いやー、実はですね……どうやら私がラッセさんに送ったメールがネットワークの管理者を自称する連中に捕捉されていたみたいでして」

「え……それって……」

「ハノイの騎士と名乗っていましたっけ？ あの白いコスした変な人達」

「はあ……そう言う事だったのか……」

『I:Pマスカレーナ』と言うサイバース族のカードを所持している事をハノイの騎士が察知した原因はマスカレーナのカードデータが添付されたメールをハノイの騎士が探知していたからと言う訳か。

「ごめんね！」

：P

「その顔は謝る気ないだろ」

「そもそも！ ラッセさんのパソコンのセキュリティが貧弱すぎるのが原因なんですよ！ すぐに気が付いた私が向こうからのアクセスを遮断していなかったら今頃あなたの個人情報からぐふふな趣味までマルっと全て筒抜けになっていたんですからね！」

「一般人は凄腕クラッカーに攻撃を受けることを考慮してパソコン使わないし……てか、なんてこと言うんだ」

謝って来たと思つたら今度はプンスカと言わんばかりに逆切れをするマスカレーナ。一般的なセキュリティソフトは使っているが、本気のクラッカーを相手にしてどうにかするのは無理だろう。

……ハノイの騎士側に俺の趣味まで全部バレるとか、嫌過ぎる

……。

「と言う事は、奴らに俺の本名や住所までは知られていないのか」

「ふふん……ラッセさんは私に感謝してくださいね。サービスでその後仕掛けられた攻撃も全部防いでおいたのでもう安心ですよ」

「それは普通に助かる」

ハッキングの知識を何も持たない俺にハノイの騎士による攻撃を防ぐ手段は無い。そこは素直にマスカレーナに感謝しなくてはならないだろう。

まあ、基本的にハノイの騎士はネットワーク世界でのみ活動をしている様子が伺える。それが奴らのプライドなのか、はたまた何らかの掟なのかは分からないが、現実世界で危害を加えられる可能性は低いだろうと考えている。

とは言え、知らない奴に個人情報握られるのはいい気分ではない。

「まあ、それはいいか。マスカレーナが対処してくれたなら大丈夫だろう」

彼女の手助けもあり、これ以上の情報の流出の危険は取り合えず考えなくていい。

後は、無事に現実世界に帰ってしばらくLINK VRAINSにログインしなければ万事解決だ。

俺はマスカレーナに感謝と別れを告げ、以前ここに来た時と同じようにログアウトの処理を行おうとするが……。

「……あれ？」

「どうかしたんですか？」

「……ログアウト出来ない……」

「え？ そんな事があるんですか？」

普通はあり得ない。

ネットワーク世界に閉じ込められる危険性と言うのはLINK VRAINSを運営するSOLテクノロジーもよく分かっており、ログアウトに関する確実性と安全性は常に気を遣っている部分だ。

だが、今はそれが出来ないでいる。単純なバグ、なんて事はあり得

ない。となると、考えられるのは外的要因によるものという事。そして、そんな外的要因として一番可能性が高いのは……

「ハノイの騎士のジャミングか」

俺が精霊界に入るまでに対峙していたハノイの騎士が原因と考えるのが自然だろう。

「まさかハノイの騎士の妨害が精霊界にまで及ぶなんて……」

「精霊界とはいえ、このサイバース精霊界はLINK VRAINSと表裏一体ですからね。彼らのジャミングが一定範囲内に有効なものであるなら、今この場所でも有効なのは不思議では無いですね」「そうか……」

なら、精霊界の中でハノイの騎士のジャミングの範囲外まで出て行けば良いだろう。しかし、そのジャミングのエリアがどこまで続いているのかも不明だ。

他にも、ハノイの騎士が自分から消えるまで精霊界に引きこもる事も考えたが、どうも俺達の世界と精霊界では時間の流れが違うらしく、ここでどれだけの時間を過ごせば良いのか見当もつかない。

最悪そう言った手段も取れるが、一体どうした物だろう……。

「はいはい！ それなら今LINK VRAINSに居るハノイの騎士をどうにかしてしまえば良いんですよ！」

「まあ、それはそうなんだが」

この世界でのあらゆる揉め事はデュエルによって解決することが出来る。基本だな。

ハノイの騎士にデュエルを仕掛けて障害を排除する。選択肢としては当然思い浮かんでいたが……。

「ラッセさんにご迷惑を掛けたお詫びと言っては何ですが、良いものを差し上げましょう！」

「！ これは……」

俺はマスカレーナから受け取った起死回生の一手を握りしめながら、LINK VRAINSへと帰還する。

☆

「……消え去ったか……なにッ！」

「ごほっ！…ごほっ！…おえ……ここまで再現する必要あるのか？」

精霊界からマスカレーナを引き連れLINK VRAINSに戻って来た俺はクラツキング・ドラゴンによる攻撃の余波である煙に巻かれながら再びハノイの騎士と対峙していた。

思っていた以上にLINK VRAINSでは時間が経っていなかったようであるの攻撃の本当に直後だったらしい。

「どうやったかは知らんが、まあいい。もう一度攻撃すれば良いまでの事。クラツキング・ドラゴンよ！」

「おい」

ハノイの騎士がクラツキング・ドラゴンに攻撃の指示を出す寸前、俺はデュエルディスクを展開しながら装着した左腕を構えて見せる。

「ほう？…この私にデュエルを挑むというのか？ ハノイの騎士であるこの私に？」

「……」

「良いだろう。その勝負、受けて立つ。私が勝った暁には貴様が持つサイバースを頂くとしよう」

ハノイの騎士はクラツキング・ドラゴンを消し、地面に降り立つ。

同じ視線の高さとなったハノイの騎士は自身が持つデュエルディスクを起動し、いつでもデュエルを始めることが出来る態勢へと移行する。

「デュエル!!」

ハノイの騎士は高らかにデュエル開始の宣言をする。

しかし……。

「おい、貴様！ 何をグズグズしている！ まさか怖気づいたのか？」

俺はデュエル開始の宣言もしなければデッキから手札となる五枚のカードすら引いていない。

「貴様あ……私を愚弄して……」

そんな俺は手では無く、口を動かし始める。

「株野 伊乃葉」

「なに？」

「男性、36歳」

「お、おい待て……」

「妻子持ち、IT企業社員」

「貴様まさか?!?!」

「始めは会社の命令でSOLテクノロジーに対する妨害行為のためにハノイの騎士に潜り込むが、最近は日々の鬱憤晴らしと充実感から休日はハノイの騎士として精力的に活動を行うようになる。その成果が実り、ハノイの騎士のリーダーであるリボルバーからクラツキング・ドラゴンを預かるまでになる……か。大した奴だねえ」

「……」

俺はマスカレーナから預かったメモデータを読み上げたんだけど、だが、相手のアバターの顔色はその心情を読み取ってどんどん青くなっている。

もちろんこの情報はマスカレーナが手に入れた情報である。情報屋で運び屋でカードの精霊である彼女は本当に何でも出来るなど感心してしまう。

『デュエルディスクのメモ機能を使って日記を書くのは止めておいた方がいいですね』

「日記でぶつちやけ過ぎだろ、アンタ」

「ッ！」

相手の反応から分かる通り、これまで語って来た情報は全て真実なのだろう。

「わ、私を脅す気か？」

「そうですね!! 何かありますか!!」

チエーン確認は大事。

『凄くカッコ悪いのに清々しいのが逆に良いですね、ラツセさん』
「うるさいぞ」

元はマスカレーナの案やろがい。

彼女に呟き声で悪態をつきながらも俺はハノイの騎士(社会人)から視線を外さない。相手は無法者のハノイの騎士。どういった行動

をとって来るかしつかり注意しておかなければならない。

「さあ、早くログアウトのジャミングを止めて俺の前から消えるんだな」

「ぐぐ……しかし、私はリボルバー様の為にも……」

「良いのか？　こちらにはアンタの奥さんとアンタの子供のメールアドレス宛にこの情報をリークする用意があるぞ？」

俺は追加でマスカレーナから渡されたハノイの騎士（おっさん）の家の電話番号、奥さんのケータイのメアド、さらにその子供のケータイのメールアドレスを読み上げる。

「汚いぞ！　妻と娘を人質に取るなんて!!」

「なんか言ってますよラッセさん。これじゃあどちらが悪者か分かりませんね」

「あーあー聞こえないー」

人質に取るとは人間きの悪い事を言う。

俺の休日とLINK VRAINSの平和を脅かしたハノイの騎士には当然の報いだ。これくらいしてもバチは当たらないはず。

「……ものか……」

「え？」

何やらボソボソと話し出すハノイの騎士（妻子持ち）。

「構うものか！　私を正當に評価して下さいったりリボルバー様の為なら私の社会的地位がどうなろうと知った事ではない!!」

「……まじかよ」

『ありやりや。これはもしかしたらまずい方向に吹っ切れてしまったかもしれないですね』

ハノイの騎士は顔の上半分を隠す仮面を付けているため、その表情を完全に見ることは出来ないが、恐らくその瞳は狂気に染まっていることだろう。

自分の全てを捨てられるほどに尊敬されているリボルバーと言う男は本当にどれだけ凄い奴なんだか。

「どうせ会社は私の働きを正當に評価はせぬ！　妻と娘からは最近邪険にされていて未練もないわ!!」

「突然悲しい事言うのやめろよ……」

『うわぁ……』

ハノイの騎士（36）は悲痛な叫びを挙げながら改めてデュエルデイスクを構えて来る。その鬼気迫る様子に相手をするつもりが無かった俺ですらデュエルを受けてしまいそうだ。

「くっ……もはや戦いは避けられないか……」

別に一人のおっさんを本気で地獄に落とそうとは思っていないなかったため、俺もデュエルで決着を付ける事を決意する。

「行くぞ!! デュエツ……」

しかし、ハノイの騎士は最後まで言葉を発する事は無かった。

ハノイの騎士のアバターは何かにか断されたかの様に二つに分離し、上半身は地面に向かって落ちて行く。

上半身が地面に落ちたことで見えるようになった向こう側に居たのは、大きな鎌を振りかぶった姿勢を取るガラテアだ。

『お兄ちゃん、の、敵、排除』

『わぁ……』

俺とマスカレーナの声が重なる。彼女の顔は見て居ないが、きつと俺と同じ表情をしている事だろう。

「う、後ろから奇襲とは……卑怯な……」

地面に横たわったままのハノイの騎士の上半身がそんな事を言っていたが、すぐにアバターは消滅していった。

思いもよらぬ所からの助太刀はその一撃を以って全ての問題を解決したのと同時に、今までやっていた茶番劇が徒労に終わった事を意味していた。

『お兄ちゃん、大丈夫?』

「ガラテア……偉いぞ!」

今後はいきなり実力行使を行わない様にガラテアに教えないといけないなと思いつつも、今回の件に関しては本気で助かったと思っているので俺も本気でガラテアを褒める事にしたのだった。

俺に褒められて嬉しかったのか、ガラテアは手に持った大鎌をクル

クルと回して放り投げてキャッチしてはまたクルクル回してと気分良さそうに遊んでいる。

本来ガラテアの大鎌にはめ込まれているはずの蒼穹のコアがその時は黄華の輝きを放っていた。

『この情報どうしますか？やっぱり公表しちゃいますか？』

「……………このことは俺ら二人の心の中に留めておこう。あれじゃあ余りにも……………不憫だ」

『……………そうですね……………』

バード・ストライク

ハノイの騎士による襲撃事件から数日が経った。

思った通り、奴らは現実世界でこちらにアクションを仕掛けて来る事は無かった。そもそも俺の情報を全部掴み切れていないために接触して来ないだけと言う可能性も考えられるが、恐らくLINK V RAINSに行かなければさして問題も無いだろう。

となれば、俺から何かする必要はない。ハノイの騎士も、その後のトラブルも遊作が何とかしてくれるはずだ。何とかしろ！

そうしていつも通りの日常を送る俺は、相も変わらずデュエル部の部室で島を相手にデュエルをしている。

「がーはっはっは!! 見ろ！これが俺の最強バブーン陣形だ！」

世良 VS 島

LP4000 LP3000

「おー。後攻1ターン目でグリーン・バブーンを三枚並べるとはやるねえ」

『森の番人グリーン・バブーン』

レベル7 ATK2600 地

こちらの先攻ターンはモンスターを一枚セットだけして終了。返しのターンで島はフェイバリットカードである『森の番人グリーン・バブーン』を三体展開して来た所だ。

グリーン・バブーン達は島の期待に応えるようにそれぞれが戦意を示す咆哮をあげている。

おっ、真ん中のグリーン・バブーンは俺が譲った精霊付きのあいっだな。そいつだけがデュエルディスクに搭載されたAIの行動パターンよりも感情的な動きをしている。

「ふっふっふ……グリーン・バブーン達も俺の勝利を確信している様だな」

「さあ、それはどうかな？」

「一体目のグリーン・バブーンで世良のセットモンスターを攻撃だ！」
「あれ？」

てつきり揃えたグリーン・バブーンを素材に強力なランク7エク
シーズモンスターや素材に縛りがある強力なリンクモンスターなり
を出してくると思ったが、どうやらグリーン・バブーンはそのまま運
用するらしい。

俺から見て左のグリーン・バブーンがこちらに攻撃を仕掛けてく
る。

グリーン・バブーンが持つ巨大な棍棒によつてセットされたモン
スター、『ガスタ・ガルド』は無残にも潰されてしまう。ガルドの悲痛な
叫び声も合わさってグリーン・バブーンの狂暴性が際立つ。

『ガスタ・ガルド』

レベル3 DEF500 風

「墓地へ送られた『ガスタ・ガルド』の効果を発動！ デツキからレベ
ル2以下の「ガスタ」と名のついたモンスター1体を特殊召喚できる。
俺は『ガスタの巫女 ウィンダ』を守備表示で特殊召喚！」

『ガスタの巫女 ウィンダ』

レベル2 DEF400 風

現れたのはミドラーシュの生前の姿。

このカードには特に精霊が宿っているという訳ではないため、
フィールド上に現れた彼女は機械的な動きで防御姿勢を取っている。
初めはウィンダのカードを使う事で俺の影に住んでいるミドラー
シュが何か反応をするかとも思っていたが、特段そんなことは無かつ
た。

過去にある程度区切りを付けたのか、そもそも自分と同一視してい
る訳では無いのかは分からないが、いつの間にかデツキが組めるくら
いに集まっていたガスタを気兼ねなく使えるのはありがたい。

「何だ？ この間の融合デツキじゃないのか？ 関係ねえや！ そん
な弱いモンスターじゃ俺のバブーン達は止められないぜ！」

『……イヤな、人』

「気持ち分かるけど抑えて、な？」

俺のデュエルディスクから小さく聞こえてくるガラテアの声。彼女はいつもと同じ様に上半身だけデュエルディスクのソリッドビジョンシステムによって表示された状態でこのデュエルを観戦している。

どこから取り出したのか、彼女は大鎌を持ち出してブンブンと音が鳴りそうな勢いで振り回している。まあ、今の状態ならデカイ爪楊枝みたいなものだが、ちよつと危ない。

「お前のサポートAIなんか物騒だな……」

以前の悲しき事件があつてからデュエルディスクのスピーカーの音量を最小にしたため、デュエル中である程度距離が離れた場所に居る島にガラテアの声は聞こえていない。そのため、あいつにはガラテアが突然大鎌をブンブン振り出したように見えている事だろう。

「まあ、いいか！ 二体目のグリーン・バブーンで攻撃！」

今度は右側に控えていたグリーン・バブーンが動き出す。

単体では攻撃力も守備力も大した事が無いウインダにその攻撃を防ぐ手立てがあるはずもなく、大きく振り抜かれた棍棒によつて吹き飛ばされてしまう。

「風の結束を舐めると痛い目を見るぞ。相手モンスターの攻撃によつて破壊され墓地へ送られたウインダの効果発動！ デッキから「ガスタ」と名のついたチューナー1体を特殊召喚する。俺は『ガスタ・イグル』を守備表示で特殊召喚！」

『ガスタ・イグル』

レベル1 DEF400 風

ウインダが倒されるや否や、今度はガルドとは別の緑色の鳥がフィールドに現れる。

「あん？ また壁モンスターか？ まあいい、最後のグリーン・バブーンでそいつも攻撃だ！」

「戦闘によつて破壊され墓地へ送られたイグルの効果を発動！ デッキからチューナー以外のレベル4以下の「ガスタ」と名のついたモンスター1体を特殊召喚出来る。俺は『ガスタの神裔 ピリカ』を守備表示で召喚だ！」

『ガスタの神裔 ピリカ』

レベル3 DEF1500 風

「さらに、特殊召喚されたピリカの効果を発動！ 自分の墓地から風属性のチューナー・ナー一体を選択して表側守備表示で特殊召喚する。戻ってこい、『ガスタ・ガルド』！」

イグルの導きによってデッキから特殊召喚されたピリカは持っている杖を一振りして墓地に眠っているガスタの鳥獣を復活させる。

「な、なにに!? 俺のバブーン軍団が全員で攻撃したのに何で世良のフィールドのモンスターは逆に増えてるんだよ！」

「仲間の危機にはすぐさま駆けつける。それがガスタの特徴だ。面白いだろ?」

「うぎぎぎ……ターンエンド」

グリーン・バブーンを三体並べるために島は全ての手札を使い切っているため、伏せカードを使ってくる心配はない。メインフェイズ2でグリーン・バブーンを素材にEXデッキからモンスターを召喚する手もあつただろうが、どうやらグリーン・バブーンを三体フィールドに維持する方が良いと考えたようだ。

「俺のターン、ドロー！」

先攻1ターン目はガルドを伏せただけなのでドローも合わせて手札は五枚。これだけあればある程度の妨害があつたとしても乗り越えられただろうが、その必要も無いな。

「俺はレベル3『ガスタの神裔 ピリカ』にレベル3『ガスタ・ガルド』をチューニング！ シンクロ召喚！ 現れる！ ガスタの守護者、

『ダイガスタ・スフィアード』!!」

「シンクロ召喚!」

『ダイガスタ・スフィアード』

レベル6 ATK2000 風

現れたのはガスタを守護する戦士の家系の少女がヴァイロンを装備した姿。設定的にはシンクロ素材とすべきカードとしてピリカとガルドではおかしいのだが、そんな事を気にしていたらデュエル何て出来ないので気にしない気にしない。

それに、ピリカを絡めたレベル3＋レベル3の組み合わせの方が圧倒的に使い勝手がいいのもある。

「スファイアードの効果発動！ このカードがシンクロ召喚に成功した時、自分の墓地の「ガスタ」と名のついたカード1枚を選択して手札に加える。俺は墓地の『ガスタ・イグル』を手札に加え、そのままイグルを攻撃表示で召喚！」

『ガスタ・イグル』

レベル1 ATK200 風

「攻撃力200のモンスターを攻撃表示で召喚？ 世良く、ミスったかあ？」

「これで良いのさ。バトルフェイズ！」

「グリーン・バブーンの攻撃力は2600。対してお前のシンクロモンスターの攻撃力は2000じゃないか！ 無駄だぞ！」

「無駄かどうかはすぐに分かる。スファイアードでグリーン・バブーンに攻撃！」

スファイアードは俺の指示に従い、攻撃力が自身よりも高いグリーン・バブーンへと戦いを挑む。本来であれば敵の反撃に遭い、破壊されたうえでこちらがダメージを受けるだけだが……

「痛!!? どうしてこっちがダメージを受けてるんだ!?!」

「スファイアードのもう一つの効果。このカードは戦闘では破壊されず、さらに、自分への戦闘ダメージは代わりに相手が受ける」

「げえ!?! そんな効果もあったのか!?!」

島

LP3000↓LP2400

どちらのモンスターも破壊されず、それなのに相手だけがダメージを受けるといふ奇妙な戦闘。だが、ガスタはこれだけでは止まらない。

「そして、イグル！グリーン・バブーンに突撃だ！」

「!?! そんな事したって意味無いだろ!?!」

「詳しく説明しようか。スファイアードが場に居る限り、「ガスタ」と名のついたモンスターの戦闘ダメージは全て相手が受けるんだよ！」

「はあ!? そんなのありかよ!」

「すまんイグル! 勝利のために死んでくれ! ガスタの意地を見せろ!!」

「ぐわああああ!!」

島

LP2400↓LP0

俺は無茶な攻撃を指示したイグルに手を合わせて謝りながらそう言った。心なしか、凄く嫌そうな表情でイグルがこちらを見ていたよ。うな気がしたのは気のせいだと思いたい。仮にガスタのカード達に精霊が宿っていたらこんな戦法は出来ないな。

ただ、デュエルディスクから試合を見ていたガラテアが酷いものを見たかのような表情でデュエル終了時からずーっとこつちを見つめて来ているのは気のせいではない。

うん。そんな表情で見つめられると流石に心に来るものがあるの。で止めて欲しいんだけど……ガスタデッキで勝つためにはこれが最善なのであつて……ダメかなあ。

『鳥さん……』

やめて!そんな悲壮な感じでボソツと言わないで!

「かーっ! また負けた!!」

「そりゃ攻撃力が高いモンスターを並べるだけじゃな。もつと妨害を意識しろって部長からいつも言われてるだろ」

「うむう……」

感想戦をしながら俺は島にアドバイスを送る。決してガラテアの物言いたげな視線から逃れるためではない。

「それはそれとして、世良は今日暇か?」

「ん? まあ、用事があるとしたらカードショップを冷やかしに行くくらいだが?」

「それはつまり暇って事だな」

入学してそこそこ付き合いがある島は俺がカードショップを冷やかしに行っている時は暇つぶしをしているという事を分かっている様だ。

「良いものが手に入ったからさ、ココに行ってみようぜ?」

そう言つて島はポケットから取り出したクシャクシャの紙をこちらに見せて来る。

「ドラゴンメイド喫茶?」

「そうそう。最近出来たらしくてさ、割引券配つてたんだよ」

割引券が付いたチラシには人気テーマである「ドラゴンメイド」……のコスプレをした女性たちが写っていた。提供している一部の料理や飲み物の写真は旨そうだが、意外と良い値段をしている。

割引券でもなければ学生が気軽に行けるようなものではなさそうだ。

「ふーん。こんなん出来てたのか」

「出不精でカドシヨと学校の往復しかしない世良は知らないだろうな」

「うっせ。家には帰るわ」

だが、そう言われると寝る時間を含めても平日は家にいる時間よりも学校とカードショップに居る時間の方が長いかもしれない。

「お前、こういうのも好きだろ?」

「何でそう思った?」

「そりやーだつてよお? 好きだろ???」

「風評被害だ」

こいつの中で俺は「妹萌のオタクだからメイドも好きだろ」見たいな単純な思考だろう。

まあ、嫌いじゃないですけど。

「だからさ、行こうぜ!」

「どうせ一人でこういう店に行く勇気が無いだけじゃないのか?」

「ギクツ……べ、別にそんな事ねーし! お前が行きたくないって言うんなら来なくていいよー!」

「いやいや、別に行かないなんて言つてないだろ」

島が仕舞おうとするチラシを破れないギリギリの力加減で掴んで

止める。

「俺もついて行っていいか？」

「え？」

島とのやり取りとの外側。

思いもよらぬ人物の声。

それは、開いた部室のドアの前に居た藤木遊作の物だった。

ドラゴンメイド喫茶

島が貰って来た割引券が一枚で三名様まで有効との事だったので、俺と島に加えて遊作もドラゴンメイド喫茶に行くこととなった。なんぞ？

「いや、まさかお前もこういう趣味があったなんて意外だったなあ」

「俺は別に……」

「解ってるって！ 別に今時どんな趣味だろうが恥ずかしがる事は無いってのー！」

「……」

俺にとつてもそうだが、遊作がメイド喫茶と言う余りにも似合わない場所へ赴くことを自分から希望した事を一番意外に思っていたのは島だったのだろう。島は喫茶店に着くまでの道すがらひたすら遊作にダル絡みし続けていた。そのお陰と言うべきか、そのせいで言うべきか、俺と遊作は最初の自己紹介以降全く会話をしていない。

ていうか、共通の知人を間に挟んでは言え、初対面で一緒にメイド喫茶に行くとか意味不明過ぎて笑えて来る。

それにしても、どうして遊作は「一緒に行く」なんて事を言い出したのだろうか？ あの遊作がまさか本当にメイドさんに興味があるとは思えない。

例えば知り合いの島に直接誘われたとしても無言でその場を去るくらいのはしそうだが、そんな男が自分からメイド喫茶に行くと申し出るだろうか？

『メイド喫茶ですか、楽しみですね。ね！ ガラテアちゃん！』
『？』

そして、そんな面白そうなことに食いついてきた人物はもう一人。マスカレーナである。

俺はレイノハートとのデュエルの後にマスカレーナのカードデータを本人に返却（というか、サイバース精霊界に置いてきた）しているため、カードとして所有はしていない。なぜなら、現時点でサイ

バース族は持っているだけで面倒事に巻き込まれる厄ネタに近いものだからだ。まあ、結論から言えばマスカレーナのカードデータを受け取った時の事を察知されていたから無意味だったんだけどね……。そのため、彼女は常に現実世界に居る訳では無い。それでも何をどうやってかは知らないが、俺のデュエルディスクを通して好きな時にこちらに来たり精霊界へ帰ったりしているのが現状だ。

さつきから遊作が振り返ってこちらを見ているような気がするが、ずっと島に絡まれ続けている。

……ああ！　もしかして、島と遊作が二人で話してるから俺だけ孤立している状態なのを気にしているのか？　それなら気にしなくていいから、島の相手を続けていてくれ。こっちはこっちで意外とにぎやかだから別に寂しくないんだ。他人からはそう見えないかもしれないけどな。

それにしても、復讐で頭が一杯で余裕がなく、草薙さん以外には常にピリピリした態度をしていたこの時期の遊作にあれだけ気兼ねなく話しかけられる島はもしかして凄いな奴なのだろうか？　何も考えないだけかもしれないけど。

『いいですか？　メイドさんと言うのはですね〜』

『ドラゴン。メイド。ドラゴン、メイド……？』

そんな事を考えていると、マスカレーナがガラテアに何やら余計なことを教え込もうとしている。あまり変なことは教えないで欲しい所だ。

ガラテアはガラテアでドラゴンとメイドと言うそれぞれの言葉の意味は理解できるが、何故その二つが繋がっているのかが理解できない様子。

『……ドラゴンメイド？』

「うん、ドラゴンメイド」

『ドラゴンメイド……』

ガラテアがこちらを見つめて来る。

はっ、もしかして遊作が俺達についてきた理由って……

今から行くメイド喫茶とハノイの騎士との関係を疑っているのか！

ドラゴンと言えばハノイの騎士を代表するモンスター、クラッキンゴドラゴンが居る。もしかしたら既に遊作はリボルバーがドラゴンデッキの使い手だという事を知っているのかもしれない。

件のドラゴンメイド喫茶がハノイの騎士の資金獲得のためのフロント企業だと、遊作は疑っているんだ！

理由は三つある。

一つ。ドラゴンと言うハノイの騎士との共通点。

二つ。ハノイの騎士が表立って行動し始めた時期と同時期に喫茶店がオープンしたという事。

三つ……いや、三つも思いつかないわ。

流星にそんな馬鹿なことは無いか。

「おー！　ここだ！」

「見た目は普通の喫茶店っぽいな」

そんなこんなで俺達は目的地へと到着する。

Den Cityの広場から少し歩いて二つほど裏道に入った所に「ドラゴンメイド喫茶」と書かれた看板が掲げられた真新しい建物があった。

外見はいたって普通の喫茶店。思っていたよりシックな外装でイメージしていたメイド喫茶より随分落ちついた雰囲気醸し出している。それに、メイド喫茶と言えばメイドさんが道端で強烈な客引きをしている印象があるが、店の前にすらスタッフが出ていないところを見るに、おおっぴらに宣伝している訳では無いのだろう。

「よ、よし！　じゃあ入るぞ」

「おー」

「……」

島が扉を押して開けると、その向こう側には……

「『お帰りなさいませ、旦那様』」

「おお！」

「ほえー完成度たっかいなあ」

「……」

カードの中から飛び出て来たみたいなのドラゴンメイドがそこに居た。

ハスキー、チェイム、ティルル、ナサリー、ハスキー、パルラ、ラドリーに扮したスタッフが動きを止めて、入店した俺達に息の合った挨拶をしてくれる。

喫茶店と言う事で、本来はチェインバーメイドのチェイムからラドリーメイドのラドリーまで全員がホールスタッフとして働いたり、何故かハスキー役のスタッフだけ二人いたりと妙な違和感があるが、ここは喫茶店だ。客の服を洗うサービスが無ければラドリーの仕事も無いだろうし、ある程度の人数が居ないと客を捌ききれないだろうから役が被ることもあるだろう。

「三名様でございますね。席へご案内致します」

「は、はい！」

ハスキー役のスタッフに声をかけられ、島は緊張で上ずった声で返事をしている。彼女の先導に従い、この店で一番数が多い四人掛けのテーブルへと案内される。

『それでは、お嬢様方はこちらの席へ』

『えー！ 私達も良いんですか！』

『勿論でございます』

『行きましょう！ ガラテアちゃん！』

『？ はい』

「ん？」

俺、島、そして入店時からずっと無表情の遊作が席に着くと、その隣の空いている席にこれまたマスカレーナと精霊状態のガラテアがハスキー役のスタッフに連れられて……って！ あれ、精霊じゃないか！

不自然にハスキーだけ役が被っているなと思ったら、二人目のハスキーは人間では無く、『ドラゴンメイド・ハスキー』その人の精霊で

あった。

そう思つて彼女の事をよく見れば、その角や尻尾は作り物特有の安っぽさは全く無く、有機的で生物的な質感をしている。

『「ゆっくりどうぞ」』

「ど、どうも」

「世良は誰と話してるんだ？」

「ああ、いや……ははは……」

思わず彼女達の方を見つめてしまつていたためなのか、ハスキーは俺の視線に気が付いたようで、挨拶と共に深々と会釈をしてくれた。そんな彼女にうっかり素で返事をしたために島に怪しまれてしまった。

(あのハスキーは野良精霊……じゃないな)

彼女はメイドとしての所作が前面に出ているため少し分かりにくい、あれは明らかに野良精霊の有り方ではない。店内を見回してみると、一番目立つところにドラゴンメイド全員のカードが額縁に納められている。額縁のガラスには指紋はもちろん埃一つ付いていない様子。デュエリスト、と言うよりはコレクターなのだろうか？ いや、カードに精霊が宿るくらいなのだから、ハスキーを相棒としたデュエリストだったのは間違いないだろう。

彼女のマスターはどうやら本気でドラゴンメイドが好きで、カードに精霊が宿るくらい大切にしている事が伺える。居るところには居るもんだなあ……。

個人的にちよつとした混乱はあったものの、俺達はメニューから飲み物と軽食を注文する事にした。

ちなみに俺が頼んだ物は「テイルル特製ショートケーキ」と「チエムが寝る前に淹れてくれるホットココア」である。

流石に「ラドリー」が洗濯で使った水(無料)を注文する勇氣は俺には無かったのは余談である。多分普通の水だと思うけどね。

各々が注文を終わった後、突然モゾモゾし始めた島が俺に向かって

アイコンタクトを取ってくる。何かあるのかと島に顔を向けてみるとあいつは耳打ちでこう言った。

「……すまん、ちよつとウンコ行ってくる」

「ばかやろう、そんな事耳打ちで伝えてくんない。はよ行け」

「がはは」

普通に嫌な気分になったわ。

「……」

「……」

そんなこんなで島が離席すると、この場に居るのは俺と遊作だけになる。

彼と繋がりが一切無い俺は特に話すような話題も無く、無言の空間となってしまう。

俺も遊作も、島のように自分からドンドン話題を振っていくタイプではないので、こうなるのも仕方が無いだろう。

だが、そんな沈黙の空間を最初に破ったのは意外にも遊作の方だった。

「単刀直入に聞く。世良、お前も意思を持ったAIを連れているのか？」

「……………？」

？

『ほおらく、お前の事を「お兄ちゃん♡」って呼ぶ子の事だよ』

「黙っている」

『へーい』

遊作が左腕に装着しているデュエルディスクから聞こえてくる第三者の声。ギョロつとした目玉の様なそれはまさしく物語の重要人物である闇のイグニス、A^{アイ}iの物だ。

「っー！」

「アンタのデュエルディスクに居る奇妙なAIの姿は学校でも確認している。確か、ガラテアと呼んでいるそうだな。どうなんだ？」

『彫像から人間になった女の名前をAIに付けるとは、良い趣味して

るねえ』

あ、そつかあ……。

遊作が興味があるのはドラゴンでもメイドでもなく、ガラテアかあ……。

「……」

「……」

今度は先ほどまでとは違う意味の無言が周囲を包む。

そんな事はお構いなしと言わんばかりに、隣でマスカレーナはハスキー（精霊）が淹れてくれたのであろう紅茶を飲んで『うまい！』なんて言っているのが聞こえてくる。た、たすけてえ……。

「ガラテアは……」

困ったことになった。

変に誤魔化しても余計に怪しまれるだけだろう。ガラテアという証拠を握られている以上、最悪ハノイの騎士の一味扱いされる可能性も否定できない。

しかし、正直に話すにしてもどこまで信じてくれるだろうか。ガラテアの事を全て話すには精霊の事も話さなければならぬ。

今代の主人公はそう言った方面には疎そうだからそんな事を言っても「ふざけるなあ！」と怒り出しかねない。

『お兄ちゃん？』

「あ」

「ッ！」

『お！ 出た出た。よ！ 新人！ 調子はどうよ？』

『……？ 誰？』

『ふう〜ん……』

さつきまでマスカレーナと一緒に精霊の姿でハスキーのお茶を楽しんでいたのだが、ガラテアは俺が呼んだと思ってソリッドビジョンで実体化して現れてしまった。

はあ……こうなっては仕方ない。

相手は主人公^{遊作}だ。下手に誤魔化すより、ある程度正直に事情を話した方が無難だろう。せめて精霊関連の話題は省いて話すことにしよう。

う。

「ガラテアは友人の……友人？ 知り合いの妹だ」

「なんで言い直したんだ？」

「いや、友人と言うほどの関係では無いからな。本当に」

俺は精霊関係の話題に若干のフェイクを混ぜながら遊作に説明する。

ガラテアは知人の妹の様な存在である事。

俺は彼女をその知人から預かっているという事。

その知人はガラテアを預けてどこかに行ってしまったという事。

俺が彼女に色々な事を見せるために連れてきているという事。

そんな感じだろうか。

「……」

話し終えた後、遊作はしばらく考え込む。

『お帰りなさいませ！ 旦那様！』

『そうです。背筋は伸ばして、手を前で組むときは左手を上にするのですよ』

『はい！ 先生！ ところで、どうしてご主人様では無く旦那様なんですか？』

『私達にとつてご主人様と呼ぶ方はマスターだけですからね。ここにいらつしやる皆様はご主人様のお客人と言う事になります』

『なるほど〜』

そして、隣ではいつの間にかハスキーによるメイド講習が始まっている。

マスカレーナは一体何をやっているんだ。

「そうか……。それじゃあ……。その人物は草薙さんと同じ様に妹を……」

「え？ な、何？」

「いや、こつちの話だ」

小声で独り言を呟きながら何かを納得したような遊作は質問を続ける。

「ちなみに、ロスト事件については何か知っているか？」

「ロスト事件？ 昔に大規模な子供の誘拐事件があったという事くらいしか」
「そうか」

本当の事を言えばロスト事件の背景も犯人も全て知っている。しかし、それは遊作がストーリーを通して知っていくべき事柄だ。それに、俺がその事件について詳しく知っているとおかしな事になるので、ここは素直に黙っておくこととする。

「……わかった。ありがとう。聞きたかったことは全部聞けた。俺はこれで失礼する」

「え？ 注文した料理は？」

「すまない。代金は置いて行くから、二人で食べてくれ」

それだけ言い残して遊作は席を立ち、店を出て行くとする。

だが、少し歩いた所で立ち止まり、さらにこう言い残した。

「これ以上悲しみは増やさせはしない。世良はその娘を全力で守れ。ハノイの騎士は必ず俺が潰す」

『行つてらっしゃいませ、旦那様』

『素晴らしいです。貴女、筋が良いですよ』

『ありがとうございます！』

「あ、うん」

それだけ言うと、遊作は今度こそ店を出て行く。

左右からの情報量の多さに押しつぶされそうになりながらもなんとか遊作に返事を返すことが出来た俺を誰か褒めて欲しい。

『あ、ラッセさん……じゃなかった。ご主人様？ さつきあのAIにデュエルディスクをハッキングされてましたよ？ 中々手癖の悪いAIですね』

「……マジ？」

『でもまあ、大丈夫でしょう。精霊という概念を解さないAIには理解出来ない情報がちよろつとあるとバレたくらいですから』

「……それってまた別の疑念を持たれないか？」

『へーきですよ、ご主人様！』

「……そのご主人様って何となくむず痒いからいつも通りに呼んでく

れ……」

『お兄……様?』

ほらあ! ガラテアも変な事覚えちゃったでしょうがぁ。

こうして遊作とのファーストコンタクトは終わりを告げた。

「どう思う?」

『うくん、ありや俺達とはまた別口の存在だな。同じと言えば同じだが、確実に違うとも言える。何より、あのガラテアって言うAIの事を俺は知らないぜ』

「……まさか……まだどこかであんな悲劇が続いているのか」

(しかし、あいつのデュエルディスクにあった謎のデータは……?)

迷いフェニックス

「『『『お帰りなさいませ、旦那様』』』」

「どうも」

再びやって来たのはドラゴンメイド喫茶。

……いや、違うんだよ。別に前回のどつぷり嵌まってしまったとか、病み付きになっちゃったとかそういう訳では無い。

まず一番の理由は放課後にやる事が無いという事。いつも通りカードショップを冷やかしに行っても良いのだが、毎日通ってもラインナップがそう頻繁に変わるわけではない。もちろん毎日通う事で新しい発見がある時もあるが、無い時の方が多いのだ。

次に遊ぶ場所の候補として挙げられるLINK VRAINSは最近ハノイの騎士がうろついているから近寄りたくない。しかもハノイの騎士に俺がロックオンされているとなれば猶更だ。だから、しばらくLINK VRAINSにはログインしない事に決めているのだ。

『セラ様、またいらして下さったのですね』

「まあね。前は色々あつてじっくり料理を味わえなかつたからさ」

『メイドさん……ドラゴン……さん?』

『ガラテア様もようこそいらつしやいました』

『ドラゴンメイド・パルラ』に扮したスタッフに案内されたテーブルに座ると、俺の入店に気が付いたハスキーが声をかけて来た。

落ち着いた雰囲気のお店とは言え、店内はそれなりに賑やかなので、普通の声量で話す分にはおかしな目で見られない。深く気にすることなく彼女と会話を続ける。

『おや、それはとてももったいないですね。このケーキはティールルが作る物に負けないくらい洗練されていますので』

「うんうん、だよねえ。あんな予想外の連れが居なければ俺もゆつくり味わってたんだけどねえ……」

島はともかく、俺とガラテアの事を探りに来た遊作との一件。あの

時は冷静に対処出来ていたと思ったが、家に帰ってからケーキとココアの味をほとんど覚えていない事に気が付いたのだ。

決して安くはない料金を払って頼んだ料理の味をいまいち覚えていないというのはもったいないし、何より申し訳ない。そう言う意味もあつてまたドラゴンメイド喫茶に来させてもらった訳だ。

『そう言えば、今日はマスカレーナ様はいらっしゃらないのですか?』
「彼女は俺の所に居たり居なかったりするからね。今日は精霊界で仕事でもしてるんじゃないかな」

『そうなのですか? それでは、彼女とはまた次の機会を楽しみにしましょう』

……うん。近いうちに今度はマスカレーナも連れてドラゴンメイド喫茶に来ることが決まったな。いやー、ハスキーがマスカレーナに会うのを楽しみにしているというのなら、またここに来るのも吝かでは無いな。うん。

「ご注文は如何なさいますか?」

「え? あ、えーと……」

ハスキーとの会話に夢中になって居た為にいつまで経っても料理の注文をしない俺に気を遣つてか、チェイム役のスタッフに声をかけられてしまった。

「それじゃあ、この「パルラも摘まみ食いしちやうチョコケーキ」と「ハスキーの至福の紅茶」をお願いします。あ、紅茶はミルクで」

「かしこまりました、旦那様」

注文を聞いたチェイムの人は厨房へと向かつていく。

本来は寝室や客室の整備を専門とするチェインバーメイドの彼女が客対応をやっているのは何だか可笑しくて少し面白いが、デュエルと同じで大事なのは正確な設定では無くその場のシチュエーションなので問題なしだ。いやまあ、設定を大事にしたデュエルも盤面とか展開の流れに美しさがあつたりするから全部否定する訳でないけどね。

『それでは、ガラテア様には私が』

ハスキーに誘われてガラテアは前回と同じテーブルへと着く。

ハスキーはいつの間にか現れたワゴンに載ったケーキをガラテアの前に置くと、ティーポットを慣れた手付きで取り扱い、音も立てずに紅茶を淹れていく。

カップに注がれるストレートティー。その横にミルクピッチャーと角砂糖が置かれる。

『…………』

「ん？ どうした？」

ケーキと紅茶を前に座ったガラテアは困った様子で俺の方を見つめて来る。

ああ、そう言えば前は対面に座ってたマスカレーナが世話を焼いていたな。きつと、彼女は自分でどうすれば良いのか分からないのだろう。

「まずは少しだけ飲んでみな」

俺の言葉を聞いてガラテアは何も淹れていない紅茶を少しだけ口に付ける。

…………今更気になったが、彼女の機械の身体は味を感じたりすることが出来るのだろうか？ 飲むこと自体は前回もやっていたから出来るのは知っているが、果たして彼女は甘さや辛さ、苦みや酸味などを感ずることが出来るのか？

『……………………』

俺のそんな考えは杞憂だったようで、紅茶を一口飲んだガラテアは少しだけ眉を顰めて渋そうにしている。兄さん驚異のメカニズムの面目躍如と言った所か。

「渋いなら、ミルクを入れてまろやかにする。甘みが欲しいなら砂糖を一個入れて甘くするんだぞ」

『…………』

コクコクと頷いたガラテアはミルクピッチャーの中身を半分程と角砂糖を一個加えてからもう一度一口。

『…………』

少し悩んだ後、彼女はさらにもう一個角砂糖を加える。

『…………ホカア…………』

両手で大事そうに抱えたカップを置いて満足そうに一息ついてい
る様子を見るに、満足できる味に調整する事が出来たようだ。

そんなガラテアをハスキーと一緒に見ていると、俺の所にも注文の
品がやって来る。

目の前に置かれたケーキのクリームが少しえぐれているのはパル
ラが摘まみ食いをしたという表現なのだろうか？ 芸が細かいな。

「旨い……」

うーん……、濃厚なチョコレートの味がたまらなく美味である。

『……うまい？ ……うまい！』

『ふふ……』

俺がケーキを食べる様子を真似するようにガラテアは横に置かれ
ているフォークを手にとってケーキの欠片を口の中へ入れる。紅茶
の味とはまた違ったケーキの甘さに嵌まったのかパクパクと続けて
食べていくのを見るに、とても満足している様だ。

俺もガラテアに負けじとケーキをつついてみると、サイズが小さい
という事もあつてすぐに無くなってしまう。締めミルクティーを
一口飲むと、口の中で暴れまわっていた甘味が洗い流される。しか
し、それは全く違う味で消し去るのではなく、程よい甘みと紅茶の風
味でとても穏やかな気分にならせてくれる。

「ふう……満足満足……あつ」

カップをソーサーの上に戻そうとした時に、先ほどまでケーキを食
べるのに使っていたフォークにうっかり手を当ててしまった。

このままだと店の雰囲気をぶち壊すような甲高い音を立ててしま
う！

「……」

と、思いきや、フォークの落下地点には不自然に動いた俺の影が待
ち構えており、音も無く「ズズツ……」って感じにフォークが飲み込
まれて行く。

しばらく無言で見ていると、影の上にそっとフォークが現れる。少
しだけフォークに残っていたチョコレートのクリームが綺麗さっぱり
無くなっている様な気がするのは気のせいだろうか？

『あの……もう一つ同じものをご用意いたしましたでしょうか?』

「……いや、こっちで頼むからいいよ」

ハスキーからのありがたい提案を断り、俺が頼んだ物と同じものをもう一回注文する。このままだと俺はケーキとお茶を二人分頼んだただの高血糖野郎だが、届いたケーキと紅茶は誰も見ていないうちに自分の影の上に置く。するとこれまた先ほどと同じように音も無く影の中へと消えて行く。

そのまま自分の影をじつと見つめていると、ゆらゆら揺れているので、きつと満足しているのだろう。

『……すき……』

『おやおや、セラ様は随分愛されている様ですね』

「そうなのかな……ん? そうかなあ??? 何かちよつと違う様な……? まあ、今度からは美味しいものを食べる時は共有してあげるか」

もはやミドラーシユが人間界の物質に対して普通に干渉しているという事実には目を瞑りつつ、これから彼女と共有できる思い出の幅が増えたなあ、なんてぼんやり考えていたのだった。

☆

ずっと気になつて居た「ラドリーが洗濯で使った水(無料)」を頼んで(ちなみに、水自体は何となく濁つてる気がする普通の水だった)ハスキーとぼつぽつ会話をしながら時間を潰していると、床の方から「カチャリ」と陶器が擦れる音が聞こえる。そこに目をやると中身が綺麗さっぱり無くなった皿とカップが影の上に置かれていた。

何事も無くミドラーシユも食べ終わったようなので、ハスキーに伝えるために声をあげる。

「さてと、そろそろ帰るとするかね」

『おや、もうお帰りになられるのですね』

「ああ、随分ゆつくりさせてもらったよ」

『またのお越しをお待ちしております』

「次はマスカレーナも連れて来るよ。ガラテアー、帰るぞー……つて

なんか居る！」

『……鳥さん』

ガラテアが座っているテーブルに目を向けると、そこにはガラテアだけでは無く、紅い鳥、『トロイメア・フェニックス』がテーブルの上に座り込んでいる。

『おや？ 今日も来たのですね』

「こいつはよくここに来るのか？」

『ええ。この子は以前から時々この店にやって来るのですよ。迷いインコの様な物だと思うのですが』

「インコにしては……」

禍々し過ぎんだろという言葉は飲み込んでおく。

フェニックスは頭をガラテアの顔に擦り付けてまるで甘えているみたいに見える。

ガラテアがフェニックスの頭を一撫ですると、フェニックスはその身体を紅色の結晶、紅蓮のジャックナイツのコアへと変化させていく。紅蓮のコアもやはりこれまでの黄華、紫宵と同様にガラテアへと取り込まれる。

『どうやらあの子は帰るべき場所を見つけられたようですね。あんなに嬉しそうな表情は初めて見ました』

そう言うハスキーの表情は嬉しそうで、少し寂しそうだ。

この世界で数少ない精霊の知り合いとして、彼女にとってフェニックスの存在は意外と大きかったのかもしれない。そんな知り合いが突然どこかに行ってしまうのは、寂しいもんな。

「また来るよ」

次はいつ来ようか。

流石に今の頻度で通い続けるのは財布がもたないので来週か、再来週か。それとも校則で禁止されているバイトでもしようか。

アザナー事件

「なあ、世良はアザナーって知ってるか？」

「痣ナー？ 5000年毎に戦ってる奴らの事か？」

「はあ？ お前は何の話をしてるんだ？」

いつもの日常、学校でのデュエル部の活動中に島が突然そんな事を言いだした。島は間違えてアザナーと記憶しているが、正確にはアザナーだ。これまた想像の通り、ハノイの騎士が悪さをして一般人がLINK VRAINSに意識だけ取り込まれるという事件が起こる。目的はPlaymakerを探すためだと言うが、意識を抜かれた身体が植物状態になって集中治療室送りというよく考えなくても滅茶苦茶悪い事をしてるよな？

「冗談だよ。あれだろ、LINK VRAINSに魂を囚われるって」

「そうそう！ 最近学校で急に来なくなった奴が何人か居るだろ？」

あいつらもきつとアザナーになっちまったんだよ……」

「そうなのか？」

「そうだよ！ ……多分な……」

アザナー事件が起こり始めたという事は、そろそろPlaymakerとハノイの騎士の戦いに決着が着く頃なのだろう。それなら、LINK VRAINSにログインするのを止めるのはもう少しで終わりだな。

「うーむ、俺のデュエルディスクも呪われてそのうちアザナーになっちまうと思うと少し怖いぜ」

「何で島が心配してるんだ？」

「だってよお、アザナーにされちまった人間はみんな将来有望なデュエリストだったって話だぜ？ それなら俺もアザナーにされる危険があるって事だろ!!」

「え、あ、うん。そうだね」

島が将来有望なデュエリストかどうかは置いておいて、確かアザナー……じゃなくて、アザナーにされた人間は決闘者力が高くて、カード収納型の旧型デュエルディスクを使っている、そのうえハッ

カーの人間が狙われていたはずだ。

まあ、この情報は今の所俺しか知らないはずだから、取り合えず話を合わせて置くことにする。

「お前も気を付けろよ？ 世良だって俺に次ぐくらいには将来有望なデュエルリストなんだからな。午前0時になる前にはデュエルデスクは離れた場所に置いておいた方が良くせよ」

「え？ 俺？ 大丈夫だろ」

だってハツカーじゃないし。

「それに、お前って確か小学生くらいの時に大会で優勝しまくりで結構有名だったって話じゃん。むしろ最近は全く大会に出てないのが不思議な位だぜ」

「まあ、昔の話だし」

小学生の頃はなあ……。

お小遣いが少なくて中々カードが集められなかったから近場のカードショップのデュエル大会小学生の部に出場して優勝賞品のレアカードを換金していた時期がある。

これでも前世では最新環境の二歩遅れくらいに遊戯王を追い続けていた人間だ。そんな人間がいくらカードが揃いきつていなかったとは言え小学生だけの大会に出て居れば……今思えば当時の対戦相手の子供たちには申し訳ない事をしたと思っっている。

仮に小学生の時の成績を加味されたとして、個人的な主義で使っている旧型デュエルデスクを合わせてツアーアウトって所だ。Playmakerとして一番大事な要素であるハツカーと言う部分が抜けているからハノイの騎士に狙われる恐れはない。

島とそんな事を話しながら、チラッと壁に掛かっている時計を見てみれば、もう夕方の五時になろうとしていた。

「と、もうこんな時間か。俺はもう帰るわ」

「ん？ まだそんな遅い時間じゃないだろ。用事でもあるのか？」

「まあ、ちよつとね」

「何だ？ ……ッ！ まさか彼女が出来たのか!？」

「ちげーよ」

「だよなあ〜お前には愛しの妹が居るからな」

「うるせえ、俺は帰るぞ。じゃあな」

「またな〜」

いつもなら部長に戦術の質問をぶつけてみたり、部員の誰かとデュエルするような時間だが、いつもよりも早く部活を切り上げて俺は帰宅の途に就くのだった。

☆

「さてと……始めるか」

家に帰り、少し早めの晩飯を食べた後、風呂も入ってもう後やる事は寝るだけの状態となった俺は自室のパソコンに向き直る。

『遊ぶ？』

「ごめんな、今日は遊べないんだ」

『……』

ワクワクした表情だったガラテアは俺のその一言によって「しよんぼり」といった雰囲気を漂わせながら少し離れた位置で大鎌をバトンの様にクルクル回して一人遊びをし始めた。

くっ……すまない、ガラテア。確かにいつもなら寝る前にトランプ遊び（神経衰弱の様なガラテアがカードを持つ必要が無いゲーム）をして遊んでいるが、今日は駄目なんだ……。

大好きな部活を早く切り上げたり、断腸の思いでガラテアの誘いを断った理由。それは……。

「今から仕事の時間だ」

バイトである。

本来俺が通う高校ではバイトは禁止されているのだが、正直言ってもそんな校則を馬鹿正直に守っている奴はそんなに居ない。少し遠い場所の店でバイトしているやつも居れば、ネットワーク上でバイトをして居る奴もいる。

要するに、バレなきや良いんだ。

それに、このご時世ネットワーク上で働くなら身分証明はLINK

VRAINSのサーバー情報でも通る。学校も生徒の個人的なアカウントまでは把握していないだろう。

突然バイトを始めた理由？ それはドラゴンメイド喫茶に……金はいくらあっても困らないからな。

そんな事は良いとして、俺が始めたバイトはあの超有名企業、SOLテクノロジーが運営するLINK VRAINSのサーバー管理業務！ ……の、下請けの下請けの下請けが募集していた物だ。

時給800円とちよっぱいが、高校生のバイトならこんなものだろう。それに、業務内容も家のパソコンからよく分らんファイルを開いて閉じてを繰り返すという「これ何の意味があるの？」みたいな単純作業であり、深い知識も必要ない。

体力を使わずに金を稼げるのだからこれほどいい話は無いだろう。

「よし、やるぞー！」

……

「ぼえー……」

こ、これは想像以上に辛い作業だ……。体力は使わないが精神力が削られて行く。

ファイルを開いて、閉じる。ただそれだけの作業だ。だが、終わりが無い。いや、実際の所バイトの契約書には俺の操作から労働時間を算出して給料が払われるようになっていて、だからいつでも止めていいのだ。だが、こういう作業は一度始めると止めるタイミングと言うものを失うもので、やめるタイミングを失えばズルズルと続ける訳で……。

「もう12時か……。確か7時前くらいから始めたから5時間。5時間間の虚無作業で4000円か……。ふっ……。労働って大変だな……」

この作業が一体どういう風にLINK VRAINSの役立つのかは不明だが、SOLテクノロジーの下請けの下請けの下請けにまで仕事が行われる理由がよく分かる。こんな作業誰もやりたくないわな。お得意のAIはどうしたんだよ。こういう仕事こそ機械に作業

をさせるべきなのでは無いだろうか？

それとも、どこまで行っても人間の手が必要と言う事を知らしめるためにSOLテクノロジーが敢えてやらせているのだろうか？ 嫌がらせかな？

『遊ぶ？』

「……遊ぶほうかな」

『やったー』

俺の作業の手が止まったことに目ざとく気が付いたガラテアがこぞとばかりに声をかけて来る。元々の予定では明日は休日だから寝落ちするまでバイト業務に勤しむ予定であったが、ちよつとこれは厳しそうだ。

もうバイトの仕事はこの辺で切り上げてガラテアと一緒に夜更かして遊ぶのも良いかもしれない。

そう思い、いつもガラテアと遊んでいるトランプなどが仕舞つてある棚に手を掛けようとした時、左腕に装着しているデュエルディスクが突然輝き出す。

「なっ！ これってLINK VRAINSへのログイン演出!!」

当然、このログイン操作は俺の意図してやっている物ではない。なのに、こうして今俺はLINK VRAINSへログインしようとしている。それが示している事は、今日島と話していたアナザー事件の次の標的として俺が狙われているという事!?

だが何故？ 俺はハッカーではない。そりゃ、こんな世界で生きて来て一般人並みの知識はあるが、ハッキングも出来なければプログラミングだって授業でやる程度の知識しかないし、ネットワークのシステムに至っては授業で聞いたけどチンプンカンプンだった。そんな俺がどうしてハッカー認定を……ん？

目に入るのはモニターに映し出されたサーバー管理業務虚無作業の成果物。

もしかして、この作業をしていたからハッカー認定されたのか!?

ハノイの騎士のハッカー認定適当過ぎだろ!?

「まっずっ」

ログイン処理が完了するまさにその瞬間。

『……えい』

俺の後ろで「今日やるゲームは何かな何か？」といった様子で覗き込んでいたガラテアがその手に持つ大鎌の先を俺のデュエルディスクにコツンとぶつける。

それが原因だったのだろうか。直前まで不正な操作によって行われていた強制ログイン処理は中止され、ログイン演出である身体を包み込む光が消えてなくなる。

『遊ぼ？』

「……ああ、そうだね。遊ぼうか」

『やったー』

ガラテアは喜びを身体全体で表現するかのように両手を挙げる。その手の中に未だある大鎌にはめ込まれているコアは紅蓮の輝きを放っていた。

「紅蓮のコア……トロイメア・フェニックス……」

フェニックスのモンスター効果は相手フィールドの魔法・罫カード1枚を対象としてそのカードを破壊するというもの。いつの間にか俺のデュエルディスクに仕込まれた罫ウイルスを破壊したって言う事なのか？

そんな一つの考察が俺の中に生まれたのだった。

ハツカーの証左（ガバ）

『ラッセさん！ 無事ですか!?!』

「あれ、マスカレーナじゃん。こんな時間にどうしたんだよ」

『……こんばん、は?』

『こんばんは、ガラテアちゃん……それで、貴方は何をやっているんですか?』

「何って、神経衰弱だが?」

ガラテアのお陰でLINK VRAINSに強制ログインさせられるところを辛くも逃れることが出来た俺は虚無作業で疲れた精神力を回復させるため、そのままガラテアと一緒にカード遊びに興じていた。神経衰弱ならガラテアがカードを選んだ後に俺が代わりにそのカードを捲れば良いから一緒に遊ぶことが出来るのだ。

記憶力が異様に良い彼女を相手に神経衰弱を挑むとほぼ毎回俺の負けになってつまらないと思うのだが、それでも彼女は満足らしい。

そんな感じでいつもと同じ様に俺の三連敗目を喫した時に左腕に装着したデュエルディスクからヌルッとマスカレーナはやって来た。

『……はあ……。ラッセさんのデュエルディスクに誰かが攻撃を仕掛けて来たのを感じたから急いで来てあげたというのに……』

「あー……。悪いな。ちよつと問題が発生したはしたんだが、ガラテアが助けてくれたんだ」

『ムフウー』

俺がガラテアの方に目を向けると、それに気が付いた彼女は胸を張って鼻息を荒くしていた。

『ガラテアちゃん、貴女は本当に良く出来た子ですねえ……。それに比べてラッセさんは迂闊すぎですよ!』

「え……。そんな事言ったってあれは不可抗力だし」

何故か説教モードに入ったマスカレーナは両手を腰に当てて口を尖らす。気のせいかもしれないがいつも垂れている彼女のツインテールも今は重力に抗って逆立っているように見える。

まあ、確かにアナザー事件の標的にされたのは俺がハツカーっぽい

仕事（ハッカーの知識不要）をしていたからかもしれないけどさ。

マスカレーナは叱られてしょんぼりとした俺を尻目にパソコンへと向き直り、それに向かって手を翳す。

『……やっぱり……』

「何かあったか？」

虚無作業の画面のままになって居るパソコンに俺も近づき、マスカレーナにそう問いかけた。

『このラッセさんが請け負ったバイトですけど、あのハノイの騎士とかいう集団が募集した物ですよ』

「え？ マジ？」

『大マジです。まあ、巧妙に偽装はされていますが』

なんと、俺が選んだバイトはハノイの騎士がSOLテクノロジーの下請け企業に偽装して発注していた物だったのか！

『なるほど……知識を持った人間ならプログラムを組んで自動でやれるような仕事……。これでハッカーとしての知識を持っているであろう人間を探していた訳ですね』

「ん？ つまり、その作業を自動でやれるプログラムを作れる人間を篩にかける為って事か？」

『そう言う事です。時給が安いとはいえ、知識があればこんな作業最初にプログラムを組んでしまえば後は放置しているだけでお金が貰えますから良い餌になるでしょうね』

「でも俺はプログラムなんて組んでないぞ？」

『それはラッセさんが馬鹿正直に長時間同じペースで作業をし続けていたからBOT判定されたんですよ……うわ！ 5時間もやってたんですか!? うへえ……良くも飽きずにやれましたねえ……感心しますよ』

ええ……。

確かにほとんど気絶したみたいな状態で時間も忘れて作業をしていたが、まさか俺の温もりを感じる手作業がプログラムによるものだと見なされて、ある程度の技術を持ったハッカーとして判定されたとか……。

だが、アナザー事件の標的にされる人間は決闘者力が高くて旧型デュエルディスクの所持も条件に含まれる。確かに俺はその条件に当てはまらなくもないが、ハノイの騎士がその情報を知っているはずが……あつ、そう言えば応募する時にLINK VRAINSのアカウント情報を登録したんだった。そこから身辺情報と機器の登録情報を調べればそれらの情報を得ることも出来る……。

あれ？ もしかして、全部自分の所為か？

『状況を理解出来ましたか？』

「はい、ごめんなさい」

『まったく……これじゃあセキュリティ意識ゆるゆるのラッセさんが心配で目が離せませんよ』

「……バイトはちゃんとした所でやるべきだな……」

最近はお父や先生に怒られるという経験を全くしていないから人からこうやって言われると少し来るものがあるね……。

よし、これからは反省して次のバイトは身元がしっかりしている実店舗のバイトをしよう。

『……本当に分かってるんですかね……？』

疑いの感情がこもったジト目でこちらを見つめて来るマスカレーナ。

大丈夫大丈夫。要するに気を付けてやれって事だよな！

『……まあ、良いです。それより、これから少し面倒な事になるかもしれませんよ』

「ああ。あのバイト先がハノイの騎士だったなら、提出したLINK VRAINSのアカウント情報……ラッセの情報から俺の事まで知られていると考えて良いだろうな」

SOLテクノロジーは一応表向きはちゃんとした企業だ。一応な。個人情報の取り扱いには社会の目を考えれば気を遣う分野だろう。しかし、相手は凄腕ハッカー集団ハノイの騎士。イグニスのような超特級の極秘情報なら兎も角、LINK VRAINS登録者の個人情報なんてハノイの騎士なら簡単に丸裸に出来るくらいにしか守っていないと思われる。

しかも、ただのサイバース族保有者疑いの人物からPlayermaker 疑いまでかけられたら躍起になって情報を探ってくるはずだ。

『そう言う事です。これから一層注意が必要ですよ』

マスカレーナは出来の悪い生徒に言い聞かせるように人差し指を立てて念を押ししてくる。

「やっぱまだしばらくはLINK VRAINSにはログインしない方が良いな」

『それに関しては私が居れば精霊界に避難することが出来ますから、ログインする際は私が居る時にして下さいね。流石に奴らも精霊界までは追っては来れないでしょうし』

「ん。ありがとう」

リアル個人情報知られた可能性がある以上、ハノイの騎士がこつちの世界で何らかのアクションを仕掛けてくる可能性もあるが、そうなったら即ポリスメンに通報出来るように心得ておこう。あ、でも通信遮断のジャミングとかされたら通報も出来ないな。

そうなるど大事なのは逃げ脚か、敵に対抗するための腕力。やはりフィジカルパワーが最適解か……。

『そう言えば、ガラテアちゃんはどうやってハノイの騎士の攻撃を撃退したんですか？』

「ああ、それがな」

俺はガラテアが行った一連の行動を説明した。

シームレスにガラテアとの遊びに移行したためすっかり忘れていたが、あの時示したガラテアの力はどう考えても彼女自身が持つ物では無かった。ついこの間遭遇した『トロイメア・フェニックス』に由来する物だという想像は容易につく。

それに、思い返してみればハノイの騎士（おじさん）を撃退した時も違和感があった。確かにLINK VRAINSでアバターが尋常じゃないダメージを受けた場合、肉体にフィードバックダメージが行かない様に迅速に強制ログアウト処理が行われる。それこそ、身体が上下に分かれるようなダメージを受けるとするならば、身体が二つに分かれるよりも早くログアウトさせられるだろう。

え？ 頭から落ちたブルーエンジェル？ システムが大丈夫と判断したから大丈夫だったんでしょ。彼女は真のデユエリストだし……。

例外の話は横に置くとして、一般人の場合は普通そうなのである。しかし、あの時身体を真つ二つにされたハノイの騎士はそれどころか捨て台詞を吐く余裕すらあった。

それを考慮に入ると、ハノイの騎士が消えたのはフィードバックダメージ防止の強制ログアウトでは無く、別の要因でログアウトさせられたと考えられる。そして、あの時は見間違いかと思っていたが、ガラテアの大鎌にはめ込まれたジャックナイツのコアが黄華の輝きを放っていたという事。

黄華のコアを受け継ぐトロイメアモンスターは皆ご存知『トロイメア・ユニコーン』。そんなユニコーンのモンスター効果はフィールドのカード一枚をデッキに戻すと言うもの。

つまり、LINK VRAINS上のハノイの騎士の意識を肉体にログアウトさせた^戻と考える事も出来る。

どちらもガラテアがこれまで出会ってその身にコアを宿したモンスターたちの持つ効果だ。もしかしたら『トロイメア・グリフォン』の力も扱う事が出来るのだろう。そして、これから同じように出会うであろうトロイメアモンスターの力もこれから使えるようになるかもしれない。

『なるほどなるほど。それならラッセさんはガラテアちゃんにも守ってもらわなきゃですね』

「……そうだな」

妹に守ってもらわうお兄ちゃんか……。

少し情けなく感じるが、ガラテアの方が強そうだから仕方ないね……。ギルスには「ガラテアを守れ」と言われた訳では無いから許してくれるはずだ。

『お兄ちゃん』

「ん？」

マスカレーナとの会話に集中していた所にガラテアが声をかけて

くる。

『カードを、捲って?』

三連敗を喫して四戦目に入ろうとしていた時にマスカレーナが乱入して来たので、並べられたトランプはそのままである。

ガラテアが捲るカードを選んでもいつまで経つてもマスカレーナとの会話から戻ってこない俺に業を煮やして声をかけてきたようだ。

「ああ、ごめん。そんなじゃ直ぐに……って、なんか居る!!」

『わ!何ですか?あのThe・ゴブリンって感じの』

『?』

『?』

さつきまで俺が座っていた位置。並べられたトランプを挟んだガラテアの対面。そこに俺の代わりに座っていたのは『トロイメア・ゴブリン』だった。OCGではその強力な効果から禁止カードに指定されたが、この世界ではそう言う話は聞いていない。

どうやらゴブリンは俺が席を外した後にガラテアの対面に現れて彼女とゲームをしようとしていたみたいだ。

ゴブリンは俺と目が合うと、これまでのトロイメアモンスターと同じく、その身体を翠色の結晶、翠嵐のジャックナイツのコアへと変化させていく。ガラテアはその翠嵐のコアを両手で包み込むようにして受け止め、その身に取り込む。

遊び相手が居なくなってしまうからか、ガラテアの様子は心なしか少し悲しそうだ。

『ガラテアちゃん! 私とも遊びましょうか! それに、今度ゆつくりサイバース精霊界を案内してあげますよ!』

『!』

マスカレーナもそんなガラテアの表情に気付いたのか、気に掛けている様子。

「俺も!」

何にせよ、ハノイの騎士に対する警戒は必要だが警戒し過ぎてもどうしようもない。今はとりあえずこのお姫様妹を満足させることが先決だろう。

嬉しくない再会

マスカレーナを交えたトランプ大会はもう盛り上がった。

普段俺とガラテアの二人だけでやっていた遊びも、もう一人加われればそれはもうほとんどパーティーみたいなものだ。トランプと言う古典的な遊び道具一つとっても三人で話しながらやれば非常に楽しめる。

どれくらい盛り上がったかと言うと、次の日に寝坊をして朝ご飯を食べ損ねるくらいには盛り上がった。

「あー……眠った時間で考えれば同じなのにどうして夜更かしをした次の日って異様に眠たいんだろーなあ」

『これくらいで情けないですねーラッセさんは』

「俺が起きた後もぐーすか寝てたくせに……」

俺はゲーム中に寝落ちしたために床で寝てしまった。それもあって少し身体がダルイし寝不足気味である。一方マスカレーナは俺が寝た後ちやつかりベッドで横になってぐっすり眠っていたものだからうっかり叩き起こしそうになってしまった。まあ、触れる事は出来ないんだけどね。

それにしても、精霊体の彼女がわざわざベッドで眠る意味はあるのだろうかと思わなくもないが、やはりベッドの上で眠るというシチュエーションが気持ちの上で大事なのだろうか？

ちなみにガラテアは床で寝ている俺の横で座っていた様で、目覚めて最初に見たのは彼女の顔だった。まあ、彼女が何を思っただか俺の寝顔を覗き込んで居る事はよくある事だ。最初の頃は驚いていたが、今では起床して即「おはよう」と言う余裕すらある。

「腹減ったー。あれ？」

階段を下りてリビングに向かうが、家には人の気配がない。

今日は休日の為、オカンは勿論親父も居るはずなのだが？

不思議に思いながらも辺りを見回してみると、テーブルの上に一枚のメモ紙が置かれている。

『『お出かけしてきます』って、飯は……』

『ありやりや、これはご飯はお預けですね』

どうやら両親は俺が寝ている間に外出してしまったようだ。テーブルの上は勿論、冷蔵庫の中にも作り置き料理などが無いのを見るに、本当に放置された様だ……。

しかし、出かける前に起こしてくれても良いと思うのだが、何で声をかけてくれなかったのだろうか？

だが、俺は部屋の状況を思い浮かべる。

床で爆睡する息子^俺。

あたかも誰かとトランプ遊びをしているかのように床に散らばるトランプ。

ははーん、なるほど。

これは出かける前にちゃんと起こしに来てくれたが、部屋の状況を見て「……そつとしておこう」とでも思われたな？

まあ、昔から似たような事をやらかしているから今更恥ずかしいも何もないのだが、最近オカンの中で俺の評価が一体どうなっているのか少し怖いとは思っている。

「しゃーない。外に食いに行くか」

『ハスキーさんの所ですか？』

「いや、流石にあそこに行くにはまだ貯金が貯まってないからなあ」
『なんだー』

あれ？　そう言えば俺がやった5時間分のバイト代はしつかり支払われるのだろうか？　まさかバックレられてりはしないよな？

まさかハノイの騎士は数千円ぽっちの給料も渋る訳ないよな???

まあ、バイト先の正体はハノイの騎士だった訳だが、その仕事を募集していた求人サイトは大手でテレビCMもバンバン打ってるちゃんとした所だった。最悪そこに泣きつけば何とかなるかな。

床で寝た所為で盛大についた寝ぐせを直し、眠い目をこすりながら外出の準備を整えた俺は休日の街に繰り出すことにした。

☆

外で軽く何かを食べる時、俺は大抵安くて手軽なCaf・Nagiのホットドッグを食いに行くのだが、残念ながら今日は営業していないようだった。本編でも島に「閉まつてる時の方が多い」みたいな弄られ方をしていた様に、この店は草薙さんの気分次第でやっていたりやっていなかったりするため、意外とホットドッグを食べない事がある。しかも、営業場所はDenCityの巨大スクリーン前の広場に限らずその時によって違う場所で営業している事があるものだから食える機会は結構貴重だったりする。

そんな訳で、今日は行きつけでも何でもない街歩き中に目に入った適当なカフェのテラス席で食事を取る事にした。

「んー、すきっ腹にホットケーキとコーヒーは効くなあ」

『いいなー私も食べたいなーずるいなー』

「そんな事言ったって、マスカレーナは人間世界の食い物は食べられないじゃん」

『何とかして下さい』

「無茶言うなよ」

マスカレーナはどうかパンケーキが掴めないかと苦心しているようだが、残念ながらその努力は実っていない。

パンケーキを四分の一ほどに切り分け、誰も見ていない事を確認してから昼間の太陽によって地面に映し出された俺の影に落とす。すると、パンケーキは地面に落下することなく影の中へと飲み込まれて行く。

しばらく見ていると、俺の影が俺の動きを全く無視した動きを見せ、影の右手がグッドのハンドサインを作り出す。イイ感じっぽいな。

どうやらミドラーシユは新しい表現方法を思いついたらしい。今までは影を蠢かせる程度だったのに随分細かい動きをし始めたものだ。

今となっては見慣れた光景だが、改めて考えると意味不明だなあと自分でも思う。

『相変わらずミドラーシユさんは凄いですね。彼女の精霊としての力

はどれほど強いのでしょうか?』

「さてなあ」

なんだかんだ言ってミドラーシユは神の力の一部を宿しているモンスターみたいな所があるから精霊としての力は最上級に近いだろう。だからと言ってこんな人間界で好き放題やれるのかと言われると俺は首をかしげざるを得ないがね。

「うーん、流石にパンケーキだけだとちよつと物足りないな」

本来の時間的には既に昼食を食べている様な時間だ。それなのに朝食抜きでパンケーキ一皿では育ち盛りの高校生である俺の腹を満たすには少し足りない。追加でホットサンドを注文して品が届くまでコーヒーをしばいて待つことにする。

「おやあ? そこに居るのは」

「え……」

そんな時に声をかけて来たのは予想外の人物だった。

「この間はどうぞも」

『人間、久方ぶりですね。息災ですか?』

「ああ、いや……まあ」

人と精霊からかけられた言葉に曖昧な返事を返す。

前回と同じように巨大な樹のモンスターの子を精霊を引き連れた男、スペクターは胡散臭い笑みを浮かべて目の前に立っていた。

ハノイの騎士の幹部スペクター。確か前回もこんな休みの日の昼頃に遭遇してしまった気がするな。もしかして、こいつのルーティンなのだろうか?

「そうだ、丁度君に感謝を伝えようと思っていたんですよ」

「俺に?」

そう言いながらスペクターは何も言わずに対面のイスに座る。

何事も無いかのようにスタッフにコーヒーを一杯注文し、言外にしばらく居座る宣言までしている。

「ええ、そうです。君の言葉を聞いてからこの世界に対する見方が少し変わったんですよね」

「まさか、精霊の姿が!」

「いいえ、残念ながら私には彼女達の姿をこの瞳に映すことは叶いませんでした」

スペクターは懐のデツキケースからサンアバロン・ドリユアトランティエ聖天樹の大母神のカードを取り出し、大切な物を見る目で見つめている。

「ですが、「居るかもしれない」、「居たらいいな」と言う希望的観測では無く、「居る」と言う確信を得られた今ならば、その存在を感じ取れるような気がしたんですよ。何となくですがね」

「本当にそんな事が……」

別にスペクターの事を疑う訳では無いが、今まで精霊を見る事が出来る人は勿論、その存在を感じるだけでも出来る人が居るなんて話は聞いた事が無い。

皮肉なことだが、ある意味俺が一番精霊は見えないモノだと決めつけているのかもしれないな。

「ふむ……二三、いえ、四人程ですか？ 我々の近くに何かを感じますね。君の傍に来てからこの感覚が増えたことを鑑みるに、君はとても精霊に好かれているのでしよう」

あ、当たっている……。

この場に居るのはミドラーシユ、ガラテア、マスカレーナ、そしてドリユアトランティエの四精霊。本当にスペクターは精霊を感知できている!?

『あれ以来、この子が私達に向けて沢山語り掛けてくれるようになったのですよ。素晴らしい事です』

ドリユアトランティエの方に目を向けると、こっちはこっちでスペクターの事を愛する我が子の様な目で見つめている。親バカとはこういう場合にも適用されるのだろうか？

「おや、ドリユアトランティエはそちらに居るのですか？ 羨ましいですねえ。私にも彼女の姿を見ることが出来たら、声が聞こえたらと何度思った事でしょう」

俺の視線の先を追うようにしてドリユアトランティエを見る。

「もし君を殺してその力が得られるのなら、私は何の躊躇い無く君を殺してしまおうでしょうねえ」

「ヒエツ……」

いや、怖いて。この人突然何言ってるの!?

「……まあ、そんな事は不可能だという事くらいは理解していますよ」
スペクターは丁度今届いたコーヒーに口を付ける。

精霊の存在を感知する事しか出来ないスペクターは何事も無いようにコーヒーを啜っているが、「君を殺して」位のところでガラテアが大鎌を取り出し、ドリユアトランティエが蔓を伸ばして牽制してと、結構ヤバ気な雰囲気を漂わせていたのだが、それを知ることが出来る人間は残念ながら俺だけである。

「そんな戯言は置いておいて、これでも私は君に結構感謝しているんですよ。世良君?」

「ッ!」

こいつ、俺の名前を!

恐れていたことが起こってしまったようだ。既にハノイの騎士は俺llラッセと言う情報も握っている。奴はそう言っているのだ。

「だからね、これだけははつきりさせておかないといけない。君はPlayer makerですか?」

「……」

「現状、我々の強制ログインプログラムを強引に破壊して逃れた君は類稀なるハッカーであるPlayer makerの最有力候補です」

ふあ!? ち、違うぞ!

あの時の強制ログインを防いだのは俺では無く、ガラテアだ!

……って言って信用してもらえらるだろうか? 精霊を感知できるようになったスペクターなら微妙に信用してくれそうな気がするが、こいつに喋りすぎるのは少々怖い……。

「それで、君はPlayer makerなのですか?」

返答に悩む。

だが、結局の所、答えは「ノー」である。下手に時間を掛けると余計に怪しまれるので、俺はシンプルに答える事にする。

「……俺はPlayer makerじゃない。それに、俺はハッカーの知識は持っていない。あの変な仕事も全部手作業でやったし、あの仕事

がハノイの騎士に関連した物だって教えてくれたのは友達の精霊だし、あの強制ログインを防いだのも妹の精霊だ」

「ん？ 妹の精霊？」

「そこは聞き流してくれ」

スペクターは俺の言葉を聞き、検討しているのか考え込むような姿勢を見せる。

五秒だろうか、三十秒だろうか。この沈黙の空間は実際よりも長く感じた。

「ふむ……どうやら嘘ではなさそうですね」

ふう……どうやら信じてくれたみたいだ。

ここで「いや、君はPlayerだ。私がそう判断した」なんて言われた日にはもうどうしようもなかった。

「うん。それなら構いません。であるならば君は現状ただのサイバース族保有者疑いの人物。今日の所はこれで失礼させて頂きましょう」

スペクターはそれだけ言うと、残ったコーヒを一気に飲み干し、席から立ちあがる。

「良いのか、ハノイの騎士」

ハノイの騎士は最終目的はイグニスの抹殺。そのためのサイバース族所持者を探していた。そんなハノイの騎士にとって標的である俺を見逃そうとしている事に疑問を持ち、余計なこととはしなくても良いのについて声をかけてしまった。

「言ったでしょう？ 私はこれでも君に感謝していると。偶然街中で出会った事を無かったことにするくらいにはね。勿論、君が望むのなら私は吝かではありませんが？」

そう言ってスペクターはデュエルディスクが装着された左腕を持ち上げる。

なるほど、別にスペクターからすれば今この場でやり合って俺からサイバース族を取り上げても良いという事か。

「御免だね」

「そうですね、残念です。ですが、あの方の命令があつた場合は逃しませんよ。それでは、今後はお互い出会わない事を願います」

それだけ言うと、スペクターはテーブルから離れて行く。

『それではまた会いましょう』

おい、マスタースペクターと言ってることが違うぞ……と、忘れてた。ドリユアトランティエには言わなきやいけない事があったんだ。

「なあ、ドリユアトランティエ。その……前回あのアホ三人娘がアンタの果実を勝手に取って食べてたみたいなんだが、すまなかった。謝って許してもらえれば嬉しいんだが……」

『？ ああ、そんな事もありましたね。私わたくしは気にしてはいません。それに、あの娘達が私を精霊と心を通わす者に導いてくれたと言つても過言ではありませんから。許します』

「そうか。助かる」

あー良かった。

地味に気にしていたらどうしようかと心配だったんだよな。ドリユアトランティエが気にしていないというのなら俺も安心だ。

彼女とはそれだけ言葉を交わすと、スペクター共々人ごみに紛れて見えなくなつていった。

「……………はあ……………」

張りつめていた気が一気に抜ける。

ちよつと寝坊しただけなのにどうしてこんな目に遭わなければならぬのか。

「何だか余計に腹が減ったな」

緊張で今まで忘れていた空腹感がぶり返して来た様だ。スペクターとの会話中に注文したホットサンドが届いていたからそれを頂くでしょう。

「あれ？」

ホットサンドが無い？

スタッフがテーブルに置いたところまでは確認しているし、俺はまだ食べていないので確実にそこにあるはずの物だ。

おかしいなあと思いつながら横を向くと、そこには俺の影を囲んでガラテアとオレンジ色の犬、いや、『トロイメア・ケルベロス』が何かをモグモグ食っている。

「何してんの？」

『！』

俺が見ている事に気が付いたのか、ガラテアは口元をゴシゴシと手で拭って証拠隠滅を図ろうとしている。

そして、ケルベロスはと言うと、その身体を燈影のジャックナイツのコアへと変化させ、そそくさとガラテアの中へと入って行ってしまった。共犯者に逃げられて焦ったのか、ガラテアはしばらくオロオロした後、俺の影を指差す。

「……」

そんな俺の影は美味しい飯にご満悦だったのかサムズアップしていたのだった。

現実世界の食べ物もミドラーシユを介せば普通の精霊も食べることが出来る。

「そう言うことも出来るんだなあ……」

俺は再びホットサンドを注文するのだった。

『ふへー危ない所でした』

「マスカレーナ。静かだと思ったら、どこ行ってたんだよ」

『ふっふっふー……、これを取りに行ってたんです！』

「それは……ドリュアトランティエの果実……お前……」

『本職のキスキルさんやリイラさん程ではありませんが、私の手に掛ければ聖天樹の大母神と言えども訳ないですね』

「……また謝らなきゃいけないのか、これ？」

最後のトロイメア

「はあ……飯食いに行っただけなのに異様に疲れたな……」

『そうですか？ 私はとても良い収穫があったので非常に満足度高かったです！ また今度も行きましようね！ にゅふふ……』

「勘弁してくれよ……」

マスカレーナはドリユアトランティエからパクって来た果実に頬ずりしながら怪しい笑い声をあげる。「この果実一つでどれだけの……ジュルリ……」なんて彼女は言っているが、とても悪い顔をしているね。うん。

家に戻つてくると、未だに両親が使う車が車庫になかったため、まだ帰って来てない事が伺える。これは帰りを家で待つて居たら本格的に空腹に耐えられなかったかもしれないな。

「ただいま〜つと」

ドアの鍵を開け家の中に入ると、当然誰も居ないため物音一つしない。

サツと手を洗い、自分の部屋がある二階へと向かう。

「……ん？」

『部屋の中から何やら聞こえてきますね？』

部屋のドアノブに手を掛けようとした時、部屋の中から何か聞いて来た。そつとドアに耳を近づけてみると、微かに聞こえた音は人の声だという事が分かる。

『うっ……うう……』

『シクシク……』

『…………グスン……』

ドアの向こうと言う事でくぐつても聞こえるが女の泣き声……？ 最初は泥棒か何かかと思つたが、どうもそうではないらしい。

しかし、これはこれで幽霊の可能性が出て来て非常に怖いのだが？

『中に入らないんですか？』

「いやあ、ちよつと心の準備が……」

しかし、このままずっとこうしている訳にはいかない。何かあつてもすぐにデュエルディスクが構えられるように左手はフリーにし、意を決して右手でドアノブを捻る。

そして、一気にドアを開け放つと、そこには三人の人影があつた。

「あ」

『ア、アンタ今までどこに行つてたのよ～～!!』

『うわくん、会えて良かったですう～～』

『……何かあつたのかと心配した……』

俺の部屋から聞こえて来たすすり泣く女の声はなんとシェイレイン、メイルウ、ハウフニスの三人だった。

「おー、三人とも久しぶりだな！ 元気にしてたか？」

『「元気にしてたか？」じゃないわよ！ もう！ アンタどうして家に居ないのよー!』

『家中を探してもアナタは居ないし、ご両親の姿も見えませんでしたし……』

『……もうこの家には居ないのかと思つた……』

「ああ……それで……」

ティアラメンツ

三人娘は折角人間界にやって来たのにそこに俺が居なくて不安になつてしまった様だ。しかも、いつもならシャドール・ティアラメンツデッキをデュエルディスクに入れていいるから本来だったら俺の傍に現れるはずだった。だが、最近は気分を変えるためにガスタデッキを使つていたために、ティアラメンツのカードは家に置きっぱなしだったのである。

申し訳ない事をしたとも思うが、何とも間の悪い娘達だ。

マスカレーナも久しぶりに再会したティアラメンツの皆と挨拶を交わしている。

そんな中、彼女達と面識がないガラテアは知らない精霊が三人もいたからか頭に疑問符を浮かべながらこちらに問いかけて来る。

『お兄ちゃん、あの人達、誰?』

「ああ、彼女達は俺の友達。シェイレイン、メイルウ、ハウフニスだ。仲良くするんだぞ」

手で指し示しながら彼女達の名前を紹介していく。

『あら？ 知らない子が居るわね。シエイレーンよ。よろしく』

『メルウです。新しいお友達ですか？』

『……ハウフニス……相変わらずの精霊誑し……』

「お、おいおい。ハウフニスさんよ、それは人間きが悪いぜ……」

『ガラテア、です』

ハウフニスの思わぬ俺の評価に思わず表情が引き攣ってしまったが、お互いの自己紹介は無事に終わる。

『ところで、この子さつきアンタの事お兄ちゃんって呼んでなかった？』

「ああ、それは……」

『ガラテアちゃんはラッセさんの妹なんですよ！』

俺がガラテアを預かる様になった経緯を彼女達に説明しようとする、すかさずマスカレーナが横から遮って端折りに端折った端的な言葉だけで済ませてしまう。

『アンタ精霊の妹が居たの？ 教えてくれても良かったのに』

『まあ、そうだったんですね』

『……びつくり……』

そして、当然そんな言葉不足の説明だけでは伝わる訳も無く……つて、なんでティアラメンツの皆さんは「人間の俺に精霊の妹が居る」という状況に対して全く疑問を持っていないんですかねえ。おかしいでしょ？ 常識的に考えて。

その後、マスカレーナに説明した時の様に三人娘と別れてから起こった出来事を彼女達に説明した所、しっかりと理解してくれた。

『それにしても、今日は突然どうしたんだ？』

『色々と一段落付いたから久しぶりに顔でも見せようかと思ったのよ』

『シエイレーンちゃんったら、凄いい会いたそうにしてたんですよ』

『ちよ、ちよつと！ メールウ！』

『……溜息ばかりついてた……』

『ハウフニスまで！』

メイルウとハウフニスに暴露されて慌てて二人の口を塞ぎにかか
るシェイレーン。何だかこういう感じは久しぶりだな。

「そうか。シェイレーンはそんなに寂しかったんだなあ」

『ち、違うわよ！』

『違うのか？』

『え、えう……』

顔を伏せてモゴモゴし始めたシェイレーンを見て満足したので、彼
女を弄るのはこれくらいにしておこう。話が進まないのな。

「ルルカロスは元気にしてるか？」

『はい。ルルカロス様はペルレギア壱世壊の新しい統治者として毎日頑張つてい
ますよ』

「ペルレギア？」

聞き覚えの無い単語に俺は疑問符を浮かべる。

『ほら、ペルレイノってアイツの名前が入ってるじゃない？ だから、
私達の最初の仕事として壱世壊の新しい名前を考える事にしたの』

「なるほど、それがペルレギアか」

今気が付いたのだが、彼女達の胸元にかつてあった錠前のアクセサ
リーが無くなっている。それは支配者たるレイノハートが居なく
なった事による解放を示している様だった。

それに伴って壱世壊もレイノハートを王とする世壊であることを
やめたという事だろう。

『曲がりなりにも頂点に立ってた男が居なくなったから色々混乱も
あったけど、最近はようやく落ち着いてきたところよ』

『今度お祝いのお祭りを開く予定なので！』

『……今日はそのお知らせとお誘い……』

『おー、祭りね。それは楽しみだな』

『私も行っていいですか！』

『勿論です！ その時はガラテアちゃんも是非一緒に！』

『……大歓迎……』

精霊界の祭りか。一体どんなことをするのだろうか。それに、前回
は経験しそびれたが、壱世壊の美味しいものとかも味わえるかもしれな

い。

「皆は祭りで何か出し物でもするのわ？」

『私達三人は音楽の奉納をするのよ。私は唄を捧げるわ』

『私は笛を。今は練習中です！』

『……私は豎琴。本番をお楽しみに……』

「唄と演奏か」

メイルウとハウフニスは演奏でシェイレーンはボーカルを務めるのだろう。音楽の奉納とは、正しく神事だな。随分祭りとしてしつかりしたものを準備している様だ。

それにしても、彼女達と共に生活をしていた時は音楽関係の話題は全く出てこなかったから少し意外である。

「シェイレーンが唄うんだな」

『何よ、文句でもあるの？』

「いや、別にそう言う訳では無いが」

『シェイレーンちゃん歌声はとっても綺麗なんですよ。壺世嬢では誰もが知ってる歌姫です！』

『……こうご期待……』

『あ、あんまり期待されても困るわよ……？』

シェイレーンは頬を赤く染め、照れ隠しなのか前髪を指先で弄ってクルクルしている。

『ま、そう言う事だから、アンタも楽しみにしてなさいよね』
「おう」

二人がそれほどまで称える歌声とは、俄然楽しみになって来た。

今から祭り当日がとても待ち遠しいな。

『ん、伝えなきゃいけない事も伝えたいし、私達はそろそろ戻るわね』

「え、もう帰っちゃうのか？」

『一段落付いたとはいえ、まだまだやらなきゃいけない事は沢山あるんだから』

そう言うシェイレーンの表情からは苦労や大変な事ばかりでは無く、未来に希望を抱いている事が伺える。

かつて、日常の笑顔の中に隠しきれない陰りが垣間見えた彼女

達とは大違いだ。

そんな彼女達の今を知ることが出来て俺は嬉しく思う。

「そうか。残念だが、やるべきことがあるなら仕方ない。またいつでも遊びに来てくれよな」

『ええ。アンタこそ、これからは私達のカードは常に肌身離さず持つて居なさいよね!』

『それでは、これで失礼します』

『……またね……』

そう言うと、三人娘は姿を消していった。彼女達の世界、ペルレギアへと帰って行ったのだろう。

『楽しみが増えましたね、ラッセさん』

「ああ。その時はガラテアも一緒に……うお!」

後ろで俺たちの会話を静かに聞いていたガラテアの方へ振り向くと、そこにはいつの間にか現れていた『トロイメア・マーメイド』が彼女の横に浮かんでいた。

既に何度も経験した出来事だが、何度経験したとしても音も無く突然現れられると驚いてしまう。

俺がマーメイドを視認してからしばらくすると、やはりその姿を紺碧のジャックナイツのコアへと変化させていく。

ガラテアは紺碧のコアを両手で受け止めると、コアは彼女の身体にゆっくりと取り込まれる。

「ガラテア……」

『?』

彼女が取り込んだジャックナイツのコアは全部で六つ。黄華、紫宵、紅蓮、翠嵐、燈影、そして紺碧。

これは全てのトロイメアモンスターと出会った事を意味している。

「何か身体に変わった事は無いか? 変な感じはしないか?」

『? 何も、変わらない、よ?』

『ラッセさん? どうしたんですか?』

ガラテアはいつもと同じ口調でそう言い、いつもと同じ様に瞼を閉じ、口元は優しく微笑んでいる。

正直、『トロイメア・フェニックス』に出会ったあたりから今後全てのトロイメアモンスターと出会うのだろうとは予感していた。ただ、もしかしたら……もしかしたら、全てのトロイメアモンスターと出会う事で星遺物世界の黒幕が何かちよっかいをかけてくるのではないか。

そう言う不安も抱えていた。

「……いや、おかしなところが無いなら良いんだ。俺の考え過ぎだろう」

だが、全てのトロイメアモンスターと出会い、その身に全てのジャックナイツのコアを宿してもガラテアが何か変わった様には見えない。

考え過ぎだった。

そう結論付けて俺は残りの休日を三人で過ごしたのだった。

『アハハハハハ』

……の塔

トロイメア・マーメイドと出会ってから一週間。

変わらぬ日常、変わらぬ学校生活、変わらぬデュエル漬けの日々。念のためガラテアに何か変化が無いかと注意を向けていたが、やはりそれも杞憂だったようでこの一週間何もなかった。

そうしてやって来た次の休みの日。

今日は島と朝から街で遊ぶ約束をしている。

目を覚まし、歯を磨き、朝飯を食い、服を着替えてデュエルディスプレイを身に着ける。

いつもと変わらぬ朝支度。

何だか今日は心なしか静かだなと思いつつながら俺は街へ出かける。

☆

カードショップやアパレルショップなど適当な店を巡って各々目的の物を回収した後、小腹も空いてきたという事で適当なバーガー屋で軽食を摂る事にした。

薬にも毒にもならないバカ話をしながら飲み物を啜り、ポテトを摘まむ。俺は俺で島に不審がられない様に気を付けながら時々ポテトをミドラーシユに渡しながら過ごしていると、タブレット端末を弄っていた島が突然騒ぎ出す。

「ん!? おい世良! これ観て見ろよ! 今LINK VRAINSで大変なことが起こってるぞ!」

「どうした?」

島がこちらに寄越したタブレットに映っているのはどこかの報道屋が中継しているLINK VRAINSの映像だった。

それは現在行われているPlaymakerとハノイの騎士の幹部であるスペクターとのデュエルだ。だが、その舞台は普段のLINK VRAINSでは無く、ビルは崩れ、道路はひび割れ、暗雲が垂れ込めた空模様。

そして、一番異様な存在として目立っているのがハノイの塔だろう。LINK VRAINSに存在する膨大なデータを吸い上げ、一気に放出する事でLINK VRAINSは勿論、それ以外のネットワークを崩壊させ最終的にはスタンドアロン状態のすべてのコンピュータをも破壊する事を目的とした電腦空間上の建造物、ハノイの塔。

「ハノイの騎士がまた何か悪さをしているのか」

「ああ、多分な。でも！ Playmakerが必ずハノイの騎士に正義の鉄槌を食らわせてくれるはずだぜ！ 頑張れー！ Playmaker！」

その通りだ。

島が言っているのは子供っぽい理想の様に聞こえるが、この世界では何も間違っていない。未来を知っている俺がわざわざ出張って何かを手伝うまでも無く、この世界の主人公が解決してくれる。

だから、俺はここで島と一緒に手に汗握りながらPlaymakerのデュエルを観戦し、応援していれば良い。

だが、この違和感は何だ？

何かが間違っている気がする。

完成しつつあるハノイの塔を背景にPlaymakerとハノイの騎士の幹部スペクターとの緊張感のあるデュエルは今もまだ決着が着かずに行われている。

「!!」

『ラッセさん！ 大変です！ 今すぐLINK VRAINSに来てください！』

マスカレーナが血相を変えてデュエルディスクから飛び出て来たのと、違和感に気が付いた俺が勢いよく席から立ち上がったのはほぼ同時だった。

「すまん、島！ 用事を思い出したから俺はもう帰る！」

「ええー！ 突然どうしたんだよ!? 一緒にこの世紀の重大事件の顛末を……って行っちゃった」

島の言葉を振り切り、俺は大急ぎで店から出て家へと向かう。

崩壊していくLINK VRAINS。

Playmakerとスペクターとのデュエル。
完成しつつあるハノイの塔。

そう、ハノイの塔だ。俺が感じた違和感の正体。

ハノイの塔は全部で六段からなる輪っかがすべて完成した時、つまり、必要な量のデータを吸い上げ終わった時に溜め込んだデータを放出してLINK VRAINSを崩壊させる。

Playmakerとスペクターのデュエルをしている時、ハノイの塔は二段目まで完成し、三段目を形成している段階のはずだった。本来ならば。

しかし、俺が見た映像のハノイの塔は既に三段目が完成しており、四段目の形成の段階に入っていた。

これでは、Playmakerが物語通りに進めたとしたらハノイの塔完成までに間に合わない！

何かが起こっている。

俺の知らない何かによってハノイの塔の形成スピードが上がっているのだ。そして、その何かとは、まさにマスカレーナが血相を変えていた理由だと思われる。

「何が起こってるんだ？」

『それが……突然サイバース精霊界の精霊達が何者かの手によって……私は何とか人間界に逃げる事で免れることが出来たのですが、人間界にパイプの無い精霊達はみんな……みんなッ………。LINK VRAINSに避難した精霊達もダメだったみたいです……。』

「……」
ハノイの騎士が精霊に対処できる技術を手に入れた？ いや、それは考えにくいだろう。

精霊の存在を感知できるようになったスペクターが向こうに居るとは言え、そこからさらに精霊をどうこう出来るようになるとは思えない。何より、そんな技術を開発する時間は無いだろう。

であるならば相手は精霊、と考えた方が良い。

家に着くなり、手も洗わずに自分の部屋へと駆け込む。幸い今日も両親は出かけているため、小言を言われることもない。

意識を失った身体が倒れない様にイスに座り、俺は久方ぶりにLINK VRAINSへのログインキーワードを口にする。

「In to the VRAINS!!」

遮断される外界の音。

暗くなる視界。

遠のく意識。

遠のく意識の中で俺は思う。

そう言えば、今日ガラテアを見ていないな、と。

☆

失われた五感が戻って来て、意識がはつきりとする。どうやらLINK VRAINSへのログインは無事成功したようだ。

しかし、いつも賑やかなLINK VRAINSには人の気配がほとんどなく、変わり果てた姿を晒している。

『ラッセさん！ あちらから皆の気配を感じます！』

「あっちだな」

そうやってマスカレーナが指さした方向にはハノイの塔がある。マスカレーナを引き連れ、俺は彼女が示した方向へと走る。

走る。走る。走る。

道はガタガタにひび割れており、走るのには苦勞したが、幸い突き進む俺を邪魔するような人間は誰も居ない。

俺のログイン地点がハノイの塔からそこまで離れていなかったこともあり、少しの間走っただけで俺はハノイの塔の根元までたどり着くことが出来た。

リボルバーもG.O鬼塚も見当たらないのを見るに、彼らがデュエルをする反対側にでも辿り着いたのだろう。

そこで俺は、昨日ぶりの少女と出会う。

「ガラテア……」

『あれ？ ガラテアちゃん？ どうしてラツセさんと別れてこんな所に？』

ハノイの塔を眺めていたガラテアは俺達の声に気が付いたのか、こちらに振り向いてこう言った。

『あ、来ちゃったんだ。お・に・い・ちや・ん？』

ガラテアの姿で、ガラテアの声で……。

ガラテアとは全く違う、嫌に耳に付く口調で彼女は喋る。

『もうちよつと待ってくれたらぜーんぶ終わったのに』

『……あなた、誰ですか？』

いつもと違うガラテアの雰囲気にもスカレーナも何かがおかしいと感じたみたいだ。

「……リースだな」

『あれ？ お兄ちゃんだったら、私の事まで知ってるんだ！ 意外と侮れないじゃない？』

星遺物世界の黒幕。全ての元凶。救いようのないクズ。何か悲しい過去や神にならなければならぬ理由があると思っただけなら特に無いただのゲス。羽虫。

星遺物世界のストーリーを知った決闘者^{デュエリスト}は彼女の事を言葉のあらん限りを尽くして似たように称する事だろう。

『星杯の妖精リース』

それがガラテアの中に潜んでいるデュエルモンスターの精霊の名前だ。

「目的は何だ？ まだ神になろうとでもしてるのか？」

『質問ばかりね。まあいいわ。今私はとても気分が良いから答えてあげる。ようやくこの子^{ガラテア}の身体の主導権を握れたと思っただけそこは私の知らない世界。しかも、科学技術が発達した機械文明の世界。その後少し調べてみたら何やら面白い事をしようとしている集団が居るじゃない？ だから、少しお手伝いして私も一枚噛ませて貰おうって思った訳』

ペラペラと良く回る舌でしゃべり始めたリースは続ける。

『こうして集まった膨大なデータは謂わばエネルギーよ。まさにネットワーク世界と言う一つの世界を破壊させることが出来るほどの莫大なエネルギー。それをただぶっ放すだけに使うなんてもったいないじゃない？ だからね、貰っちゃう事にしたの。私が』

まるで自分の手柄かのようにハノイの塔を指し示すリース。

ハノイの塔はあれからもどんどん出来上がりつつあり、とうとう四段目も完成した。

「サイバース精霊界の精霊達はどうしたんだ？」

『ああ、あいつら？ 本来の予定だとあの塔の完成に随分時間が掛かりそうだったから私がデータを変えて塔に捧げてやったわよ』
『な、なんて事を！』

なるほど、本来の物語よりもハノイの塔の出来上がるスピードが速かったのはリースが精霊までもデータ化してハノイの塔を形成するデータ群に追加していたからだったのか。

「……今すぐ精霊達を解放して、ガラテアの身体を返せ」

『イヤ』

一応リースに提案してみたが、予想通りそれは拒否された。

彼女が俺の知っているリースであるならば、当然そうなるだろうという事は予想出来ていたがな。

『神の器となるべくして作られたこの子の身体は特別製よ？ あの膨大なエネルギーを受け入れるにはこの子の身体は必要なの』

リースは自分で自分を抱きしめるようにしながらガラテアの身体を必要性を語る。愛おしいモノを抱きしめる様に、大切なモノを抱きしめる様にリースは自身の身体を抱く。

「だったら俺とデュエルしろ！ お前が負けたらデータ化した精霊達とガラテアを解放してもらおう！」

『デュエル？ 私が？ アンタと？ それになんの意味があるのかしら？』

くっ……乗ってこないか……。

確かに賭けるものを片方しか提示しない戦いなんて、リアリストでもなくとも普通は受けない。何故なら受ける価値がないからだ。

だが、そんな相手を勝負の舞台にあげるためにはこちらも価値を示せばいい。

「……なら俺が負けた時は俺の魂とおまけにお前が知らない知識もくれてやる。これでどうだ、”パラディオンの科学者リース”」

『ラッセさん!?!』

『……ふーん、中々面白そうな事を言うじゃない』

これが俺が示せる最大の価値。

意地汚く魂だけの存在となっても生き続けてきた彼女なら転生という御業は興味の対象となるだろう。まあ、俺自身がどうやってこの世界に転生してきたのかを知らないから説明しろと言われても無理だが。

そして、何より奴は科学者だ。得てして科学者という生き物は知らない事を明かしたがる。

『……良いわよ。その勝負受けてあげる』

俺の提案に興味があるのか、少し間を開けてから返答が返ってくる。俺が対価を示したことでリースはデュエルに乗ってきた。

『どうせここで待つしかやるのがなかったから丁度いい時間潰しになるわ。遊んであげる。お兄ちゃん?』

ガラテアでは無いのに俺のことを「お兄ちゃん」と呼びこちらを挑発してきやがる。

リースはガラテアの大鎌を上空へと放り投げる。すると空中に浮かんだ大鎌はデュエルディスクへと変形し、彼女の左腕へと装着される。

「今まで黙っていたが……お前にお兄ちゃんと呼ばれる筋合いは無いわ!!! 行くぞ!!」

俺の方もデュエルディスクを起動させ、デュエルモードへと移行する。

「『デュエル!!』」

星遺物へ誘う悪夢

世良 VS リース

LP4000 LP4000

『先攻は私よ。手札から魔法カード『星遺物の醒存』を発動！ デツキからカードを5枚めぐり、その中から「クローラー」または「星遺物」カードがあった場合、そのうちの一枚を手札に加え、残りのカードは全て墓地へ送る。私は『星遺物―『星槍』』を手札に加えるわ』

そう言ってリースは選ばれた星槍のカードを手札に加えて残りの4枚を墓地へと送った。現代遊戯王において墓地は第二の手札とも呼ばれるくらいに重要だ。そんな場所へ一気に4枚もカードが送られてしまったのは痛いのが、『灰流うらら』が手札に無い今、俺は見ている事しか出来ない。

「星遺物……」

ガラテア、トロイメア、そしてリースも全員星遺物世界と決闘者から呼ばれる世界観出身のカード達だ。それを考えればリースがこのカテゴリを使ってくることは頷ける。

『さらに、墓地へ送られた『星遺物―『星杖』』の効果が発動するわ。私は手札から、『星遺物―『星盾』』をフィールドに特殊召喚！』

『星遺物―『星盾』』

闇属性／レベル 6／攻撃力 0／守備力 3000

フィールドに現れたのは巨大な盾。

ただでさえ守備力が3000と高いうえ、EXデツキから特殊召喚されたモンスターが発動した効果を受けない強力な壁モンスター。カードの除去をモンスター効果に頼りがちな現代の環境でその効果は侮れない。

『そして、『星杯の妖精リース』を通常召喚！』

『星杯の妖精リース』

光属性／レベル 2／攻撃力 1000／守備力 2000

『通常召喚されたリースの効果によってデツキから「星杯」モンスター

を1枚手札に加える。『星遺物―『星杯』』を手札に』

星杯にリースと、これまた星遺物に関連したカードだ。フィールドに現れたリースはスポットライトの様な光源に当てられてまるで神々しさを演出している様だ。

それにしても、全てのストーリーを知ったうえであの妖精の様なモンスターを「星杯の妖精」などと評するのは躊躇われるな。

『さて、下準備はここまで。これからドンドン行くわよ！ 現れなさい！ 星が導くサーキット！』

リースが両手を空へと掲げてそう宣言すると、リンク召喚の為のマークが現れる。

『召喚条件はカード名が異なるモンスター2体！ 『星杯の妖精リース』と『星遺物―『星盾』』をリンクマークにセット！ 出でよ！

リンク2！ 『トロイメア・ゴブリン』！』

『トロイメア・ゴブリン』

風属性／リンク 2／攻撃力 1300

『『トロイメア・ゴブリン』の効果！ 手札を1枚捨てる事で私はこのターンもう一度通常召喚することが出来る』

「出やがったな」

俺はフィールドに現れた緑色の怪物に目をやる。

『トロイメア・ゴブリン』はその効果を活かしたコンボの凶悪性からOCGでは禁止カードに指定されていた。召喚権を増やすという単純なものだが、リンクモンスターの重要度が高いこの世界ではモンスターを横に展開するというのはリンクマークを増やすことが出来るという意味でもある。

『再び現れなさい！ 星が導くサーキット！ 召喚条件は「トロイメア」モンスター1体！ 『トロイメア・ゴブリン』をリンクマークにセット！ 出でよ！ リンク1！ 『トロイメア・マーメイド』！』

水属性／リンク 1／攻撃力 1000

『リンク召喚に成功した『トロイメア・マーメイド』の効果発動。手札を1枚捨て、デッキから「トロイメア」モンスターを特殊召喚する

わ。来なさい、『アストロイメア夢幻転星イドリース』！』

『夢幻転星イドリース』

闇属性／レベル 9／攻撃力 2100／守備力 2100

マーメイドによって呼び出されたトロイメアモンスターは「リース」の名を冠したモンスターの一体。

巨大な悪魔のような見た目に俺は思わず尻込みしてしまいそうだ。

しかし、メインデッキに入るトロイメアと限られた条件ではあるが、手札コスト1枚で特にデバフを負う事も無くモンスターを特殊召喚出来る効果は厄介だ。

『まだまだ私のターンは終わってないわよ？』 『トロイメア・ゴブリ

ン』の効果で増えた召喚権を使って『デストロイメア夢幻崩界イヴリース』を召喚！』

『夢幻崩界イヴリース』

闇属性／レベル 2／攻撃力 0／守備力 0

こちらもやはりイドリースと同様に「リース」の名を冠している事からその関係性が伺われる。現れたのは『星杯に誘われし者』の妹、イヴの身体を乗っ取った状態のリースだ。

本来の彼女であるならば絶対にしないようなイヤらしい笑みを浮かべながらリースのフィールドへと降り立つ。

『夢幻崩界イヴリース』の効果発動！ このカードが召喚した時、自分の墓地のリンクモンスター1体を攻撃力を0にし、効果を無効にして、このカードとリンク状態となるように自分フィールドに特殊召喚する。復活しなさい、『トロイメア・ゴブリン』！』

墓地から蘇生される『トロイメア・ゴブリン』はEXモンスターゾーンでは無く、イヴリースの横である真ん中のメインモンスターゾーンに置かれる。

「くっ……これでモンスターが4体……」

トロイメアモンスターを利用したリンク数伸ばし……OCGでは禁止されていたから馴染みが無かったが、使われてみると中々厄介だ。

『三度現れよ、星が導くサーキット！ 召喚条件はカード名が異なるモンスター2体！ 『夢幻崩界イヴリース』と『トロイメア・マーメイ

ド』をリンクマーカーにセット！ 出ですよ！ リンク2！ 『トロイメア・フェニックス』！』

『トロイメア・フェニックス』

炎属性／リンク 2／攻撃力 1900

『トロイメア・フェニックス』はEXモンスターゾーンでは無く、『トロイメア・ゴブリン』のリンク先へとリンク召喚される。

魔法・畏カードを破壊するための汎用リンク2モンスターとしてよく使われる『トロイメア・フェニックス』だが、まだこちらのターンが回ってきていないため俺の場に伏せカードは無い。そのため、伏せカードを破壊する効果は使えない。

だが、それよりも問題なのは……

『リンク素材となり墓地へ送られた『夢幻崩界イヴリース』の効果！

このカードを相手フィールドに守備表示で特殊召喚する！』

『えー！ こちらにモンスターを渡して来るんですか!?!』

相手のフィールドにモンスターを召喚する。一見相手を利するよくな行為にマスカレーナは疑問の声をあげる。

そんなマスカレーナの声が聞こえたのかは分からないが、俺のフィールドへと現れたイヴリースはこちらへ振り向きながら意味深な笑みを浮かべている。

「だが、『夢幻崩界イヴリース』がフィールドに居る限り、俺はリンクモンスターしか特殊召喚出来なくなる」

『ふふふ……知ってるわよ？ アンタが大事な時に使うデッキは融合召喚を主軸としたデッキだつて言う事。これで大分動きにくいんじゃないかしら？ お・に・い・ちゃ・ん？』

リンク召喚を主体としたデッキであるならば、イヴリースの存在は邪魔どころか、素材の一つとして利用する事も出来るが、奴の言う通り今使っている俺のシャドル・ティアラメントは融合召喚を主軸に戦うデッキだ。イヴリースの制圧効果は俺にかなり刺さる。

勿論俺のデッキにもリンクモンスターは入っているため、完全に動けなくなると言う事は無いが、まずイヴリースを処理するという作業

を強いられる事になる。

「どうやらリースは俺の使うデッキもすっかり把握しているらしい。となると、ガラテアの中から常に外の事も観察出来ていたという事なのだろうか？」

『さてと、それじゃあ次よ。私は墓地の『機巧蛇―ムラクモノオロチ叢雲遠呂智』の効果を発動！』

「……『星遺物の醒存』の効果で墓地に送られていたのか」

『ええ、そうよ。デッキの上から8枚のカードを裏側で除外してこのカードを特殊召喚する！』

『機巧蛇―ムラクモノオロチ叢雲遠呂智』

闇属性／レベル 8／攻撃力 2450／守備力 2450

叢雲遠呂智は「機巧」と呼ばれるカテゴリーに属するカードの1枚であり、その緩すぎる特殊召喚条件から様々なデッキに出張パーツとしてよく使われる事がある。40枚デッキの五分の一を実質使用不可能な状態にするというコストは決して何度も使えるようなものではないが、デュエル序盤であれば、余程運が悪くない限りそれも大きな問題になる事は少ない。

リースが使うカードとしては些か不自然な気もするが、『機巧蛇―ムラクモノオロチ叢雲遠呂智』の闇属性と機械族と言う属性と種族を考えればとあるカテゴリー、「オルフェゴール」とシナジーがあるカードだと納得できる。

『さあ、これでラストよ！ 現れなさい、星が導くサーキット！ 召喚条件はカード名が異なるモンスター2体！ 『アストロイメア夢幻転星イドリース』と『機巧蛇―ムラクモノオロチ叢雲遠呂智』をリンクマーカーにセット！ 出でよ！

リンク2！ 『トロイメア・ケルベロス』！』

『トロイメア・ケルベロス』

地属性／リンク 2／攻撃力 1600

『トロイメア・ゴブリン』のもう片方のリンク先へと『トロイメア・ゴブリン』がリンク召喚される。召喚時に手札を一枚捨ててこちらのモンスター1体を破壊する効果を持つケルベロスだが、当然効果は使わない。

なぜなら今回、リリースがわざわざ先攻でトロイメアリンクモンスターを展開した理由は別にある。

「……これは……」

《left》

《box:absolute(1/1),overhidden,z9,
w2,h3,lh3,bo#000》《box》《left》《le
ft》

《box:absolute(1/1),overhidden,z9,
w2,h3,lh3,bo#000》《box》《left》《le
ft》

《box:absolute(1/1),overhidden,z9,
w2,h3,lh3,bo#000》《box》《left》《le
ft》

《box:absolute(1/1),overhidden,z9,
w2,h3,lh3,bo#000》《box》《left》《le
ft》

《box:absolute(1/1),overhidden,z9,
w2,h3,lh3,bo#000》《box》《left》

《left》
《box:absolute(0.3/0),overhidden,z
1,w1,h2》

《box》《left》

《box:absolute(0.3/0),overhidden,z



③ ◀ ?

```

1, <<box>>/<<box>> ▶ ?
w1, <<absolutelleft>>
h2 <<left>>
      (0.3/0), overridden,
z

```

② ◀ ?

```

1, <<box>>/<<box>> ▶ ?
w1, <<absolutelleft>>
h2 <<left>>
      (0.3/0), overridden,
z

```



①

```

1,
w1,
h2 <<

```

```

1,
w1, h2
《box》《left》《left》空白《left》《left》
《box:absolute(0.3/0),overhidden,z》

```

```

1,
w1, h2
《left》空白《left》《left》
《box:absolute(0.3/0),overhidden,z》
《box》《left》

```

```

1,
w1, h2
《box》《left》《left》
《box:absolute(0.3/0),overhidden,z》

```

```
1,
w1,
h2
《box》
《left》
《left》
(0.3/0),
overhiddenn,
z
```

```
1,
w1,
h2
《box》
《left》
《left》
(0.3/0),
overhiddenn,
z
```

```
1,
w1,
h2
《left》
《box》
《left》
《left》
空白
《left》
(0.3/0),
overhiddenn,
z
```



```

⟨⟨b o x : a b s o l u t e ( 1 / 1 ) , o v e r h i d d e n , z 9 ,
⟨⟨l e f t
⟨⟨/ b o x
⟨⟨/ l e f t

```

```

1,
w 1,
h 2
⟨⟨b o x : a b s o l u t e ( 0 . 3 / 0 ) , o v e r h i d d e n , z
⟨⟨/ b o x
⟨⟨/ l e f t
⟨⟨l e f t

```

④

```

1,
w 1,
h 2
⟨⟨b o x : a b s o l u t e ( 0 . 3 / 0 ) , o v e r h i d d e n , z
⟨⟨/ b o x
⟨⟨/ l e f t
⟨⟨l e f t

```

- w2, h3, lh3, bo#000》《/box》《/left》《left》
 《box:absolute(1/1), overhiddén, z9,
 w2, h3, lh3, bo#000》《/box》《/left》《left》
 《box:absolute(1/1), overhiddén, z9,
 w2, h3, lh3, bo#000》《/box》《/left》《left》
 《box:absolute(1/1), overhiddén, z9,
 w2, h3, lh3, bo#000》《/box》《/left》《left》
 ①トロイメア・ケルベロス
 ②トロイメア・ゴ布林
 ③トロイメア・フェニックス
 ④イヴリース

これによって、ケルベロス、ゴ布林、フェニックスの3体による相互リンクが形成されたことになる。

『トロイメアリンクモンスターのもう一つの効果。これらのカードが相互リンク状態の場合、私のフィールドの相互リンク状態のモンスターは効果の対象にならず、効果では破壊されず、戦闘でも破壊されない』

『……ええ？ ええ！ じゃあ、あのモンスター達はどうやって突破すれば!?!』

「相手のカードの効果を受けない」の様ないわゆる完全耐性程ではないが、対象耐性、効果&戦闘破壊耐性となると、あのモンスター達を突破するには壊獣によるリリース、対象を取らない墓地送りや除外効果など、限られた手段しかない。

『さて、アンタはこの盤面をどうやって処理するのかしら？ カード

を一枚伏せてターンエンドよ』

トロイメアリンクモンスターによる強固な盤面。

「俺のターンー!」

だが、この盤面を崩す手は俺の手札にある。

```
《left》
《box:absolute(1/1),overhidden,z9,
w2,h3,lh3,bo#000》《box》《left》《le
ft》
《box:absolute(1/1),overhidden,z9,
w2,h3,lh3,bo#000》《box》《left》《le
ft》
《box:absolute(1/1),overhidden,z9,
w2,h3,lh3,bo#000》《box》《left》
1,w1,h2》
《box:absolute(0.3/0),overhidden,z
```



③ ◀ ?

l, w1, h2
⟨⟨ box: absolute left left ⟩⟩
? ▶

② ◀ ?

l, w1, h2
⟨⟨ box: absolute left left ⟩⟩
? ▶



①

l, w1, h2
⟨⟨ box: absolute left left ⟩⟩
? ▶

```

1,
w1, h2
《box》《left》《left》空白《left》《left》《left》
《b:absolute(0.3/0), overridden, z》

```

```

1,
w1, h2
《left》空白《left》《left》
《box》《left》
《b:absolute(0.3/0), overridden, z》

```

```

1,
w1, h2
《box》《left》《left》
《b:absolute(0.3/0), overridden, z》

```

```
1,
w1, h2
⟨⟨box:absolute(0.3/0), overridden, z
⟨⟨box:absolute(0.3/0), overridden, z
⟨⟨left:left⟩⟩
```

```
1,
w1, h2
⟨⟨box:absolute(0.3/0), overridden, z
⟨⟨box:absolute(0.3/0), overridden, z
⟨⟨left:left⟩⟩
```

```
1,
w1, h2
⟨⟨box:absolute(0.3/0), overridden, z
⟨⟨left:left⟩⟩
⟨⟨box:left⟩⟩
⟨⟨left:left⟩⟩
空白
⟨⟨left:left⟩⟩
```

⟨⟨
/ b o x
⟨⟨
/ l e f t
⟨⟨

1, ⟨⟨
w 1, b o x
h 2, a b s o l u t e
⟨⟨ / l e f t
⟨⟨ l e f t
⟨⟨
0. 3 / 0,
) , o v e r h i d d e n,
z

④

1, ⟨⟨
w 1, b o x
h 2, a b s o l u t e
⟨⟨ / l e f t
⟨⟨ l e f t
⟨⟨
0. 3 / 0,
) , o v e r h i d d e n,
z

《left》
 《box: absolute(1/1), overhiddenn, z9,
 w2, h3, lh3, bo#000》《box》《left》le
 ft》
 《box: absolute(1/1), overhiddenn, z9,
 w2, h3, lh3, bo#000》《box》《left》le
 ft》
 《box: absolute(1/1), overhiddenn, z9,
 w2, h3, lh3, bo#000》《box》《left》le
 ft》
 《box: absolute(1/1), overhiddenn, z9,
 w2, h3, lh3, bo#000》《box》《left》le
 ft》
 ① トロイメア・ケルベロス
 ② トロイメア・ゴブリン
 ③ トロイメア・フェニックス
 ④ イヴリース

オルフェゴール・アタック

世良 VS リース

LP4000 LP4000

「俺のターン、ドロ―！」

『おっと、ここで墓地の『星遺物―『星盾』』の効果発動！ ライフを1000払い、このカードを守備表示で特殊召喚！』

『星遺物―『星盾』』

闇属性／レベル 6／守備力 3000

リース：LP4000―1000↓LP3000

『その後、アンタは手札か墓地からモンスター1体を選んで特殊召喚することが出来るわ。出来るなら、だけどね？』

「分かかって言ってるやがる……」

『うふふ……』

本来なら俺も手札からモンスターを特殊召喚することが出来るチャンスなのだが、今フィールドに居るイヴリースの効果のせいで俺はリンクモンスターしか特殊召喚する事が出来なくなっている。

墓地にリンクモンスターが居ればそれを特殊召喚していた所だが、1ターン目な事もあってそれも出来ない。

俺の手札は『壺世壊を揺るがす鼓動』、『バトル・フェーダー』、『ティアラメンツ・メールウ』、『影依融合』、『影依の偽典』、そして、今引いた『魂源への影劫回帰』ブルシャドール・アイオーン

まずは彼女に出してもらおうとしよう。

「手札から、『ティアラメンツ・メールウ』を通常召喚！」

『ティアラメンツ・メールウ』

闇属性／レベル 2／攻撃力 800

「メールウの効果、デッキの上からカードを3枚墓地へ送る」

墓地へ送られたカードは『シャドール・ファルコン』、『死者蘇生』、『サイクロン』。

イヴリースが居なければファルコンも特殊召喚出来ていたが、それ

も出来ない。他のシャドールモンスターが墓地へ行つていけばまだ効果が使えただろうに、これは運がないと言わざるを得ない。

さっさとこの厄介なモンスターには退場してもらおうことにしよう。

「現れるー！ 想いを繋げるサーキットー！」

俺の宣言により、空中にリンク召喚を表すマーカーが出現する。

「召喚条件はリンクモンスター以外のモンスター2体！ メイルウとイヴリースをリンクマーカーにセット！ サイバース世界を自由気ままに駆け巡る。リンク召喚！ リンク2、『I:Pマスカレーナ！』」

『I:Pマスカレーナ』

闇属性／リンク 2／攻撃力 800

『あら？ その女も出てくるのね。てつきり周りをうるちよろしてるだけかと思つたわ』

『ムカツ！ ラッセさんが普段から私を使つてくれないから酷い事言われてますよ！』

「いやあ……まあ……うん」

マスカレーナはそう言うが、人間界こちらにはこちらの事情があるのだから仕方ない。

それに、ハノイの塔の事件が終わればハノイの騎士によるサイバース狩りも少しは落ち着くはずなので、もう少し我慢してもらいたい。

ハノイの塔の事件が終わればブルーエンジェル改め、ブルーメイデンもサイバース族である海晶乙女マリンセスデッキを使っていた。だが、それによつてハノイの騎士に何か突っ込まれたりしていなかったと思うので、大丈夫になるだろうと踏んでいる。

それはそれとして、フィールドからイヴリースが居なくなつたことによつて俺はリンクモンスター以外の特召喚もようやく解禁された。

「手札から、『影依融合』シャドール・フュージョン発動！ 相手フィールドにEXデッキから特殊召喚されたモンスターが居る事で、デッキのモンスターも融合素材とすることが出来る。デッキの『影霊の翼ウエンディ』と『超電磁タートル』を墓地へ送り、融合召喚！」

ソリッドビジョンの演出だろうか。自分のアバター身体が作る影が大

きく広がる。

「輝石の力を受け継ぐ影の姫。輪廻から外れた者達を導く光となれ！

融合召喚！ 現れる、『エルシャドール・ネフィリム』!!」

『エルシャドール・ネフィリム』

光属性／レベル 8／攻撃力 2800

現れるのはこのデッキのエースカードである、ネフィリム。

俺の後ろでその威容を示す様に立ち尽くす彼女の姿は神々しさも感じる。

『あ、あのお……ラッセさん？ その人に私の後ろに立たれると何となく怖いのですが……』

「頼もしいだろ？」

『え？ あ、はい』

ネフィリムはマスカレーナのリンク先に融合召喚されたため、彼女からすれば後ろに立たれている気分なのだろうか。

「墓地へ送られたウエンディと特殊召喚されたネフィリムの効果を発動する。ウエンディの効果で『シャドール・ビースト』を裏側守備表示で特殊召喚する」

『シャドール・ビースト』

闇属性／レベル 5／守備力 1700

「さらに、ネフィリムの効果でデッキから『シャドール・リザード』を墓地へ送る。そして、墓地へ送られたリザードの効果発動！」

『いつまで続くのかしら？』

シャドールデッキ特有の墓地効果と墓地肥やし。

その連続発動にリースは少し辟易している様だ。

「リザードの効果でデッキから『シャドール・ハウンド』を墓地へ送る。そして、墓地へ送られたハウンドの効果発動！ お前のフィールドの

星盾の表示形式を守備表示から攻撃表示へ変更する」

『あー！』

『星遺物―『星盾』』

闇属性／レベル 6／攻撃力 0

防御に長けた星盾であるが、攻撃表示にしていまえば壁にもならな

い脆弱なモンスターだ。

「バトルだ！ ネフィリムで星盾に攻撃！」

ネフィリムから両手から伸びた影系が星盾に絡みつく。

「本来であれば、特殊召喚された星盾はネフィリムの効果によってダメージステップ開始時に破壊されるが」

『星盾は自身の効果によってEXデッキから特殊召喚されたモンスターは効果を受けない……』

「そうだ！ だからそのままネフィリムとの戦闘になる！」

リース：LP3000→2800↓LP200

強大な守備力と強固な耐性を有する星盾だが、その耐性効果が裏目に出て本来なら発生しなかった戦闘ダメージをリースは受ける事になる。

余り発生する事が無いネフィリムによる特殊召喚されたモンスターとの戦闘。その勝敗は当然攻撃力を有さない星盾の負けだ。

『チツ……大層な名前の癖してなんて脆いのかしら』

「リバースカードを2枚セットしてターンエンドだ」

このターンではリースの場のトロイメアの魔物達をどうにかすることは出来なかったが、次の相手ターンには解決出来る。

『私のターン、ドロロー』

「リバースカードオープン！ 『影依の偽典』！」

開かれたのは俺のフィールドに伏せられた罠カード。

「そして、発動と同時に効果を使用する！ 墓地のウエンディとリザードを除外し除外したモンスターを素材として融合召喚する。来い！ 『エルシャドール・ウエンディゴ』！」

『エルシャドール・ウエンディゴ』

風属性／レベル 6／守備力 2800

マスカレーナのもう一つのリンクマーカーの先に『影依の偽典』の効果によってウエンディゴが融合召喚される。そして、融合効果を発動した『影依の偽典』のカードから影系が伸び始める。

『影依の偽典』のもう一つの効果。この効果で特殊召喚したモンスターと同じ属性を持つ相手フィールドのモンスター1体を選んで墓

地へ送る事が出来る。選ぶのは『トロイメア・ゴブリン』だ」

俺の宣言と同時に『影依の偽典』シャドールックから伸びていた影糸はゴブリンに向かつて纏わりつくつと、そのまま墓地へと引きずり込んで行った。

『なるほど！ 対象に取るのではなく、選んで。破壊するのではなく墓地に送る効果だからトロイメアモンスターにも通用するんですね！』

「そう言う事」

マスカレーナの言う通り、『影依の偽典』シャドールックの効果は対象耐性と破壊耐性をすり抜けることが出来る。

これで相互リンクの要となつて居た『トロイメア・ゴブリン』がフィールドに居なくなつた事によつてリースのフィールドのモンスターの耐性は一気に無くなる事になる。

『ふーん。まあ、トロイメアはただの時間稼ぎ。何の問題も無いわね。墓地の『星遺物』『星杯』を除外して効果発動！ デツキから『星遺物』『星冠』を手札に加えるわ』

星冠……。たしか、EXデツキから特殊召喚されたモンスターが発動した効果を無効化するカードだったな。しかも、星冠はリンクマーカーの先に手札から特殊召喚する効果もあつたはずだ。

だとすると、このままりースの行動を続けさせるとマスカレーナの効果は勿論、『トロイメア・ユニコーン』によるバウンス効果も使えなくなつてしまう。

本来だったら相手の動きを見極めてから使いたかったが、仕方ない。

「マスカレーナの効果で俺は今、リンク召喚を行う！」

マスカレーナとウエンディゴが3体分のリンク素材として右、左、下のリンクマーカーに宛がわれる。

「召喚条件はカード名が異なるモンスター2体以上！ マスカレーナとウエンディゴをリンクマーカーにセット！ 憤怒を越えたその先へ、駆け抜ける!! リンク召喚！ リンク3、『トロイメア・ユニコーン』！」

『トロイメア・ユニコーン』

闇属性／リンク 3／攻撃力 2200

黄華の機界騎士ジャックナイトの面影を残す機械部分を開くように展開し、フィールドに舞い降りたのはガラテアを俺の元へと連れて来た張本人。

「まずは墓地へ送られたウエンディゴの効果で墓地の『影依融合』を手札へ加える。そして、リンク召喚に成功したユニコーンの効果を発動だ！」

俺はウエンディゴの効果で手札に加えた『影依融合』を再び墓地へと送る。

「手札を1枚捨てて、フィールドのカードを1枚デッキに戻す。選ぶのは『トロイメア・フェニックス』！」

ユニコーンの身体が輝くと、リースのフィールドに居る『トロイメア・フェニックス』は奴のEXデッキへと戻される。

リンク2モンスターであるフェニックスをデッキに戻すことで、少しでも大きいリンク数のモンスターの召喚の妨害になれば良いのだが……。

『なら、手札の『星遺物―『星冠』』を『トロイメア・ケルベロス』のリンク先に守備表示で特殊召喚するわ』

『星遺物―『星冠』』

闇属性／レベル 6／守備力 2000

『そして、『オルフェゴール・デイヴエル』を通常召喚！』

『オルフェゴール・デイヴエル』

闇属性／レベル 4／攻撃力 1700

リースのフィールドに現れたのは楽器を模した機械族のモンスター。デイヴエルはハープとガーゴイルが合わさったような姿をしている。

オルフェゴールモンスターが出て来たという事は、ここからがこのデュエルの本番となりそうだ。

だが、これでリースの手札は0枚。オルフェゴールは墓地にカードがある事で真価を発揮するテーマだが、デイヴエル1枚からの始動ならまだどうとでもなるはずだ。

『現れなさい、星が導くサーキット！ 召喚条件は「オルフェゴール」

モンスターを含む効果モンスター2体！ 『星遺物―『星冠』』と『オルフェゴール・ディヴェル』をリンクマーカーにセット！ 下らぬ妄執が生み出した機械の器。その身に私を宿して神へと至りなさい！
リンク2！ 『オルフェゴール・ガラテア』！』

『オルフェゴール・ガラテア』

闇属性／リンク 2／攻撃力 1800

『ガラテアちゃん……』

「あいつ……好き勝手言いやるな……」

リースのフィールドに現れたガラテアの姿形は俺やマスカレーナがいつも見ていた彼女と一緒にだ。しかし、彼女が持つ大鎌はこちらへ向けて構えられており、明確に敵意を向けられている。

『リバーズカードオープン！ 『星遺物に蠢く罫』！』

「何！」

『私は墓地と除外ゾーンの星遺物カード5枚、醒存、星盾、星槍、星冠、星杯をデッキに加えてシャッフル。そして2枚ドロウする』

伏せカードはこちらの行動を妨害するカードでは無くドロウカードだったか。

壺系カードに比べれば罫カードなので少し遅く、デッキへ戻すのに選ぶカードも星遺物カードに限定されているが、墓地だけでなく除外ゾーンのカードも選べ、そして、『貪欲な壺』と違ってモンスター・魔法・罫問わず選ぶことが出来る点では優れているカードだ。

これでリースの手札は2枚。分からなくなつて来たな……。

『魔法カード、『星遺物を継ぐもの』発動！ 墓地のモンスター1体をフィールドのリンクモンスターのリンク先に特殊召喚するわ。『トロイメア・ケルベロス』のリンク先に『トロイメア・ゴブリン』を特殊召喚！』

「結局リンクモンスターを揃えられたか……」

結果論だが、ユニコーンによる妨害は余り役に立たなかった。

ケルベロスとゴブリンを合わせてリンク4。そして、ガラテアのリンクマーカーの向きは俺のフィールドに向く右上と奴のフィールドに向く左下。

『再び現れなさい、星が導くサーキット！ 召喚条件はカード名が異なるモンスター2体！』『トロイメア・ケルベロス』と『トロイメア・ゴブリン』をリンクマーカーにセット！ 出でよ！ リンク4！
『トロイメア・グリフォン』！』

光属性／リンク 4／攻撃力 2500

「……厄介なモンスターに、厄介な場所に居座られたな……」

『あら？ このカードの効果は知っている様ね？ このカードがモンスターゾーンに存在する限り、フィールドの特殊召喚されたモンスターはリンク状態でなければ効果を発動できない。これでアンタの頼みの綱の『エルシャドール・ネフィリム』もフィールドではただのモンスターよ』

マスカレーナのリンク先に融合召喚されたネフィリムはメインモンスターゾーンの真ん中に位置している。対して、ユニコーンのリンクマーカーは右、左、下に向いているため、このままではネフィリムの戦闘時効果が使えない。

しかも、グリフォンはリースのフィールドのメインモンスターゾーンの真ん中に鎮座している。グリフォンをEXモンスターゾーンに召喚していたら、そのリンクマーカーをこちらが利用することも出来たのだが、これではそうする事も出来ない。

ガラテアのリンクマーカーが1つこちらのフィールドに向いているが……俺の予想が正しければすぐにガラテアは居なくなるだろう。

『墓地の『オルフェゴール・デイヴェル』を除外して効果発動。デッキから『オルフェゴール・スケルツオン』を特殊召喚よ！』

『オルフェゴール・スケルツオン』

闇属性／レベル 3／守備力 1500

今度は骸骨とドラムセットがモチーフになったであろうモンスターが現れる。

『さらに、魔法カード、『オルフェゴール・プライム』を発動！ フィールドの『オルフェゴール・スケルツオン』を墓地へ送り、2枚ドローク！』

「またドロークカードッ」

リースは無くなった手札をすかさず補充しつつ、キーモンスターであるスケルトンと同時に墓地へ送っている。

『さらに、『オルフェゴール・ガラテア』の効果発動！ 除外されている『オルフェゴール・デイヴエル』をデッキに戻し、デッキから『オルフェゴール・バベル』をセット。そしてそのまま発動よ！』

リースがフィールド魔法である『オルフェゴール・バベル』を発動すると、機械で出来た巨大な塔が地中から音を立てながらせり上がって来る。

「ユニコーンの効果をガラテアに使うことが出来れば……」

『オルフェゴール・バベル』の効果によって、私は相手のターンでもオルフェゴールモンスターの効果を使う事が出来るようになる』

正確にはフィールドのオルフェゴールリンクモンスター及び墓地のオルフェゴールモンスターだが、着々と面倒なモンスターのための場が整えられてしまっている。

『さあ、行くわよ！ このカードは自分フィールドの「オルフェゴール」リンクモンスターの上に重ねてX召喚する事もできる。『オルフェゴール・ガラテア』1体でオーバーレイ・ネットワークを構築。

精々私の為に働きなさい！ エクシーズ召喚！ ランク8

『シーオルフェゴール宵星の機神『デインギルス』!!』

『シーオルフェゴール宵星の機神『デインギルス』

闇属性／ランク 8／攻撃力 2600

エクシーズの渦から現れる巨人。

その身に見合うこれまた巨大な槍を携えたそのモンスターはオルフェゴールデッキのエースカードの1枚。

その強力な効果から1ターンに1度しかデインギルスは召喚出来ないという珍しいデメリット効果を持っている。そんなデメリットを課せられているのはこのカードが特殊召喚に成功するたびに厄介な効果を発動することが出来るからだ。

『シーオルフェゴール宵星の機神『デインギルス』の効果発動！ 相手フィールドのカード1枚を選んで墓地へ送る。私は『エルシャドール・ネフィリム』を選ぶわ』

「くっ……俺は墓地へ送られたネフィリムの効果で『影依融合』を手札に加える」

デインギルスが手に持つ大槍を構えると、勢いよく投擲する。その槍は俺のフィールドに存在するネフィリムを一撃で貫いた。

効果が発動できなくとも攻撃力が2600のデインギルスならネフィリムで戦闘破壊することが出来る。しかし、デインギルスの特殊召喚時に発動できる効果の一つ目である「カードを選んで墓地へ送る」と言う強力な除去効果には成す術もない。

何より問題なのが、デインギルスのこの効果がエクシーズ召喚成功時ではなく、特殊召喚成功時に発動する事だ。リースの墓地にあるオルフェゴールモンスターを蘇生させるスケルツオン。フィールドで聳え立ち、俺のターンでもオルフェゴールモンスターの効果を発動できるようにするバベル。

これらのカードが揃っている事でフィールドのデインギルスを処理してもこちらの一手を確実に潰してくる妨害札が一つ確定している事になる。

『さあ、バトルよ！』シーオルフェゴール『宵星の機神デインギルス』で『トロイメア・ユニコーン』を攻撃！』

「墓地の『超電磁タートル』を除外して効果発動！ バトルフェイズを終了させるー！」

『ふふ。まあ、そう来るわよね。でも、次はもう無いわ。墓地の『オルフェゴール・スケルツオン』を除外して墓地の『オルフェゴール・トロイメア』を準備表示で特殊召喚』

『『オルフェゴール・トロイメア』？ ……最初のターンに醒存で墓地に送られていたか。だからマーメイドの効果でこちらでは無くイドリースを呼び出したんだな』

『オルフェゴール・トロイメア』

闇属性／レベル 7／守備力 2000

そのモンスターはオルフェゴールとトロイメアの二つのテーマを冠している事からもその関係性が伺える。「リース」と言う名前こそ含まれていないが、このモンスターも奴に関連するカードの1枚だ。

ガラテアの中に潜む悍ましい何かが露わになろうとしているその姿はリースの怨念そのものだろう。

『さらに、墓地の『星遺物―星杖』を除外して、除外されている『オルフェゴール・スケルツオン』も守備表示で特殊召喚よ』

『オルフェゴール・スケルツオン』

闇属性／レベル 3／守備力 1500

『カードを2枚伏せてターンエンド』

「……」

デインギルス蘇生させるための手段であるスケルツオンを場に出して来た？

明らかに不自然な動きだ。

デインギルスを墓地に送らなかつたのはデインギルスが持つ身代わり効果を使うためだろう。あのカードはフィールドのカードが破壊される時、その代わりにX素材を1つ取り除く事が出来る。しかも、破壊されるカードに縛りは無く、モンスター・魔法・罫を単体、全体除去からX素材一つで守ることが出来る。

仮に俺が次のターンに『サンダー・ボルト』や『ハーピィの羽根帚』を

引いたとしてもX素材一つで守られてしまう。

だが、墓地にいてこそ真価を発揮するスケルツオンやオルフェゴール・トロイメアをわざわざフィールドに揃える意図が読めない。ただの壁モンスター……と言う事も無いだろう。

そうなる、あの2枚の伏せカードが怪しいか。

「俺のターンだ！」

《left》

《box:absolute(1/1),overhidden,z9,w2,h3,lh3,bg#0000,bg#673E24》《box》
《left》《left》

《box:absolute(1/1),overhidden,z9,w2,h3,lh3,bg#0000》《box》《left》《left》

①

```
1, w1, h2
《box:absolute》0.3/0, overridden, z
《box》
《left》
《left》
```

```
1, w1, h2
《box:absolute》0.3/0, overridden, z
《left》
w2, h3, lh3, bo#000《box》left
《left》
《box:absolute》1/1, overridden, z9,
ft
w2, h3, lh3, bo#000《box》left《left》
《box:absolute》1/1, overridden, z9,
《left》
w2, h3, lh3, bo#000, bg#673E24《box》
《left》
《box:absolute》1/1, overridden, z9,
ft
```

④

l, $\langle\langle$ box $\rangle\rangle$ $\langle\langle$ left $\rangle\rangle$ $\langle\langle$ left $\rangle\rangle$
w1, absolute(0.3/0), overridden,
h2 $\rangle\rangle$ z

③

l, $\langle\langle$ box $\rangle\rangle$ $\langle\langle$ left $\rangle\rangle$ $\langle\langle$ left $\rangle\rangle$ \blacktriangleright ?
w1, absolute(0.3/0), overridden,
h2 $\rangle\rangle$ z



②



l, $\langle\langle$ box $\rangle\rangle$ $\langle\langle$ left $\rangle\rangle$ $\langle\langle$ left $\rangle\rangle$
w1, absolute(0.3/0), overridden,
h2 $\rangle\rangle$ z

```

1,
w1, h2
《box:absolute(0.3/0),overhidden,
z
《left》
《/box》《/left》《left》空白《/left》
▶?

```



① ◀?

```

1,
w1, h2
《/box》《/left》《left》空白《/left》《left》
《box:absolute(0.3/0),overhidden,
z

```

```

1,
w1, h2
《/box》《/left》空白《/left》《left》
《left》

```

```
1, <<box:absolute>>/left <<left>>  
w1, <<box:absolute>>/left, overridden,  
h2 <<left>>  
z
```

```
1, <<box:absolute>>/left <<left>>  
w1, <<box:absolute>>/left, overridden,  
h2 <<left>>  
z
```

```
1, <<box:absolute>>/left <<left>>  
w1, <<box:absolute>>/left, overridden,  
h2 <<left>>  
z
```

2

```

《box:absolute(1/1), overridden, z9,
《left》《left》
w2, h3, lh3, b0#000, bg#673E24》《box》
《box:absolute(1/1), overridden, z9,
ft》
w2, h3, lh3, b0#000》《box》《left》《left》
《box:absolute(1/1), overridden, z9,
ft》
w2, h3, lh3, b0#000》《box》《left》《left》
《left》
《box》《left》

```

```

1, w1, h2》
《box:absolute(0.3/0), overridden, z
《box》《left》《left》

```


w2, h3, lh3, bo#000》》/box》》/left》》le
ft》》
《box: absolute (1/1), overhiddn, z9,
w2, h3, lh3, bo#000, bg#A8307D》》**③**》》/b
ox》》/left》》

① オルフエゴール・スケルツオン

② トロイメア・グリフォン

③ 宵星の機神デインギルス

④ オルフエゴール・トロイメア

ファイルド：オルフエゴール・バベル

① トロイメア・ユニコーン

② シヤドール・ビースト

③ 影依の偽典

オルフェゴール・リリース

世良 VS リース

LP4000 LP2000

「ドロー！」

引いたカードは『超融合』。実質相手のモンスターを何でも除去できる優秀なカード。シャドールを使っている俺ならシャドールモンスターと相手の何らかのモンスターで属性シャドールの融合体を利用する事が出来る。

リースのデッキの中核モンスターがオルフェゴールと言う事なら、シャドールモンスターと闇属性モンスターで融合召喚出来るミドラッシュを融合召喚することが出来るはずだ。

手札の『ティアラメンツ・ハートビーツ 壱世壊を揺るがす鼓動』を使って相手のバベルを手札に戻すのも一案だが、2枚の伏せカードも怖い。それに、『ティアラメンツ・ハートビーツ 壱世壊を揺るがす鼓動』を使うために墓地に送るカードも出来れば選びたいところだ。シャドールモンスターかティアラメンツモンスターを引き込めれば良いのだが……。

「何にしても、まずはグリフォンの処理からだな。『シャドールブック 影依の偽典』の効果を使う。墓地のウエンデイゴとネフィリムを除外して融合召喚！」

再び現れる、『エルシャドール・ネフィリム！』

『エルシャドール・ネフィリム』

光属性／レベル 8／攻撃力 2800

俺はデッキに入れていた2枚目のネフィリムをユニコーンのリンク先に特殊召喚する。ネフィリムを素材にネフィリムを融合する必要がある場面は結構あるため、当然ネフィリムは複数枚採用だ。

『またそのモンスター？ 芸が無いわね』

「言ってる。さらに、『シャドールブック 影依の偽典』の効果でネフィリムと同じ光属性のグリフォンを墓地へ送る」

ゴブリンを墓地へ送った時と同様にグリフォンは『シャドールブック 影依の偽典』によって墓地へ送られる。

グリフォンは特殊召喚されたモンスターの効果を制限するモンス

ターだが、『影依の偽典』は罨カードであるため、問題なく効果を利用できる。

そして、グリフォンが居なくなった事によってネフィリムの効果も使うことが出来る。

「ネフィリムの効果でデッキから『シャドール・ドラゴン』を墓地へ送る。そして、墓地へ送られた『シャドール・ドラゴン』の効果！このカードが墓地へ送られた場合、フィールドの魔法・罨カード1枚を対象としてそのカードを破壊する。俺は右の伏せカードを破壊する」『カードを破壊される代わりに』宵星シオールフェゴールの機神デインギルス』のX素材を1つ取り除くわ』

リースは伏せカードを守って来た。

1つしかない素材を使って守ったという事は、この場面で破壊されたくないカードと言う事か？

なんにしても、これでデインギルスの身代わり効果は使い切らされた。

「裏側守備表示の『シャドール・ビースト』を反転召喚！」

『シャドール・ビースト』

閻属性／レベル 5／攻撃力 2200

「ビーストの効果で2枚ドロロー！」

ドロローカードは『PSYフレームギア・Y』と『PSYフレーム・ドライバー』。嘘だろ？ と言いたくなるドロローだ。

「……その後、手札を1枚捨てる」

今引いた『PSYフレーム・ドライバー』は墓地へ行ってもらおう。後攻の捲り札として採用している『PSYフレームギア・Y』だが、デュエル中盤となると使いにくい。申し訳ないが、ここはコストとして使わせてもらうことにしよう。

「現れるー！ 想いを繋げるサーキット！ 召喚条件はカード名が異なるモンスター2体以上！ ユニコーンとビーストをリンクマーカーにセット！ その翼で怠惰な心を吹き飛ばせ！ リンク召喚！ リンク2、『トロイメア・フェニックス』！」

『トロイメア・フェニックス』

炎属性／リンク 2／攻撃力 1900

ドラゴンメイド喫茶で出会ったフェニックスだが、あの後デュエルデイスクのカード一覧を眺めていたら何故か登録されていた。それはガラテアと共に出会った他のトロイメアモンスター達も同様だが、フェニックスの効果は非常に有用なのでデッキに採用する事になっていた。

「手札を1枚捨ててフェニックスの効果発動！ 相手フィールドの魔法・罫カード1枚を破壊する。俺が対象とするのは……」

ここで少し思考する。

本来であればこちらのターンで好き勝手させないためにもバベルを破壊するべきだ。しかし、先ほどシャドール・ドラゴンの効果で破壊されるのを防いだあのカードも気になる。

破壊対象に選ばれたとしても、使えるのであればあのタイミングで使ってしまったえばディンギルスの身代わり効果を温存できたはずだ。それをしなかったという事は発動タイミングが限られるため発動できなかつたからだと思われる。

例えば、『聖なるバリアー―ミラーフォース―』の様な攻撃反応型の罫カード。仮にそうだとすれば、このターン、俺の攻撃は防がれて勝ちまで持ち込めない。

バベルは言わば見えてる地雷。バベルの効果によつて俺のターン中に一手を妨害されることは確定しているが、逆に言えば見えているのなら避ける事も、敢えて踏み抜くことも出来る。何より、今リリースの墓地にはディンギルスは勿論スケルツオンも居ない。この2枚のカードが墓地に揃つて初めて俺への妨害札として成り立つ。

だとするならば破壊するべきは……

「右の伏せカードだ！」

『アハハ！ アハハハハハ！ 引つ掛かった！ リバースカードオーブン！ 『オルフェゴール・リリース』!!』

「!? ブラフ!?」

俺が選んだ右側の伏せカード、『オルフェゴール・リリース』は攻撃反応型の罫カードでも何でもない。俺がシャドール・ドラゴンの効果

を発動した時にデインギルスの身代わり効果を使わずとも、その時に効果を発動できるカード！

『自分フィールドの機械族モンスター2体、『オルフェゴール・スケルツオン』と『宵星の機神^{シューオルフェゴール}デインギルス』をリリース！』

スケルツオンとデインギルスが『オルフェゴール・リリース』の効果によって墓地へと送られる。

『そして、私は自分の墓地からモンスターを特殊召喚する！ しかも、相手のフィールドにリンクモンスターが存在する場合、特殊召喚するモンスターを2体に出来る！ 復活しなさい、『宵星の機神^{シューオルフェゴール}デインギルス』、『オルフェゴール・ガラテア』！』

『宵星の機神^{シューオルフェゴール}デインギルス』

闇属性／リンク 8／攻撃力 2600

『オルフェゴール・ガラテア』

闇属性／リンク 2／攻撃力 1800

「デインギルスの特殊召喚を許してしまったか」

『特殊召喚された『宵星の機神^{シューオルフェゴール}デインギルス』の効果によってカード1枚を選んで墓地に送る。さて、そろそろその目障りなカードには消えたらおうかしらね』

「……」

リースが指を差したカード、『影依偽典^{シャドールーク}』に向かってデインギルスは大槍を投げつける。

これまで戦線維持の要としての役割を全うしていた『影依偽典^{シャドールーク}』がとうとう墓地へ送られてしまった。

だが、これでこのターン奴はデインギルスを特殊召喚することは出来なくなった事になる。

今、俺のEXゾーンはリンクマーカーが機能しないフェニックスが居る。『影依融合』で炎属性であるフェニックスとシャドルモンスターを素材に『エルシャドル・エグリスタ』を融合召喚し、ガラテアに攻撃すればリースの残りLP200を削りきるには十分だ。仮に攻撃力を変動させる効果を使われるとしても伏せている^{ブルシャドル・アイオーン}『魂源への影劫回帰』で1000ポイントまではカバー出来る。

油断することは出来ない。しかし、好機であることも事実。

「手札から、『影依融合』発動！」

『リバースカードオープン！』『オルフェゴール・クリマクス』！』
「なっ!?」

『ふふ……。何と言おうともう遅いわ。自分フィールドに「オルフェゴール」リンクモンスターが存在し、モンスターの効果・魔法・罠カードが発動した時に発動できる。その発動を無効にし除外する』

発動された『オルフェゴール・クリマクス』から、デインギルスが持つ大槍が射出され、俺が発動した『影依融合』を貫きながら次元の狭間の様な空間へと押しやる。

これまでシャドール融合モンスターが墓地へ送られるたびに墓地の『影依融合』を回収して利用していた訳だが、除外されてしまつてはそうすることも出来ない。

だが、幸いにして俺の手札にはもう一つの融合カード、『超融合』がある。リースの場に伏せカードは無い。これでエグリスタを融合召喚して攻撃すれば……

『その眼、まだ手段はあるって所かしら。そんなアンタに良い事を教えてあげる』

「何?」

丁度手札から『超融合』を切ろうとした時、リースが話し始める。

『確かに、私を倒せば精霊のエネルギーをデータという形で留める事が出来なくなって精霊のエネルギーは解放されるでしょうね。ところで、今、この世界のデータ^{エネルギー}を集めているあの塔とこの身体はリンク状態にあるわ。そんな状態であの塔から一部とはいえ一気に、そして突然エネルギーが解放されたら、リンク状態のこの身体はどうなると思おう?』

『え? それって……』

今までデュエルを静観していたマスカラーナも思わずと言った風に声を漏らす。

「……はったりだ。ガラテアの身体は膨大なエネルギーも受け入れられるというのはリース自身が語った事だ」

『ふう……分かってないわね。何事も物事には順序と言うものがあるの。最初に設定したプロセスを規定通りに経て機械は初めて求めた性能通りに機能するものよ。それとも、アンタは何の調節もしていない電気でパソコンが動くと思ってる?』

「……」

『まあ、信じるも信じないもアンタの自由よ』

俺がリリースに勝ったら……ガラテアが……?

アイツの言う事を信じるのか? だが、そうならないという保証も……ない……。

『さてと、余談はこれくらいにしてここで『オルフェゴール・ガラテア』の効果も使っておこうかしらね。除外されている『星遺物―『星杖』』をデッキに戻して『オルフェゴール・アタック』をセットさせてもらうわ。安心しなさい? このカードはこのターン使う事は出来ないから』

思考の渦に嵌まってしまい言葉を発さない俺を余所に、リリースはデュエルを進めて行く。

どちらにしても、このまま何もしなかったら俺が負ける。

「……バトルだ。ネフィリムでデインギルスに攻撃」

普通の攻撃力2800のモンスターであるならば、攻撃力2600のデインギルスを戦闘破壊する事で俺の勝利となるが、ネフィリムの効果によってダメージ計算が行われる前に特殊召喚されたデインギルスは破壊されるため、リリースは戦闘ダメージを受けない。

「……フェニックスでガラテアを……攻撃!」

『あら、酷いわ。お兄ちゃんなのに』

リリース:LP200→100↓LP100

フェニックスの羽ばたきによって、ガラテアは破壊される。

フェニックスとガラテアの攻撃力の差ではリリースにとどめを刺すことは無い。

「……カードを1枚伏せてターンエンドだ」

俺は持て余してしまった『超融合』をフィールドに伏せる事しか出来なかった。

1, w1, h2
《box:absolute(0.3/0), overridden, z
《box》《left》《left》

1, w1, h2
《box:absolute(0.3/0), overridden, z
《left》
w2, h3, lh3, bo#000》《box》《left》
《left》
《box:absolute(1/1), overridden, z,
ft》
w2, h3, lh3, bo#000》《box》《left》《le
ft》
《box:absolute(1/1), overridden, z,
ft》
w2, h3, lh3, bo#000, bg#673E24》②》《b
ox》《left》《left》
《box:absolute(1/1), overridden, z,
ft》
w2, h3, lh3, bo#000》《box》《left》《le
ft》
《box:absolute(1/1), overridden, z,
ft》
w2, h3, lh3, bo#000》《box》《left》《le
ft》
《left》

⟨⟨b
o
x
:a
b
s
o
l
u
t
e
(0.
3
/0),
o
v
e
r
h
i
d
d
e
n,
z
/⟨⟨b
o
x
⟩⟨⟨l
e
f
t
⟩⟨⟨l
e
f
t
⟩

1,
w
1,
h
2
⟨⟨b
o
x
:a
b
s
o
l
u
t
e
(0.
3
/0),
o
v
e
r
h
i
d
d
e
n,
z
/⟨⟨b
o
x
⟩⟨⟨l
e
f
t
⟩⟨⟨l
e
f
t
⟩

1,
w
1,
h
2
⟨⟨b
o
x
:a
b
s
o
l
u
t
e
(0.
3
/0),
o
v
e
r
h
i
d
d
e
n,
z
/⟨⟨b
o
x
⟩⟨⟨l
e
f
t
⟩⟨⟨l
e
f
t
⟩

①

▲ 1, $\langle\langle$ box $\rangle\rangle$ $\langle\langle$ box $\rangle\rangle$ $\langle\langle$ left $\rangle\rangle$ $\langle\langle$ left $\rangle\rangle$ $\langle\langle$ left $\rangle\rangle$ 空白 $\langle\langle$ left $\rangle\rangle$ $\langle\langle$ left $\rangle\rangle$ $\langle\langle$ left $\rangle\rangle$
w1, absolute(0.3/0), overridden, z
h2 $\rangle\rangle$

1, $\langle\langle$ left $\rangle\rangle$ 空白 $\langle\langle$ left $\rangle\rangle$ $\langle\langle$ left $\rangle\rangle$ $\langle\langle$ left $\rangle\rangle$
w1, absolute(0.3/0), overridden, z
h2 $\rangle\rangle$

①

1, w1, h2 $\rangle\rangle$

```
1, <<box>>/<<left>><<left>>  
w1, absolute(0.3/0), overridden,  
h2<<left>>
```

```
1, <<box>>/<<left>><<left>>  
w1, absolute(0.3/0), overridden,  
h2<<left>>
```

```
1, <<box>>/<<left>><<left>>空白<<left>>  
w1, absolute(0.3/0), overridden,  
h2<<left>>
```


《box:absolute(1/1), overhiddenn, z9,
 w2, h3, lh3, bo#000》《box》《left》《le
 ft》
 《box:absolute(1/1), overhiddenn, z9,
 w2, h3, lh3, bo#000, bg#673E24》③《b
 ox》《left》《left》
 《box:absolute(1/1), overhiddenn, z9,
 w2, h3, lh3, bo#000, bg#673E24》④《b
 ox》《left》《left》

①オルフェゴール・トロイメア

②オルフェゴール・アタック

ファイルド：オルフェゴール・バベル

①トロイメア・フェニックス

②エルシャドル・ネフィリム

③魂源への影劫回帰

④超融合

お兄ちゃんの選択

世良 VS リース

LP4000 LP1000

『ドロー！』

結局ガラテアの無事を確保しつつ勝利する方法が思い浮かばないまま、ターンはリースへと渡る。

『手札から、『オルフェゴール・カノーネ』を召喚』

『オルフェゴール・カノーネ』

閻属性／レベル 1／攻撃力 500

現れたのはメインデッキに入る最後のオルフェゴールモンスター。カノーネはオルフェゴールモンスターの中で唯一のチューナーだが、リースのデッキを考えればシンクロモンスターが出てくるとは考えにくい。それならば当然カノーネも墓地へ送ってその効果を使ってくるだろう。

『墓地の『オルフェゴール・スケルツオン』を除外して『オルフェゴール・ガラテア』を特殊召喚！』

『オルフェゴール・ガラテア』

閻属性／リンク 2／攻撃力 1800

『現れなさい、星が導くサーキット！ 召喚条件は「オルフェゴール」モンスターを含む効果モンスター2体以上！ 『オルフェゴール・トロイメア』、『オルフェゴール・カノーネ』そして、リンク2の『オルフェゴール・ガラテア』をリンクマーカーにセット！ 神の器の成り損ない。せめて華麗なメロディでも鳴らして見せなさい。 リンク4！ 『オルフェゴール・オーケストリオン』！』

『オルフェゴール・オーケストリオン』

属性／リンク 4／攻撃力 3000

オーケストリオン。その元となった楽器もまたそのままオーケストリオンであり、それ一つだけでまるでオーケストラの様に様々な音を鳴らすことが出来る楽器だという。小型のパイプオルガンとして

認識されることもあるその楽器だが、『オルフェゴール・オーケストリオン』は見上げて足りない程巨大で、威圧感すら感じる程だった。「フェニックスのリンク先にオーケストリオンを……」

オーケストリオンには除外されている機械族モンスターを3体デッキに戻す事で相手フィールド、つまり俺の場のリンク状態のモンスターの攻撃力・守備力を0にし、効果を無効化する効果を持つ。

このままでは攻撃力を0にされたフェニックスを通して大ダメージを食らう事は明らかだ。

伏せカードである『超融合』を使い、攻撃力が0になったフェニックスを素材にエグリスタを融合召喚すれば……ダメだ。リースの墓地リソースを考えれば例えエグリスタで特殊召喚を一度無効化してもディングルスの特異召喚までたどり着くだろう。

直接攻撃は『バトルフェーダー』があるから防ぐことが出来る。フェニックスをエグリスタの素材に使おうと、使わまいと、結局直接攻撃を『バトルフェーダー』を使って防ぐなら、ギリギリまで手札を温存できる選択肢を取るべきか？

『墓地の『オルフェゴール・クリマクス』を除外して効果発動！ デッキのモンスター及び除外されている自分のモンスターの中から、機械族・闇属性モンスター1体を選んで手札に加える。私はデッキの『オルフェゴール・デイヴェル』を除外して効果発動！ 手札の『オルフェゴール・デイヴェル』を特殊召喚！』

『オルフェゴール・デイヴェル』
闇属性／レベル 4／攻撃力 1700

『さらに！ 墓地の『オルフェゴール・トロイメア』を除外し、フィールドの『オルフェゴール・オーケストリオン』を対象として効果発動！ デッキから「オルフェゴール・トロイメア」以外の機械族・闇属性モンスター1体を墓地へ送る。墓地へ送るのは『星遺物―『星杖』』！ そして、『オルフェゴール・オーケストリオン』の攻撃力は『星遺物―『星杖』』のレベル×100アップ！』
『オルフェゴール・オーケストリオン』

属性／リンク 4／攻撃力 3000↓攻撃力 3800

『こ、攻撃力3800!? ヤバイですよラッセさん!』

「……まだ耐えられる。ライフポイントが0にならない限りは負けじゃない」

仮にレベル10の閻属性・機械族モンスターを墓地に送られていたならエグリスタの融合召喚を考えていたが、まだ動かない方が良い。

『そして、墓地の『星遺物―星杖』を除外して、除外ゾーンの『オルフェゴール・スケルツオン』を守備表示で特殊召喚するわよ』

『オルフェゴール・スケルツオン』

閻属性／レベル 3／守備力 1500

先ほどガラテアの蘇生に使われたスケルツオンが除外ゾーンからの復帰を果たす。これで再び墓地からデインギルス等特殊召喚するための目途が立った訳だ。

『もう一度行くわよ! 現れなさい、星が導くサーキット! 召喚条件は「オルフェゴール」モンスターを含む効果モンスター2体! 『オルフェゴール・デイヴェル』と『オルフェゴール・スケルツオン』をリンクマーカーにセット! カワイイ私のお人形ちゃん? 来なさい! リンク2! 『オルフェゴール・ガラテア』!』

「!、そう来るか!」

『オルフェゴール・ガラテア』

閻属性／リンク 2／攻撃力 1800

再びフィールドに降り立つガラテア。オーケストリオンのリンクマーカーはフェニックスに向いているもの以外は全てフィールド外を指し示しており、使うことは出来ない。しかし、オーケストリオンはフェニックスのリンクマーカーが向いているメインモンスターゾーンにリンク召喚されているため、EXモンスターゾーンが空いている。

このタイミングで態々ガラテアをリンク召喚したのは素材を持ったデインギルスフィールドに立たせつつ、次のターンで墓地にあるデインギルスの特殊召喚を狙うためだろう。

『『オルフェゴール・ガラテア』1体でオーバーレイ・ネットワークを

構築。エクシーズ召喚！ ランク8 『宵星の機神シーオルフェゴールデインギルス』!!』
『宵星の機神シーオルフェゴールデインギルス』

闇属性／リンク 8／攻撃力 2600

『宵星の機神シーオルフェゴールデインギルス』の効果でもう一度アンタのお気に入りのお人形さんには墓地へ行ってもらおうわよ』
「ッー」

デインギルスが手に持つ大槍を投げる構えを取る。

ここは『超融合』で融合素材にしてネフィリムを逃がして……いや、デインギルスの効果は対象を取らない効果だ。それだと融合召喚された後のエグリスタを墓地へ送られてしまい、手札をロスするだけの結果に終わってしまう。

フェニックスが俺のEXゾーンにまだ存在する状況では相手のモンスターを素材にして融合する事も出来ない。

最早ここで動く訳にはいかなかった！

「……墓地へ送られたネフィリムの効果で『影依の偽典シャドールック』を手札に加える」

『ふふふ……これでアンタの頼みの綱も居なくなったわね。『オルフェゴール・オーケストリオン』の効果！ 除外されている『オルフェゴール・デイヴエル』、『オルフェゴール・カノーネ』、『星遺物―『星杖』』をデッキに戻し、リンク状態の『トロイメア・フェニックス』の攻撃力を0にし、効果も無効化よ！』

『トロイメア・フェニックス』

炎属性／リンク 2／攻撃力 1900↓ 攻撃力 0

オーケストリオンから発せられる奇妙な音色を聞かされたフェニックスはその力を奪い取られてしまう。また、フェニックスの相互リンク状態の時に戦闘破壊されない効果も消されてしまう。

『さあ、これで終わりよ！ バトル！ 『オルフェゴール・オーケストリオン』で『トロイメア・フェニックス』に攻撃！』

「うわっ!?!」

『ラッセさんー!』

世良：LP4000↓LP2000

フェニックスの力を奪い取った時の音色とは違い、今度は衝撃波を伴う様な爆音を鳴らすオーケストリン。その衝撃はフェニックスを破壊するだけに留まらず、俺の身体を吹き飛ばす程の力を有していた。

マスカレーナは俺を受けてくれてくれようとしたが、精霊体の彼女では俺に物理的に干渉する事は出来ず、そのまま壁に打ち付けられる。

「こ、この衝、撃……は……」

LINK VRAINS内ではデュエルの緊張感を高め、臨場感を感じるためにダメージを受けた時にある程度の衝撃を感じる様に設計されている。勿論、その衝撃によってデュエリストの肉体や精神に影響を及ぼすようなレベルではない。

しかし、今俺が受けた衝撃はこれまでLINK VRAINSでのデュエルで受けたものと比べ物にならない程の衝撃だった。

頭がクラクラしてまるで考えが纏まらない。

「まさか……LINKのVRAINSで……闇の、ゲーム……だとも……言うのか……」

『あら？ 今更気が付いたの？ ああ、そう言えばアンタ、今まで上手い事ダメージを受けるのを避けていたわね』

攻撃力3800と言う、ほぼ初期ライフと同等のダメージは俺の精神に多大な負荷を掛けるには十分すぎた。

これは幸いと言うのか分からないが、かつてペルレイノで一度経験した事もあって意識を手放すまではいかなかった。

『でも、もう苦しまなくて良いのよ？ この攻撃で終わりだから。行きなさい』シールフォルフェゴール『宵星の機神デインギルス』

『ラッセさん！ 早く手札のカードを!!』

「……て、手札の……」

ダメだ。アバターのはずなのに本当に身体がボロボロになっている様で立っているだけで精一杯だ。『バトルフェーダー』をプレイする事が出来ない。

間に合わない。

『ダイレクトアタック』

そのリースの言葉と共に、今まで俺のカード達に向けられていた
デインギルスの大槍が今度は俺に向かって投げられる。

『んん？』

「……あれ？」

朦朧としながらも、俺の意識は未だ消えない。

ゆつくりと頭を動かして横を見れば、俺を外した大槍が地面に突き
刺さっている。

そして、今度は自分のフィールドを見る。

『バトルフェーダー』

闇属性／レベル 1／守備力 0

『バトルフェーダー』が……」

『良かった……ギリギリ間に合ったんですね』

フェーダーの効果発動が間に合った？ 本当に？

いや、明らかに俺は意図して手札の『バトルフェーダー』をデュエ
ルディスクに置いてはいない。無意識のうちに手が動いたのか？

よく分からないが、なんにしてもこれでこのターンを生き延びられ
たのは事実だ。

『チツ……しぶといわね……。まだそんなカードを握っていたなん
て。ふん、でも次の私のターンで今度こそ本当に終わりよ。ターンエ
ンド』

『オルフェゴール・オーケストリオン』

属性／リンク 4／攻撃力 3800↓攻撃力 3000

だが、劣勢の状況であることに変わりはない。

リースの場にはX素材を持ったデインギルス。未だバベルは健在
で墓地にはスケルツオンと2枚目のデインギルスが揃っている。

この状況をひっくり返すには何をドロースればいい？

『サンダー・ボルト』か？ 駄目だ。デインギルスの効果でリースのモンスターを破壊することは出来ない。

2枚目の『影依融合』か？ 駄目だ。融合召喚したモンスターは墓地のデインギルスによって処理される。

『死者蘇生』でリースの墓地のデインギルスを奪って……って、クソツ！ 『死者蘇生』は最初のターンで既に墓地に送られている。それに、使えたとしても『死者蘇生』にスケルツオンの効果をチェーンすれば逃げられる。

なら、『ティアアラメンツ・ハートビーツ壺世壊を揺るがす鼓動』でバベルをデッキに戻してから……いや、リースの場には『オルフェゴール・アタック』が伏せられている。その対処もしなければいけない。

だとすると……

『ちよつとー、早くカードを引きなさいよ。それとも、デュエル続行不可で負けを認める？』

「何を馬鹿なことを」

『ねえ、ここでサックリ負けを認めてくれるのなら最初の賭けは無しにしてあげても良いのよ？』

リースは俺の返答を待つこともせずしゃべり続ける。

『アンタが邪魔をしないのなら、私は力を手に入れられてハッピー。この身体も壊れなくてアンタもハッピー。まあ、この身体に入ってた意識は消えてしまうかもしれないけれど、大した問題ではないでしょう？ この身体的设计思想を考えれば元からそう言う運命だったのだから』

「……」

『あー！ そうだ！ 良い事を考えた！ 何なら、全てが終わった後にアンタの事を「お兄ちゃん」として見てあげても良いわよ？ アンタ、欲しかったんでしょ？ 妹が？ そうでしょ？』

「……」

『これこそみんなが幸せになる選択と言うやつよ。ね？ お兄ちゃん？』

「……………」

『……ラッセさん?』

……はあ。

憤りや怒りを乗り越して逆に頭がスッキリして来たぜ。

「リース」

『なあに? お兄ちゃん?』

デュエルディスクが装着された左腕をゆっくりと持ち上げる。

さっきまで感じていた痛みや気だるさが嘘だったかのように感じない。

「一つ、言っておく」

右手をデツキトップへと運ぶ。

デツキに添えた右手は少し離れているはずなのにカードから熱を感じる。

「俺は!! ガラテアの!!! お兄ちゃんだああああああああああああああああああ!!! ドローおおおおおおおお!!!」

渾身の力を込めて勢いよく引き抜いたカードをチラリと見た俺は九割の困惑と一割の納得を胸にデュエルの続行を決意する。

「俺の墓地にはマスカレーナ、ユニコーン、フェニックス。お前のフィールドのオーケストリオン、墓地のゴブリン、ケルベロス、グリフォン、マーメイド。そして、ガラテアの9種類のリンクモンスターが居る」

俺が名を挙げたモンスター達がフィールドではなく、俺を囲むようにして現れる。

『な、何が起きているの?』

「このカードはお互いのフィールド・墓地にリンクモンスターが8種類以上存在する場合のみ特殊召喚できる」

マスカレーナだけは俺の傍に残り、他8体のリンクモンスター達は空へと昇っていく。また、トロイメアの魔物達はその姿を機械騎士のコアへと変えていく。

リンクモンスター達が開いた空に開いた空間から青白い光が漏れ出している。

「手札から特殊召喚！ その力はただ一人のため。だが、今はその真なる神の力を俺に貸してくれ！ 顕現せよ！ 『双星神 a | v i d a』 a』!!」

『双星神 a | v i d a』

光属性／レベル 11／攻撃力 3500

『そ、そんな事、あるはずがッ!?!』

「a | v i d a の効果発動！ このカードが特殊召喚に成功した場合、このカード以外の、お互いのフィールド・墓地のモンスター及び除外されているモンスターを全て持ち主のデッキに戻す！」

『！ 墓地のスケルツォンの効果っ』

「無駄だ！ この効果の発動に対して魔法・罠・モンスターの効果は発動できない!!」

a | v i d a が持つ剣を天に掲げると、青白い光が逆巻きながらその剣に集まっていく。

「全てをゼロに戻せ!!」

a | v i d a の効果によってお互いのフィールド・墓地のモンスター及び除外されているモンスターがデッキに戻る。ただし、デインギルスのX素材となって居た方のガラテアだけは墓地へと送られる。

リースの場には発動条件を満たせない『オルフェゴール・アタック』と墓地とフィールドからオルフェゴールモンスターが居なくなつたことで無用の長物と化した『オルフェゴール・バベル』のみ。

「……バトルだ」

『ちよ、ちよつと待ちなさい！ 本当に良いの？ このまま私が負けたらこの身体は……』

「自分の身体をよく見てみるんだな」

『何を……っ!?!』

そこで初めてリースは今の自分の身体がガラテアの物では無く、リースのものになって居る事に気が付いたのだろう。

a | v i d a の効果のお陰だろうか。もしくは、デインギルスがX素材として抱えていたガラテアだけが墓地に送られた事でガラテアの中のリースの部分を切り離れた事を意味していたのだろうか。

真相は分からない。

だが、これで俺が勝つてもガラテアは無事であると、俺は何故か確信を持っていた。

『双星神 a | v i d a』でダイレクトアタック！』

a | v i d aの剣が放つ光が周囲を包む。

リース：LP100↓LP0

お兄ちゃんのお託

『君にはまず、お疲れ様と言うべきなのかな。少年』

a—v i d aの攻撃の光が辺りを包み、全てを真っ白に塗りつぶした。その次の瞬間、俺の視界に入ってきたのはそれまでの光景とは一転して真っ黒の何も無い空間へと変わっていた。

そこで待ち受けていたのは以前この空間に来た時と同じ様に、『星杯に誘われし者』の姿をしたギルスだった。

「……ハノイの塔に囚われていた精霊達はどうなったんだ？」

『奴がデュエルで負けたことで、彼等をデータとして押し込める事が出来なくなった。そうする事であの塔の一部を形成していた精霊達は自分達の世界に戻って行ったよ』

良かった。イレギュラーなデータである精霊達が解放されたのなら、これでハノイの塔の完成状況は原作通りの進捗になるはずだ。そうすればP l a y m a k e rがリボルバーをデュエルで倒して今回のハノイの騎士事件は一旦の終結を迎えるはず。

『それにしても、結局双星神に助けられる事になっちゃったな』

限られた手札でカードを破壊する事もままならない。直前でネフィリムが墓地に送られた事で手札に回収した『影依の偽典』シャドールークがあったから次のターンでミドラージュの特殊召喚をしてディングルスかオーケストリオンを墓地へ送る事は出来ただろうが、流石にそれでは遅すぎただろう。

あの場面でリリースのフィールドのモンスターとオルフェゴールで重要な墓地リソースを枯らせることが出来たのは大きい。

『ふっ……あいつもお節介な奴だからな。次のカードを1枚引いてみると良い。それが君の本来のドローカードだ』

ギルスが俺のデッキを指差しながらそう言う。

彼の言葉に従い、デッキトップを1枚捲る。

「あ」

ドローカードは『ティアラメンツ・シエイレーン』。あのターンのドローカードがこのカードだったら……まず、『ティアラメンツ・ハートビーツ壺世壊を揺るがす鼓動』

でリースのフィールドの『オルフェゴール・アタック』をデッキに戻した後にシエイレーンを墓地へ送る。

そうしたら、シエイレーンの効果が発動して最初のターンで使ったメイルウとシエイレーンを素材にキトカロスと融合召喚出来る。キトカロスの効果でデッキのハウフニスかメイルウを墓地へ送ればさらにその効果が発動してルルカロスの融合召喚を行える。もし、ディングルスがこのタイミングで特殊召喚されて、キトカロスと融合召喚出来たら、キトカロスの効果は問題なく使うことが出来る。

そして、ルルカロスがフィールドに立てば彼女の効果でそもそもスケルツオンの特殊召喚効果を無効化することが出来る。

『オルフェゴール・アタック』が無くなったのならルルカロスで安全にディングルスへ攻撃して、400の戦闘ダメージを与えて……俺の勝ちだ。

「ははっ……本当に頼りになるなあ……。でも、それで俺が勝ってもガラテアが……」

『? 君と共に居る彼女の力を借りれば、ガラテアあの子の中に潜む奴を引きずり出す事も出来ただろう。彼女が傍に付いている。それも君にあの子を預けた理由の一つだ』

「ええ?」

彼女って……マスカレーナの事か?だが、申し訳ないけどマスカレーナにそんな真似が出来るとは思えない。

もしかして、ギルスが言う彼女とはミドラーシユの事か? 確かに、シャドールと言うモンスターの中には、元となるモンスターの魂が奪われる事で、魂を失った肉体がシャドールモンスターへと変化した者も居る。そして、その魂を奪ったり、魂が抜けた肉体を操ったりしていた筆頭はネフィリムと……ミドラーシユだろう。

ミドラーシユの力でリースの魂だけをガラテアの身体の中から引きずり出すことが出来たって言うのか? そのためには確か、真空管みたいな物も関わっていたような?

「でも、LINK VRAINSにミドラーシユは来られない。あの場に居ないのにどうやって?」

『ああ、なるほど。そこから勘違いしているんだな』

勘違い？ え？ もしかして、ミドラーシユはいつも俺と一緒にLINK VRAINSに来ていたののか？

『あの仮想世界、LINK VRAINSと言ったかな。そこにも影はあるだろう？』

「そりゃまあ、太陽も再現されているし、光があれば影も出来る」

『当然、その世界の少年の身体による影も出来る訳だ。君の影は一種の象徴だ。君達が持つカードが我々と君達の世界を繋ぐ扉アイコンの役割をしている様に、君の影は彼女が住む場所と君とを繋ぐ扉なのだ』

何だつて？ いつの間に俺の影は異世界へ繋がる様になっちゃったんだ……って思ったけど、『影依シャドールーツの原核』が飲み込まれたり、食い物が飲み込まれたりしていた訳だし、そこは今更か。

『君と言う存在から映し出された影はそこがどこの世界だろうと君と言う存在の影だ。なら、そこが人間界だろうと、精霊界だろうと、仮想世界だろうとその影を通じて彼女は世界に干渉する事が出来る。まあ、それ程の干渉力を持つのも、彼女の精霊としての力の強さと、君との繋がりの強さがあつてこそだがね』

「はあ……。まじかよ……」

視線を足元に落としてみると、そこには見慣れた自分の影がある。そして、自分の身体の動きに反して影が独りでに動いて右手がOKサインとなっているのもここ最近でよく見慣れた動きだ。

となるとあの時、間に合うはずがなかった『バトル・フェーダー』の効果を使ってくれたのは俺の身体を影糸で操作した彼女だったという訳だ。

「ん？」

真つ暗なこの空間でどうして影があるんだ？ いや、そもそもこれだけ暗いのにギルスの姿はハッキリと見る事が出来ている事から本当に暗い訳ではないのか？

地面も周囲と同じ様に黒色なのに、影だと判別できるほどクツキリと色が浮いておりとても奇妙だ。

「お前、そんな事も出来るなら先に言ってくれよ……」

しゃがんで自分の影をベシベシと叩く。他人が見れば奇行にしか見えない行動だろう。

「いてっ」

俺が影をはたき続けていたのに据えかねたのか、影の中から何かが飛び出て来て顔にぶつかった。

地面に落ちたそれを手に持って見ると、表が白紙のカードだった。

なんだこりや？

「ところで、あんたはガラテアの中にリースが潜んでいた事も知っていたんだらう？」

『まあな』

「それなら、どうしてアイツを放っておいたんだ？」

ギルスが俺にガラテアを預けた時、その時点でリースをどうにかしていれば話は早かった。まあ、そうする事が出来なかったと言われてしまえばそれまでだが、忠告の一つくらいくれても良かっただろうに。

『君は知っていたらう？』

「そりやまあ」

……

え？　もしかして、俺がガラテアの事情を知っているから話を省いたのか？　言葉足らずが過ぎるだろ……。

『私があの子の傍に居ても、未来は変わらなかつたらう。何をどうやっても、私と言う存在が関わってしまえばあの子は一度消えてしまふ』

ギルスの語りを俺は遮らずに聞くことにした。

『だが、違う世界に住む君なら、また違った未来を引き寄せる事も出来る。私はそう考えた……ふむ、君の傍であの子は色々な事を経験したみたいだな』

ギルスが手を出すと、そこに6つのジャックナイツのコアが現れる。

『グリフォン。傲慢を司る魔物。初めての敵対者はその傲慢な思想から君に危害を加えようとした。だが、そんな人物の行動は忠義の心か

らくるものだという事を知った』

紫宵のコアが輝く。

LINK VRAINSで俺に襲撃を仕掛けて来たおっさんハノイの騎士の事だろう。

『フェニックス。怠惰を司る魔物。給仕を受ける客たちは代金と言う代価を支払っているが、それを知らなければさぞ怠惰に見えた事だろう。だが、そんな彼らにも真摯な心で奉仕する彼女達の勤勉さを知った』

紅蓮のコアが輝く。

ドラゴンメイド喫茶で働くスタッフ達とハスキーの事だろう。

『ゴブリン。強欲を司る魔物。強欲にも金に目がくらんで怪しい仕事を請け負った君は敵対者の罠に嵌まる所だった。だから、分別と言うものを弁えたあの子は君を金のかからない遊びに誘った』

翠嵐のコアが輝く。

うっ……あの虚無バイトの事か。それを言われたら少し弱い所がある。

『ケルベロス。暴食を司る魔物。初めて食べる人間界の食べ物に、あの子は我慢が出来なかつた様だ。その結果、共犯者に逃げられ、思わずもう一人の共犯者を密告した。あの子はどうやらその事を少し気にしていたらしい。何事も我慢、節制が必要だ。そうあの子は思っ
た』

燈影のコアが輝く。

スペクターと二度目の遭遇をした時だな。まあ、ミドラーシユは反省しているどころか、全く気にしている様子は見せなかつたが。

『マーメイド。嫉妬を司る魔物。あの子は旧友と再会して喜ぶ君を見て自分の知らない君を知った。そんな知らない君を引き出せる彼女達にどうやらあの子は嫉妬してしまつたらしい。かわいいね』

「ん？」

『だが、彼女達から君に、君から彼女達に向けられる友愛の情はとても良いものだと気が付いた。それは他人に対する慈愛の第一歩だ』

紺碧のコアが輝く。

三人娘がペルレギアで行われる祭りへ誘いに来た時の事だろう。

『そして、ユニコーン。憤怒を司る魔物。だが、人の怒りと言うものは長くは続かない。いずれは受け入れられる。それは寛容と言うものだ。あの子は何も言わずに妹として受け入れてくれた君の寛容さに甘えることが出来た』

黄華のコアが輝く。

「寛容か……。そうは言っても、俺はリースを許すことなんて出来ないな。そんな俺が寛容だろうか？」

『ふっ……。人と言うものは悪徳だけでも、道德だけでもない。その二つを併せ持つてこそ人だ。君は怒る事もあるし、許すことも出来る普通の人間だ。だからこそ、君を選び、あの子を託した。もし、君が完全に道德を極めた人間だったとしたら、そんな奴を私は信用しない。それに、君が徳に優れた人間だったして、奴の性根を叩き直す事は出来なかつただろう。あいつにも出来なかつた事だからな』

ギルスが懐かしむように口にした「あいつ」と言う言葉。彼が双星神の事を呼ぶときも同じように「あいつ」と言っていたが、恐らくここで示しているのは神としてではなく、幼馴染としてのアウラムの事だろう。

『もう一つは……。まあ、いいか。あの子にはまだ早い』

あ、最後の色欲を飛ばしたな。

色欲を司る魔物であるサキュバス。そのサキュバスを象徴するトロイメアモンスターについて触れなくなつただけかもしれないが。『あの子は君と共に日々を過ごし、様々な事を学んだ。良き事と悪き事。その日々の経験はこれから来るあの子の未来での指針になるだろう』

ギルスの手の周りに集まっていた6つのジャックナイツのコアは俺のデュエルディスクから現れた蒼穹のコアと交わり、光を放つ。

『奴に意識を消され、双星神に再誕させて貰う以外の可能性を、君はこの子に与えてくれた』

眩い光の中から現れたその姿は……

「ガラテア」

『お兄ちゃん』

リースの人の心をささくれ立たせる様なゾワゾワする感じは全くしない。俺の事をお兄ちゃんと呼ぶ彼女はまさしく俺が知っているガラテアだ。

『お兄ちゃん』

ガラテアはこちらに近付いて来ると、ミドラーシユが投げつけて来た白紙のカードを持った俺の手を持ち上げる。

『ありがとう。お兄ちゃん』

「……ああ。どういたしまして」

すると、手に持っていた白紙のカードにイラストが刻まれて行く。描かれたイラストはガラテア、いや、OCGで『星遺物トークン』として扱われていた物によく似ている。だが、名称の部分には『ガラテア』とだけ刻まれており、そのほかのテキスト関連は空白だった。

デュエルディスクを使つてのデュエルが主流のこの世界ではトークンカードと言うものは存在しない。全て機械が生成してくれるからだ。テーブルでデュエルをする時は皆コインや予備カード等を代わりに使う事になって居る。

『これからこの子が未来でどのような音を奏でるのか。君がいつか聞いてくれることを願う』

「楽しみが増えたよ」

ガラテアは俺から離れ、ギルスの方へと向かう。

そろそろ、お別れの時間だろう。ガラテアをギルスの元へ帰す。それは俺のお兄ちゃんとしての役割が終わりを告げたという事だ。

『改めて、君に感謝を』

ガラテアと並んだギルスは軽く会釈をすると、ガラテアを伴って消えて行く。

『認めよう、少年。君は私に並ぶお兄ちゃんだ』

「ん?」

『さらばだ。弟よ』

「アンタの弟になった覚えは無いんだが!」

ギルスの意味不明な言動に思わず声を荒げてしまったが、ガラテア

の『バイバイ、またね』と言う言葉はしっかりと俺の耳に届いていた。

☆

「ん……んん……」

『あ！ 起きたんですね！』

長く寝ていた時の様な気怠さが身体を襲う。こんなに長時間LINK VRAINSにログインする事はあまりないから身体が慣れていないのだ。

マスカレーナは現実世界で俺が目覚めるのを待っていてくれた様だった。

『その……ガラテアちゃんは？』

「大丈夫。無事だよ」

『良かったあ〜。あのすっごいモンスターが攻撃してデュエルが終了したと思ったら、いつの間にかラッセさんはログアウトしてるし、LINK VRAINSはもう少してバラバラになる所だったしで、一人置いて行かれた私はちよつと焦ったんですからね！』

頬を膨らませながらそっぽを向くマスカレーナ。如何にも「私怒っています」と言うような素振りだ。

「ごめんごめん。まさか俺も勝手にログアウトされるとは思わなかったからさ」

『……良いですけどね。それで、ガラテアちゃんは今どこに？』

「ガラテアは……帰ったよ。自分のいるべき場所に」

『そうだったんですか……。サイバース精霊界を案内してあげたかったのですが、叶いませんでした……』

「そうだな。俺もまだまだガラテアに見せてあげたいものは沢山あった。一緒にペルレギアの祭りも見えたかった。でも……」

『あれ？ ラッセさんの横に置いてあるそれは何ですか？ さっきまでそんなの無かったはずなのに』

マスカレーナが指を差した場所。それは机の上。イスに座った俺の上半身が丁度影を作っている場所だ。

そこに裏側で落ちている1枚のカード。それを手に取ると、マスカレーナに見せてあげる。

『あー！』

「また会えるさ」

それは『ガラテア』のカード。

オルフェゴールの名を冠さず、星遺物の名も冠していない。

いつか、未来でギルスと同じ様にジャックナイツ・オルフェゴールの名を冠しているのか、それとも全く別の名を冠しているのか、俺には分からない。

でも、新たなガラテアがこの世に現れる時、俺は彼女と再会できるだろう。

新着メールが届いています。

Title :

新しい動画が投稿されました

From :

Live☆Twinチャンネル

本文 :

動画タイトル『サイバース精霊界』激突!?!神様達も大喧嘩?人間は必要?不要?あなたはどっち派? 私は味噌派! 【割れる】

概要『なんだか最近みんなピリピリしてるね。雰囲気最悪って感じ。さっさと仲直りしてもらって、元のサイバース精霊界に戻って欲しいよ。私達は喧嘩なんてしないもんね!』『……ラーメンは醤油派』『は?』『……は?』

n?ope=2&cidd=156331
com/yugiohd/card|search|actio
URL↓ttps://www.dbyugiohd|card.

囚われの姫と怪盗二人 Eメール

LINK VRAINSが閉鎖してから一週間。

それはつまり、ハノイの塔事件が終結してから一週間が経ったという事でもある。

普段から頻繁にLINK VRAINSにログインすることは無い俺はLINK VRAINSが閉鎖されたとしても生活に大きな変化は無かったが、最近LINK VRAINSへ行く決心がついてエンジョイしていた島なんかはとても残念がっていた。

だが、それも少しの辛抱だ。崩壊したLINK VRAINSの代わりに新たに作り出す新生LINK VRAINSがSOLテクノロジーから発表されている。三か月後にはこれまでと同じ様に、いや、これまでに以上に便利なLINK VRAINSを体験できるだろう。

……まあ、未来に起こるであろう出来事を知っている俺からすると、出来るだけ近付きたくない場所であることは変わらないのだけだね。

「……はあ」

イスの背もたれにもたれ掛かり、溜息を一つ。

何となしの手慰みにUVカット仕様のスクリーндаウんに入れた『ガラテア』のカードを手に持ち、眺める。

「……………はあ……………」

そうすると、改めて寂しさと言うものがこみ上げてくるような気がした。

彼女とはまたいつか会うことが出来る。そう信じている。だが、それはそれとして、今まで傍に居た人物が突然居なくなると寂しく感じる物だ。

彼女はシェイレーン、メールウ、ハウフニスと比べれば口数は少なく、賑やかと言う訳では無かったが、何かあれば『お兄ちゃん、お兄

ちやん』と声をかけてくれていた。それがある日突然無ければ調子も崩れるというものである。

三人娘ティアラメンツと別れた時は数日やそこらでユニコーンが突撃をかましてきたり、謎のニーサンが突撃をかましてきたりと、寂しさを実感する前に色々な事が起きたため、寂しさを実感する暇も無かったと言う方が正しいだろう。

しかし、今回はガラテアと別れてから何事も無く時が過ぎて早一週間。

俺は、また広くなった自室で休日を過ごしていた。

これまでも精霊付きのカードを手に入れては、カードの精霊と親交を深め、あまり馬が合わなかった奴も居れば、自意識過剰でなければ結構仲良くなれた奴も居た。

それでも、そのどちらも共通して最終的には俺の元から離れて行ってしまった。それが少し嫌で最近では積極的に精霊付きのカードを集めなくなったという事を久しぶりに思い出す。

マスカレーナ？ 彼女は猫みたいに自由気ままだからなあ。

彼女は精霊界と人間界を行ったり来たりして俺の所に連日居る事もあればしばらく全く顔を出さない事もある。そして今日は彼女が顔を出さなくなつて三日目である。

三人娘のために用意した空の水槽は未だに水が腐らない様に循環装置の電源は切っていない。水を循環させるモーターの音だけが鳴り響いているのも虚しいので熱帯魚でも飼おうかなんて考えていたのだが、彼女達がまた来てくれた時に熱帯魚と喧嘩したら困るなど思い、その決断もし切れていなかった。

「食うか？」

俺の問いかけに対し、俺の影が首を縦に振って応える。

机の上に置いてるスナック菓子を適当に摘まんで紙皿に移し、それを自分の影の上に置くと、菓子を乗せた紙皿はズブズブと影の中へと沈んでいく。

虚空に語り掛ける俺の姿をオカンが見たらまた頭を抱えてしまうだろうか。

だが、この部屋には俺ともう一人が住んでいる。

それは勿論『エルシャドール・ミドラーシユ』だ。

かつて精霊達と別れた時と違う所と言えば、彼女が常に俺の傍に居てくれているという事を知っている事だろう。

彼女が居てくれるからこそ、俺はガラテアと別れても寂しさを感じるだけで済んでいる。もし、ミドラーシユが居なかつたら一人寂しく泣いていたかもな。冗談だけど。

「美味いか？」

影の右手が親指を立ててグツドのハンドサインを向けて来る。

「それは良かった」

相変わらずミドラーシユは無口な奴だ。

彼女の声を聞いたのは結局数えられる程なのだから。出来ればもつとお話したいのだが、それが彼女のスタンスだというのなら、無理強いする事も無いだろう。

部屋に響く水槽の循環装置のモーター音。

開けた窓から聞こえるのは鳩や雀と近所の声のデカイおばさんの囁き。

一日中電源付けっぱなしのパソコンから聞こえる新着メールが届いたことを知らせる通知音。

「ん、メールか」

このご時世、あらゆるサイトの会員登録にメールアドレスの入力を要求される。その結果、届くのはほとんどが興味もない広告メールばかり。

俺はそう言ったどうでも良いメールは通知音を鳴らさない設定の専用メールアドレスを使っている。通知音が鳴ったという事は個人的な知り合いや見逃せない重要な情報を得るために使用しているメールアドレス宛にメールが届いたことを示している。

メールアプリを起動し、新着メールを確認する。

「？ なんだこりゃ」

新着メールが届いています。

Title :

新しい動画が投稿されました

From :

Live☆Twinチャンネル

本文 :

動画タイトル【サイバース精霊界】激突!?! 神様達も大喧嘩? 人間は必要? 不要? あなたはどっち派? 私は味噌派! 【割れる!】

概要『なんだか最近みんなピリピリしてるね。雰囲気最悪って感じ。さっさと仲直りしてもらって、元のサイバース精霊界に戻って欲しいよ。私達は喧嘩なんてしないもんね!』『……ラーメンは醤油派』『は?』『……は?』

URL↓<https://www.yugioh-card.com/yugiohdb/card-search.action?ope=2&cid=15631>

差出人は……『Live☆Twinチャンネル』?

悪戯メールかとも思ったが、このメールアドレスは本当に一部でしか使っていない。メールアドレスが流出したと言うのは完全には否定できないが、可能性としては低いだろう。

何より、サイバース精霊界の話題に触れている事を考えると、このメールの差出人はやはり本人達精霊であると思われる。

「URL……って、何も無いじゃないか」

Live☆Twinチャンネルに新しく投稿されたらしい動画のタイトルと概要は書かれているのに、肝心のアドレスが入力されていない。これでは、折角の宣伝メールなのに動画への導線になって居ない。

「ん、いや待てよ。もしかして……」

俺はふと思いついたことを試してみる事にした。

マウスカーソルを適当な所に置き、クリックを押したままドラッグし、文章を選択する。

「やっぱり反転表示か」

選択されたテキストを示すためにその部分の背景だけが青色に変化する事で、今まで何も表示されていなかったURLの横に文字が浮かび上がる。

ご丁寧に、マウスカーソルがあつた時にリンクがある事を悟られない様に頭文字の『h』が消されている。

消されていた一文字を手入力し、送られてきたURLをブラウザで入力してみると、表示されたページは真っ黒の背景にテキストを入力する入力欄と精霊界の文字が書かれた赤いボタンのみ。そう言えば Evil★Twin テーマのカードにこの状況とよく似た『シークレット・パスフレーズ』と言うカードがあつたな。

精霊界の文字は俺には読めない。だが、恐らく「エンター」とか「ログイン」とか、そう言った意味合いの文字だろう。

そうになると、この入力欄はパスワードでも入れれば良いのか？

「うーん？ パスワードって言ったって、俺は何も聞いていないぞ？ ミドラーシユは知ってるか？」

ダメ元でそうミドラーシユに問いかけてみるが、返ってきた答えは横に振られた首だけだった。まあ、当然か。

とりあえず、適当に文字を入力してみると、20文字まで入力出来る事は分かった。

「えーっと、そうだな。じゃあ、「Evil★Twin」と」

安直だが、特に思いつかなかつたので彼女達のテーマ名を入力して赤いボタンを押してみる。

「え、うぎ」

すると、どうやらそれは間違いだったようで、ポップアップで出て来たウィンドウに、デフォルメされているが死ぬほど人を馬鹿にしたような顔で描かれたLive☆Twinの二人が表示される。そこには何か精霊界の文字で書かれており、意味は分からないが恐らくこちらを馬鹿にしてくるような内容だろう。

その後も、当てずっぽうに「Live☆Twin」だとか、「イージーゲーム」等、彼女達に関りがありそうな単語をいくつか組み合わせた

りしながら色々試してみたが、どれも正解では無かった。

ちなみに、間違えることにポップアップされるウィンドウの数が一つずつ増えて行くので、挑戦するたびに次のパスワード入力の手間になっていく。しかも、新しくウィンドウが出る度に描かれているLive☆Twinの顔は全部違っていて何気に芸が細かい。

「う——ん……うーん??？」

やはり何を試してみても結果は変わらず、入力画面から先へ進むことは叶わない。そもそも、怪盗と言う他人に明かせない秘密を持つ彼女達がこんな安易に想像が可能なパスワードを設定しているというのは考えにくい。入力上限である20文字を全部使う必要があるパスワードなら俺にそれを突破する術はない。

彼女達が俺にこのメールを送って来た真意も気になるが、パスワードの入力に挑戦していたのは単純に彼女達の動画が気になったからだ。前回、彼女達から教えてもらったURLを入力して観られたLive☆Twinチャンネルでは別にこんなパスワードの入力を求められなかった。しかし、今回はパスワードが必要と言う事は、この動画は普通に公開されている動画では無く、所謂コミュニティ限定動画の様に視聴者を限定する類のものだと思われる。

そんなの気になるに決まっている。

あれからLive☆Twinチャンネルに投稿されていた動画は全て試聴済みであり、すっかり彼女達のファンになってしまったのだからな。

ただまあ、言ってしまったえばそれだけなら別に意固地になる必要もないのもまた事実。

今度マスカレーナが来た時にでも聞けばこのパスワードも教えてくれるだろう。

「あ、最後にこれも試してみるか」

もはやブラクラみたいになって来た数十個ものウィンドウを一つずつ消し、パスワード入力画面にもう一度触れられるようにする。

「えーっと、確かあれは……」

俺は何とか思い出した四つの数字だけを入力して、赤いボタンをク

リック。すると……

「お？」

今までモニターを陣取っていたパスワード入力画面は消失し、ブラクラ擬きの邪魔くさいウインドウ群は出て来る事は無かった。これはもしかすると、もしかするかもしれない。

ここに来てパスワード入力成功とは、我ながら良くやったものだし、しかし、正解がたった四つの数字とは……。逆に想像出来なかったな。

「さてと、どんな動画なのかなー、つと……？」

画面が暗くなり、動画が再生されるのを待とうとしたその時、一階から俺を呼ぶオカンの声が聞こえて来た。

「あんたにお客さんだってー！　綺麗な女の子よー！」

「え？　女の子？」

俺は思い当たる人物が思い浮かばないまま、俺を訪ねて来たという人を迎えるために部屋を出たのだった。

住所特定

家を訪ねて来た女性とやりに心当たりが全くない。

勿論、俺だつて学校に通っているのだから交友がある女子くらいは居るが、家に訪ねてくるほど仲が良いかと言うと、そんな事は全くないだろう。学校で一番話す女子生徒と言えば、部活で一緒に活動している財前さんだが……もつと無いと思う。あの人大体の人間に塩対応だし。

学校を病欠したらその日に配られたプリントを頼まれれば持つて来てくれる位はしてくれるかもしれないが、そもそも俺は学校を休んだりしていいないので、そう言う特別な事情があるわけでもない。

なら、学校外の知り合い？ 学校外の知り合いなんて、精々カードシヨップで一回デュエルをした仲とか、そんな薄い繋がりはかりだ。家の場所どころか、俺の名前すら知らないだろう。

「ちよつとちよつと！ あんな綺麗な子達とどこで知り合ったのよ！もしかして、詐欺とかじゃないの？ 大丈夫？ 絵とか買わされてない？」

階段を下りた先に居たオカンに呼び止められたと思つたら何とも失礼なことを言い出した。

俺がそんな美人なだけで騙される人間に見えるのだろうか？

「そんなん買つてないよ。ていうか、誰が来たんだ？」

「さー？」「世良君居ますかー」つて言われただけだから

結局オカンからは新しい情報は得られなかった。けどまあ、ドアを開けて、来訪者の顔を確認すれば良いだけの話だ。

「どちら様ですかー」

声をかけながらドアを開け、家を訪ねて来たという人物に目を向ける。

「やっほー！ 久しぶりー」

「遊びに来たよ」

「……えー……つと……どちら様？」

目の前に立っているのは二人組の女性。

一人は淡い赤色の髪を持つ女性。

胸元が大きく開かれた水着みたいなトップスとショートパンツの組み合わせのせいでヘソが丸だした。左脚だけ履いたストッキングはお洒落なのかダメージを受けている。そんな恥ずかしい恰好を全部覆えるほどの大きなジャンパーを羽織っているが、前は全く止められておらず、全て曝け出されている。痴女かな？

もう一人は深い青色の髪を持つ女性。

白いレオタードの様な衣服を身に着け、ズボンは……ズボン？ 透明なズボンの様な物を履いているが、透明なせいで色々とスケている。そのうえ、横は大きく穴が開いており、その太腿は惜しげも無く晒されている。彼女もそんな恰好を隠すことが出来るジャンパーを着ているが、やはり前は全て開けている。痴女では？

LINK VRAINSでないと許され無さそうな衝撃的な格好の女性二人を目の前に対面してもなお、俺は彼女達の事が誰なのか分からなかった。

「え？ あれ？ もしかして冗談で言ってる？」

「そんな事を言うなんて、世良君は酷いなあ、シクシク」

赤髪の女性は少し焦ったように、青髪の女性は泣き真似をしながらからかうようにそう言う。

「私はキスキル！」

「私はリイラだよ」

そして、ここに至ってもなお彼女達の事が分からない俺に呆れたのか、二人は溜息をつきながら自己紹介をしてくれる。

「キスキル？ リイラ？ あー……。と、自分の事を思ってる一般人の方ですか？」

「ちがーう!!」

「ええ？」

そりや確かにキスキルもリイラも知り合いだが、彼女達はデュエルモンスターズの精霊だ。

ここは俺の家の前。つまり、人間界。それに、オカンも二人の事を

認識する事が出来ていた。当然、オカンはカードの精霊を認識することとは出来ない。出来て居たら今頃オカンは俺の事で頭を抱えるような事は無かつただろう。

そんな二人がカードの精霊だと言われても、俄かに信じがたいというもの。

精霊が人間界に実体化するのは、デュエルディスクと一体化してその機能の一部を使い、ソリッドビジョンとして実質的な実体化をしていたガラテアくらいしか知らない。強力な力を持った精霊として認知されているミドラーシュですらやっていない。俺が知らないだけで本当は出来るのかもしれないが……。

『ラッセさん……お久しぶりですね……。彼女達は本当にキススキルさんとリイラさんですよ』

「あれ？ マスカレーナ？」

マスカレーナが二人の後ろから現れる。三日ぶりに見た彼女の顔は何故かとても疲れているように見える。

「なんでそんな疲れたような顔を？ というか、マスカレーナがそう言うって事は、二人は本当にあのキススキルとリイラなのか？」

「最初からそう言ってるじゃん！」

「マスカレーナが言う事なら信じるんだね」

リイラがジト目をこちらに向けて来る。

「あー……とりあえず、家あがってく？」

そんな視線に耐えられなかったという訳では無いが、いつまでも玄関前で話し込む必要はないので、二人を俺の部屋へあげる事にした。

☆

謎の美少女来訪者こと、人間界に実体化しているキススキルとリイラを家に招き入れ、自分の部屋へと案内する。その時、リビングからこっそりこちらの様子を伺っていたオカンの目がびっくりしていたのを確認している。

これは後で質問攻めだろうなあ……と、未来の面倒事を考えないよ

うにしつつ、二人には色々と聞かなければいけない事がある。

「適当にベッドにでも座っていいよ」

普段、男友達か精霊くらいしか招かない自室。そんな部屋に女の子を座らせることが出来るソファなんてものは無いし、イスもパソコンデスク用の物一つしかない。

精霊だったらそもそも物理的に座る必要もないし、男友達なら適当に床に座らせれば良いが、今回は流石にそう言う訳にもいかないだろう。そうになると、腰かけられるような場所はベッドくらいしかない。申し訳ないけど二人にはそこに座ってもらう事にした。

ちなみに俺は自分のイスに座っている。

「ところで、リースがサイバース精霊界の精霊を襲った時、二人は大丈夫だったか？」

「ああ、あれね。私達は安全な場所に避難していたから平気だったわ」「良かった。そんな場所があったんだな」

どうやら二人はリースによってハノイの塔を作るデータの一部分にされることは避けられたらしい。あの時聞いたマスカレーナの話では、サイバース精霊界に居る精霊全員がデータ化されてしまったと思ったが、そう言う訳では無かった様だ。

「うん。そこにあるパソコン」

「え？」

リイラが俺のデスクトップパソコンを指差しながらそんな事を言いだした。

「この前、君が私達のページにアクセスしたでしょ？ そのアクセス履歴からそのパソコンのアドレスを逆探知して嵐が過ぎるのを待たせてもらったのよ」

「私達が知ってる人間界との繋がりはそこだけだったから。LINK VRAINSはサイバース精霊界に近すぎて避難しても巻き込まれていたかもしれないね」

まさか、リースが騒ぎを起こしている間、二人が俺のパソコンの中に居たとは全く気が付かなかった。確かに、あの日は出先で事件の様子を見て居たし、家に帰って即LINK VRAINSへ赴いたため

にパソコンは見て居なかったな。

あれ？ でも、人間界の電子機器に干渉することが出来るのはサイバース族精霊の特性だ。それで彼女達の意識とLive☆Twinの精霊体の安全を確保する事は出来たとして、中の人こと、悪魔族のEvil★Twinとしての精霊体はどうなっていたのだろうか？
もしかして、俺がリースに負けていたら二人とも一生サイバース族として生きる事になって居た……とか？
……

まあ、結果的には全員解放されたのだからそんな事は別に良いと言えれば良いのだけだね。

「あ、そうだ。二人が送って来たあのメールは何だったんだ？」

俺は直前までパスワードチャレンジをしていたメールについても聞くことにした。結局正しいパスワードを入れても動画は観られなかったし、何の意味があったのだろうか？

「ああ、あれね。それは君の家の位置座標を調べるための物よ」

「私達は人間界に不慣れだし、君の家がどこにあるのかも勿論知らない。精霊界と人間界をよく行き来しているマスカレーナがさつさと教えてくれれば話は早かったのだけど？」

『……いくら貴女達とは言え、友人の個人情報をそうホイホイとは渡しませんよ』

もしかしたらここ最近マスカレーナが姿を見せなかったのはEvil★Twinの二人に絡まれていたせいで人間界に来られなかったのかもしれないな。

『……はあ……ラッセさん！』

「えっ。な、何？」

あれ？ この流れは前にもあったような……？

『良く知らないURLは簡単に開いてはいけませんよ！』

「いやまあ、それはそうだが、サイバース精霊界について触れられてたからLive☆Twinからのメールだって事は確信してたし……」

『それでもです！ 幸い二人に悪意は無かったから良かったものの、それが原因でEvil★Twinはあなたの住所を手に入れている

んですから!』

「……はい、俺が迂闊でした……」

以前ハノイの騎士の罫に嵌まった時と同じ様にマスカレーナにネットリテラシーについての説教を受ける事になってしまった。マスカレーナが顔を見せた時、最初疲れたような顔をしていたのも俺に呆れていたからだろうか。

自分では一応大丈夫と駄目の基準を設けてインターネットと付き合っているつもりなのだが……もしかして、俺の基準って……ガバガバ?

「まあ、それは横に置いておくとして、結局あのサイトは何だったんだ? 普通に動画観たかったんだが?」

「あれ? もしかして世良君も私達のファンになっちゃった? やつたね、リイラ! ファンが増えたわ!」

「人間界進出の第一歩だね、キスキル」

「動画は……」

何故か知らないが、キスキルとリイラは人間界住む俺をファンとして取り込めたことに二人は手を取り合いながらも喜んでいる。それは良いのだが、結局件の動画は観られないのか……?」

「あのメールに書いた動画なら、前教えた方のサイトで観られるわよ」「まじで?」

じゃあ、さっきまで俺は意味も無くパスワードを入れては煽られを繰り返していたのか? キスキルがそう言うのなら、動画はこの後観させて貰おう。

「ちなみに、今日君がアクセスしたサイトは私達に依頼を出す時に使うページ。当然、E v i l ★ T w i nとしての依頼をね」

リイラがキスキルの話を補足するように説明してくれる。

「私達に依頼をしてくるような奴らは大抵裏があるようなのばかりだから、依頼人の裏取りを兼ねて情報収集が出来るようにあのページ自体に仕掛けがしてあるの」

「それって、本来精霊界で使ってたシステムだよな? それが人間界の位置情報にも適用出来るって……」

本当に精霊達の出来る事と言うのは想像の範疇を越えて来るものである。

「……って、あれ!? 世良君パスワード突破してるじゃん!」

「え? うわ、本当だ」

ベッドに腰かけながら俺の部屋を見回していたキスキルが画面をそのままにしていたパソコンに気が付いたらしい。リイラもその言葉聞いてパソコンの画面を見ている。

「パスワードは毎回サイトの存在を教えた相手ごとに変えていて、確かに今回は適当に設定したけど……」

「なんで世良君は私達の、E v i l ★ T w i n 結成の日付を知っているのかしら?」

ああ、そう言う扱いなんだ。

俺が入力したパスワードは「0912」。つまり、L i v e ☆ T w i n と E v i l ★ T w i n のカードが収録されたパックが発売した日付である。偶々覚えていただけだったが、まさか正解だとは思わなかったね。

「それはほら? 俺が君達のファンだからと言う事で」

「ふーん……?」

リイラにストーカーを見るような目で見られて居る気がするが、「前世から知っていました」なんて説明した方が胡散臭い目で見られると思うので……まあ、百歩譲ってこれでよしとしよう。説明するのも大変だし。

「なににせよ、世良君はノーヒントで私達が設定したパスワードを当てられたので、ご褒美に一回だけ私達に無料で依頼出来る権利を進呈しまーす! パチパチパチ」

キスキルはこちらに向かって拍手をしてくれる。それに合わせてリイラも

「ドンドン、パフパフ」と煽っているが、果たして俺が怪盗の彼女達に再び依頼をする日は来るのだろうか?

また、精霊絡みで情報が欲しくなった時があれば使わせてもらう事にしようかね。

「ところでさあ、世良君は私達にもっと他に聞かないといけない事があるんじゃない?」

「うんうん」

何やらセクシーなポーズングをしながら何かを主張して来る二人。

ふむ……。

「それって新衣装? とても可愛いと思う」

女の子は取り合えず褒めろとは、俺の親父の言葉である。

彼女達の服装は俺の知らない衣装であり、キスキルに至っては長い髪をバツサリと切っている。そのせいで最初彼女達が誰なのか分からなかった訳だが、Evil★Twinの正装は人間界では浮きすぎるからな。悪魔の尻尾みたいなのも生えてるし。

ギリギリの所で「可愛いと思うけど、この世界で活動するつもりならもう少し落ち着いた服の方が良いと思うぞ?」と言葉を続けなかった俺は百点満点の対応だと自分を褒めてやりたい所だ。

「でしょー! って、ちがーう!」

「……がつくし」

どうやら服装について聞いて欲しかった訳では無いらしい。

おかしいな? 服装では無いとすると、やはり髪型を変えたことについて触れた方が良かったのか?

「こんなに鈍い子だなんて思わなかったわよ」

『まあ、ラッセさんは精霊に触れ過ぎていて少し基準が変なんです』

「流石はあのドリユアトランティアの果実をむしやむしやと食べた人間……。器が違うね」

キスキル、リイラにマスカレーナを加えてコソコソ話をしているが、この狭い部屋では何を話しているのかなんて全て聞こえている。もしかしなくてもバカにされてるよなこれ?

ていうか、リイラが言ってるドリユアトランティアの実を食った件はその時何も知らなかったんだから仕方ないだろ!

「なら、これでどうかしら！」

「うわー！」

コソコソ話を切り上げたキススキルが突然こちらにやって来たと
思ったら、突然俺の手を掴んで彼女の剥きだしのお腹に押し付けさせ
られる。

「いきなり何を……………ん？」

ぐっと彼女のお腹に押し付けられた俺の手から感じる感触は一見
人の肌の様だったが、その奥には奇妙な硬さがある。へその当たりな
ので骨と言う事はないはず。

「？ 何だこれ？」

キススキルに無理やり触らされた右手だけでなく、左手も使って彼女
の細い腰を包むように触ってみても、やはり皮膚の下に硬い何かを触
ることが出来る。金属かプラスチック？ 何処を触ってもその感触
は変わらない。

それに、皮膚だと思ったそれも良く触ってみれば少し違う気がする。
皮膚を掴まんでみても人間の様に持ち上がらない。まるで、下に
ある何かにピッタリと張り付いているみたいだ。

「ちよ、ちよつと……………流石に少しくすぐったいんだけど……………」

「じー……………」

『じー……………』

「どうしたんだこの身体？」

彼女達はデュエルモンスターの精霊だ。普通の人は精霊を見る
事は出来ないし、触ることも出来ない。俺は見ることは出来るが、人
間界では触ることは出来ない。

ドリュアトランティアの様に意味不明な干渉力を持つモンスター
はこちらに物理的な接触をしてきたが、俺の方から彼女へ触ろうとし
ても恐らくそれは出来ないだろう。

ただ、場所が精霊界であるなら、彼女達は実体を持つ生き物である
ため、人間の俺でも物理的な接触は可能となる。

人型のモンスターならその身体の構造と言うものは俺達人間とそ
う変わらないはずだ。

まあ、テイアラメンツの様に人型だが水中に適性があるモンスターであるならばそれ相応に人間との違いはあるだろうが。

だが、今触れているキスキルの身体はどう考えても普通の人間のそれではなかった。

「ふう……やつと本題を話せるわね」

『そんなに触り心地が良かったんですかあ？』

「うーん、何と言うべきか……新感覚素材って感じ？」

『あ、はい。そうですか』

俺とマスカレーナが話をしていると、何故かキスキルとリイラがいそいそとジャンパーの前を閉め始めた。

前を閉めるなら外をうろついている時に閉めるべきでは？ タイミングおかしいだろ。

「コホン……それで、この身体の事んだけど……」

キスキルが改めて説明をしてくれる。

「ソルtiスSって知ってる？」

「な、何だつて？」

自分の口元が引きつっている事を自覚する。

「キスキル、流石に知らないと思うよ？ まだ一般に発表はされてないみたいだし」

「あ、そっか。えっとね、AIを搭載出来るアンドロイドとして人間界の企業で開発されている物なんだけどね、どうも私達でも使えるみたいでとっても面白そうだったから試作品を貰って来ちゃったのよ」

SOLtiS……。

それは遊戯王VRAINS終盤で出て来るSOLテクノロジーの製品の名前だ。LINK VRAINSが閉鎖されて悪化した業績を立て直す起死回生の商品として発売されたSOLtiSは便利な労働力として一気に普及する。

ただ、その便利過ぎるアンドロイドは肉体を持たないAIである闇のイグニスAiと遊作のお手伝いロボットに搭載されたAIであるロボッピの人間界での依り代として利用されてしまう事になる。

結局何が言いたいのかと言うと、今現在ではSOLtiSと言うも

のは世間一般では存在しないはずの物であるという事だ。勿論、研究・開発・量産化と言う過程を考えれば今の時期に試作品が存在している事は不思議ではないし、流通と言う段階も踏まれば既にある程度の量産化も終わっている可能性もあるのだが、まだ一般に公表されていない物が外をうろついているというのは大問題だ。

きっとSO L テクノロジーは血眼になって探している事だろう。

「ちよつと失礼」

「いやん」

「意外と大胆だね」

俺はキスキルとリィラの首に付けているチョーカーを少しずらしてSO L t i Sであることを示す菱形のランプの存在を確かめる。

マジじゃん……。チョーカーで上手い事隠れていたから初見で分からなかったんだ。

「ただ、貰ったのは良かったのだけど、人間界で活動するにあたってこの身体の置き場所に困ってしまったって訳」

「だけど、途方に暮れているそんな時、私達には人間界に住む知り合いが居たって事を丁度思い出したわ」

ああ、俺の事ね。

「それで、この部屋にこの身体を置いて欲しいの！」

「ええ……」

精霊のお願いは大体聞いてしまう俺ではあるが、このお願いはすぐにYESとは返せない。

何故って？ それは人間界で普通に問題になるからだ。

大抵の人間界にやって来た精霊がするお願いは「あれを見てみたい」だとか「あそこに行つていたみたい」だとか「あのデュエリス^人トに私を渡して欲しい」だとか、そんな物である。多少金が必要になる事もあったりする（主に俺の為の交通費）が、それも大した負担ではない。

お願いの内容が俺と精霊の間だけの問題であるのなら良いのだ。

だが、今回は大企業SO L テクノロジーが関わっている。彼女達が何か証拠を残すと言うへマをしたとは思わないが、SO L t i Sと言

う物的証拠を家に置いてある事を万が一にでもSOLテクノロジ―にバレでもしたら俺は大企業から新商品の試作品を盗み出した犯罪者になってしまう。濡れ衣で臭い飯を食わされるのは御免である。

「うーん流石に……」

「ダメかなあ？」

リイラが上目遣いで俺の事を見て来る。

「やっぱり……」

「お願いだからあ」

キスキルが祈る様に手を組んでこちらを見て来る。

「うっ……そんな目で見られても……」

「……」

ぐわー！ そんな絵文字のピエンみたいな顔で迫って来るなー！

「あーもう！ 分かったよ！」

「やったー！」

『ラッセさん……押しに弱すぎる……』

言うな、マスカレーナ。

それに、何も一生隠し通さなければいけない事も無いはずだ。数か月後には世間一般に流通し始めるのだから、その頃になればわざわざ隠す必要も無くなるだろう。

それまでは絶対に見つからない場所にしまっておく必要はあるが……。

「やっぱり押せば通ったね、リイラ」

「そうね、キスキル。これで人間界の活動拠点ゲット」

おーい、聞こえてるぞー。

やっぱりSOLt.i.S預かるの止めようかなあ???

「そう言う訳だから、これからよろしくね！」

「よろしく」

「はあ……」

そんな感じでまた俺の部屋は狭く騒がしくなるのだった。

『それで、ラッセさんはどこにあのデカイアンドロイドを隠すつもりなんですか?』

「そうだな……押し入れは……オカンが開ける可能性があるからダメだな」

『他には?』

「……」

『え!?! もう候補無しなんですか!? 余りの無策さにビックリなんですけど!?!』

「………あ、そうだ」

『倉庫でも借りるんですか?』

「ミドラーシユ、頼めるか?」

「きよわ!?!」

「ひえっ!」

『うわあ……キスキルさんとリイラさんが突然動き出したラッセさんの影の中に引きずり込まれて行きましたよ』

「うん、ここならSO^人Lテクノロジー間にバレる事も無いだろ」

「びつくりしたあ……」

「突然影が身体に纏わりついて来るとは……ていうか、一瞬でよく見えなかったけど中に何か居なかった……?」

『あ、二人とも出てきましたよ。……下半身はまだ影に埋まっていますけど……』

「なんか絵面がアニメの最後に「トホホ……」って言ってそうなアレみたいになってるな」

「「良いから早く出して——」」

映え

LINK VRAINSが閉鎖されたことは確かに社会問題レベルの一大事だが、それが原因で学校が休校になる訳ではない。LINK VRAINSの救世主であるPlaymakerだって（廊下ですれ違ったが挨拶はしていない）、LINK VRAINSのアイドルであるブルーエンジェルだって（部活で挨拶はしたがそれ以降の会話はデュエル中に必要な言葉のみ）しっかり毎日学校に通っているのだから俺だって普段通りに学校に行かなければならない。

今日も今日とて真面目に部活動に励んだ自分へのご褒美にカードショップにでも寄って帰ろうかななどと考えながら校門を通り抜けようとした時、誰かに声をかけられた。

「おーい、世ー良くーん」

「私達と遊ぼうぜー？」

「リイラとキスキルじゃん。こんなところまで来てどうしたんだ？」

それはSOltisを使って実質的な実体化を果たしたキスキルとリイラだった。

彼女達の恰好は俺の家に来た時と同じ格好であり、その姿は下校途中のハイスクール生の視線を一身に受けている。

そして、そんな奇抜な服装をした彼女達に声をかけられた俺の方にも注目を向けてくる奴が出てくる始末。

「ちよつと街歩きに付き合っつて欲しいのよー！」

「ふーん、珍しいね」

「世良君の手伝いが欲しいんだよね」

彼女達が家に押し掛けて来てからもう一週間ほど経ったのだが、基本的に彼女達は二人だけで行動している事が多い。俺を人間界の拠点として色々としているようだが、何をしているのかは詳しくは知らない。

精霊界に戻る時は俺にSOltisを預けに来るので、その時にその日あった面白い話や楽しかった話を少しするくらいで実はそままで一緒に居る訳では無い。

じやあ自分はこれで！」

島は二人にそう言うが、俺は知っている。

キスキルとリイラの視線は島……ではなく、その後ろに居るグリバ
ブに向けられているという事を。

でもまあ、それでも島は嬉しそうにしてるからわざわざ真実を伝える
必要もないと思うので、何も言わないでおこう。言っても仕方がな
いけどな。

島はそれだけ言い残して凄いい勢いで走り去って行ってしまった。
行先はカードショップだろうか？

「さて、それじゃあ行きましようか」

「れっつづー」

そう言つてキスキルとリイラの二人は俺の腕を掴んで引きずるよ
うにDen Cityのメインストリートへと連れ出された。

一人でカードショップ冷やかに行くのはまた今度だなあ。

☆

しばらく歩き、メインストリートに面する好立地に構える店まで連
れてこられた。店の前は行列が出来ており、学校帰りの高校生、大学
生くらいの女性が多く見られる。

「まずはここでタピオカミルクティーを飲むわ！」

「え？ でも二人とも……」

キスキルはそう言うが、二人とも人間界ではSOLtIS、つまり
機械の身体だ。そんな身体で飲み食いなんて出来るのだろうか？

「大丈夫。本命はこっちだから」

「ああ」

リイラはそう言いながらポケットからスマホを取り出す。所謂「映
える写真」を撮る。つまりはそう言う事だろう。

流行と言うのは不思議なもので、流行には繰り返しの周期がある。
タピオカとナタデココはその代表格みたいなものだろう。今このD
en Cityではn度目のタピオカブームが来ているのだ。

そうなるよ、今回俺がわざわざ連れて来られた理由は……

「写真を撮ってポイなんて駄目だからね〜」

「私達の代わりに飲んで欲しいの」

「あ、お金は気にしないでいいよ！　ちゃんと私達が出すから！」

「え？　二人ともこの金なんて持つてるの？」

二人は人間界で普通の人間の様に振る舞っているが正体はカードの精霊だ。そんな彼女達が人間界の通貨を持つている？

そう言えば、先ほどもリイラがしれつとスマホを取り出したが、それもいつ調達したのだろうか？　当然俺は彼女にスマホを渡した覚えは無いし、俺が使っているスマホとも違ったので俺のをいつの間にかクられたという訳でもない。

「ふふん……抜かりは無いわ。ほら！」

「うわあ……なあにこれ……」

キスキルがチラッと見せてくれた財布の中には万札がちよつとした束になるくらいに納められていた。なんで俺より金持つてるんだ？

「まさか、他人の口座からちよろまかしたりなんて……」

「そんな事してないわよー」

「酷いなー」

え、冗談で言っただつもりなのに本当にそんな事を？　流石にそれは

マズイって！　でも二人は怪盗がモチーフのモンスターだし、やれない事もないだろうし、絶対にやらないとも微妙に言い切れない……。

「ウソウソ。本当はこれで稼いでるの」

そう言っただけリイラこちらに向けて来るスマホの画面には人間世界の大手動画投稿サイト上のLive☆Twinチャンネルが表示されていた。

サムネに映っている彼女達は勿論Evil★Twinの姿ではなく、Live☆Twinの姿である。

「いっつ!?　登録者100万人!？」

動画自体は俺が観た物と同じで動画に表示される字幕は精霊界の文字だが、話す言葉は日本語である。逆にその字幕が独特な世界観を

演出しているという事で最近界限で人気らしい。

「しーっ！ あんまり大きな声出したら私達だってバレちゃうじゃないー！」

「ああ、ごめん」

彼女達が人間界にやって来て一週間。たった一週間だ。初日にチャンネルを立ち上げていたとしても、そんな少ない時間でこれだけの登録者を集めたというのは驚きである。

しかし、最近の動画投稿サイトは結果さえ出せばこんな短期間で報酬を渡してくれるのだな。そっちも驚きだよ。

優れた作品は国を越えて評価される物だが、文字通り世界を越えてもその理論は通用するものなのだ……。

そんな事をしみじみ考えていると、長かった列は順調に消化されて行き、キスキルとリイラの番まで来ている。二人とも慣れたもんだと言わんばかりに呪文のような注文をこなしているが、もしかしてタピオカミルクティーは精霊界にも有ったのだろうか？

「ほら、キスキル」

「ん！ オツケー！」

リイラが持つているカップを店の看板が写り込む位置で掲げると、それに合わせるようにキスキルも頼んだ飲み物のカップを合わせる。

「まるで普通の女子高生みたいだな……」

我ながら現役の男子高校生の言葉としてどうなんだろうかとも思うが、俺はこういう事はやらないから仕方ない。

自分のスマホで適当に「Live☆Twin」と検索を書けたところ、彼女達が運営しているSNSアカウントはすぐに見つけることが出来た。そのアカウントでまさに今投稿された写真付きの一言に凄い勢いで「いいね」が付いていつているのを見るに、本当に人気があるのだと分かる。

あ、ついでにフォローもしておこう。

「それじゃあ、はい」

「お姉さんたちからのプレゼントだよ」

「こりゃどうも」

写真に撮られるという一仕事を終えたタピオカミルクティーは二人から俺へと渡される。

甘いものは嫌いでは無いが、流石に二杯も飲むのは厳しいものがある。

「ん？」

少し考えていると、俺の服の裾が軽く引つ張られる感覚があった。下から。

「はいはい、最初からそうしようと思ってたよ」

受け取ったカップの片方を自分の影の上に置いて、ミドラーシユへと渡す。こちらも二人だったから食品を無駄にすることが無くて助かった。

「前から思ってたけど、世良君ってすごく自然に凄い事してるわよね」
「非科学的く」

リイラとキスキルはそう言うが、自分達も非科学的存在だという事を理解しているのだろうか？

「さて！ それじゃあ次の目的地に……」

キスキルが次の目的地を高らかに宣言すると思ったら、突然変な方向を向いて言葉を止めた。

「行く前に、彼のお話でも聞いてあげましょうか」

「さつきからチラチラと目に入って気になるもんね」

「どうした？」

俺が声を掛ける間もなく二人は路地の方へと駆け出していく。

突然の行動に俺は動き出せずに結局そのまま路地の方をずっと見ている事しかできなかつたのだが、何やら「ヤメ……」とか「離せ……」とかそんな感じの声が聞こえる気がする。

そのまま少しの間待って居ると、有名な宇宙人の写真の様にキスキルとリイラが両端に立って誰かの腕をひつ掴みながら路地から出てきた。

「ええ……」

その人物はそう、藤木遊作その人だった。

この状況を写真に撮ってSNSにアップしたらいい感じにバズるかもしれないな。

俺はそんなどうでも良い事を考える事しかできなかつた。

カードの精霊

「どうぞ。これはサービスだ」

「あ、どうも」

先ほど俺達と自己紹介を終えた草薙さんが俺の前にコーヒーを置いてくれる。

ここは草薙さんが店主を務めるCaf・Nagiの仮設テーブル。キスキルとリイラに捕まえられた遊作は話がある事だったので落ち着ける場所と言う事でここを提案してきた。

「そう言えば、世良君は遊作とメイド喫茶に行ったそうじゃないか。遊作はその時の事を全く話してくれなくてね」

「草薙さん、今その事は関係ないだろう」

「へいへい、お嬢さんたちもどうぞ」

「あら、ありがとう」

「どーもどーも。でもごめんなさい。私たちは頂けないわ」

「おっと、コーヒーは苦手だったかな」

「えーっと、そういう訳ではないのだけどね」

「すみません、二人の分は俺が貰ってもいいですか？」

「ん？ それは構わないけど」

飲み物を拒否する二人に対して草薙さんは釈然としない表情を浮かべているが、どう説明するにしても精霊の話からしないといけないので申し訳ない気持ちになってしまう。

いやまあ、この人達なら納得はしなくとも理解はしてくれそうだから話しても良いのだが、今からその話をするのは唐突で意味不明だし、何より大変だからな。

「それで、藤木は何が聞きたいんだ？」

心の中では彼の事を遊作と呼んでいる俺だが、普段から関わりは全くと言っていい程無い。なんなら以前ドラマ喫茶に行った時に初めて会話をしたレベルの交友関係だ。

いや、初対面で一緒にメイド喫茶に行くってどういう事よ？ いくら共通の知り合い（遊作がどう思っているか不明なので敢えて友人と

は言わない)が間に挟まっていたとはいえ、俺と遊作の関係は意味不明過ぎるだろ。

「学校からずーっと彼の後をつけていたよね、君」

「え? そうなの?」

キスキルが言うにはEvil★Twinの二人が校門前で合流した時点ですでに物陰から俺の事を見ている遊作に気が付いていたらしい。

……あ、そうか。だから普段全然見ない遊作を今日は珍しく学校で見かける機会があったわけだ。あれは俺の事を追っていたからなのか。

こういう周囲をしつかり警戒している所を見るとやはり二人はヤバイ仕事をしている人間精霊なんだなと実感させられる。

「そうだな……まず、彼女……あのAIの子はどうなった?」

遊作は少し聞きづらそうにしながらそう言った。それはガラテアの行く末がどうなったのかが不安になったからなのか、それとも見知らぬ人間であるキスキルとリイラが居ると言う状況でイグニスに関する事柄を言う事を躊躇ったからなのかは分からない。

「ガラテアか。彼女はあるべき所に帰ったよ」

「そうか」

遊作は少し顔を伏せて何かを考える様な仕草を取ったが、俺の表情に悲壮感が全くないことに気が付いたのか、悪くない結果に落ち着いたことを悟ってくれたのだろう。

「本題はこちらだ。聞きたいことは三つある。ハノイの塔の事件発生時、お前はLINK VRAINSに居たな。アバターネーム、ラツセ。一つ、お前があの時行っていたデュエルの相手。二つ、そのデュエルで使っていたあの巨大なサイバース族について。そして三つ……世良は実際の所あの事件についてどこまで知っている?」

俺とリースのデュエルの事は知られていたか。

お馴染みのカメラコンビはplaymakerに引っ付いていたから俺の事は大っぴらには知られないと思っていたが、流石にaidaのあの巨体は巨大なハノイの塔の反対側とは言え隠しきれな

かったか。なんかすげー光ってたしな。

おそらくそこからそこで行われたデュエルのログを辿って俺に行きついたらと言った所か。

……ていうか、そういえばa—vidaはサイバース族だったな。失念していた。そりゃ興味惹かれますわ。

「どうしてそんな事が知りたいんだ？」

「それは……俺が、playmakerだからだ」

「！」

「ハハ、LINK VRAINSの有名人がこんな身近に居たから流石に驚いたかな？」

驚いた。

だが、それは草薙さんが言うplaymakerの正体が遊作だった事に対してではない。そんな事は俺が生まれる前から知っている。

俺が驚いたのは遊作が自分からplaymakerの正体を明かさうなことをしたからだ。草薙さんの反応を見るに、俺に正体を明かすことは承知の上での行動だったのだろう。

「あの日、お前はロスト事件について詳細は知らないと言ったな」

「ドラゴンメイド喫茶に行った日だな」

「草薙さんはしばらく黙っていてくれ」

草薙さん興味津々か???

「だが、俺達がイグニスと呼ぶ意思を持ったAIと似た存在を連れ、サイバース族のモンスターを操っていたお前があの事件と全く無関係だとは考えにくい。世良が何かを隠している事は分かっている。だからこちらも秘密を共有した。教えて欲しい、あの事件について知っている事を」

なるほど……。

リボルバーからロスト事件の全容は聞かされているはずだが、結局のところリボルバーこと鴻上了見はロスト事件の黒幕ではない。黒幕である鴻上聖は遊作と対面した時点で死んでしまった訳だから彼としては自分の秘密を明かしてでもまだまだ知りたいことがあるという事か。

「……………さて……………どこから話しをしたものか……………」

うーん……………何というか……………」

「非常に申し訳ないのだが……………、俺はロスト事件に関しては本当に知らない」

申し訳ねえなあ。

だけどこれはマジなんだよなあ。

ロスト事件に関して、この世界で生きる俺としてはニュースでやってたこと以上の事は知らないし、俺がリースとデュエルしていたのもサイバース族である a i v i d a を使っていたのも精霊関連という全くの別口なのだから。

「そんなはずツ……………」

俺の返答に対して納得がいかないとばかりに椅子から立ち上がる遊作だが、それを抑えて俺は話を続ける。

「ロスト事件には全く関係ないのだが、最初の二つに関しての質問になら答えられる」

まあ、いいだろう。

別にこれは秘密にしなければいけない様な事ではないのだから。

話したところで誰も信じてくれないから誰にも話していかなかっただけだ。

仮に精霊に関する知識が悪用される可能性があつたとしても、この二人ならそんな事はしないだろうし。

俺が話す態度を見せたことで遊作は再び椅子に座り直し、草薙さんも横で話を聞く態勢になっている。

「藤木と草薙さんはカードの精霊って知ってるか？」

「は？…」

いきなりの話題転換に二人は虚を突かれた様な表情をする。

「まあ、そういう反応にもなるよな……………最初の質問の答えだが、俺が相手をしていたのはこいつだ」

椅子を少し引いて地面に向けて手を差し伸べる。そうすると俺の意図を汲み取ってくれたミドラーシユが影から一枚のカードを差し出してくれる。

「……ん??? ちょっと待ってくれ、今どこからそのカードを出した?」
「その話も後でしますんで」

立ち位置の関係で遊作と草薙さんからは良く見えなかっただろうから変な場所からカードを取り出したように見えた事だろう。

『星杯の妖精リース?』」

2 / 3 の答え

それはあのデュエルの後、何故か俺の机の上に落ちていたリースのカード。幸い精霊の方はギルスか世界しか救えない男が引き取ってくれたのか、今このカードは精霊抜けのただのカードでしかない。

……ないはずなのだが、俺は不安なのでスクリューダウンに入れたうえで隙間をホットボンドで埋めて封印している。ちなみに、ヴィサスに押し付けられたレイノハートも同様の処置をして絶対安心の場所（ミドラーシユの住処）に保管していた。

「もう察しているだろうけど、俺はカードの精霊が見える。あ、ちなみにこっちの二人もカードの精霊ね」

「いえーい」

「ぶい」

「!？」

さつきまで話に入ってこないでSNSにアップする用の写真を撮っていたEvil★Twinの二人が話を振られた事に気が付くとしっかり反応してくれた。

本当なら二人のカードを見せれば証拠の提示に成るのだが、俺は『Evil★Twin キスキル』のカードも『Evil★Twin リイラ』のカードも持っていない。ていうか、俺の知っている二人の衣装はもつと怪盗っぽい暗めの衣装だったはずだが、今二人が来ているパンクちつくなデザインを知らないので余計に説明がしにくい。俺が知らないうちにイラスト違いでも出ていたのだろうか？

「い、いやでも、カードの精霊って言うのはこう……幽霊？ みたいに普通は見えないものじゃないのか？」

「まあ、それは草薙さんの言う通りなんですけど、この二人はちよつと出所の言えない凄いアイテムで実質的な実体化をしているというか……まあ、そのせいで物を食べたり飲んだりすることは出来ない訳ですわね」

「そんな非科学的な事があるのか？」

「そういう反応になるよなあ」

遊作が言う通り、俺が今話している内容は荒唐無稽な夢物語と言わ
れても全く否定のしようがない。

何というか、思い出すなく。

おかんにカードの精霊について話した時もこんな感じの反応をさ
れたものだ。カードの精霊が見える俺の両親という事でもしかした
ら親父とおかんもカードの精霊が見えるのではないかと考えた俺が
チラツと話をした時もこんな感じの反応をされたものだ。

「あ、すまない。決して疑っている訳ではないんだが」

「いや、良いんだ。だって俺が一番非科学的だと思ってるから」

「ええー！ ひどーい」

「ある意味科学的な存在な私達よりよっぽど意味不明なことをしてい
る世良君には言われたくないんだけど？」

SOLtISという最先端科学技術を使っている最先端非科学的
存在のキスキルとリイラにオカルト扱いされる俺と言う存在は一体
何なのかと思わないでもないのだが……。

「まあ、今回の話では二人は関係ないのでとりあえず置いておくとし
て」

いかんいかん、つい話が逸れてしまったが、今はハノイの塔とサイ
バス精霊界で起こった事件の関連性を伝える場だったな。

「んで、このリースなんだが、こいつがハノイの塔の計画を利用して悪
さをしようとしていたから、それを止めるために俺はこいつとデュー
エルをしていたって訳」

俺は机の上に置いたリースのカードを爪でトントンと叩きながら
話を続ける。

「精霊がLINKVRAINS上のデータを使って何かする事が出来
るのか？」

「藤木はこの『星杯の精霊リース』がどういった背景のストーリーを
持っているモンスターか知っているか？」

「いや」

「ならそこからだな。掻い摘んで話すと、こいつはこのカードの中で
はまるでこれまで一般人として過ごしてきた少女に魔法少女となる

力を授けるマスコットの様な見た目をしているが、本当は自分が神の力を手に入れようとしている黒幕なんだ」

「？」

「……ここは前提知識と言うか、余談だからそんなに気にしなくていいや」

聖遺物世界の盛大なネタバラシをする俺だが、どうやら話の展開が急すぎて遊作は付いていけない様子。

「まるで最近流行りの鬱系魔法少女物みたいな展開だな」

「草薙さん!？」

草薙さん!?

「ま、まあ、ストーリー上このリースと言う存在はとんでもなく悪い奴って事」

あまりにも理解が早い草薙さんに思わず動揺してしまったが、俺はなんとか話を続ける事にする。

「大事なのはこの妖精リースの前世というか、正体が科学技術が発達した世界で情報工学の権威だったという事だ」

「ほー、デュエルモンスターズのカードにはそんな背景があるのか」

「ええ、思いもよらないカードと意外な繋がりがあったりして調べてみると面白いですよ」

草薙さんの疑問に雑談で返すものの、この世界では公式の設定資料集とも言えるザ・ヴァリアブル・ブックを見た事がないからもしかすると調べるのは結構大変かもしれないな。

まあ、色んな人がいるからネットで調べれば物好きが考察サイトでも出している事だろう。

しかし、カードの精霊の性格は背景ストーリーに囚われないとばかり思っていたが、リースは知っている通りというか、思った通りの精霊だったなあ。

「情報工学の権威……という事はハッキングなどの知識に精通しているという事か」

遊作が正解を答える。

「そう。精霊の中にはそのストーリー上の役割や技能を通して俺達が

住む人間界に干渉することが出来る奴がいる。リースもその一人で、奴はその知識と技術でハノイの塔のプログラムに介入して自身の目的を果たそうとしていた」

「じゃあ、あそここの二人もその自前の技術とやらでこの世界に居ることが出来るっていうのか？」

「そうですね」

俺の話から横に置かれたからか今度はCaf・Nagi本体の写真を撮るためにいつの間にか席から離れていたEvil★Twinの二人に草薙さんは目をやる。

二人は持ち前のスキル（怪盗）で大企業からサイバース族に（本人達は悪魔族だが）親和性のあるAIアンドロイドの筐体をかっぱらって来た訳だから間違いではない。うん。

「リースは何が目的だったんだ？」

「これは奴自身が語った事だが、文字通りLINKVRAINSという世界を一つ壊すほどのハノイの塔のエネルギーを奪おうとしていた。まあ、そのエネルギーを使って何をするつもりだったのかは今となっては分からないけど、世界の役に立つことだったとは思えないね」

思い返してみれば、リースはハノイの塔のエネルギーの莫大さしか話していなかったな。だが、何をどう考えても良くないことに使おうとしていただろうけど。

「そして二つ目の質問。あのサイバース族のモンスターに関してだが、あれは言ってしまうえば諸悪の根源たるリースを倒すため、世界を救うために神になった主人公かな」

「それもデュエルモンスターズのストーリーか？」

「そういう事。その神様が俺を手伝ってくれた理由は相手がリースだったからと言うのもあるんだろうけど、一番の理由は精霊界が脅かされていたからだろうね」

「精霊界？」

おっと、つい当たり前の様に精霊界という言葉を使ってしまったが、この世界ではカードの精霊に対する認識が薄いから知らないか。

「大事にされたカードにはカードの精霊が宿るっていうのは子供でも知ってる御伽噺だけど、デュエリストの前に現れる前の精霊が何処に居ると思う？」

「それが精霊界か」

「そうそう。それでまあ、サイバース族を含めた科学技術に親和性があるいくつかのモンスターが集まったサイバース精霊界って場所があるんだけど……」

「まるで見て来たかのようだな」

「まあ、実際に見て来ましたから」

「もう何でもありだな……実は君もカードの精霊なんじゃないか？」

「そうかな……そうかも……」（錯乱）

草薙さんは冗談のつもりで言ったんだろうけど我ながらそうとは思えない様な話しかしていないので否定もしづらい。

「こほん。リースはその精霊界に住む精霊を片っ端からデータ化してハノイの塔のデータの一部にしてたんだ」

「！ 面白いえば、ある瞬間にハノイの塔の完成度が一気に進んだ時があった」

「ああ、多分その時だ。リースが精霊たちをデータ化してハノイの塔の一部にしゃがったのは」

俺はネットのライブ配信でハノイの塔事件を見ているだけだったが、その瞬間を見ることが出来ずに後から違和感として気が付いたが、事件の初期からLINKVRAINSにログインしていた遊作はその瞬間も認識していたらしい。

「そうか、だとすれば納得がいくことがある。あの巨大なサイバース族のモンスターが現れた後、ハノイの塔の完成度が巻き戻されていたのは……」

「俺がリースとのデュエルに勝って、精霊達をハノイの塔から解放したから、だな」

「そうだったのか……」

疑問が一つ解消したからか、遊作の表情は幾分かすっきりしたものとなっている。

「あの神様、『双星神 a | v i d a』はストーリー上の宿敵との対戦、精霊界の危機という理由があったから俺のデッキに現れたんだろう、と今では分かるよ。あれ以来俺のデッキに a | v i d a は居なくなっただけだ」

リンクモンスターが幅を利かせているこの世界なら a | v i d a は強力なメタカードとして非常に有用だと思う遊戯王プレイヤーとしての俺と、どう考えてもヤバイパワーを持っているカードを使うのは怖いと考えるこの世界に住む俺のせめぎ合いが無かったわけではないが、今も手元に居てくれないというのは多少なりとも関りがあつたカードと言う事で少し寂しく思ってしまうな。

「これが二つ目の質問の答え。俺がサイバース族のモンスターを使っていた理由だな」

「……」

沢山話をして乾いた喉を草薙さんが淹れてくれたコーヒーで潤す。聞きたかった話とは全く違う方面で意味不明な情報を投げつけられた遊作と草薙さんは呆気を取られていたようだが、すぐに再起動する。

「話してくれてありがとう。知りたかった情報ではなかったが、分かった事もあった。裏で世良が戦ってくれたおかげで俺達は知らないうちに助けられていたんだな」

「ハノイの塔の事？ まあ、それに関しては……礼は要らないかな」
ギルスがしっかりと全部説明してくれていたならミドラーシユの力を借りてさつきとリースに対処する事が出来たのだが、その事に気が付かず遊作と LINK VRAINS を危機に陥れていたのだから少し気まずい。

「これで俺が話せることは全部話したな」

そう言うってから机の上に置いていたスクリーンダウンに封印されたリースのカードを手に取り、話しているうちにいつの間にか陽が傾いてきたために最初の位置から少し横にずれていた俺の影に落としてミドラーシユに受け取ってもらう。

「!!」

「!? そう言えばそれ! それは一体どういう仕組みなんだ! 手品か何かか!」

「え? ああ、そうだった」

普段だったら人に見られない様にしていた所だが、精霊に関して暴露した後だからつい何も考えずに適当にミドラーシユに渡してしまった。

「ここに居るのはミドラーシユ。俺の相棒さ」

腰のデツキケースのエクストラデツキから『エルシャドール・ミドラーシユ』のカードを取り出して二人に見せる。それに合わせてか、椅子に座っている俺を映した影が、俺自身は動いていないにも関わらず独でに立ち上がりお辞儀をしている。

「どうやら二人に挨拶をしているらしい。」

「か、影がツ!」

「これも精霊の力なのか」

「そうだね。正確にはちよつと違うんだけど、シャドールモンスターは影に由来する様なモンスターだからこうやって俺の影を通して人間界に干渉できるんだ」

めっちゃビビり散らかしている草薙さんに対して遊作は冷静に見ている。

そんな時、ふと俺はEvil★Twinの為に出してもらったコーヒーがそのまま残されていることを思い出したのでそのうちの一つを手にとって自分の影の上に置く。

するとカップはそのまま俺の影に飲み込まれるようにして沈んでいく。

「え、ええ……」

「最早驚く事にも疲れたな」

今まで見た事がない遊作の呆れた表情も見る事が出来たし、そろそろお暇させて貰おうかな。

『苦……甘……』

「あら? ブラックは苦手だったのか?」

「? 誰と話しているんだ?」

「ああいや、どうもブラックコーヒーは少し苦手だった様で」

俺の影を通したミドラーシユの動きは遊作と草薙さんにも見ることが出来るが、精霊であるミドラーシユそのものの声はやはり二人には聞こえていない。

返却されたカップの中身は空であり、何だかんだ言いながらもすっかり完食してくれるあたり良い子である。

最後のコーヒーを俺が飲み干した後、必要な写真を撮り終わって本気で暇をし始めたキスキルとリイラを呼び戻してから家に帰る事にした。

playmakerの正体については誰にも話さないことを告げながらCaf・Nagiを離れる。

少しだけ、この世界の主人公たる遊作とその相棒である草薙さんとのつながりが増えたわけだが、この先起こるであろう事件で俺が関わることにはならないだろう。

何故かって？

この世界はカードの精霊に関する事件が全く起きない科学技術全盛の世界だからだ。俺みたいなオカルト人間はお呼びではないのである。

「何だか突拍子のない話だったな、遊作」

「ああ。あの事件で気になっていた疑問の一つがこれで解けた。だが、あのサイバース族のモンスターはリボルバーにも見えていたはずだ。もしかしたら、世良もハノイの騎士に狙われるかもしれない」

「そうだな。でも大丈夫だろう。彼には何だかよく分からないが心強い味方が沢山居るみたいだし」

「…………ふっ。そうかもしれないな」

ドドドドドドドドド

「?」

「あつた! Caf・Nagiだ! ここにさつきまでLive☆
Twinの二人が居たはずだ!」

「すみません! 少し前に二人組の女の子がこの店に来たと思うんで
すけど、同じものを下さい!」

「俺にも!」

「僕にも!」

「拙者にも!」

「な、なんだ? 一体何が起きているんだ?」

「Live☆Twin………草薙さん、おそらくこれのせいだな」↑
会話内容からLive☆TwinのSNSアカウントの万バズ投稿
を探し出して草薙さんに見せる遊作

「な、なんだこりゃ!」

サイバース拉致

遊作と草薙さんのお茶会から早数日。

彼らとの関係が深まったからと言って俺の生活にはこれと言った変化は特には無い。強いて言えば遊作と廊下ですれ違ったときに「よっ」「おう」くらいの挨拶を交わすようになったり、今でも時々ホットドッグを買いに行くCaf・Nagiでホットドッグを受け取るときに草薙さんが声を掛けてくれるようになったくらいだろうか。

LINKVRAINSはまだ閉鎖中のため、放課後の暇を潰す選択肢がカードショップを冷やかしに行くくらいしか無いのが最近の悩みである。

という訳で、今日も今日とて行きつけのカードショップでほぼ毎日カードの内容が変わっているような気がするストレージボックスを漁っているのである。

「うーん……ん？ お、『神騎セイントレア』か。エクシーズ素材を使つてバトルした相手モンスターを手札に戻す効果。しかも、セイントレア自身はエクシーズ素材を持っていれば戦闘破壊されないから相手だけを処理できる良いカードだ」

俺が使うデッキでランク2が立つ、つまり、レベル2モンスターを中心とした物はないのだが、こういう汎用モンスターはいずれ役に立つもんだ。

それに、このカードは戦闘破壊されないという事でレベル2モンスターが主体となったデッキで『天霆號アークゼウス』^{ネガロギア}を出すための下敷きとしても使うことが出来る。

「なんでストレージに入ってるんだ？ 確かちやんと値段が付くカードだったと思うんだけど……こりや買いだな。これだからストレージ漁りはやめられない」

アークゼウス……良いよなあ……後攻の捲り札として超強いし。

まあ、俺アークゼウス持ってないんですけどね。

『トロイメア・ユニコーン』もそうだけど、一枚3000円は高えわ……。

そりや買えなくはないけども学生がおいそれと手を出せる値段ではない。こちらら学生なので、カードを買う以外にもお金は必要なのだ。友人と遊んだり……遊んだり？ あれ？ 言うほど友人とどっか行ったりしてないな？ もしかして俺って友達少ない……？ いやいや、ジャンクフードだつて食いたいし、ドラメ喫茶にも行きたい……って、あれれ？ なんか飯ばかりだな？ あれれれれれれ?? 『……まあいいや。アーゼウスの事を考えると『ダウンード・マジシャン』も欲しい所だが、これも確か結構良い値段してたはずなんだよなあ』

ダウンードもアーゼウス関連で使えるカードという事で結構良い値段をする。ショーケースで飾られてもおおかしくない位の値段だったはずである。

まあ、アーゼウス持っていないから結局俺には関係ないんですけどね。

「ん？」

そんな感じで時間を忘れてカードを漁っていると、ポケットに入っていたスマホが震えだす。誰だろうか？

そう思いながらスマホを取り出して通知を見ると、知らないメールアドレスからのメールだった。

「んー？」

ネットリテラシー100点満点だと自覚している俺は通常だったから見知らぬメールアドレスからのメールを開くなんて事はしない。だが、通知欄から見えたメールの概要は凄く見覚えのある物だった。

Title :

新しい動画が投稿されました

From :

Live☆Twinチャンネル

本文 :

URL↓<https://www.db.yugioh-card.com/yugiohdb/card-search.action?ope=2&cid=16251>

「お、新着動画か」

それはキスキルとリイラが精霊界でバーチャル配信者として投稿している新着動画の通知だ。以前もこんな感じで知らないメアドからメールが来ていた。

また、最近彼女たちは人間界の動画投稿サイトでも活動しており、そっちのチャンネルもすっかり通知をオンにして登録している。新着動画が出ればメールで通知が来るようになっていて。そっちのチャンネルで動画が投稿されれば俺も知っているメアドで通知が来るはずなので、今回の新着動画通知メールは精霊界の方のチャンネルだという事が分かる。

それにしても、精霊界の方のチャンネルの更新は久しぶりではないだろうか？ 彼女達はずっと人間界に居る訳では無いとはいえ、こっちの世界で何やら色々楽しんでる様子なので、凝った編集を入れて動画を投稿する時間は中々捻出出来なさそうだった。

「今回はなんだろうな。案外人間界の旅行記動画みたいな感じだったりするかも。精霊から見た人間界の話か……面白そうだ」

少し気になるのは今回は投稿された動画の説明文と一緒に載せられていたはずだが、今回はURLしか記入されていない様だ。

どちらにしても今は出先だ。家に帰ってから楽しませてもらう事にしよう。

☆

カードショップで清算を済ませた後、何事も無く家に着き、夕飯を食べて、風呂に入ったらさあ勉強……とはならない。

今日はLive☆Twinの新着動画を観るのだ。動画一本分だけなら対して時間は取られないが、動画を一本観たらオススメ欄に表示されている別の動画に手が伸びてしまうのは自明の理というやつではないだろうか。

精霊界の動画チャンネルで動画を投稿しているのは彼女達だけではない。他にも沢山の精霊界のクリエイター達が鎬を削っている場

なのである。

「あく時間がいくらあっても足りねえなあ〜」

これから始まる世界一楽しい時間の無駄遣いの事を考えながら慣れた手つきで隠しリンクをコピーしてから手打ちで修正しながらブラウザに入力する。

「!?」

エンターキーを押した瞬間、パソコンのモニターから異様な光が発せられ、部屋一面を照らし出す。

眩い光に目が潰されると思い、反射で瞼を閉じる。それに加えて思わず腕を顔の前に出して防御姿勢を取ってしまうが、結局はモニターが光っただけなので衝撃がやって来るとか、そういった事は起こらなかった。

「……………?」

未だモニターが輝き続けていないことを確認しながらゆっくりと瞼を開く。

「な、な……………なあ?!?!」

そこで俺の瞳が映し出したものは見慣れた部屋の景色ではなく、天を衝くかのような高いビル群、光り輝くネオンに読めない文字、Live☆Twinの二人が広告塔を務める商品広告。そして、どこかで見た事があつたり、見た事も無い姿をした精霊達。

「サイバース……………精霊界……………」

まさしくここは何度かマスケーナに連れて来てもらったデュエルモンスターズの精霊達が住む世界だった。

「なんで……………それにこれは……………」

サイバース精霊界はLINKVRAINSと表裏一体の世界。ここに来るためにはLINKVRAINSにログインしたうえでマスケーナに導いてもらう必要があるはずだった。しかし、今の俺はLINKVRAINSで活動するときのアバターの姿ではなく、俺自身の身体であった。

手を握って開いてみたり、顔を触ってみたり、その場で足踏みをしてみたりするものの、アバターの時の小さな違和感が全くない。鏡を

見て確かめた訳ではないが、顔も毎朝見るそれと全く同じ事だろう。

「……なあ、ミドラーシユ。一体何が起こったんだ？」

その場でしやがみ込んだ俺は自分の影に居るはずの彼女に声を掛けてみる。どうやらこの世界はいつ来ても真夜中のようだが、眩いネオンの明かりのお陰でこの場所は昼の様に明るい。

そのため、夜中でも問題なく影が出来ている。

「ミドラーシユでも分からないか……」

ネオンに映し出された俺の影は首を傾げている。

どうやら彼女にも今起こった事の原因は不明らしい。

「じゃあ、お前の力で人間界に帰れないかな？」

今度は首を横に振る。それは出来ないらしい。

ミドラーシユは精霊として大きな力を持っているのは確かかなはずだが、流石にサイバース精霊界はお門違いと言う事だろうか？

「さて、どうしたもんかな……」

幸いこの世界には知り合いが三人も居る。マスカレーナ、キスキル、リイラ。彼女たちの誰かに接触出来れば人間界に帰る手掛かりも掴めるはずだ。俺がこの世界に飛ばされた時、三人とも人間界には来ていなかったたのでこの世界に居るはずだ。

「とりあえず、最初にキスキルとリイラに出会ったあのバーに行ってみるか？」

マスカレーナに連れて行ってもらった時の事を思い出して何とか一人で行ってみようと思うものの、この街は辺り一面背が高いビルが生えているビルの森とも言える場所である。中々これと言った分かりやすいランドマークが無く、難儀しそうだ。

「うーん……小夜丸がそこら辺を歩いていたら道を聞けそうなものなんだが……」

俺はあの人の好きそうな精霊の少女の事を思い浮かべるが、残念ながらそう都合良く現れるという事は無かった。

「おい」

「ん？」

それは正面から歩いて来た男の声だった。

この世界で男の知り合いは居ないし、その男を見ても俺の記憶には無い顔だった。サイバース精霊界に居るといふ事はこの男も精霊なのだろう。

人違いならぬ、精霊違いである事も考えたが、目の前の男はどう見ても俺に話しかけている。

「一緒に来てもらおうか」

「はあ？」

てつきりデュエルでも仕掛けられるかと思つたが、どういう訳か相手は同行を求めて来た。

「お前何を……ッ」

気が付いたら俺は十人くらいの男たちに囲まれていた。

見ると皆顔にデフォルメした稲妻を模したような片眼鏡？ を付けている。同じ意匠の装備をしているという事は何らかの組織か団体に属している精霊という事か？

残念ながら俺の頭の中のカードプールにそんなモンスターは存在しない。ティアラメンツの三人娘の様に俺の知らないテーマモンスターか？

「抵抗はしない方が身のためだぞ。すまないが、サニー様の計画の為だ」

「サニー……？」

やはり聞いた事のない名前だ。

「サニー様と言え！ サニー様と！」

「貴様！ サニー様を呼び捨てにするとは許さんぞ！」

「サニー様!! はい!! リピート、アフター、ミー!!」

「ひえっ」

なんだこいつら……こわあ……。

どうやらこの男たちはそのサニーとやらに随分心酔している様だ。

でもなんだろうか……怖いんだけど、この男たちから感じる怖さはヤクザに絡まれた時の様なそれではなく、厄介なオタクに囲まれた時のその様な……。

「まあ、待て。お前達」

「隊長！」

「隊長！」

「彼はサニー様を知らないのだから仕方がない。それに、価値観の押し付けは良くない」

周りの男達から隊長と呼ばれた男が俺の前に出てくる。

他の男たちと比べて一際存在感がある隊長と呼ばれた男はゆっくりと俺に近づき、肩を組めるくらいの距離まで来る。

「こう言うのはゆっくり、じっくり、確実に、沼に引き込むんだよ。少年、これは君へのプレゼントだ」

そう言っただ隊長と呼ばれた男は一枚の写真を懐から取り出して俺に渡してくる。

「そ、それは!?!」

「貴重なサニー様のお昼寝ブロマイド!?!」

「ま、まさか……新規ファン獲得の為に隊長はそこまで!?!」

そこに写っていたのは金髪ドリルツインテールの少女がよだれを垂らしながらソファで眠っている様子だった。服がはだけてへそが見えてしまっている。

「な? 良いだろ?」

「あ、はい」

俺は謎のオタク集団に襲撃を受けていた。

太陽と月

怪しいオタクたちにホイホイとついて行った俺であるが、何も考えなしに行動している訳ではない。

俺を連れて行こうとしていた男の一人が言った「サニー様の計画」という言葉。それが正しいのであれば俺がこのサイバー世界に連れてこられたのもサニー様とやらの計画の一環だと思われる。であるならば、サニーに会って話をする事が出来れば逆に人間界に帰る方法が分かるかもしれないのだ。

決して、隊長と呼ばれた男がくれたプロマイドに映った少女がかわいくて気になったからついて行く事にした訳ではない。これは本当である。

それはそれとして「一目くらいは見ておくか」と、思ったこともまた嘘ではないと言っておく。

それに、万が一危険な目にあつた時は恥も外聞も無くミドラーシユに泣きつく覚悟が出来ているので心配する事は何も無いのである。

「ここだ。ついて来い」

「へいへい」

連れてこられたのは何の変哲もないビル。周囲を見渡しても似たようなビルばかりなので、俺だけでもう一度ここへ来いと言われても恐らく無理だろう。

目的地は上層階らしくエレベーターに乗り込む事になるのだが、一般的なオフィスビルのエレベーターくらいの広さしかないのに謎のオタク十人くらいと一緒に乗るのはいろんな意味できつい。

出来れば今後二度と経験したくない事ランキングのトップ10入りを果たしたな……なんて事を考えていると、目的地の階層へと到着した。

エレベーターを出て、薄暗い通路をまっすぐ歩いていくと、一転して沢山のライトで光源が確保された大きな部屋へと辿り着く。

「ここは……？」

「はーっはっはー！ よく来たわね、人間！ ようこそ、サニー団本部

へ！」

部屋の奥にあるステージの様に一段高くなったお立ち台の上で胸を張ってこちらに声を掛けてくる少女が居た。それは先ほど渡されたブロマイドに写っていた金髪ドリルツインテールの少女、オタク集団がサニー様と呼ぶその人だ。

サニーの横には長身で褐色肌の女性が側仕えの様に控えているが、もしかして彼女もこのオタク達と同じようなサニー様万歳な人なのだろうか？

鋭めの眼差しはここに居る全員（サニー様含め）と比べて知性を感じるが、人は見かけによらないという事だろう……。

「早速だけど、アンタにはE v i l ★T w i nのアホ共をギャフンを言わせるための人質になって貰うわ！」

「E v i l ★T w i nに対する人質？ 俺が？」

サニーは俺をここに連れて来た理由らしい事を話しているが、余りにも内容が抽象的過ぎて具体的にどうしたいのかがいまいち分からない。彼女たちに何か恨みでもあるのだろうか？ まあ、キスキルとリイラは怪盗をやっている訳だし、色んな奴らから恨みを買っているうではあるな。

「ええ、あなたがあの二人と親しい関係にある事は調べが付いています」

俺の質問に答えたのは長身褐色の女性だった。手元のタブレット端末に目を向けながら話している事から察するに、俺の情報でも載っているのだろうか？

「えーっと……」

「ルーナ様だ。彼女はサニー様のお目付け役を務めていらっしやる」

しかし、俺は彼女の名前を知らなかったので返答に困っていると、オタク集団の隊長が音もなく近づいてきてそう耳打ちで補足してくれた。

お前……仕事が出来るってよく言われるだろ？

と、まあそんな事は今はどうでもよくて、あの女性の名前はルーナと言うらしい。しかし、サニーのお目付け役という事は、彼女は普段

から色々と迷惑なことをやらかしているのだろうか？

結構苦労してそうである。

「そりゃまあ、二人は友達だけど……俺を人質にして二人を呼び出したとして、その後どうやってキスキルとリイラの二人をギャフンと言わせるつもりなんだ？ あの二人は結構な曲者だぞ？」

「え？ それは、その……」

「少年」

「世良だ」

俺の問いに対して明らかに目が泳ぎまくってるサニーを庇う為か、ルーナが話に割り込んでくる。名前までは調べていなかったのかは知らないが、人間やら少年やらと呼ばれるのは嫌なので名前を伝えておくことにする。

「世良少年、あまりサニー様をなめるのはやめなさい。サニー様には私達では思いもつかない様な、海よりも深いお考えがあるのです」

「そ、そうよー！」

「で、サニー様。それは具体的にはどのようなお考えなのですか？」

「……」

あれ？ あのルーナって姉ちゃん、意外と愉快的性格をしているのかもしれない。

味方だと思っていたルーナに突然裏切られ、サニーの（多分何も考えていない）考えを聞かれて愕然とした表情をしている。

そんなサニーの様子をオタク集団たちは見逃すはずもなく、各々どこから取り出したカメラでシャッターを鳴らさずに撮りまくっている。

「んー、まあこの際キスキルとリイラをどうしたいのかはいい。お前たちはどこで俺の情報を知ったんだ？」

「ああ、その事？ アンタ、このEden Cityで一部の連中から賞金首扱いされてるわよ」

「は？！」

は？！

え？

いや、まったく心当たりがないんだが。

第一俺はこのサイバース精霊界、別名Eden Cityでは精々観光程度しかしておらず、何かをやらかす暇も無かった。

そりゃサイバース精霊界での友人たちは宝石なんかのカワイイ物を盗む怪盗コンビとか様々なデータを盗み届ける「運び屋」を営んでいる奴とか、悪そうな奴は大体友達くみたいなノリだが俺は何もやってないんだが!?

あ、いや、この世界で警察みたいな役回りをしてそんな小夜丸をほんのちよつぴりだまくらかしはしたな。

「まー！ 私はいつらの依頼を聞くような義理は無いから話だけ聞いてアンタの情報だけ貰ったのだけど、聞いてビックリ！ あのE v i l★Twinの二人と繋がりがあって話じゃない!」

「その情報を元に、ルーナ様は世良少年を人質にしてE v i l★Twinを誘き出す作戦を立てたのです」

なるほどね……。

一体どこの誰が俺を狙っているのかは分からないが、二人に俺の事を伝えた奴が居るといふ事は分かった。

……ていうか……

「なあ、俺は裏社会とかそういうのには余り詳しくないんだが、そういう依頼があった時に、その依頼の情報を得たうえで依頼を無視するのってマズイじゃないの？ 知らんけど」

「え？ いやいやいや。そんな訳ないじゃない。ねえ、ルーナ?」

「……」

「えっ！ 嘘！ もしかして私やばい事しちゃった!？」

「ふふっ。大丈夫ですよ、サニー様。私たちはサイバース族ではありませんからあの依頼を強制される謂れはありません。知らんけど」

「知らんけど!?! 今あなた知らんけどって言った!! ねえ！ 本当に大丈夫なんでしょうね!」

涙目になりながらルーナに縋り付いているサニーだが、ルーナの方は明らかに笑いをこらえている表情をしているのでわざとやっているのだと分かる。

そして、当然そんなシャッターチャンスは逃すはずもないオタク集団たちは再びカメラを構えている。

なんだこの空間？

「しかし、サイバース族が動員されている……か」

なんだか嫌な予感がする。

サイバース族はイグニスを作り出した新しい種族だ。そんな種族の精霊達を強制で動員できる存在……イグニスが直接精霊界に関与しに来ているとは考えにくいだが、あいつらに近しい精霊の誰かが関わっているというのはいり得る……のか？

だとしても俺を狙う理由が分からん。

「そうよ！ E v i l ★ T w i n の二人を誘き出して目的を達成した後にあいつらに引き渡しちやえば良いのよ！ 私ったら天才ね！」

「結局あいつらの言う事を聞くんですか、サニー様？」

「うぐ……」

さも名案を思い付いたかの様子でドヤ顔でそう言うサニーだが、ルーナの発言によってそれでは意気揚々と依頼を無視すると言い放ったさっきの言葉と矛盾してしまう事に気が付いたのか、そのドヤ顔は一瞬でぐぬぬ顔へと移行する。

当然このダブルシャッターチャンスを逃すわけがないオタク集団達はカメラのシャッターを高速で切りまくっている。

もう帰ってもいいかな？

「なあ、もう帰っていいか？」

「良い分け無いでしょ！ アンタは人質なんだから！」

どうやらダメらしい。

ていうか、帰ると言っても帰り方が分からないのだが……って、あ。

「そう言えば、俺をこの世界に呼んだのはサニー……様達なのか？」

俺がサニーを呼び捨てにしそうになった瞬間後ろに控えたオタク集団から殺意を感じたので急いで取り繕う。

「ん？ そうよ！ ルーナの手に掛ければ人間一人を精霊界に連れ込む事なんてよゆうなんだから！」

「あんなに分かりやすい怪しいメールのURLを疑いも無くクリック

する単純な人でしたのでよーでした」

「うぐう……」

ルーナの発言に思わず俺もぐぬぬ顔をしてしまう。

やはりあのLive☆Twinの新着動画通知のメールはこいつらが送り付けて来た偽物だったか。しかし、マスカレーナでさえLINKVRAINSという中間地点を通してでしか人間を精霊界に連れ込むことが出来ないというのに、あの彼女は人間を直接精霊界に連れ込む力を持っているのか……。ここから見ると二人はギャグをやっているおもしろコンビにしか見えないが、デュエルモンスターズのモンスターとして見ればペルレイノから人間界に俺を送り届けてくれたルルカロス並みの力を持つというのか。

攻撃力3000くらいありそうだな。え？ まじで？ 自分で言っておいてなんだけどまじで？

……だが、これで人間界に帰る方法も分かった。なんとかしてルーナに俺を人間界に送り返してもらえばいい。

……どうやって？ 推定攻撃力3000ありそうなルーナを攻略して言う事を聞かせる？ うん、俺一人で出来るとは到底思えない。ミドラーシュに頼ろうにも彼女の攻撃力は2200なので推定攻撃力3000の彼女に仕掛けるのは危険だ。それに、ミドラーシュは効果破壊耐性こそ持っているが戦闘破壊耐性は持っていないのでこれも懸念点である。

そうなると攻略のカギは……

「ぶーくすくす……あの二人が慌てふためく顔が見られると思うと、今から楽しくなっちゃうわね！」

「で、どうやってギャフンと言わせるんですか？」

「……」

サニーだな。

分からないけど、サニーの攻撃力は3000くらいしかなさそうだし、彼女を人質に取ればルーナに言う事を聞かせることも出来そう
だ。

ルーナはサニーをからかって面白がるような様子を見せているが、

ああいう人物は人間・精霊問わず意外とちやんと相手の事を気に掛けているものだ。

よし、推定攻撃力300のサニーならミドラーシユが対応しれければ何とかなるはず。

そうと決まれば話は早い。

電光石火、疾風迅雷、紫電一閃。

ミドラーシユと息を合わせて一気にサニーを制圧する！

「行くぞ！・ミドラーシユ！」

「ッ！」

「え!? 何!?!」

俺は彼女とタイミングを合わせるために声を掛ける。

少しでも変な動きを見せれば即バレるこの状況。で、あるならばこちらの士気を高めて少しでも相手をビビらせられれば儲けものと言う思いで敢えて大声を挙げた。

サニーに近づくために力強く踏み込んだ一歩目。

「ん?」

「え?」

「おや?」

その時、俺の足元、正確にはこの部屋を満遍なく照らし出すライトによって作られた俺の影の上に丸くて、金属で、紫っぽくて、猫耳っぽい何かが付いてて、俺の良く知るところの誰かが人を小バカにする時にするのと同じような表情をくっつけた何かが転がった。

カッ!!

その瞬間、この部屋を明るく照らすライト以上の光が周囲を覆った。

チャレンジ成功ッ！

俺は思い出す。それはある日の昼下がりの事だった。

『良いですか、ミドラーシユさん？ ラッセさんは何かと抜けている所があるので、もし私達が居ない時にラッセさんが危険な目にあつた時はあなたが助けてあげるんですよ！』

「お前は俺のオカンか？」

部屋でネットサーフィンをしていると、その日人間界に来ていたマスカレーナが俺の影の中に居るミドラーシユへと語りかけていた。

彼女もマスカレーナの発言に同意しているのか、俺の影が首を縦に振って肯定を示している。

大丈夫だから心配するなよと、確信を持って言えない辺り我が事ながら情けない。

『もちろん、ミドラーシユさんだけに負担はかけませんよ！ えーつと……』

そういうとマスカレーナは何かを探すようにポケットを漁りだす。

『てっててー！ この秘密兵器をミドラーシユさんにさしあげます！』

「おい、今それどこから出した？」

マスカレーナの服はピツチりとしたスパッツの様なスーツであり、今彼女が取り出したものの体積を考えると取り出す前はその部分がかもつこりしていたはずだ。

『ラッセさん……余り女の子の秘密を探るようなことをしてはモテませんよ？』

「え？ それって女の子の秘密なのか？」

マスカレーナは呆れた表情をしながら俺を見て言う。

女の子の秘密のカバー範囲広すぎるだろ。本当にそうなら俺は一生モテない気がする。

『もしラッセさんが危険な状況に陥った時は、ミドラーシユさんの判断でこれを使って下さい！ 使い方はここにあるピンを抜いてから投げるだけですから、簡単ですよ！』

マスカレーナは手に持った秘密兵器とやらの使い方をミドラーシユにレクチャーした後、それを俺の影の中へと落とした。

「おいおい、あんまり変な物入れるなよ」

『あの二人が使っているS O L t i Sの保管場所になっているラッセさんに言われたくはありませんが?』

「痛い所を突くね、君」

それは何の変哲もない日常的一幕。俺と精霊のいつものよくある光景。

そう言えばマスカレーナはあの時秘密兵器の名前を言っていたな。確か……そうそう、あれは……

『この子の名前はグレニヤード! かわいがってあげてくださいいね?』

☆

カツ!!

その瞬間、この部屋を明るく照らすライト以上の光が周囲を覆った。

「!!」
「ぎゃああああああああ!!」
「!!」

そして、この部屋に居た全員の目が潰れた。

「目、目があ……」

想定外の閃光攻撃。

グレニヤードが爆発した事による光はサニー団の面々だけではなく、すぐ近くに居た俺にも当然被害を与えていた。

強烈な閃光によって視覚情報が何も得られなくなった中、唯一得られる音という情報で周囲の様子を伺ってみる。

「う、う(ぎゅ)……」

「何も……見えん……」

「ルーナ……どこお?」

「ふふふ……私はこつちですよ?」

「え? こつち?」

「違いますよサニー様、こちらです」

「え!? さつきと違う方向じゃない!」

「なんてことだ! ファインダーを覗いているはずなのに何も見えん!」

「くっ! サニー様とルーナ様の尊みがヤバ過ぎてカメラが壊れたか!」

見えてはいないけど、恐らくこれは地獄絵図だな。

ていうか、ルーナは実はこの状況で一人だけ見えてるんじゃないか? サニーが頭にひっかけているサングラスをあの一瞬で確保して一人だけ対閃光防御を施していたとしても俺は驚かないぞ。

「えーっと、何かしらこの状況?」

「何これ地獄?」

「ん? この声は……」

「しーっ! 静かに、助けに来てあげたわよ、ラッセ君? いや、今は世良君と呼ぶべきかしら?」

「君は本当に厄介ごとに巻き込まれるね」

今まで聞かなかつた新しい二人の人物の声。

その声はここ最近よく聞くようになったため聞き間違えることは無い。

キスキルとリイラだ。

「二人とも、助かる。ちよつと今まじで何も見えなくて歩く事すら覚束ないんだ」

目が見えなくても歩くことは出来るだろって?!

バカを言うな。何も見えない状況でよく知らない場所を歩こうものなら何かに足を引っかけて転ぶだろう。そうでなくとも、目を瞑った状態で歩くという行為は想像するよりもずっと恐怖感がある。

この部屋は比較的広くて物が多いという訳では無かったが、周囲にはサニー団のオタク達が転がっているだろうし、サニーが立っていた場所の様な微妙な段差もいくつかあった。適当に歩けばそれはもう無様に転がりまわる事になるだろう。

「全く、仕方ないわね……よつと!」

「うわっ」

尻を付いて座っている俺の背中と膝の裏を誰かの手が触れると、突然浮遊感を感じる。

「今日だけ特別よ」

「特等席、今日だけは貸してあげる」

「えーっと……それは……ありがとうございます？」

「ふふっ、何それ？」

今の状況を推測するに、俺は所謂お姫様抱っこ状態でキススキルに抱えられているのだろうか？

カードの『Evil★Twins キススキル・リイラ』のイラストではキススキルがリイラをお姫様抱っこをしている様子が描かれていた。リイラが特等席と言っていた事を考えると、つまりはそういう事だろう。

この状況は男としては恥ずかしい限りだが、SOLtTiSの人工皮膚の感触とは違う実体のキススキルの手の感触はとても柔らかく、こんな時にもかかわらず俺はマスカレーナに手を引かれてサイバース精霊界を訪れた時の事を思い出していた。

「ああ！ その声は！ キススキルとリイラね！ そこに居るんでしょ！ 隠れるのはやめて出てきなさい！」

「サニー様？ それはサニー様が見えていないだけで二人は普通にそこに居ますよ」

やっぱりルーナ見えてるだろう？

しかし、この状況でEvil★Twinsの二人を捕らえることを優先するのではなく、サニーをからかっているのを考えるに、彼女の『お目付け役』と言う役職は文字通りの物なのだろう。

サニーの部下？ 相棒？ としてサニーの手伝いはするが、一線を超えない様に、コントロール不可能な状況になる前にサニーをそれとなく留める。

ルーナにとって、本当の所はキススキルもリイラも俺もどうでも良いのかもしれない。それなら人間界へ送ってもらおうように頼む難易度も幾らか下がる。

だが、とりあえず今は態勢を整えるために一度この場から脱出するべきだろう。

当初の目的だった知り合いとの合流を果たせたのだ。もしかしたら彼女達経由で人間界に戻る事が出来るかもしれないな。

「さて、こんな所からはさっさとオサラバするわよ。下でマスカレーナも待機してるから」

「マスカレーナも来てくれたのか」

キスキルから伝えられた朗報。

どうやら彼女も俺の異変を悟って一緒に来てくれたらしい。

「それじゃ、ちよつと飛ぶからしつかり掴まってなさい!」

「え? 飛ぶって」

この部屋に来るまで俺は結構長い間エレベーターの中に居た。それはつまり、この天を衝く程高いビルはかなり上の階に居るという訳だ。

ここから脱出するために悠長にエレベーターを使って下るとは考えていなかったが……まさか……。

あ、こんな時に視界が少し戻って来やがった……。

「えーい!」

「じゃーねー」

「うわあああああああ!!」

思わずキスキルの首に手を回すようにして彼女にしがみつく。

高層ビルからの飛び降り。そこには安全ベルトも無ければバンジーの紐も無いし、飛込競技の様に下に水が有るわけでもない。まあ、この高さだと下に水が有ったとしても無事では済まないだろうが。

「ほらほら、こんな綺麗な景色は中々見れないわよ」

「絶景だね」

俺を抱えたキスキルと一人で飛ぶリイラは彼女達が持つ腰から生えた羽を大きく広げて摩天楼の夜空をゆっくりと滑空していく。その飛行には全くブレが無く、落ちてしまおうんじゃないかと言う心配は全く必要なさそうだ。

「お、おう……」

だが、それはそれとして俺に周りの景色を楽しむ余裕は全くなかった。

お恥ずかしながら高層ビルから飛び降りる経験は無いもので。

「あ、ほら。あそこにマスカレーナが居るよ」

ゆっくりと滑空しながら下降する事で地表がはつきりと見えるようになって来た。そこには大型のバイクにまたがってこちらに向かって手を振っているマスカレーナの姿があった。だが、その姿はいつもの恰好ではなく、ライダースーツとしての機能を優先した服装をしている。

トレードマークのローラースケートはバイクの運転に邪魔になるからだろうか、今はブーツを履いている。

「おーい！ ラッセキーン！ ご無事ですかー！」

「ああ、何とかね。二人に助けて貰わなかったら今頃地獄みたいな空間でオタク達と一緒に芋虫みたいに這いつくばってるところだよ」

「？ どういう状況ですかそれ？」

「あーね」

「あーね」

「何で二人は今の発言で納得してるんですか!？」

キススキルが地表に降り立つと、抱えていた俺をそのままマスカレーナが跨る大型のバイクの後部座席へと座らせた。

「それじゃ、後は頼んだわよ?」

「面倒な奴らは私たちがあしらっておくから」

「はい！ 集合場所はいつもの所で良いですよね?」

「おーきー」

「どーきー」

マスカレーナの発言を聞いたキススキルとリイラは気軽に返事をしながら先ほど俺達が居たビルの方へと再び飛んで行く。おそらくサニー団の連中を足止めしてくれるのだろう。

「それじゃあラッセさん、これから最高速で行くんでしっかり掴まっ

「ててくださいよ?」

「おう。でも出来れば安全運転でお願いしたいんだが?」

「あ、そう言えばグレニヤードは役に立ちましたか?」

「あれ? 話を逸らされた? うーん、まあ役に立ったと言えば立った……のか? あれのせいでえらい目に遭ったんだが?」

「そうですか? それなら良かったです! 威力は十分な程に詰め込みましたからね!」

「いや、十二分過ぎるくらいだったか? あんな威力護身用として必要ないだろう?」

「さあ、ラッセさん! 行きますよー!」

「おい、都合の悪い部分で話を逸ら……うわあああああ!!!」

俺はその日、二度目の絶叫マシンを体験する羽目になったのは言うまでも無い事だろう。

何はともあれ、俺はサニー団とかいうめんどくさそうな連中から逃げおさせる事が出来たのだった。

光属性サイバー族

マスカレーナが操る大型バイクの後部座席で風になった俺は目的地へ到着してバイクが止まっていることにも気が付かない程のグロッキー状態だった。

バイクから振り落とされないように必死でしがみ付くために彼女のお腹に回した手はそのままの状態だった。

「お客さん、もう終点ですよー。起きてくださいーい」
「……………はっ」

遊園地に行ったら決して絶叫マシンには乗らないと決めている俺なのだが、今日一日だけで紐無しバンジーと安全バー無しのジェットコースターを体験した様なもので本当に辛い。

キススキルに抱え上げられた時はまだ彼女の手の柔らかさを認識するくらいの余裕はあったのに、それ以降はもうまじで「無」である。口の中が何となく酸っぱい気がするのには知らない間に胃液が少し逆流して来たからだろう。彼女たちの傍でゲロらなかつた自分を盛大に褒めてやりたいところだ。

ただでさえ囚われの姫のようなシチュエーションで救出されたというのにその上ゲロイン属性まで要らないのである。

ん？ 男の場合はヒーローだからゲロー？ それは最早ただのゲロなんよ。

「ありがとう…………でももうマスカレーナの運転するバイクに乗るのは遠慮しておくよ…………」

「えー！… なんですですか！ 今日走ったコースなんてまだまだ序の口ですよ！ 私が本気を出したら飛んだり跳ねたりローリングしたりとそれはもう凄いです！」

「うっ…………想像しただけで吐きそう」
「ひ弱ですねえ〜」

バイクから降りてようやく地面に足をつける事が出来た俺はその安定感に深い感動を覚えていた。

かなりのスピードを出したバイクを操縦しながらデュエルを行う

ライディングデュエルは憧れの対象ではあるが、俺には出来そうにないな。

LINK VRAINSなら自分の身体ではなくアバターを使う事が出来るのでスピードデュエルなら出来るだろうか？ だけど、こういうのは本人の意識の問題も大きそうだ。どちらにしてもDボードの上でバランスを取りながらデュエルをするのは滅茶苦茶大変なのは間違いないだろう。

「それで、ここは一体どこなんだ？」

「ここは私が使ってる拠点の一つです。テレビとソファとベッドと中身が詰まってる冷蔵庫とお風呂くらいしかありませんがゆっくりしていって下さいね？」

「うん、何の不自由も無く暮らせるな」

エンジンを切ったバイクを手で押すマスカレーナはガレージの中に入ると、そこから建物の中に入れるドアを開けて案内してくれる。

マスカレーナの趣味が出てそうな小物は全くないが、彼女の言う通り生活するのに必要なものは一通り揃った部屋の様だ。

「キスキル達にはいつもの場所と言っていたからってつきり例のバーにでも行くものかと思ってたけど？」

「あれはただの符丁ですよ。以前ラッセさんを連れて行ったバーで私達がちよくちよく顔を合わせている事は知っている人は知っていますからね。どこで誰が聞いて居るかも分からない状況でしたのであ言いましたが集合場所はあらかじめ決めておいたのです」

「ほー。そういう所は流石お尋ね者だな。抜かりが無い」

「まあ、今はラッセさんの方がよっぽどお尋ね者ですけどねえ」

「そう言えばそうだった……。」

折角忘れていたのに……いやまあ、俺が忘れた所でこの世界で俺が賞金首扱いされていると言う事実は変わらないのでただの現実逃避でしかないのだが。

「一体何をやらかしたんですか？」

「何もやらかしていないが？ そうだな、怪しい所はサイバース族が俺の確保に動員されて、いる……って事……。」

「? どうしたんですか、ラッセさん?」

そう言えばマスカレーナもサイバース族だな。

「お前は俺の事を捕まえようとしなのか?」

「え? 私がですか? そりゃラッセさんが指名手配されているという情報は知っていますが、私がそれに従う理由は無いですね。もしかして、私を疑っているんですか?」

「疑いたくは無いな」

「私がラッセさんを捕まえるんだったらバイクの後ろでへばってる内にお持ち帰りしちゃいますね」

「まあそうなるよな」

チャンスは幾らでもあった。キスキル、リイラやマスカレーナがその気だったのならもうとつくに俺を捕まえようとしている連中の元へ連れて行かれているだろう。

……そのうえで騙されていたとしたらもう俺は精霊を信じられなくなっちまうよ。

「じゃあさ、俺を必死になつて捕まえようとしてる奴にどんな奴が居るか知らないか?」

「うーんと、そうですね。有名どころだとS—Forceの司令官さんとか。やけに張り切っていると噂ですよ」

「S—Forceの司令官……ジャステイファイだな。となると、S—Forceは全員敵に回ってしまったって考えると考えた方が良さそうか」

ジャステイファイ、つまり『S—Force ジャステイファイ』は小夜丸が所属しているS—Forceの司令官を務める人物。リンクモンスター。サイバース族。光属性……ん?

「なあ、『斬機シグマ』って知ってるか?」

「シグマさんですか? ええ、知っていますよ。計算機オタク集団の一人ですね。……って、ああ! そう言えばあの人も狂ったように「人間を捕まえるんだー!」って騒ぎだしてファイナルシグマ隊長にぶん殴られて元に戻ったって言う話を聞きましたよ」

「計算機オタク集団って……この世界にはオタクしかいないのか?」

まあ、それはいいか。ふーむ……」

『斬機シグマ』。効果モンスター、サイバース族、そして、光属性……か。

まだ数例しか確認はしていないが段々と共通点が見えて来た。

出来れば正解であって欲しくなかったが、これはライトニングと光のイグニスと関連していると考えても良さそうだ。

となると、キスキル自身はともかく、Live☆Twin体の方に何か細工をされている可能性を考えておいた方が良さそう。二人と合流したら最初に確認する事にしよう。

「何か分かったんですか？」

「ああ、大ボスの輪郭が見えて来たぞ」

「ええっ!? これだけの情報ですか！ 私ですらまだ今回の件の内容を把握しきれていないのに！ 本当にラツセさんにはどういう情報網があるんですか……」

「ま、そこは数少ない男の秘密だな」

「むう……男の子も中々奥が深いですね」

俺が敵の大ボスに見当が付いたと聞いてマスカレーナはうんうんと唸りながらそれが誰なのか考えている。まあ、精霊の立場でイグニスの存在を割り出すという事は難しいだろう。

そう言えば、以前Live☆Twinチャンネルで投稿された動画で最近のサイバース精霊界は人間必要・不要論、つまり共存するか否かと言う問題で世論が割れていると紹介されていた。

これはおそらくサイバース族の生みの親であるイグニスの考えが反映されているのだろう。

あ、そうなると風属性のサイバース族も今は敵対的かもしれないな。地属性は中立と言った所か。後は水、炎、そして闇属性のサイバース族は今の所敵に回さなくても良さそうだ。

いや、S-Forceの様リーダーの指示によって俺を狙ってくる奴らも居るだろうから属性だけで敵味方を判断するのは危険か。

……ん？ あ！ そう言えばavidaやアストラムも光属性サイバース族じゃないか！ うーん……あのあたりに本気で敵対さ

れるとヤバイぞ。

だが、創造主と一世界の神に等しい存在だとどちらの方が格が上なんだ？　もしかすると、ライトニングの意向に逆らってこちらに協力してくれるかもしれない。一緒にリリースをボコった仲だから味方になつてくれると嬉しいが……。

まあ、その辺の事はここでいくら考えても仕方がないだろう。

光属性のサイバース族が中心になつて俺を狙っているのは精霊界に入り込んだ人間を排除するのが目的、という事だろうか？　うーん、まあ無いとは言えないか。現状そうであると仮定して行動した方が良いだろう。

「ところで、マスカレーナの力で俺を人間界に戻せたりはしないか？」
「それは無理ですね。私はLINK　VRAINSと言う中間地点を経由する事でしか人間を精霊界に連れてくることは出来ませんので。それに、生身の肉体ではなくアバターののみです」

「じゃあ出来そうな知り合いは？」

「うーん……すみません、私の周りにそう言った芸当が出来そうな人に心当たりはありませんね」

「いや、良いんだ。出来たらラッキーくらいの気持ちだったから」

こうなると、本気でサニー誘拐計画を立案する必要があるだろうだな。Evil★Twinの二人に一回無料で依頼が出来る権利があつたからそれを使って手伝ってもらおうか。

ん？　ちよつと待てよ。もしかしてこの権利って今回サニー団から脱出するために使われちゃつたかな？　まあ、その場合は何か報酬を渡して正式に依頼すれば良いか。

「やっぱあのルーナって女はかなり異質だな。俺をこの世界に引き込んだのはあいつらしいぞ」

「ああ、彼女ですか。サニー団はその名の通りサニーのファンクラブみたいなものなのですが、実質組織の運営をしているのはあのルーナと言う人なんですよね」

「だろうな」

サニーとルーナと話したのはあの時の短い時間だけだったが、それ

でも色々と察することが出来た。そのうえ人間をそのまま精霊界に引き込める程精霊としての力も強い、と。

「なあ、サニーを誘拐して人質にとればルーナに言う事を聞かせる事は出来ないかな？」

「ラツセさん!?! 結構エグイ事考えてますね!?! 本当にお尋ね者に成っちゃいますよ!！」

とはいえ、手段を選んでいられるほど余裕のある状況でも無いんだよねえ。

「まあ何にしても、キスキルとリイラが戻って来てからこれからの事を考えよう」

「はい、それが良いですね」

話が一段落した事で、マスカレーナは冷蔵庫に保管していた飲み物を注いでくれる。俺は「ありがとう」と一言答えてからソファに座ってコップに口をつける。

中身は炭酸飲料だ。味は人間世界で最も人気のある炭酸飲料とよく似た味がする。飲み慣れた物で少しだけ安心感を覚える。

ここで初めて気が付いたが、どうやら俺は結構疲れていたらしい。いきなりサイバース精霊界に拉致されたと思ったら絶叫系アトラクションの様な事を二連続でやらされたらそりゃ疲れも出る。今までアドレナリンが出まくっていたお陰で疲れを忘れていたんだな。

その時、突然部屋の中心に置かれていたテレビの電源が入る。マスカレーナが電源を入れたのだろう。

「あれ?・なんでテレビが?」

「え? マスカレーナが点けたんじゃないのか? ……ツ!」

画面を見て、俺は跳ね上がるようにしてソファから立ち上がった。

そのテレビの画面に写っていたのは俺も良く知るこの世界の人気者。Live☆Twinキスキルだ。

画面に映ったキスキルと俺の視線が交わると、そいつは人を馬鹿にするような笑みを浮かべた。

夜の追跡者

「まずいー」

俺が反射的に声を上げると同時に、足元に伸びる自分の影から何か飛び出し、テレビに直撃した。

「あああああああ！ 私の最新型50インチテレビが！」

「あれは……」

テレビの画面を突き破るようにして刺さっていたのは『オルフェゴール・ガラテア』がイラストで手にしている大鎌だった。

蒼穹のジャックナイツのコアを宿していた部分は紅蓮の輝きを灯している。それは以前見た事がある状態だ。俺がハノイの強制ログインプログラムによって強制的にLINK VRAINSにログインさせられそうになった時にそれを防いだのがこの状態の大鎌を持ったガラテアだった。

ガラテアの大鎌がウイルスやトラップを破壊する効果があると思われる紅蓮のコア状態である事を考えると、今現在光属性サイバース族に起こっている変化はウイルスに汚染された状態に近いものなのだろうか。

「ガラテア……助けてくれたんだな」

大鎌が突然光り輝くと、その姿を彼女が残してくれたガラテアのカードへと変化させていった。

俺の影からこいつが飛び出してきたということは、こちらの世界に来る直前にミドラーシユが机の上に置いていたガラテアのカードを確保してくれたのだ。

出来ればあの偽メールの時点で助けて欲しかった……なんて考えてしまったが、本来このカードにはもう何の力も無いはずだった。それがこうして各トロイメアの効果を模していると思われる能力を有したガラテアの大鎌に変化したと言う事は、精霊界に来た事で少しだけ力が使えるようになったのだろう。

「ありがとう……。ミドラーシユもよく持ってきてくれたな」

俺の言葉を聞いてミドラーシユはグッドのハンドサインを出して

いる。

カードの形へと戻ったことで床に落ちてしまったガラテアのカードを拾い上ると、カードはその姿を再びガラテアの大鎌へと変化させた。

ちよいと物騒だが、これで敵対する精霊に対して少しは俺も抵抗できるな。まあでも、俺は大鎌を扱う心得なんてものは無いのでこまで役に立つかどうか……。決闘者としてはデュエルで解決するべきなのだろうが、トロイメアの効果を内包した大鎌があれば色々と手っ取り早く済む。

俺はデュエリストでありたいと思っっているリアリストなんだな。

「うう……私のテレビが……」

「悪かったって。今度何かで埋め合わせするから許してくれ」

「え？ 本当に本当ですか？ やったー！ じゃあ今から楽しみにしておきますね！」

あれ？ もしかして嵌められた？

さつきまで瞳を潤ませて泣きそうな勢いだったのに今ではそんな様子は見る影もなくはしゃぎ回っていた。

「そんな事よりこの場所が敵にばれたかもしれない。移動した方が良いで」

「さつきのはキスキルさんですよ？ まさか彼女が裏切り者だって言うんですか？」

「いや、キスキル自身はそんな事はしないだろう。問題なのは彼女のアバターだ」

「アバターって、Live☆Twinの動画で出てくるあのミニキャラ状態のキスキルさんの事ですか？」

「ああ」

Evil★Twinのキスキルがアバターを使っていない時、Live☆Twinのキスキルがどういう状態なのかは分からないが、大方敵にハックされて使われている、と言った所だろうか。

「どうしてラッセさんはそう思うんですか？」

「マスカレーナは『S—Force ジャステイファイ』、『斬機シグ

マ』『Live☆Twin キススキル』のカードの属性が何か知ってるか?」

「えーっと……あれ? 確か三人とも光属性ですね」

「そう。そして、今回の騒動の首謀者は光属性サイバース族の創造主……に近い精霊だと俺は睨んでる」

「ええ!? ラツセさん、そんなヤバそうな存在に目を付けられてるんですか! 本当に何をしたんです……」

「それは俺が聞きたいところだな」

「でも、なるほど……確かにそれなら色々と合点がいきます」

マスカレーナに手早く俺の考えを説明しながら彼女のバイクが置いてあるガレージへと向かう。マスカレーナは慣れた手つきでエンジンを始動させ、俺はその間にガレージのシャッターを開けておく。

「ラツセさん、良いですよ!」

「分かった!」

ここに送ってもらった時と同じようにバイクの後部座席に跨り、左手でマスカレーナの腹に手を回して落ちない様にしっかりと身体を固定する。右手にはガラテアの大鎌を持っているためそちらの手でマスカレーナに掴まっていられないのは不安で仕方ないが、この大鎌がカードの姿へ戻らないという事はそのままの姿であった方が良いという事なのだろう。

こうして俺とマスカレーナを乗せたバイクは夜のサイバース精霊界を疾走する。彼女の拠点があった裏路地から大通りへと抜ける事でさらにその速度を上げていく。

「どこか行く候補地はあるのか!」

「はい! さっきの拠点より居心地は良くないですが、隠れるには十分な場所です!」

ハイウェイと思われる道に入ると、周りの車両を次々と追い抜いていきながらさらにスピードを上げていく。

バイクのエンジン音に負けない様に俺達は叫ぶようにして会話を
する。

「キススキルとリイラはどうする!!」

「あの拠点に私達が居なかった時はそこに来るように指示してあります!!」

「そうか!!」

緊急時の事も予め想定しているとは流石だと言いたいが、流石だあ。

それはそれとして、マスカレーナは全くの手加減なしにスピードを上げていくものだからそろそろ俺は怖くなって来たんだが……?・

(ん?)

下道のカーブが多い道では重心移動が怖すぎて周りを見る余裕がなかったが、直線が多く、カーブがあっても緩いハイウェイで安定した走行に入った事で俺は少しだけ周りを見る余裕が出来た。

(さっきまで居たはずの俺達以外の車両が見当たらない?)

周りを見る余裕が無かったのにどうして車両が走っている事が分かったのかって? それはマスカレーナが曲芸走行の如く車両と車両の間に出来る細い隙間を通り抜けるなんて無茶な真似をしたからだな! 超怖かったんだが!? ていうか、右手に持ってた大鎌ですれ違った車両をちよつと擦っちゃったんだけど大丈夫かな!?

「ッ! ラッセさん!! 身体を左に!!」

「お、おう!!」

マスカレーナの指示に従って体重を左に傾けることによつてバイクの走行進路が左へとずれる。

「どうしたんだ!!」

「私達、狙われています!!」

「なんだって!?! おわ!」

突然俺の右腕が動かしてもいないのに持ち上がり、大鎌の広い刃を盾にするように持ち直す。自分の腕をよく見てみるとそこには影糸が結びついており、ミドラーシユがやっているのと分かった。

その直後、手に伝わって来る衝撃。それは大鎌の刃に何かがつぶかった事を示している。

「助かった! ミドラーシユ!」

「あ、これはちよつとマズイかも……」

「え?」

マスカレーナが何かを呟いたと思つたら地面が爆発し、その爆風に煽られて俺とマスカレーナはバイクごと吹き飛ばされる。

「うわああああああああ……あ、あれ?」

そのまま地面に激突して死ぬ事を覚悟した。

思わず瞑ってしまった目を開けてみると、目の前には俺をもみじ下ろしにする寸前だった地面が見えていた。そして、俺はそのままゆっくりと着地する。

何が起こったのかと不思議に思ったが、全身に影糸が絡まっていた事に気が付いた。さっき俺の右腕を操作した時とは違い、雑な絡まり方をしているあたり、ミドラーシユも相当焦っていたと思われる。

「本当にありがとうな……ミドラーシユ……本当に……って、マスカレーナは!?!」

「ほっ!」

振り返って後ろを確認すると、そこには空中で体勢を立て直した後、一回転して地面に着地する彼女の姿が見えた。本当に猫みたいな奴だな。

「バイクは……ダメみたいですね……」

マスカレーナは横転した彼女のバイクを横目に見るが、さっきの爆発に巻き込まれた影響でガソリンが漏れ出してしまっている。

「標的を捕捉。任務を遂行します」

「!?!」

その声は俺でもマスカレーナでも、ましてやミドラーシユの物でもない。爆炎の向こう側から現れた人影。その人物は黒いスーツを身に纏い、黒いフードを被っている。素肌は全く晒していないが身体のスルエットから女性だという事が分かる。

手には苦無を持っていてる事から先ほど大鎌で受けた衝撃はあれだったのだろう。

「誰だ……って、うお!?!」

知らない相手だったため思わず声を掛けてしまったが、その隙を突いて襲撃者は俺に苦無を投げつけてくる。だが、俺は隙を突かれたと

はいえ、そんな状況をミドラーシユが見逃すはずも無く、再び影糸で俺の右腕を操作し、大鎌を盾の様して攻撃を防ぐ。

「甘いです」

「ラッセさん！ 避けてー！」

大鎌で正面を防ぐようにしたため、一時的に視界から襲撃者を外してしまふ。その一瞬のうちに相手は俺の背後に回っていたらしい。

「こなくそっー！」

ミドラーシユによる動きの補助を貰いながら、俺は身体を回転させて大鎌を横薙ぎにする。

相手は精霊であるため、『トロイメア・ユニコーン』の効果であるデッキバウンスを発動するため、黄華のコアをガラテアの大鎌に発現させる。最初はケルベロスの破壊効果を使おうとも考えたが、気が引けて使えなかった。

「なっ！ 消えたー！」

「ふむ、存外面倒ですね。その大鎌、厄介な気配を感じます」

「あのマークは……ラッセさん、気を付けてください！ そいつはセキユリテイ・フォース S—Forceの一員です！」

「S—Force?」

マスカレーナは襲撃者が被っているフードに描かれたマークに見覚えがあつたようだ。

俺もそのマークを観察してみる。「S」をモチーフにしたと思われるそのマークは俺も見覚えがあつた。どこで見たんだつたか……えーつと……小夜丸？ あ！ そうだ！ 確か小夜丸が来ていた上着の袖と額当てに同じマークが描かれていたな！

正直俺はS—Forceと言うテーマについて詳しいわけではない。効果まで覚えているのは精々ジャステイファイと小夜丸くらいであり、後知っているのは『S—Force チェイス』と言う罫カードが強力らしいという事だけだ。

だが、カードイラストとして全く見覚えが無いカードと言うのは無いと思う。環境で多く使われていたテーマでこそなかったが、比較的良く知られたテーマではあつたため、どのカードも一度くらいは見た

事があるはずだ。

という事は……

「新規って事か」

俺は前世の影響で確かに多くのカード知識がある。しかし、それは俺が生きていた時までの話であり、遊戯王カードはそれ以降もどんどん新しいカードが作られているはずだ。

ティアラメンツだってそうだと思っている。そして、今対面している襲撃者もそうなのだろう。

俺の横薙ぎを回避したのはあいつの効果によるものか？ S―F orceは除外も活用して展開していくテーマだったはず。となると、考えられるのはフリーチェーンで自身を除外ゾーンに飛ばす、みたいな効果か？ まあ、純粋な精霊フィジカルで解決しましたと言われたらそれまでなのだが。

「なあ、どうする？ この状況」

「どうすると言われましても……ラッセさんはどうなんですか？」

俺はマスカレーナと合流してこの状況を打破するための作戦を考える。

襲撃者に決闘を挑むのもありなんだろうが、果たしてあいつは受けてくれるだろうか？

そしてなにより、俺は精霊相手にデュエルを挑むことの危険性を身に染みるほど知っている。出来ればとりたくない手段であるが、最後はこれしかないとも思っている。

マスカレーナは戦闘が得意なモンスターではない。対して襲撃者は明らかに戦闘に特化していそうな見た目をしている。

キスキルとリイラが追い付いて来てくれる可能性もあるが、いつ来るかも分からないこの状況では俺が何とかするしかない。

「仕方ない……。おい！ お前に決闘を申し込む！」

俺は決闘盤を展開し、デッキからカードを五枚引く。

だが……

「決闘……ですか。ですが、わざわざ敵の土俵に上がる必要はありませんので」

「しまっ……!」

「え?」

襲撃者は決闘を申し込んだ俺をスルーし、横に立っていたマスカレーナに向けて、彼女の得物である苦無を放つ。

決闘が始まる事を予期してその余波を受けない様に少し離れた位置にマスカレーナは移動していたため、俺が彼女の援護に向かおうにも飛んでくる苦無の方が早かった。

「マスカレーナ!」

車両が全く通らず、異様な静けさを呈していたハイウェイに金属同士がぶつかり合う高音が鳴り響いた。

小さな騎士

「ッ……………？ ……あれ？」

マスカレーナへと向かって投げられた襲撃者の苦無は彼女には当たる事無く地面に転がっていた。

マスカレーナを庇う形で襲撃者に対峙している人物は右手に小太刀を構えている。先ほど響いた金属音は小太刀で苦無を迎撃した時に発生した音の様だ。

「あいつは……」

マスカレーナを守ってくれた人物はフード付きの外套を纏っており、顔は良く見えない。

「彼女は……やらせません！」

「何をしているのですか？ 乱破小夜丸。この行為は重大な命令違反であり、貴女には厳罰が処される可能性があります。任務遂行の邪魔をするのは止めなさい」

「小夜丸!？」

「え！ なんであなたが？」

正体を看破されたからか、小夜丸と呼ばれた人物は外套を脱ぎ去る。そこに居たのは確かに俺も良く知る『S—Force 小夜丸』その精霊^人だった。

彼女はS—Forceの一員としてマスカレーナを追い回していたはずだが、何故か今はこうしてマスカレーナを守るような行動をとっている。それも相手は彼女の仲間であるはずのS—Forceだ。

「どうやら無事だったようですね、マスカレーナ」

「はい、お陰様で、とこことは言っておきましょうか」

「減らず口は相変わらずの様で安心しましたよ。その人間さんは……あれ？ あなたは司令官が言っていた人ですね。マスカレーナの協力者でもあったんですか」

以前小夜丸と遭遇した時はLINK VRAINSのアバターの姿だったからだろうか、彼女は俺に対してまるで初対面であるかのよ

うに対応をしてくる。精霊界で人間に出会うという事はそうある事ではないため、印象に残っているはずだが、その時とは姿が違うため彼女は気が付いていないのだろう。

「小夜丸、あの人は一体何なんですか？」

「彼女はナイト・チェイサー。貴女を排除するためにプログラムされた自立型アンドロイドですよ」

「ええ！ 私狙い撃ちですか!?!」

小夜丸の発言によつて俺らを襲ってきた奴の事が少しだけ分かって来た。カード名だと『S—Force ナイト・チェイサー』となるのだろう。大方、マスカレーナの確保に小夜丸が失敗し続けたせいではびれを切らしたS—Forceの上の人達が確実にマスカレーナを排除するために動き出した、つてところか。

「乱破小夜丸、これは最後の警告です。この行為は重大な命令違反であり、貴女には厳罰が処される可能性があります。任務遂行の邪魔をするのは止めなさい」

「私は……今の司令官の命令に従う事は出来ません！ いきなり人間不要論を急進したり、マスカレーナを逮捕ではなく排除の方針を打ち出したり……。こんな事はS—Forceの理念に反するはずですよ！」

彼女が言う司令官、つまりジャステイファイの事だ。やはり彼もライトニングの思想の影響を受けているのだろう。

どうやら、小夜丸はそんなジャステイファイの急な方針転換に付いていけなくなつてこの様な行動に出たらしい。いや、もしかしたらマスカレーナを助けたのは彼女を逮捕するのは自分の役目だという自負もあるのかもしれないな。

「乱破小夜丸の造反を確認。本部に対象者の処理を申請……受領、確認しました。乱破小夜丸、これより貴女を排除対象に加えます」

「くっ！ ……ここは私が受け持ちます！ お二人は今のうちに逃げてください！」

ナイト・チェイサーがこちらには聞こえない音量で独り言をつぶやいたと思うと、その次の瞬間には小夜丸との距離を詰めて右手の指の

間で挟むように持った四本の苦無で襲い掛かっていた。だが、小夜丸もその攻撃にやや遅れながらも対応しており、手に持った小太刀で受け止めている。

苦無と小太刀が一度ぶつかり合った後も、二人は自身の武器を操り一進一退の攻防を繰り返している。まかり間違つてもリアルファイト初心者の俺が介入出来そうな空気では無い。

小夜丸がナイト・チェイサーの相手をしてきている間に俺はマスカレーナの方に近づいていく。

「大丈夫か、マスカレーナ？」

「はい。まさか小夜丸に助けられることになるとは思いませんでしたが……。でも、今は彼女の言う通り早くここから離れた方が良さそうです」

「……」

この世界の戦闘はデュエルモンスターの様に攻撃力の数値だけで全てが決まる訳ではないが、『S—Force 乱破小夜丸』の攻撃力は800と少し心許ない。マスカレーナと比べれば見た目からも分かる通り戦闘も出来そうな精霊ではあるが、ナイト・チェイサーの事を知らない俺は彼女の事が心配だった。

「小夜丸が心配ですか？ ですが、ここは彼女を信じるしかないでしょう。それに、私達が危機的状況なのは変わっていませんよ」

マスカレーナは壊れたバイクを見る。

確かに、俺と彼女の移動手段であるバイクが破壊されたことによつてこの場所から急いで離脱する手段が無くなっていた。このままでは敵の増援に追い付かれるのも時間の問題だろう。

だが、これに関しては俺に少し考えがあった。

「移動の足が必要なんだよな」

「そうですね」

「なら……」

俺の手にはナイト・チェイサーに決闘を挑むためにドロウした手札がそのまま残っていた。その中の一枚を手に取り、決闘盤デュエルディスクのモンスターゾーンに置く。

『シャドール・ドラゴン』を攻撃表示で召喚！』

『シャドール・ドラゴン』

レベル4 ATK1900 闇

対戦相手が居ないにもかかわらず、決闘盤によって読み取られたシャドール・ドラゴンが実体化する。

アニメでは精霊界が舞台となった時に決闘中デュエルでなくともモンスターを召喚してデュエルモンスターのルールに縛られる事無く主人公達と共に戦う描写が描かれていた。

そして、ここも精霊界。であるならば、俺にも同じことが出来るはずだと考えた。

だが、このシャドール・ドラゴンが何かしらの理由によって破壊された時、文字通り俺のライフを支払う事になるのだろうが、今はそんな事を言っていられる状況ではない。

影系によって操られたシャドール・ドラゴンは生きたドラゴンとは違ってその動きは作り物の様にややぎこちないが、ドラゴンとしての性質はそのまま持っている様で、ちゃんと飛行する事も出来そうだ。シャドール・ドラゴンが地面に着地すると、俺の意を汲んでくれたのか身体を伏せてくれる。

「よし、行けそうだ。来い、マスカレーナ！」

「はいー」

シャドール・ドラゴンに先に乗り込んだ俺は上からマスカレーナを引っ張り上げて俺の後ろに座らせる。

丁度、先ほどまでと立場が入れ替わった形だ。マスカレーナは俺の身体に腕を回して振り落とされない様にしっかりと掴まる。

「行ってくれ」

マスカレーナがしっかりと掴まった事を確認した俺がそう声を掛けると、シャドール・ドラゴンは翼を羽ばたかせて宙に浮かび上がり、飛行し始める。

「目的地の方向は？」

「ここから北に向かった所です！」

「だ、そうだ。頼む」

俺の言葉を聞いたシャドール・ドラゴンは了承したと言わんばかりに咆哮する様に頭を持ち上げるが、声は全く聞こえない。

シャドール・ドラゴンの体色は黒よりの紫だから、この夜空に紛れば地上からはほぼ見えなはず。そう思った俺は少し高度を上げて飛ぶように指示を出す。

速度はマスカレーナが操るバイクに劣るが、隠密性と言う点で見ればこちらの方が優れるかもしれない。

「……………え……………、高っ！ 怖っ！」

「ラッセさん……………さっきまでカツコイ感じだったのに……………」

「そう言われても怖い物は怖いんだよ……………」

シャドール・ドラゴンに高高度を飛ぶように指示したことで、今俺達は天を衝く程高いと思っていたビル群よりもさらに高い位置を飛んでいる。そんな状況であると改めて認識してしまうともう駄目だった。

出来るだけ下を見ない様にと考えていると、ふとシャドール・ドラゴンにつながる影糸が目に入る。先がどうなっているのか少し気になった俺は、興味本位で影糸を追っていくように視線を上にあげていく。すると……………

「あ」

距離が離れている事と辺りが暗いこともあつてちゃんとは見えなのだが、影糸の先にあったシルエットはミドラーシユの物だった。「そうなってるんだ……………」

驚愕……………でもない真実を知った俺は、「これならミドラーシユに頼んで彼女といつも一緒に居る『風竜星―ホロウ』のシャドール体と言われている竜に乗せて貰えば良かったな」なんて事を考える余裕が生まれていた。

作戦会議

俺とマスカレーナを乗せたシャドール・ドラゴンは影に紛れて……では無く、闇夜に紛れながら先へと進む。ナイト・チエイサーが襲ってきた位置からは大分離れることが出来た。

マスカレーナの案内により、俺達は彼女が有する拠点があるという場所にやって来た。そこはこのサイバース精霊界に竹林の竹の如く生えているビルの一つであり、シャドール・ドラゴンをそのビルの屋上に降り立たせる。

「よつと……ふう……やつと地面か……サンキューな」

俺が一言礼をシャドール・ドラゴンに言っていると、それを聞いたからかシャドール・ドラゴンはその姿を消してしまう。俺達の上にまだ居るであろうミドラーシユに手でも振ろうかと思いい、空を見上げるが、そこには彼女の影も形もありはしなかった。シャドール・ドラゴンが消えると同時に自分の場所に戻ったのだろうか。

「あいたつ！ もー……ドラゴンさんを消すなら先にそう言つて下さいよお」

「あ、すまん」

マスカレーナはシャドール・ドラゴンから降りる途中だったが、変なタイミングでシャドール・ドラゴンが消えてしまったために尻もちをついてしまっていた。爆風に吹き飛ばされても空中で体勢を立て直すことが出来るマスカレーナとは言え、流石に中途半端な高さで突然放り出されたらそれも難しいらしい。

マスカレーナは「あいてて……」なんて言いながら腰のあたりを摩っているが、普段軽やかに飛び回っているイメージがある彼女から余りにもかけ離れたその姿に俺は思わず笑ってしまいそうになる。

「さ、ここから中に入りますよ」

屋上からビルの中に入るための扉を開き、マスカレーナはビル内へと入っていく。俺もそれに置いていかれない様に急いで彼女の後を追いかける。

階段を下りている時に気が付いたことがあるのだが、どうやらここ

は一フロアに一室しかない随分高級なマンション、もしくはオフィスビルの様だ。それでいてこのビル自体の広さもかなり大きいため、部屋を借りるとしたら随分金が必要そうだな。

「どうぞ、こちらです」

マスカレーナは扉の横につけられたセキュリティ装置にカードを通した後、暗証番号を入力して扉を開けてくれる。

部屋の中に入ると、そこには大量のモニターが並べられており、明らかにゲームが目的とは思えない高性能そうなパソコンも複数台並べられている。

「こりや凄い」

「ここは私の事務所です。さっきの拠点と違って質の良い家具なんかは置いていませんが、外に出られない状況でも生活するくらいは出来ますよ」

メインに使っているであろうモニタールームとは別の部屋にはとりあえず置いたのであろう簡素な椅子とテーブル、そしてベッドがある。ここは彼女が休憩室として使っているのだろうか？

「さてと、ラッセさんとは今後の方針を話そうと思うのですが……おや？ 丁度彼女達も来たようです。思ったより早かったですね」

マスカレーナはそう言うと、この部屋にある窓を開け放つ。

「ふう……やっと着いたわね。ちよつとマスカレーナ、ここ遠すぎるわよ」

「ええ……そんな事言われましても」

「お、世良君もちゃんと無事みたいだね」

「キスキル！ リイラ！」

窓からするりと入り込んできたのはEvil★Twinの二人だった。どうやらマスカレーナが言った通り、予定通り最初の拠点で俺達の姿が見えなかったからこちらにやって来てくれたのだろう。

「さっきは助かったよ。お陰でサニー団の所から脱出出来た」

「いいのいいの。どうせ私達をギャフンと言わせたいとか言っつて世良君を拉致ったんでしょ？」

「むしろ私達の厄介事に君を巻き込んでしまったみたいだしね」

二人は「今回は特別にタダにしてあげる」と言ってくる。

「それに、何やら私のアバターも迷惑を掛けちゃってみたいだし」

キスキルが小動物を摘まむ様な仕草で持っているのはLive☆
Twinn キスキルだった。アバターの彼女はコミカルな表現で目
を回しており、キスキルにこつてり絞られたであろう事が伺えた。

「こんな所にマスカレーナの拠点があったんですね。何故今まで気が
付けなかったのでしょうか……」

「え!? その子も連れて来ちゃったんですか」

キスキルとリイラが部屋に入ってきた後、窓の外で上からロープが
垂れ下がって来たと思ったらそれを使って部屋にするりと入って来
たのは先ほど別れた小夜丸だった。

しかし、彼女の姿は先ほど別れた時と違い、刃物で切られたような
傷がいくつも見受けられた。

「まあね。話を聞くと、君たちを逃がすのに協力してくれたって話
じゃない? そのまま放置は流石に可哀そうでしょ」

「ここに来る途中で小夜丸と初めて見たS-Forceの奴が戦って
いるのを見てね。その傍にはマスカレーナのバイクが転がってるし、
これは何かあるなと思って加勢したの」

そうか、俺達が残した壊れたバイクを見たからEvil★Twinn
の二人からすれば敵対してそうな小夜丸に声を掛けようと思った訳
か。

「小夜丸と戦っていたナイト・チェイサーはどうしたんだ?」

「ナイト・チェイサー? ああ、あいつね。私達がこの子の側に立った
と見るや否や撤退して行ったわよ」

キスキルの話によると、どうやら二人が小夜丸と合流してから戦闘
は起こらなかったようだ。ナイト・チェイサーの実力がどんなもんな
のかは分からないが、キスキルとリイラが二人合わされば攻撃力は4
400にも到達する(カードの話だが)。これは戦闘ではほとんどの
モンスターが敵わない攻撃力であり、流石にナイト・チェイサーも危
険と判断したのだろう。

「なあ、小夜丸……:さん」

小夜丸がこの部屋に入ってくるために使っていた鉤付きロープを手に巻き付けて回収していた所に声を掛けた。

「はい？ 何でしょうか、人間さん？」

小夜丸と俺は自己紹介すらもしていない関係である。心の中では小夜丸と呼び捨てで呼んでいるが、流星にそんな仲で呼び捨ては良くないかと思い「さん」と付けたが、かえって取って付けたみたいになっ
てしまった。

「俺の名前は世良だ」

「では世良さん、と。私の事は知っているようですね。好きに呼んで
もらって構いませんよ」

俺のさん付けに違和感があったのは小夜丸も気が付いていたよう
で、好きに呼べと言ってくれる。

「さつきは助かった。ありがとう」

「え？ ああいや！ そんな、良いんですよ！」

俺はさつき小夜丸と別れた時に言えなかった事を改めて頭を下げ
ながら言う。

まさか、頭を下げられるとは思っていなかったのか、小夜丸は少し
慌てた様子で返してくれる。

「だが、良いのか？ 小夜丸はS—Forceなんだろう？」

「そうですが……。世良さんはさつき聞いておられたと思いますが、
今のS—Force……と言うよりは司令官は何かおかしいのです。
私は里長の言いつけでS—Forceに籍を置かせて頂いた身では
ありますが、その活動内容や理念を確かに尊敬していました」

彼女は自分の額に巻き付けていた額当てを取り、それを見つめてい
る。その額当てにはS—Forceのシンボルマークが刻まれている。
る。

「だけど、今行われている人間に対する方針や、マスカレーナを逮捕で
はなく排除すると言うのは私が尊敬するS—Forceの理念とは
余りにかけ離れ過ぎています」

「俺達と居ると恐らくS—Forceと敵対する事になるが良いのか
？」

「……構いません。私は、私の信じる正義を貫きます」

彼女はそう言うと、S—Forceのマークが刻まれた額当てを懐に仕舞うと、黒色の帯を額に巻き付ける。そこにはS—Forceのマークは描かれていなかった。

「え？ 本当ですか？ 小夜丸はS—Force抜けるんですか？

良かったー！ 小夜丸にバレたこの事務所も放棄しなきゃと思っていたのでラッキー！」

「……それはそれとして、マスカレーナはいずれ必ず逮捕します。私の正義に殉じて！」

「ぐへー」

：v

小夜丸による必ずを捕まえる発言を聞いたマスカレーナは不服そうな表情をしているが、俺からするとどこぞの大怪盗と国際警察の関係みたいでこれはこれで良いコンビなのではないかと思える。

「さてと」

俺は気持ちを切り替える。

ここには先ほどもまでと違ってキススキルにリイラ、それと元S—Forceの小夜丸が居る。マスカレーナとはまた違った人脈を持つ彼女達なら人間界に戻る方法を知っているかもしれない。

「マスカレーナにはさつき聞いたんだが、ここから人間界に戻る方法を俺は知りたいんだ」

「精霊界から人間界に人間を送る方法ねえ……リイラは知ってる？」

「知らない。少し時間をくれれば調べる事も出来るかもしれないけど」

「そうか……あのサニー団のルーナって奴が俺をこっちの世界に引き込んだみたいなんだが、彼女になんとか力を貸してもらおう事は出来なかな？」

「うーん……サニー攫っちゃおう？」

「ああ！ いいわね！」

「どうして皆さん、そんな物騒な考え方しか出来ないんですか……」

リイラとキスキルの結論が俺と同じという事にマスカレーナは辟

易とした様子。とはいえ、サニー団と関りが深い二人もその結論に至るといふ事はこの考え方はあながち間違いはなかった様だ。

「でも彼女にそんな力がある印象はあんまり無いわね」

「どこかの組織からそういう技術を奪ったのかも？　もしかしたら人間界から精霊界への一方通行かもしれないね」

「あ、そうか。そういう可能性もあるのか」

確かにルーナは人間界から精霊界に俺を引き込んだ実績はあるが、その逆も出来るかは分からない。

「あの、良いですか？」

俺が頭を悩ませていると、発言したのは小夜丸だった。

「S—Forceの本部に行けば何とかなるかもしれません」

「S—Forceの本部？」

「はい。ブリッジヘッドにはS—Forceの隊員たちが様々な次元で起こる事件に対処するためのワープゲートが設置されているのです。それを使えば世良さんは人間界に帰れるかもしれません」

「なるほど……」

ブリッジヘッド。それは聞き覚えがある名前だ。確かS—Forceのフィールド魔法がそんな名前だった様な気がする。

確かに、人間界を別次元と定義すればその装置で戻る事が出来るかもしれない。

「しかし、本部か……突入するには骨が折れそうだ」

「ええ。一般職員は兎も角、事件解決に直接動くエージェント達は強力です。今このEden Cityに居るのはジャステイファイ司令官、エッジ・レイザーさん、オリフィスさん、そしてさつき遭遇したナイト・チェイサーだけですが、皆さん強者揃いです。これは非常に危険な賭けになります」

「だが、今はその賭けに乗るしかない」

ルーナが確実に俺を人間界に返せるか不明な現状、ブリッジヘッドにあるという装置を使う方法が一番確実だ。

「皆は……協力してくれるか？」

俺を狙っている組織の中枢に突撃をかます。そんな事は俺一人の

力だけでこなせるはずがない。ここで皆の協力が得られなければ俺は一生サイバース精霊界で過ごす事になるだろう。

「ここまで来て何言ってるのよ」

「最後まで付き合う」

キスキルとリイラは承諾してくれた。

「ラツセさんだけじゃそんな装置動かせないですよね？ 勿論私も手伝ってあげますよー！」

マスカレーナもそう言ってくれる。

「私は世良さんとの付き合いは短いですが、そういう事であれば協力は惜しみません。それに、私も司令官に話を聞きたいと思っていますので」

小夜丸も付き合ってくれる様だ。

これで皆の協力が得られた。百人力じゃないか。

「みんな……ありがとう」

こうして俺達の行動方針が決まった。後は実行に移すだけだ。

「あ、ミドラーシユさん。グレニヤードを補充しておきますね！」

「あれを量産しているのか……」

「とりあえず99個くらいあれば足りませんか？」

「そんなRPGの消費アイテムの限界個数みたいな数容れるのやめろよ……おい！そんな危なっかしいもんを箱から流し込むように入れるな！」

モンスターを操るデュエル戦士。自律型精霊シャドール「ミドラーシュ」を駆り、セキュリティ・フォー스에 強襲を仕掛ける。その姿は、正に悠々自適の如し。

S—Force Eden City本部、ブリッジヘッド。

その建物はEden Cityの中心部に位置しており、周りのビル群と比較しても一際大きなビル、と言うよりもタワーと言った様相を呈していた。小夜丸の話によると、ブリッジヘッドとは活動している世界での橋頭保として建造された本部拠点であり、ここがS—Forceの総本部という訳では無いとの事。こんな建物を世界ごとに建造しているS—Forceと言う組織は本当にとんでもない力を持った組織らしい。

S—Forceのエージェント達は各々が標的と定めた人物を捕まえるのが主な仕事なのだが、この精霊界の治安維持も兼ねているらしく、有名なエージェント達以外の職員はこの世界の平和を守るために働く精霊も多いとの事。

ていうか、そんな組織から名指しで狙われているマスカレーナは何をやらかしたというのだろうか。まあ、サイバース族の創造主に近い精霊に狙われていると思われる俺が言えた話ではないのだが……。

「さて、建物の前まで来たのは良いが、どうやって入る？」

そんな大規模な治安維持組織という事もあって当然正門裏口問わず警備員が入り口を守っている。

駐在所の様な場所であれば揉め事の仲裁を依頼したり様々な相談をしたりするために一般人が立ち入る事も出来るらしいが、この本部に入る事が出来るのは原則S—Force職員のみらしい。

当然、すでにナイト・チェイサーによつて造反を報告された小夜丸も例外ではない。むしろ積極的に狙われるだろう。

「ふむ。ここは私たちの出番みたいだね」

「何するつもりだ……？」

「ちよつと派手に驚かしてあげるだけよ」

入り口を観察していたリイラが立ち上がり、俺の若干不安気な（何をするのか分からないという意味で）質問にちよつとなのか派手なのか結局どつちなのか分からない答えをしたのはキスキルだった。

「マスカレーナ、これちよつと貰うわよ？」

「あ！ キスキルさん！ 勝手に持ち出さないでくださいよ！」

「え？ ダメだったの？」

「のわー！ リイラさん！ 何個持って来たんですか！ それも一応タダじゃないですよ！」

キスキルの手の上に置かれているのはマスカレーナ謹製のグレニヤードであった。どうやら先ほどまで滞在していたマスカレーナの事務所に置いて有ったものを知らないうちにくすねて来た様だ。

なお、リイラはグレニヤードが詰まっていると思われる布袋をサンタクローズが如く肩に担いでいる。

「ほんじゃま、ゲームスタートのホイッスルを盛大にぶちかましますか！」

良い笑顔をしたキスキルは綺麗な投球ホームから繰り出される豪速ストリートでグレニヤードをブリッジヘッドの入り口を守る警備員達に向けて投げつけた。

警備員達は何か投げ込まれたという事には気が付けたようだが、それに対する対処をするまでには至らなかった。

「おぎやあああああああ!!!」

「うわあ……俺はあんなのを間近でくらったのか……」

今はマスカレーナがどこから取り出した犬耳がついた仮面を貸してもらっているので閃光を見ても目が潰れることは無い。マスカレーナはトレードマークでもある自前の猫耳が付いた仮面を顔を付けている。

Evil★Twinの二人も今の衣装は俺が良く知る怪盗衣装であるため、サングラスを付けているのでこちらも問題は無さそうだ。

「おあああああああ!!!」

「何でこの子はニンジャなのに閃光弾に対する備えがないんですか

……」

「おつちよこちよいか?」

何が起るのかとソワソワしながらブリッジヘッドの入り口を凝視していた小夜丸も向こうに居る哀れな警備員と同じように目が潰れていた。何してるんだこの子は。

「全く……その子が居ないと建物内の案内は誰がするのよ……まあ、いいわ。このまま私達はあいつらの気を引き続けるから、その間に急いで中に入っちゃいなさい」

「二人は大丈夫か?」

「私達を嘗めて貰っては困るよ世良君? これでも裏社会のワールドエージェントランカーなんだよ? 適当なところで引き揚げて姿を眩ませるからだいじょーぶ」

「ま、本当にヤバそうならしばらく人間界でほとぼりが冷めるまで大人しくするだけよ」

キスキルとリイラはそう言うと、リイラが持っていたグレニヤードが詰め込まれている袋から次の弾を補給すると、今度は空に飛びあがりながら建物の窓ガラスを突き破って中へと投げ込んでいく。

何だか凄く楽しそうなのは気のせいだろうか? もしかしなくても日ごろの鬱憤をこれ幸いにと晴らしている様な気もしないでもない。

S—Forceに襲撃を仕掛ける下手人が居ると分かったからか、建物の中から沢山の職員が出てくる。

「おや? あの顔は見た事があります。確か、オリフィスとエッジ・レイザーですよ」

「何だか随分世界観が違う二人だな」

一人は西部劇に出て来そうなガンマン風な男。もう一人は一言で言うてしまうとサイバー侍。流石様々な種族が集うS—Forceと言った所か。

この二人の名前は小夜丸から聞いた名前の中にあつた事を思い出す。という事はS—Forceの中でもやり手のエージェントという事だ。確かにあんな見た目のモンスターが居たような気もする。

効果は全然知らないのだが。

「あ！ 二人がキスキルさんとリイラさんを追い始めましたね」

「よし！ 主力の二人を引き剥がせたのは大きいぞ。建物から出てくる人も居なくなつたし、今の内に中に入るか」

「うう……ちよつと待って下さい……」

「……」

「……」

未だに完全に視覚が元に戻っていないのであろう小夜丸が呻き声を挙げている。

「仕方ない。俺が背負っていくか」

それでも俺は決闘者デュエリストの端くれ。こんな事もあるうかと腹筋と腕立て伏せを三十回毎日続けているのだ。

という訳で、俺はもはや蹲つた状態の小夜丸の前に立ち、いつ観たかも覚えていない楽な人の運び方動画を思い出しながら彼女を担ぎ上げる。

「えーつと……確か、まず相手をこう正面から抱えて……」

「え？ わひや!? え？ え？ ちよつと!? 何ですか!?!」

「腋の下に首を差し入れてから……おりや!!」

「うひい!! 脇腹がくすぐりたいです!」

「こ、これは！ ファイヤーマンズキャリアー!」

マスカレーナが言ってくれたのは意識不明の人を一人で運べ、かつ片手を自由にする事が出来る消防士なんかを負傷者を運ぶときに使う人の運び方だ。

動画サイトでちらつと観ただけだったが、意外と出来るもんだな。

加えて、小夜丸が驚くほど軽かつたお陰もあり、感じる負担はあまりない。

なに？ 男なら女の子はお姫様抱っこだろお？ だと？ あれは持ち上げる時の腰への負担がヤバイし、抱かれる側も協力してくれないと大変なんだよ。しかも両手が塞がってしまう。この状況でそんな余裕は俺には無い!

俺の救出時にキスキルがお姫様抱っこで俺を抱えてくれたのは彼

女達が凄いからだ。俺は凄くないのだ。

空いている右手で胸ポケットからガラテアのカードを取り出し、その姿を彼女の大鎌へと変化させて構える。これで準備は完了だ。

なにいい!? 決闘者たるもの右手には手札と言う剣を携えよだつて??? バカ言つちやいけない。左手に携える盾たる決闘盤デュエルディスクは小夜丸を担いでいるため使えないのだ。そうなつては剣たる手札はただの手札なのである。ん? どういう意味?

「よし、行くぞ! 小夜丸は目が見えるようになったらそのまま道を教えてくれ!」

「えーつと……目が見えるようになったら降ろして欲しいのですが……恥ずかしいので……」

「ん? それもそうか」

小夜丸の視覚が回復したのなら俺が抱え続ける必要は無いな。俺だつてわざわざ敵地で重しを背負つて行動はしたくない。

小夜丸をファイヤーマンズキャリアで担いだ俺とマスカレーナは隙だらけとなつたブリッジヘッドへと突入する。

☆

まだ視覚が回復していない小夜丸が言うには、ワープゲートはこの建物の最上階にあるらしい。

彼女の案内がまだ使えないので俺達は階段とエスカレーター、エレベーターを駆使してとりあえず上へ上へと駆け上がる。

このクソデカイ建物を階段だけで駆け上がるのは流石に骨が折れるので途中でエレベーターを使うのだが、セキュリティのためか直通で一番上まで行くことが出来るエレベーターが無い。

そんな面倒な構造をしている建物を徘徊していると当然建物内に残っている職員達に見つかる事もある。

のだが……。

「「「あばああああああああ!!!」」」

「「「愁傷様だな」

!!!!!!

俺達を追いかけてくる職員達には俺の影から転がり出るグレニヤードの餌食になって貰っている。俺の影にはマスカレーナが無駄に入れたお陰で在庫過剰になっているグレニヤードが満載なので、そこそこの数の敵に追いかけられ始めたらミドラーシユが適当にポイポイ投げている様子。

ちなみに、小夜丸にはマスカレーナが持っていたウサ耳が付いた仮面を渡しているので今度は閃光弾対策もバッチリだ。

「あ、段々見えるようになって来ましたよ……ッ！　止まってください!!」
「!」

小夜丸の鬼気迫る言葉に俺とマスカレーナはつんのめりながらもなんとか足を止めることが出来た。

「その通路にワイヤーが張られています」

「うおっ！　本当だ。よく気が付いたな」

「流石はニンジャという訳ですね」

「え？　そうですか？　えへへ……」

小夜丸が言う通り、足元にあたる低い位置にワイヤーが張られている。幸いピアノ線のような肌が切れそうな素材ではない様だが、これに思いきり足を引っかけていたら小夜丸を担いでいる俺なんかは洒落にならない転び方をしていただろう。

「このやり口は……ッ！　そこです!」

俺に担がれたままの小夜丸はただの壁にめがけて手裏剣を投げつける。だが、その手裏剣は壁にぶつかる前に金属音を鳴らして撃ち落とされる。

「ナイト・チェイサー!」

「乱破小夜丸。無様な姿を晒してはいますが、腐っても乱破という事ですか」

「な!?　こ、これは違ってですね!　ていうか、もう大丈夫ですから降ろして下さい!」

「あ、そうっ!」

小夜丸が俺の肩の上で暴れ始めたので彼女をゆっくりと降ろして

やる。

「どうやら足元に仕掛けられたワイヤートラップはナイト・チェイサーによる物だった様だ。」

「世良さん、マスカレーナ。ここは私に任せて先に行って下さい」

「ええ？ 本当に大丈夫ですか？ 今の発言で一気に心配になったのですか？」

フラグのお手本のような発言をする小夜丸に俺とマスカレーナは非常に不安になるが、その表情は前回ナイト・チェイサーと対峙した時とは違う余裕を感じる。何か対策でもあるのだろう。

「いざっ！」

「排除する」

小夜丸が持つ小太刀とナイト・チェイサーの苦無がぶつかり合う。それはまるでハイウェイで行われた戦闘の2ラウンド目が始まったかの様だ。

「先を急ぎましょう、ラッセさん。目的地へのルートは彼女からメモを貰いましたから」

「いつの間に。流石忍者。抜かりが無い」

ナイト・チェイサーと激しい戦闘を繰り広げる小夜丸を尻目に俺とマスカレーナはワープゲートがある目的の部屋へと突き進む。

ゴールはもう間もなくだ。

正義

「お、ここがワープゲートがある部屋みたいですね」
「やつと着いたか……」

小夜丸と別れた後も俺とマスカレーナはこの巨大な建物をひたすら上へと昇り続けた。そして、ようやく貰ったメモに書かれた目的地へと到着することが出来た。

「小夜丸は大丈夫だろうか？」

「まあ、彼女はあれでもS—F—o—r—c—eで単独任務を任せられるエージェントですので実力は確かなはずですよ」

ナイト・チエイサーの対処を彼女一人に任せてしまったが、今まで見て来た彼女の様子からするとややポンコツ感が否めない。

まあ、マスカレーナがこうまで言うのだ。今は彼女の無事を祈ってひ弱な人間である俺は自分の事だけを考えた方が良さだろう。

「行きましよう！」

「あ、ちよつと待って」

マスカレーナが早速部屋に入ろうとするのを俺は引き止め、足元の影に居るミドラーシユに声を掛ける。

「なあ、グレニヤードを少し分けてくれないかな」

そうすると、足元の俺の影からグレニヤードが三個、影の中から浮かび上がってくる。

地面に転がったグレニヤードを手に取り、ピンを引き抜いてから少しだけ開けたドアの隙間から投げ入れる。

「念入りですねえ」

「まあ、中で待ち伏せされたら大変だしな……さらに、もう一発！」

時間を少しずらしてからもう一個のグレニヤードのピンを引き抜いて投げ入れる。耳を澄ませると中から何人かの悲鳴と呻き声が聞こえてくる。

「よし。行くぞ、マスカレーナ！」

「うわあ……」

何故かマスカレーナが若干引いている様な気がするが、部屋の中に

グレネードを投げ込むのはこういう場面では常套手段だろ？ 残りの一発は予備として手元に残しておく事にするにする。

扉を勢いよく開け放ち、中の様子を見てみると、一般職員と思われる精霊達が目を抑えて転げまわっている。そんな中でただ一人、仁王立ちをしてこちらに視線を向けてくる精霊が居た。その精霊は胸の装甲にS—Forceのトレードマークが刻まれたゴツイ全身スーツを着込んでいる。頭部もバイザーが付いたヘルメットをしているため、グレネードの閃光が効かなかつたのだろう。

「ふむ……卑怯な手を使うジャステイスねえ……」
「ん？」

「ジャステイスステイス！ だがしかし！ ここは正義の砦、S—Force ブリτζジヘッド！ 狼藉物の好きにはさせないジャステイス！」

「なあ、あれってジャステイファイなのか？」
「うーん……そのはず……です」

そこに居た精霊はS—Forceテーマにおけるエースモンスター、『S—Force ジャステイファイ』だった。その見た目は俺の記憶とも一致しており、奴の言動からもそうだと分かる。

しかし……
「え？ ジャステイファイってあんな感じなの？ なんかいメージと違うな」

「私は直接話した事がある訳ではありませんが、冷静沈着で悪人には容赦がない人物だと聞いた事があります……本当なんですかね？」

ジャステイファイの言動……というか、語尾？ その語尾はどう考えてもおかしいだろ。

まるでジャステイファイと言う精霊を知らない誰かが演じている様な……そう、エアプジャステイファイとも言える様相を呈している。

「何をごちゃごちゃ話しているでジャステイス？ 『スピリット・パベッター精霊躁者』にそっちは『運び屋』だな？ お前たちはここで終わりジャステイス！』
「スピリット……何だって？」

運び屋と言うのがマスカレーナの異名だという事は分かる。だが、もう一つの方は聞き覚えが無い。しかし、この状況でその二つが並べられたという事は……

「精霊躁者はラッセさんの事ですよ。数々の精霊を誑かして操って、あーんな事やこーんな事をしている、とこの世界で噂になっていきますので」

「濡れ衣だろー!」

「やっぱり俺の事!? 何そのちよつと心の奥底に封印した感性をくすぐりかねない異名!」

むしろ最近では精霊の方から俺の所に押し掛けられた覚えしかないのにその言い草は余りにも酷過ぎる!

「ま、まあそれは今は置いておこう。ワープゲートはジャステイファイの向こう側にあるあの装置だな」

この部屋の中央に鎮座している巨大な装置。中心にある球体の周りにこことは別の次元であろう景色が映し出されたモニターが多数浮かんでいる。その目の前にはいかにもなコンソールが置いて有り、あそこで操作する事によって次元移動が可能になるようだ。

「そのようです。でも、あれを動かすためにもジャステイファイをどうにかしなければ……」

「マスカレーナはジャステイファイは無視してあのコンソールの操作を頼む。あいつは俺が抑える」

俺は左腕のデュエルディスクを展開し、ジャステイファイに挑もうとする。相手は治安維持組織の長。そんな背景を持つ奴なら当然決闘には応じるはずだ。

「食らええええええええい!!!」

「ラッセさん!?!」

「うおっ! お前もそういうタイプかよ!」

ジャステイファイは床に足跡が付きそうな勢いで踏み込むと、こちらに向かってすっ飛んでくる。その勢いのまま殴りかかってくるつもりの様だ。

モンスターを召喚しようにもカードを引く暇すらなかった俺はま

だ右手に握っていたガラテアの大鎌を盾の様にして身体の前に構える。

ジャックナイツのコアは黄華を選択。これでこの大鎌に触れた瞬間にジャステイファイは自分の家にも飛ばされる事だろう。

「フンッ！」

「なっ!? ぐあっ！」

ジャステイファイの拳をガラテアの大鎌が一瞬受け止めるが、その勢いのまま俺は殴り飛ばされてしまう。吹き飛ばされた俺を、地面に着地する前に出来た俺の影から伸びた影糸が受け止めてくれたお陰で大怪我をする事は無かった。

「腕が痺れる……ッ！ 黄華の輝きが消えている? ……あ! なるほど、そういう事か……」

黄華のコアの輝きを灯した大鎌に触れたジャステイファイがデッキに相当する場所に戻されなかった。それは『S-Force ジャステイファイ』が持つモンスター効果を無効化する効果による物だろう。

この無効化効果によってトロイメア・ユニコーンのデッキバウンス効果が無効化されてしまったのだ。

「俺が除外されなかったのは嘗めているのか、それとも除外出来ない理由があるのか……」

ジャステイファイは無効化効果に加えて攻撃するダメージステツプ開始時にリンク先のモンスターを全て除外する効果も持っている。今のジャステイファイの攻撃の時に除外効果を使われていたら俺はどうなっていた事やら……。

だが、奴の無効化効果はターンに一度しか使えない。そう何度も使う事は出来ないはずだ。

なら……

「現れる! 『オルフェゴール・トロイメア』!!」

宣言と共に紺碧のコアの輝きを灯した大鎌を振りかぶると、鎌が切り裂いた空間の裂け目から姿はガラテアに似ているが顔の半分は彼女の穏やかな表情とは全く違う凶暴な笑みを浮かべた異形のモンス

ターが現れる。

ガラテアの兄を自称する俺としてこのモンスターに頼るのはひっじょくくくくくくくくくくく複雑な思いがあるが、この場においては頼りになるのは間違いない。

「むっ！ 攻撃が効かない？」

オルフェゴール・トロイメアはオルフェゴールとトロイメアと言う二つのテーマに属するモンスター。異なるテーマの名称を同時に有するという事はどちらのテーマのサポートを受けることが出来るという訳だ。

属性や種族、効果を考慮するとオルフェゴールに寄っているが、トロイメアと言う名称を持つている事で『トロイメア・マーメイド』のデッキから特殊召喚する効果に対応する事が出来る。

そして、俺が呼び出したこのオルフェゴール・トロイメアと言うモンスター。普段は墓地肥やしがメインでオルフェゴールデッキでよく使われるカードであるが、実はリンクモンスターとの戦闘では破壊されないという別に隠されている訳では無いが隠された効果がある。「だが、これしき、私の前では何の意味もないジャステイスッ！ 正義の鉄拳！」

戦闘破壊出来ないオルフェゴール・トロイメアに対してジャステイファイは戦闘時の除外効果を使い、オルフェゴール・トロイメアを難なく処理して来る。

だが、これで時間は稼げた。

「俺は『影衣融合』を発動！ デッキの『影依の巫女 エリアル』と『シャドール・ハウンド』を墓地へ送り、融合召喚！」

オルフェゴール・トロイメアが時間を稼いでいる間に俺はデッキからカードを五枚引いて手札とした。そして、EXデッキから特殊召喚されるモンスターである『S-Force ジャステイファイ』が相手の場に居るため、デッキから融合素材を墓地に送って融合召喚する事が出来る。

「儀水の果ての果て……。氷結の一族の末裔の影よ。相對者を永久の凍土に縛りつけよ！ 融合召喚！ 現れろ、『エルシャドール・アプカ

ローネ』!」

『エルシャドール・アップカローネ』

レベル6 DEF2000 闇

「何!?!」

それは『イビリチユア・マインドオーガス』のシャドール体。正史では存在しないシャドールモンスターが手に持つ儀水鏡の杖から伸びた影系がジャステイファイを雁字搦めにする。

「このカードが特殊召喚に成功した場合、フィールドの表側表示のカード一枚の効果が無効にする。無効にするのはお前だ、ジャステイファイ!」

「ぬおおお! 小癩な! だが、私の拳を止める事は……ジャステイス!?!」

墓地に送られたシャドール・ハウンドが影系でグルグル巻きにされたジャステイファイに対して吠える様な仕草を取っており、それにビビったのかジャステイファイは防御姿勢を取る。多分守備表示になっっているんだろう。

仮に再びジャステイファイが体勢を整えて攻撃してくるとしても、戦闘破壊されないアップカローネが防いでくれるはずだ。アップカローネの無効化効果は永続的に適用されるのでジャステイスファイはこれで無力化出来た。

「ラッセさん! こちらに!」

「分かった! 今行く!」

「ま、待て! 待つんだジャステイス!」

「いや、その語尾は無理があるだろ」

マスカレーナに呼ばれた俺は彼女が操作するコンソールへと近づいた。

脱出

「え？ ワープ先を人間界に設定出来ない？」

「はい。どうやらこのワープゲートは転送先との繋がりが無いとそこへ行く事は出来ないみたいです」

マスカレーナに呼ばれてワープゲートのコンソールに近づいた俺が聞かされたのは余り信じたくない真実だった。

なんてこった。皆の協力を得てようやくここまで来たというのに、結局帰れませんでしたでは笑い話にも成りはしない。

「ジャースティステイスティス！ そのワープゲートは転送先に別のワープゲートと言う点があって初めて点と点が繋がり、次元移動を可能とするジャステイス！」

アプカローネの影系によって縛られたままのジャステイファイがそんな事を言う。まあ、その状態で守備表示のアプカローネに杖で突かれてちよっかいを掛けられているので威厳も何もあつた物ではないが、ムカつく事に奴が言う事は真実なのだろう。

ペルレイノから人間界に戻った時はルルカロスの助けを借りたうえで俺自身が人間界への道標となって戻る事が出来たが、この装置はルルカロス程融通が利くという訳では無いのだろう。

繋がりか……繋がり？

「なあ、マスカレーナ。その繋がりにってのはどんなものでもいいのか？」

「ええ、人間界の座標が分かるような物でもあればそれを目印に設定する事は出来そうですが……」

「もう一つ質問なんだが、この世界から人間界にメールは送れたよな？」

「そうですね。でも、メールだと送信する一瞬は人間界への道標が出来そうですが、送信し終わってしまうとまた人間界への道を見失ってしまいます。そんな状態でワープゲートを使ってしまおうといつ時代のどこに飛ばされるか分かりませんか？ 最悪次元の狭間に放り出されるかもしれません！」

なるほど。

つまり、繋がりはどうなにも細くても良くて、必要なのは持続性な訳だ。

「分かった。ならここから人間界に居る誰かに通話を掛ける。それならどうだ?」

「それだったら……はい! 行けると思います!」

よし!

俺は決闘盤からパソコン等の端末に繋げるための汎用接続端子をデュエルディスク引き出す。

「ちよつと待てよ。精霊界の機械にこれは繋がるのか?」

接続端子は人間界では広く普及しており、国を跨いでも使うことが出来る汎用的なものだが、ここは国どころか世界が違う。祈りながらコンソールをじっくり観察してみると……

「まじかよ……すげえな汎用端子」

コンソールのI/Oパネルの中に見慣れた形の物を見つけることが出来た。そこに決闘盤の接続端子を接続すると、今まで圏外だった決闘盤はネットワークに接続され、メールや通話を使用できる状態となる。

S—Forceは様々な次元世界で活動する組織だからあらゆる世界の機器に対応できるように設計されているのだろうか? 俺はS—Forceの底力を垣間見た気がした。

「後は、通話をする先だが……」

家は……出ない。

あ、そう言えば昨日親父とオカンでしばらく旅行に行くとか言ってたな。だからしばらく家には俺しか居ないんだった。

「うーん……仕方ない。次は……」

島に呼び出しを掛けるが……出ない!

あいつ! 常に決闘盤を身に着けるのは決闘者の嗜みだとか言つてた癖に!

俺がこの世界に連れ込まれたのが夜の十一時頃。まだこつちの世界に連れて来られてから一日も経っていないと思うのだが、この世界

は常に夜だから時間の感覚が分からない。人間界とサイバース精霊界の時間の流れが違うため、今人間界が何時なのかも分からない。オフラインになった影響で決闘盤の時計も狂ってしまったている。

最悪深夜で眠っているか、風呂にでも入っている可能性がある。

えーと、後連絡先を知っているのは……

「……これは……通話を掛けても良いものか？」

一応同じ部活仲間という事で財前さんの連絡先は知っているが、下手に掛けたらお兄様に死ぬほど追及されそう。それに、もし俺が通話を掛けた先に転送されるとしたら女の子の部屋に突然現れる事になるのか？ それはヤバいだろう。お兄様に追及どころか殺されかねないのでは？

それに、今思っただのだが、連絡してその相手が厄介な精霊達に目を付けられる可能性がある事を考えると、適当な相手を選ぶ訳にはいかないか。特に島は精霊のグリーン・バブーンが付いている訳だし、精霊達から興味を引く可能性があった。

まあ、幸いと言っていいのか奴には連絡が付かなかつたから結果オフライという事で。

「後は……後、は……」

いや、別に友達が少なくても候補となる連絡先が無いという訳では無いのである。精霊達から興味を惹かれ無さそうで居ながらカードの精霊に関する理解があり、かつ万が一サイバースな精霊達に目を付けられてサイバー攻撃を仕掛けられたとしても対抗する手段を持っているという超有力な候補の連絡先が一つだけある。

「……仕方なし、か」

俺はフレンドリストの一番新しい欄に乗っている名前を押し、通話を掛ける。俺の行動がこの先のストーリーにどういった影響を及ぼしてしまうのかが不安だが、既にリリースがやらかしてハノイの塔編で話が終わりかけていたのだ。

何か問題が起こったら俺が出来る範囲で協力する事にしよう。

「頼む、出てくれ……」

祈る思いで通話ボタンをタッチし、数回コールが鳴る。

『……どうした?』

「繋がった!」

通話相手は藤木遊作。

科学技術時代の申し子であり、カードの精霊等といったオカルト要素に唯一関りを持たなかった遊戯王の主人公。

まあ、LINK VRAINSで起こる様々な出来事はオカルトじゃないのかと言われたら俺は何も言えないのだが、少なくともこの世界で解明されているルールに乗っ取って起きているのだ。多分オカルトではない。

……リンクセンス? あれは……まあ、うん。少なくともカードの精霊とは関連してないでしょ。

「藤木! 説明は後で必ずするから、出来る限りのプロテクトを掛けてこの回線を維持してくれ! LINK VRAINSの英雄なら出来るだろ? 頼む!」

誰が覗いているか分からない一般の通話機能を使った通話なため、俺はPlaymakerの名前は出さない。

『……分かった、一分待て。プロテクトの構築をすぐに始める。後で必ず話してもらおうぞ』

「ありがとう! マスカレーナ、どうだ?」

「いけそうですよ、ラッセさん!」

『マスカレーナ?』

遊作と通話を繋げることによってサイバース精霊界と人間界との繋がりが出来た。後数十秒待ってからマスカレーナがワイプゲートを起動させれば俺達の目的は達成される。

俺が名前を呼んだからか、もしくはマスカレーナの声を決闘盤が拾ったたために遊作に彼女の声が聞こえたからか。見知らぬ人物が俺の側に居る事に気が付いた遊作の声に警戒の色が伺える。

「彼女の事も含めて説明するから、今は……」

『分かっている。プロテクトは既に完了した。後は何をすればいい?』

「そのままが良い!」

「行きますよー！ ワープ開始！」

「ッ！」

マスカレーナがコンソールのボタンを押すと、装置の中心に添えられた球体が光り輝き始める。その光が俺とマスカレーナを包み込む時、光の向こうで何かを見た。

あれは……鳥？ いや……。

『：全ては光の創造主のために』

☆ ☆ ☆

「おおお!! い、痛っああ……」

マスカレーナがワープゲートを起動し、意識が遠のいたと思った次の瞬間に感じたのは後頭部への衝撃だった。どうやら壁か何かにぶつかったらしい。

ワープは成功したのか、そこは先程まで居たブリッジヘッドの景色とは全く違ったものだった。

「世良?！」

「え? 今どこから現れた?」

「藤木に、草薙さん……?」

そこに居たのはつい最近ちゃんと話すようになった二人だった。この二人が居るといふ事はここは人間界。それに、辺りをよく見てみれば大きなモニターとホットドッグを焼く設備がある。

どうやら Caf・Nagi の中に飛ばされて来た様だ。

……良かった、財前さんに手助けを求めなくて……。人間界に帰っ

て来られてもすぐムシヨ送りだったろうな。

「マスカレーナは……」

『はい！ 私はこちらですよー！』

「良かった、一緒に人間界に逃げて来れたみたいだな」

ワープでマスカレーナだけブリッジヘッドに取り残されるという事は無く、一緒に人間界に来ていた。その影響だろうか、マスカレーナはその姿を肉体ではなく、カードへと変化させており、俺のすぐ傍に落ちていた。

そして、見慣れた精霊体の姿で彼女は俺に声を掛けてくれる。

「えーっと、一体誰と話をしているんだ？」

「精霊か？」

「藤木の言う通り、今こいつが傍に居てくれてるんです」

俺は草薙さんに説明しながら落ちていたマスカレーナのカードを拾い、遊作に彼女のカードを渡す。

「これは、サイバース族モンスター！」

「そう。さつきまで俺はサイバース精霊界の精霊に拉致られてしまつて精霊界に閉じ込められてたんだ。そこで彼女と他の仲間に手伝わってもらいながら今やっと人間界に戻って来たって訳」

「あ、相変わらず非科学的だなあ……」

「世良も厄介事に巻き込まれたものだな」

「本当にな……」

草薙さんと遊作は呆れたような声を出す、そんな事は俺自身が一番そう思っているのだ。

人間界に戻って来た事によって俺の決闘盤はインターネットに無線で接続され、情報が同期される。精霊界に居たせいで狂った時計が調整された事で示された時刻は俺がサイバース精霊界に行った日の翌日午前十時。

今日が休日で助かった。平日だったら遊作は通話に出てくれなかっただろうし、学校を無断で休んだ俺に対しては親に連絡が行っていただろう。

あ、島の野郎は休日だからまだ寝てやがるんだな。ま、結果論だが

それはそれで良かったという事にしよう。

「はあ……詳しい話をするよ」

遊作に約束した通り、これまでにあつた事を説明しようとした時、マスカレーナが悲鳴の様な声で叫ぶ。

『ラッセさん!! デ、デデデデ、デツキを今すぐ確認してください!』
「どうしたんだ急に?」

俺は尋常じゃない焦り方をしているマスカレーナの指示に従い、決闘盤に挿入されたデツキを取り外し、中身を確認して驚愕する。

「これは?」

ここにカードはちゃんとある。だが、本来カードに描かれているはずの名称も、イラストも、効果テキストも、何も無かった。

「これはどういう事だ?」

「白紙のカード?」

「いや、これは俺のデツキ……のはずだ」

これは、まるで遊城十代が作中でカードのイラストが見えなくなった時の状況とよく似ている。しかし、あれは十代自身の心の問題であり、カード自体に変化が起こっていた訳では無かったため、十代以外の人物には普通にカードのイラストが見えていた。

一方で、俺のカードは俺だけでなく、ここに居る遊作や草薙さんにも見えていない。

カードをめくり、デツキのカードを確認するが、全てのカードが白紙になっている訳では無かった。

「シャドールカードがっ……」

死者蘇生の様な汎用カードと混ぜ物として入れているティアラメッツ関連のカードはそのままなのに対し、デツキの中核を成すシャドールテーマのモンスター、魔法、罫カードの全てが消えてしまっている。

「ミドラーシユ!!」

俺は自分の影に居るはずのミドラーシユに対して慌てて声を掛ける。

もしかして、彼女も居なくなってしまったのではないか。そんな不

安な気持ちで俺の心を占める。

「……ああ、良かった……君はそこに居るんだな……」

ミドラーシユは「私はここに居る」と言わんばかりに影から小さな手を出してゆっくりと振ってくれる。

『あれ？　ちよつと待って下さい、ラッセさん』

マスカレーナは俺の影から伸びるミドラーシユの手を掴むと、そのまま引つ張って彼女を影の外へと引き出す。そのままマスカレーナに捕まって全身を晒したミドラーシユは慌てているのかジタバタしているのだが、そんな事よりも……

「ミドラーシユ……？　なんか小さくないか？」

現れたミドラーシユの姿はかつてカードシヨップでつまらなさそうに佇んでいた時の姿ではなく、比較的小柄な女の子であるマスカレーナが胸の前で抱え込む事が出来るくらいに小型化していた。少し大きなぬいぐるみくらいの大きさだろうか？

『これは……ミドラーシユさんの力がほとんど感じられません……』
「なんだってー！」

よく考えれば、俺が彼女に声を掛けた時に腕だけとは言え姿を見せにくれた事自体もおかしかった。まさか、俺の影を操る事が出来なくなったからああして自己主張をせざるを得なかった、という事なのだろうか？

俺の影すらも操れないとすれば、影糸も出せないのだろう。

さつきはメインデッキしか確認していなかったため、ミドラーシユのカードを見ていなかった。そこでEXデッキのカードも確認してみると、やはりシャドルー関連の融合体は白紙に成ってしまったている。だが、『エルシャドルー・ミドラーシユ』のカードだけはイラストが白黒になっているのみで完全に消えては居なかった。

これほどまでに彼女の力が小さくなってしまった原因は何だ？

「……あいつー！」

俺は思い出す。

人間界にワープする直前、光の中で見たモンスター姿を。

鳥の様な頭に大きな翼。若木のレリーフが刻まれた身体。その身

体の中心にはこちらを見透かすような大きな二つの眼。

恐らく、俺達がワープする時にあの精霊が何らかの干渉をして来たのだ。そして、俺のシャドルカードとミドラーシユの力を奪っていった？

「こうしちやいられない！ 今すぐサイバース精霊界に戻って……？」

「世良！」

立ち上がり、直ぐにサイバース精霊界に向かおうと思ったが、身体が言う事をきかずにふらついてしまう。倒れこみそうになった所を遊作に支えて貰う事で何とか立っていられる。

『ラツセさん、あなたは緊張状態のままずっと動き続けていたんですよ！ 今は身体を休めるべきです』

「だが、ミドラーシユ達が……」

俺はマスカレーナに抱えられたままのミドラーシユに目をやる。今の状況に慣れたのか、彼女はジタバタするのをやめ、こちらに目を向けてくれる。そして、両手を前に出してまるで俺を宥めるかのようなジェスチャーを向けてくる。

「ミドラーシユも俺に休めって言うのか？」

ミドラーシユは頷く。

それを見た俺はここでようやく素直に二人の意見に従う事にした。

「落ち着いたか？ 随分疲労が溜まっている様だ。今は休め。俺達に出来る事があれば協力しよう」

「ああ、俺もだ。大事なモノが奪われた辛さは……良く知っているからな」

「藤木、草薙さん……ありがとう……」

『私ですよ！ 私を忘れて貰っては困りますよ！』

勿論、マスカレーナだって。

彼女にはこれまでだって何度も助けられた。感謝してもしきれないのだから。忘れるはずがない。

無事に人間界に戻ってくることは出来た。

だが、代わりに俺は大事なモノを奪われてしまった。これをそのままにしておけるはずがない。

今度は俺の意思でサイバース精霊界に向かい、忘れ物を取り返す！

封印されしカード

C a f ・ N a g i で少し休ませてもらった後、俺は覚束ない足取りながらも何とか家に辿り着くことが出来た。

自分の部屋に入ると急に気が抜けたのか、忘れていた眠気が一気にぶり返して来る。その眠気に逆らう事なんて出来る訳は無く、倒れこむようにしてベッドに寝転がるとすぐ眠りについてしまった。

目を覚ますと既に日は暮れており、すわ一日以上眠りこけてしまったのかとも思ったが、流石にそこまでではなくまだその日の内であった。しかし、こんな眠り方をしてしまったては生活リズムを直すのに苦勞しそうだ。

『あ、起きたんですね』

『やつほー。お邪魔してるわよ』

『中々のお寝坊さんだね』

「……マスカレーナ。それにキスキルとリイラも」

マスカレーナは俺が眠つてからもずっとそこに居てくれたのだろう。それに加えてサイバース精霊界で別れたE v i l ★ T w i n の二人が珍しい事に精霊体で人間界にやって来ていた。

「二人はあの後大丈夫だったか？」

『私達？ そりや勿論』

『まあ、あの後何を思ったのかサニー団の連中もSーF o r c e に突撃かまして来て混乱が大きくなった時に撒いて来たんだけどね』

「え？ サニー団が？ 何でそんな事を……」

『さあ？ 大方、SーF o r c e の襲撃被害を大きくしたうえで責任を私達に押し付けようとしてもしたんでしようけど、あいつら律儀に「サニー団参上!!」って言ってたから今頃サニーは涙目でしょうね』

「ええ……」

相変わらず、と言う程サニー団と関りが深い訳では無いが、そう言いたくなる位には何とも間抜けな話だ。

『まあ、お陰で小夜丸の奴を回収する時間が生まれたから今回ばかりはあいつらに感謝してやってもいいわね』

『ちなみに今は一人で留守番中』

「そうか……小夜丸が一番心配だったけど、彼女も無事か……」

お手本みたいな死亡フラグを打ち立てていた彼女だが、ナイト・チェイサーにやられてしまうという事にはならなかった様だ。

一緒にS—Forceを襲撃した仲間達に置いて行かれて一人寂しくサイバーズ精霊界に潜伏していると考えると……不憫に思えてくる。

まあ、彼女はあれで立派な忍であり、S—Forceのエージェントを任せられていた精霊だ。ちよつとやそつとのトラブルくらい一人で何とか出来るだろう。

それはそれとして、彼女を一人置いて人間界に来ているこの三人に恨み言は言つてそうだが。

「そう言えば二人が精霊体で居るなんて珍しいな」

俺に協力してくれた皆の無事を確認する事で安心出来たので、少し気になった事を聞く事にした。

『あー……それはね』

『この子がこんな事になっちゃったからなの』

キスキルはそう言うのと、ぬいぐるみ大にまで小さくなってしまったミドラーシユを抱えながら説明を続けてくれる。

どうやらミドラーシユはマスカレーナに影から引つ張り出された後も影の中に返してもらえずに居たらしい。

今もキスキルに抱かれたままであり、俺が起きるまで何があったのか分からないのだが、気持ちミドラーシユがぐったりしている様な気がするのには気のせいだろうか？

あんまり虐めてやらないであげてくれ……。

『私達のSOLtisはミドラーシユちゃんの力を借りて世良君の影の中に入れてる訳じゃない？』

「私達の“SOLtis”？ うん……まあ、そうだね……」

SOLテクノロジーから盗み出して来た現在極秘事項であろう未来の主力製品をさも当然かの様に自分達の物であると宣っているが、今はそこは重要ではないのでスルーしてあげる優しさを俺は持ち合

わせているのだ。

『この子が力を失った影響からか、君の影の中から取り出せる物の大きさが随分小さくなっちゃったみたいなのよ』

『具体的にはこの子の身体と同じくらいの大サイズの物しか取り出せないみたい』

「確かにそうなると人間と同じくらいの大サイズのSOLt i Sを取り出すのは無理だな」

キスキルの説明にリイラが補足を入れてくれる。

なるほど……。そういう事情があったのか。

しかし、俺からするとSOLt i Sの時の新衣装より怪盗コスチュームの方がずっと以前から見慣れた物であるので何となく落ち着く。

「その、ミドラーシユに関して何だが……」

『ええ、マスカレーナから事情は聞いたわ』

どうやら俺が寝ている間に二人も事情は聞いていたみたいだな。

なら、話は早い。

「出来れば、また二人に力を借りたいんだ」

『勿論答えはイエス、よ』

『世良君には無料で一回だけ依頼を受ける権利をあげてるからね。それに、私達もまだまだ人間界でやりたい事は沢山あるし』

『SOLt i Sを取り出せないのは困るのよね。動画更新は常に続けないと飽きられちゃうんだから』

「良かった。二人も手伝ってくれるなら心強い」

Evil★Twinの協力も取り付けられ、再びサイバース精霊界に赴いた時の戦力を補充する事が出来た。

ミドラーシユは力を失い、デツキの戦力も三分の一程度まで低下してしまつた俺にとって貴重な……。あ。

「忘れてた……。デツキどうしよう……」

俺のデツキの中核を成すシャドールカードが無力化されてしまつているため、急いでデツキを構築し直す必要がある。

念のため、白紙となつたシャドールカードを決闘盤が読み込むか

確認してみたが、思った通り決闘盤はエラーを吐くばかりで使えそうにない。使えたとしても白紙のカードで戦うのは余りにも運ゲー過ぎて無理だ。

俺は昔、精霊付きのカードに合わせてよくデッキを組んだりしていたため、いくつかのテーマのカードを有している。しかし、それは俺が中学生以前にやっていた事であり、デュエル大会に出て小遣い稼ぎをしていたとはいえ、高校生となって使えるお金が増えた今よりも少ない所持金で集めたカードなんて言うのはたかが知れている。値段が高くてエースモンスターが買えなかったテーマもあるくらいだ。それに加えて、トレードに出したカードもいくつかあるからテーマとして戦えるほど集まっているデッキはほとんどない。

そんな中途半端にしか揃っていないテーマカードを使って精霊界デュエルで決闘するのは些か不安が残る。

レイノハートと戦った時も、リースと戦った時もシャドールティアラメンツで挑んだのはこのデッキが俺が持つデッキの中で一番強力なデッキだったからというのが大きな理由である。

「ガスタを使うか……？」

まともにカードが揃っており、戦えるデッキとして持っている物にガスタデッキがあるが、あれは俺の中では身内でワイワイ楽しむファンデッキとしての側面が強い。

勿論、ガスタで戦えない事も無いのだが、精霊界でのデュエルにおいて、戦略がある程度相手に依存するというのは……。

せめてバロネスとかクリアウイングの様な風属性の汎用シンクロモンスターが居てくれたらまた話は別だったんだろうが、持っていないのだから仕方がない。

それに、強力なティアラメンツと混ぜるにしても何のシナジーも無いのも辛い所だ。

はーあ。

リースが使っていたオルフェゴールデッキをそのまま入手する事が出来たら話は楽だったのに。

オルフェゴールデッキはシャドールの様に効果で墓地に送られた

時に効果を発動するタイプのカードテーマではないが、墓地で効果を発動するテーマだ。オルフェゴールの展開を始めると闇属性しか特殊召喚出来なくなる縛りが付くものの、ティアラメンツもほとんど闇属性テーマであるため展開の邪魔をしにくい。

シャドールと組み合わせた時の様に融合ギミックをオルフェゴールカードで利用することは出来ないが、ティアラメンツカードによる豊富な墓地肥やしからオルフェゴール展開を始められれば非常に強力な盤面を構築出来ただろう。

俺とリースが決闘^{デュエル}をしたのは精霊界ではなくLINK VRAI NSである。リースも本当の意味で実体化していた訳では無く、データ上の存在だった。それは奴が扱っていたカードも同じである。

決闘の勝敗がついたと同時にリースが使っていたカード達はデータの塵となつて消えて行つた事だろう。ていうか、avidaが塵一つ残さず消し去つた可能性すらある。

何か良い案が無い物かと頭を悩ませる。

実は案が無い訳では無い。出来れば使いたくないという俺の心情の問題でしかないのだが、最適なカード群が俺にはあつた。

「……背に腹は代えられない、か……」

俺はミドラーシユに声を掛ける。

「預けてる例のカードを出してくれるか？」

彼女はその言葉を聞いて頷くと、キスキルの腕の中から抜け出して俺の足元に伸びる影の中へと入って行く。

しばらく待っていると、両手で箱を抱えたミドラーシユが戻つて来た。その箱が重いのか、少しふらつきながらもその手に抱えた箱を俺に渡してくれる。

「ありがとう」

『何々？ その箱何？』

『もしかして、良い物でも入っているのかしら？ 錠までしちやつて、嚴重じゃない』

「良い物っていうか……まあ、この錠は念のためだよ。ミドラーシユ、これの錠もくれ」

彼女は箱と一緒に持つて来てくれたであろう鍵を出してくれる。
錠付きの箱を開けるための鍵。その隠し場所に決めたのは俺が最も安全

だと考える場所。つまり、ミドラーシユの傍であった。

『ええ……ラツセさん……錠と鍵を同じ場所に保管するなんて、セキュリティ意識低過ぎじゃないですか……』

「そうか？ でもどう考えてもここに置いとくのが一番安全だろ？」

『そうですかね……そうかもしれないですね……』

マスカレーナは俺とミドラーシユの顔を交互に見ると、何かを納得したかの様に溜息をついていた。もしかして、彼女は俺が錠か鍵のどちらかを保管する方がセキュリティ上危険だとも言いたいのだろうか？

全く、失礼な奴である。

そんな失礼な事を考えていそうなマスカレーナの事は置いておき、俺は受け取った鍵を使って箱の錠を開ける。

鍵を回してロックが外れる音が聞こえた後、箱の蓋を開けると中に入っているのはカードだった。

『なーんだ、カードだったのね』

『つまらない』

「二人はこのタイミングで何が出てくると思っただよ……」

箱の中からカードの束を取り出して、イラストが見える向きで持ち直すとマスカレーナが何かに気が付いたのか声を挙げる。

『あ！ そのカードって……』

「ああ、レイノハートが使ってたカードだ」

レイノハートとのデュエルが終わった後、散らばった奴のデッキからヴィサスが拾って手渡してくれた何枚かのティアラメンツカード。あの時ヴィサスはカードに描かれたイラストを俺に見せる事で状況を把握させようとしたのだろうが、俺はそれをそのまま持ち帰っていたのだ。

……まあ、手放すタイミングとかも無かったし、人間界に戻ったら消えて無くなるという事も無かったので。

これらのカードは当然ティアラメンツの名を関するテーマカードであり、その効果も非常に強力だ。『ティアラメンツ・メタノイズ壺世壊に軋む爪音』もそうだが、ティアラメンツカードはモンスターだけでなく、魔法・罫カードも効果で墓地に送られることによって効果を発動することが出来る。つまり、三シエイレーン、人メイルウ、娘ハウフニスの墓地肥やし効果は運が絡むデッキの上からのランダム墓地肥やしだが、これらの魔法・罫カードがあれば当たり数を増やしてその効果を十全に発揮出来るという訳だ。

まあ、同じテーマのカードなのだから当然と言えば当然である。

あの時手に入れたカードは『ティアラメンツ・クレイム壺世壊に澄み渡る残響』、『ティアラメンツ・グリーフ壺世壊に渦巻く反響』、『ティアラメンツ・サリーク壺世壊に奏でる哀唱』、『ティアラメンツ・スクリーム壺世壊を劈く弦声』、そして……

『ティアラメンツ・レイノハート』と『ティアラメンツ・カレイドハート』

俺は『星杯の妖精リース』と同様に隙間をホットボンドで埋められたスクリューダウンに収められた二枚のカードを見る。

レイノハートの事は当然許せない奴ではあるが、カード効果は非常に強力だ。レイノハートと手札のティアラメンツモンスターだけでキトカロスを経由してルルカロスの融合召喚まで確定で繋げる事が出来る。

そして、ティアラメンツのもう一体のエースモンスターであるカレイドハートの効果は俺自身が身をもって体験した通りだ。

だが、心情で言えばこれらのカードは使いたくない。レイノハートはヴィサスに力を取られた事でこの二枚のカードは精霊抜けのただのカードとなったはずだが、過去の経歴もあって実際に使うのは少し躊躇われる。何だか使ったら身体を乗っ取られたりしそうだし？

どちらのカードも掛け値なしに強力なカードだと言える。

かつてのOCGを嗜んでいた時の俺ならカードの効果と使い勝手を見て最適なデッキを組んでいただろうが、俺は精霊達が実際に存在しているこの世界で生きて来た事でカードをそういう風な視点だけで見られなくなってしまうのも事実だ。

うーん……。

「……よし。ミドラーシユ、この二枚は戻しておいてくれ」

俺はレイノハートとカレイドハートの封印を解く事はせず、再びミドラーシユに持つていてもらう事にした。

『そのカード、とても強力なんですよ？ 確かに余り使いたくないカードではありますが……』

「まあ、俺がこのカードを使う事にあいつらはきつと良い顔をしないでる？」

この世界は遊戯王の世界だ。

カードの精霊は存在するし、ドローは確率論だけで話が出来る物ではない。ナメプと言われてしまえばそこまでだが、この世界で生きて来た人間の一人としてはこういう感覚は大事にした方が良く考えている。

こうして取り出した一部のカードをデッキに加えるが、まだデッキとして使える四十枚には届かない。何を隠そう俺が加えたカードは各種三枚ずつある訳では無いので、まだカードが足りていない状況だ。

後は『激流葬』とか『落とし穴』みたいな汎用的なカードで残りの枠を埋める事も考えたが……流石にこれだけだとデッキとしての安定感が全く無い。

『なに？ まだカードが足りないのかしら？』

「足りないという訳ではないんだけど、デッキとするには少し心許ないんだよね……」

『それじゃあ、お姉さんたちが特別サービスをしてあげる』

リイラがそう言うと、ミドラーシユに何やらお願いをしている様子が伺えた。それを聞いたミドラーシユは俺の影の中に戻ると何かを抱えて戻って来た。

「これは！」

『え！ 貴女達のカードじゃないですか！』

マスカレーナが指摘する通り、それはE v i l★T w i nとL i v

e☆Twinのモンスター・魔法・罨カードのセットだった。

「……………どうしてこんなものが俺の影の中に……………」

『そりゃー、人間界に来るためのドアがあるべき場所としてそこが一番便利だったからよ』

『ドア・トウ・ドアで即SOLtIS。非常に便利』

「ああ……………」

彼女達が最初に人間界に現れた時は俺の家を訪問していた。だが、二度目以降は直接俺の影から「やあ」ぐらいのノリで出て来るようになったのはそういう絡繰りがあったのか。

「ご丁寧に分達のカードはウルトラレア仕様なんだな」

『だって、エースカードと言えぱそのレアリティでしょー！』

俺は金文字ホイル加工の『E v i l ★T w i nキススキル』と『E v i l ★T w i nリイラ』のカードを眺めながら呆れてしまう。

でもまあ、その意見には俺も同意する。希少性と言う意味では最高レアリティはプリズマティックシークレットレアであるが、あのレアリティのカードは使う為と言うよりは飾って眺めたくなるタイプだ。ていうか、精霊にもそういう感性というか、感覚はあるんだな。自分達が安値で売られている事にショックを受けていた三人娘もそうだが、精霊達はカードとしての自分にも拘りの様な物があるらしい。「でもなんでサポートカードまで充実してるんだ？」

『ああ、それは、カード実体化装置をちよくと借りて私達のカードを実体化してたら興が乗っちゃって』

『全部揃えちゃった』

キススキルとリイラがテヘペロ顔でそんな事を言っているが、彼女達が真つ当な手段でカード実体化装置を利用したとは思えない。凡そ、装置がある施設に忍び込んで勝手に使ったのだろう。

『で、どう？…これでデツキは出来そう？』

「まあ、これなら数は十分だ……………けど……………」

E v i l ★T w i nか……………。このテーマも墓地利用はしない事も無いが、テーマ内の動きだけで必要十分のカードを墓地へ送れるので積極的に墓地肥やしを狙うテーマではないため、ティアラメンツと相

性が良い訳では無い。

じゃあEvil★Twinだけでデッキを組めば良いと思うだろうが、それはそれでまたカードの数が足りないのである。Evil★Twin関連のテーマカードは一通り揃っているが、三枚揃っているのは『Live☆Twinスキル』と『Live☆Twinリイラ』のみ。リンク体であるEvil★Twinは一枚ずつしかないし、魔法・罠も同様だ。

そうなると、Evil★Twinメインでデッキを組むにしても結局何かと混ぜなければならぬ。Live☆Twinモンスターはどちらもレベル2である事からガエルの様なレベル2テーマと合わせられれば良かったんだが……残念ながらガエルは持っていない……家のストレージを漁れば『デスガエル』なら出て来るだろうか？
まあ、あつたとしても『デスガエル』はレベル2じゃないから関係無いんですけどね。

あ、そう言えばセイントレアをこの前買ったんだつたな。あれは使えるから入れておこう。

「うーん……う……………ん……………」

俺は唸りながらも手元に集まったカードを合わせ、取り合えずデッキの形にして一人回しをしてみる事にした。

デッキをよくシャッフルし、カードを五枚引く。手札は『Live☆Twinスキル』、『Live☆Twinリイラ』、『ティアラメンツ・ハウフニス』、『壱世壊に軋む爪音』、『Evil★Twin イージーゲーム』。

「……あれ？ 意外といけるか？」

全くシナジーが無い二つのテーマとは言え、Evil★Twinというテーマは一枚初動がある優秀なテーマだ。Live☆Twinのどちらかさえ引けていれば最低限の動きをする事が出来る。まあ、ここを止められると何も出来ない可能性があるという弱点があるんだが……。

Evil★Twinの墓地蘇生効果を使うとEXデッキの悪魔族縛りが付いてしまうが、その縛りが付く前にティアラメンツの展開を

……いや、それだとEXモンスターゾーンが融合モンスターで埋まってしまうから、ハウフニスの効果を絡めてメタノイズ等を使って三人娘の誰かを墓地に落とす事で上手く相手ターンに融合をしてE v i l ★T w i nのリンク先に融合モンスターを出せばいいのか。

何？ この……何？

シナジーとか全くないけどそれぞれのパワーで無理やり動かす感じ。まるでペガサスのトゥーンサクリファイスデッキみたいじゃないか。

だが、こんな滅茶苦茶なデッキでも俺が持つカードプールで作ることが出来るデッキの中では一番妨害を立てられるし、相手の妨害に対する貫通能力も高いのが悲しい所だ。

……やって見せるさ。

I n t o t h e V R A I N S

「どう？… いけそう？」

「ああ。問題ない。強力なプロテクトによって詳細な情報は得られないが、通話時の履歴からワールドアドレスを逆探知する事は出来た」

今日は何とか戦えるデッキを組み終えた翌日。場所はC a f ・
N a g iの中。

あの後遊作に連絡を取ってある依頼をしていた。それは再びサイバース精霊界に赴くために必要な準備だ。

サイバース精霊界はLINK VRAINSに隣接する精霊界。あそこへ行くためにはLINK VRAINSにログインしたうえでマスカレーナの様な精霊に手引きしてもらって入ることが出来る。しかし、今はあのハノイの塔の事件の影響でLINK VRAINSは閉鎖中。数か月後にバージョンアップして再開される事は知っているが、それまで待つなんて事はしてられない。

そこで目を付けたのが遊作である。

精霊界から人間界にはメールを送る事や電話を掛ける事が出来る。それはつまり人間界と精霊界にはネットワークによる繋がりがあるという事だ。であるならば、警察が捜査をする時にやっている様な逆探知が出来るのでは？ と、俺は考えた。

遊作は俺が精霊界から人間界に戻って来る流れを観測していた人間であり、俺が考えた策を実行できる技術を持った人間でもある。そういう事で依頼してみた所、問題なく逆探知は成功したという訳だ。そして、逆探知したネットワーク上の中継地点からマスカレーナに手引きしてもらう事でサイバース精霊界に入り込む。

ふふふ……。今回は「精霊界に行く方法が分からなーい！」なんてやるつもりはないぞ？ 何といつたって行先は勝手知ったるサイバース精霊界なのだ。LINK VRAINSが閉鎖されていようと赴く方法はすぐに考え付いた。

まあ、本当にどうしようもなくなったら「なんとかしてくれ、マスカレーナ！」で押し通すつもりだったのは心の中だけにしまっておこ

う。

「だが何だこのワールドは？ やたら嚴重なプロテクトが掛かっていて中の様子すら見られない。それに、これ以上踏み込むと逆にこちらが危ないかもしれないぞ」

ネットワーク上に存在するVRワールドは何もLINK VR AINSだけではない。

LINK VR AINSが社会インフラに近い役割を果たすくらい普及している最大手と言うだけで、共通の趣味を持った人が集まるワールド、LINK VR AINSとは違う利用者層のワールド、はたまた個人が制作して運用しているワールドなんていう物まである。

ちなみにどのワールドにログインするにしても決闘盤デュエルディスクのVRフルダイブ機能を使う事が出来る。これでLINK VR AINSと同じように目的のVRワールドにログインするのだ。

「ああ。草薙さんの言う通り、俺達が出来るのはログイン先をこのワールドに指定する所までだ」

「いや、十分すぎるくらいだ。どれくらい時間がかかるか分からないけどここでログインしても良いか？」

「ああ。奥の部屋を使ってくれ」

遊作が指した扉は彼がPlaymakerとしてLINK VR AINSにログインするときに使っていたあの部屋だ。この世界のストーリーを知っている俺からすると感慨深いものがあるが、今は感慨に耽る時間も惜しい。

「藤木、草薙さん。俺の無茶な頼みを聞いてくれてありがとう」

「気にするな。奪われたモノを必ず取り返してこい」

「帰って来たらコーヒーでも飲みながらゆっくり精霊界についての話を聞かせてくれ」

「ええ、必ず」

遊作と草薙さんのエールを受け取った俺はVRログインルームに入る。

『さて、いよいよですね』

『私達はEden Cityで先に待ってるわよ』

『また後でね、お二人さん』

「ああ。向こうで合流しよう」

キスキルとリイラは二人とも悪魔族のモンスターのため、VRワールドに直接行くことは出来ないらしい。それに、元々サイバース精霊界に住む彼女達はわざわざ中継地点でしかないVRワールドに行く必要はないため、先に精霊界に行ってもらう事になる。だから、これからVRワールドに行くのは俺とマスカレーナ、それと俺の影の中にあるミドラーシユだけだ。

俺の影を動かして意思表示が出来ないミドラーシユも影から自分の手を出してグッドのハンドサインをしている。準備完了といった感じだな。

「よし……行くぞ。デツキ、セット!」

昨日組み上げ、急ピッチながらも微調整を加えたデツキを左腕に装着した決闘盤に差し込む。

遊作と草薙さんはこれからログインする場所を詳細不明のVRワールドと言っていたが、俺は逆探知によつて突き止めたVRワールドがどこなのかという事にある程度見当が付いていた。

「I n t o t h e V R A I N S !」

それはLINK VRAINSにログインする際のキーワードだ。

☆

未だに慣れないVRワールドへのログインの感覚。

一瞬途切れた五感はすぐに取り戻され、視覚と聴覚による情報が入って来る。

「……やっぱりな」

俺の眼に最初に入り込んだのは大きな塔。いや、最早塔と呼んでいいのかも分からない枯れた大木の様な物体がそこに鎮座していた。

「ハノイの塔」

『ラッセさんの思った通りですね』

そこにあったのは数週間前にLINK VRAINSを騒がせた

ハノイの騎士によって作られたデータ上の建造物。今はその役目を果たせず静かに佇んでいるだけだ。

そして、そんなものがあるという事はこの場所はLINK VRAINS……、いやいずれ旧LINK VRAINSと呼ばれる事になる場所だった。

VRワールドは数あれど、精霊界と隣接すると言われる程近い世界はサイバース族の生みの親であるイグニスが作り出したデータマテリアルが収束して嵐となる程存在しているLINK VRAINSだけだろう。

SOLテクノロジーはハノイの塔事件の後、このワールドを放棄して新生LINK VRAINSをオープンさせる訳だが、放棄されたこのワールドはハノイの騎士がひっそりと管理していた事が作中で判明する。このワールドを逆探知した時、凄腕ハッカーの二人が詳細不明で下手に踏み込むとヤバイと言わせたのも納得だろう。何故ならこのワールドを管理しているのも二人に対抗できる凄腕ハッカー集団、ハノイの騎士なのだから。

『ラッセさん、手を』

「ああ」

マスカレーナもハノイの塔の残骸を見てここがどこかすぐに分かったのだろう。彼女は俺をサイバース精霊界にいつも連れて行く時と同じ様に手を取るように言ってくる。

さっさとここから離れないと俺のログインを感知したハノイの騎士にちよつかいを出されるかもしれない。

俺は躊躇うことなく彼女が差し出してくれた手に俺の手を重ねるようにして置く。

瞬いた瞬間、先ほどまで見ていた荒廃したLINK VRAINSの光景は嫌に見慣れた摩天楼の世界に切り替わっていた。

「戻って来たな」

それと同時に感じるのは右手に触れるマスカレーナの手の感触。精霊体では無く実体として彼女が存在しているという事は、ここが精霊界であるという事を示している。

「おーい、お二人さーん」

「どうやら問題なくこつちに来られたみたいね」

「キスキル、リイラ！ それに、小夜丸も来てくれたのか」

俺が現れる場所が予測できていたのか、キスキルとリイラの二人は小夜丸を連れて近くの場所で待機してくれて居た様だ。

「え？ あれ？ あなたは確か……少し前に会った人間さん……？
どうしてマスカレーナと一緒に？」

二人と一緒に待っていた小夜丸は俺の姿を確認すると怪訝な表情をしながらそんな事を言い出した。

今回はLINK VRAINSを経由してマスカレーナの手引きでサイバース精霊界にやって来たため、俺の姿はアバターだ。そう言えば彼女に自己紹介した時、俺は自身の身体だったためアターの話は話していなかったな。

「ああ。俺だよ俺」

「ラッセさん、それわざとやってるんですか？」

「ラッセさん？ マスカレーナがそう呼ぶという事は……世良さん？

……ハッ！ あなたが世良さんという事は……あの時私がマスカレーナの行先を尋ねた時も彼女とつるんでいたんですよね！？ もしかして、あの時の証言は嘘だったんですか！？」

「え？ いや、嘘は言わなかったはずだよ。「あつちらへん」って言ったはずだから」

「それははぐらかす気満々じゃないですかー!!」

時をあげて判明した事実に嘆いている小夜丸を宥めるのに少し時間がかかったが、シャドールカードとミドラーシユの力を取り戻すための計画をここに居る全員に伝える。

「今回の相手は恐らく光属性サイバース族の親玉の一味かなんかだと思う。そして、居場所はブリッジヘッドのワープゲートが置かれた部屋。もつと言えば、あの部屋にあったバカでかいコンピューターの中

にでも潜んでいるんだろう。俺達が人間界に移動する時に怪しい奴の影を見たんだ」

「それはS—Forceのメインコンピューターです。ワープゲートの制御はもちろん、この世界の通信インフラの監視も行っている物です」

俺の話に小夜丸が補足を入れてくれる。

「なるほど。そんなコンピューターならこの世界を見渡すには都合が良さそうだ」

「つまり、もう一度あそこに行く必要があると言う訳ですか」

マスカレーナの言う通り、再びS—Forceのブリッジヘッドに行く必要がある。

「またあんな大立ち回りをしないとイケないのか……」

「あ、それなら今回はもう少し楽だと思おうわよ」

「え？ それはどうして？」

俺が難しい顔で今度はどうやってS—Forceに襲撃を仕掛けようかと考えていると、発言をしたのはキスキルだった。

「私達があの建物に殴り込みを仕掛けた後にサニー団の連中が便乗して来たって話はしたわよね？」

「ん？ ああ、そんな事言ってたな」

「私達が色々した上にあいつらも相当暴れたみたいでね、今S—Forceの連中は本部機能を別の拠点に移してブリッジヘッドは絶賛修繕中なのよ」

「それに、主力エージェント達は下手人であるサニー団を追いかけまわしているしね」

リイラが言う主力エージェントとはエッジ・レイザーやオリフィスの事だろう。本部機能を別の場所に移しているという事は司令官であるジャステイファイはそちらに居る可能性が高い。

となると、今ブリッジヘッドに居るのは建物や機械を修理する技術職員や事務職員がほとんどって事か。

「それに、今ブリッジヘッドは修繕中という事で本格的な警備もないし、目的の部屋の場所も分かってるから今度は空から直接行けば良い

わ」

「またエレベーターと階段を使つて駆け回るのは大変だしな」

我ながら前回はよく体力が持ったものだと思う。割と命が掛かっている状況で火事場の馬鹿力が働いていたのだろう。

さて、むやみやたらに襲撃されるS—F o r c eには申し訳なく思わないでもないが、今回も諦めて貰うとしよう。

人攻智能

ブリッジヘッドのワープゲートがある部屋に直接乗り込むために、その横に立っているビルの屋上にやって来た俺達。それでもまだブリッジヘッドのビルの最上階は見上げる位置にある事からもその巨大さが良く分かる。

「ここまで来たものの、どうやってあそこまで行くんだ？」

まだ高さが足りないのもあるが、隣接したビルとは言え向こう側まではそれなりに距離がある。到底走り幅跳びで届くような距離ではない。

「そりゃ飛んで行くに決まってるじゃない」

「え？」

キススキルはそう言うや否や有無を言わせない早さで俺を抱きかかえると腰の翼を広げながら駆け出すと、ビルの縁から飛び出した。

「やっぱりー!!」

マスカレーナはリイラに運んでもらい、小夜丸はどこからか取り出したグライダーを使って風に乗って上昇して行く。

忍者つてすげーな。そのグライダー動力無いよね？ 多分君も怪盗のセンスあると思うよ。

「しつかり掴まってなさいよ」

「……うつす」

今度はお姫様抱っこでは無く、普通に俺の腰に手を回して体を密着させているだけの状態であり、下からの支えがないためキスキルの腕の力が少しでも緩むとそのまま俺の身体がすり抜けて地面と一世一代のキスを交わす事になるだろう。そうはなりたくないなので俺自身もキスキルの身体にしつかりと掴まる。

あれだな……大怪盗が無理やり結婚させられそうになってた姫様を助けた時みたいだなシチュエーションだ。まあ、キススキルが大怪盗なのは間違いないんだけど俺こんなのばかり……。

今更ながら思うのだが、お姫様抱っこと言うのは下から支えて貰えるから安心感があつたんだな……と。

そんな無駄な事を考えていないと恐怖で頭がおかしくなりそうだったのだが、流石は大怪盗 Evil★Twin という訳で俺やマスカレーナを落つことすなんて事は無く、目的の部屋に窓から突入する。

身体で窓をぶち破る、なんてことは無く、先行していた小夜丸が刃物でガラスを切り取って人が通れるくらいの穴が開けられていた。

「……？」

「誰も居ないですね」

部屋には俺が人間界に戻る時に使ったワープゲートが中心に置かれており、間違いなく目的の部屋だという事が分かる。

しかし、以前は部屋に設置された巨大なコンピューターを動かしていたと思われるオペレーター達が居たのだが、今この部屋には誰も居ない。いくら設備の復旧中とはいえ、この部屋はブリッジヘッドの中核であり、少なくとも誰かしらが居ると思っていたのだが……。

「畏かしら？」

「どうだろう」

キスキルとリイラが辺りを警戒しているが、何かが起こるといふ訳でもない。

機械の駆動音すらも聞こえてこないこの部屋はやけに広いため、嫌に静かに感じる。

「……この部屋、妙な違和感があります」

「違和感？」

顎に手を当てて考え込んでいた小夜丸が小さく呟いた。

「何と言えば良いんでしょうか……まるで空間全体が何かに覆われて隠されている様な感じ……」

「隠されている……か」

小夜丸の言葉を聞いた俺はミドラーシユに頼んで足物との影からガラテアのカードを取り出してもらおう。

今回はアバターでサイバース精霊界にやって来ているため、本来では人間界の物を持ち込むことは出来ないのだが、ミドラーシユを経由する事でこの世界に持ち込んでいるのだ。

「この辺かな？ ……おりゃー！」

「ちよ、ちよつと世良さん！ 何やってるんですか！」

俺はガラテアのカードを彼女の大鎌に変化させ、紅蓮のコアを発動させる。そのままメインコンピュータに向けて振り下ろした。

「……あれ？ 何も起こらないか」

しかし、結局ガラテアの大鎌と機械がぶつかる鈍い音が周囲に響くのみで特に周囲に何か変化が起こる事は無かった。

「このコンピュータはEden Cityの治安維持にもワープゲートのコントロールにも使う物なんですから壊したら駄目ですよ！」

「ごめんて」

元S—Forceのエージェントとして、小夜丸は俺の行動を見過ごせなかったのか注意されてしまった。

しかし、敵の光属性サイバース族モンスターの影響を受けていたと思われるLive☆Twinkスキルがトロイメア・フェニックスの力で正気に戻せたから出来ると思ったのだが、当てが外れたな。

「なら、これでどうだ？」

今度はトロイメア・ケルベロスの効果を内包する燈影のコアを発現させてから小夜丸に怒られない様に軽く大鎌を機械に当ててみる。

「あれえ？」

だがやはり、何も起きない。

魔法・罫を破壊する効果でも、モンスターを破壊する効果でも何も起こらないという事は、そもそも精霊が相手ではないのか……？

「……もしかして何ですけど、そもそもここに敵の親玉が居るというラッセさんの推測が間違っていたのでは……？？」

「えっ」

えっ。

いやいや、そんなはずは……。

……。

でもまあ、確かに俺がここに狙いを定めた理由は人間界に戻る時に微かにモンスターの姿が見えたからと言うだけであり、確たる証拠が

ある訳では無い。

……あれは次元移動中の出来事だという事を考えると敵はこことは違う次元に存在している可能性もある訳か。そんな所に隠れられたら手が出せないぞ……。

「……えーい！ どうせ手掛かりはここしか無いんだ！ ならやれるだけの事はやってやる！」

ガラテアの大鎌にはめ込まれたコアを紫宵のコアの輝きに変え、大鎌を天に掲げるようにして振り上げる。

それに応えてくれるかのように紫宵のコアは強い光を放つ。

「え!! 何ですかこれ！ なんか急に力が抜けて来たんですけど!？」

「え? そうですか? お二人はどうですか?」

「私達? いや、特に何も無いわ? リイラは?」

「全然? 何も?」

「私だけなんですか、これ!？」

紫宵のコア、つまり『トロイメア・グリフォン』の効果は他のトロイメアリンクモンスターと同じように手札を捨てて発動する効果とは別にリンク状態ではない特殊召喚されたモンスターは効果を発動する事が出来ないという制圧効果を有している。

キスキルとリイラはカードで言えば相互リンクとなる立ち位置で二人は居るし、マスカレーナの斜め後ろには俺が立っているので彼女も謂わばリンク状態であるため、紫宵のコアの影響を受けなかったのだろう。

しかし、小夜丸はマスカレーナのリンク先では無い俺の隣に立っていたために一人だけ紫宵のコアの影響を受けている様だ。

本来であれば特殊召喚されたモンスターにしか効かないのだが、大分大雑把に効果を再現しているこのガラテアの大鎌は小夜丸にも影響を与えてしまったのかもしれない。こういう時、いつも小夜丸だけ割を食っている気がするのはい気のせいだろうか?

だが、そんな大雑把にトロイメア・グリフォンの効果が再現されているという事は、ケルベロスとフェニックスの効果からどうやってか逃れた敵にも有効だろう。

「さあ、姿を現しやがれ！」

紫宵のコアから放たれる光を宿したまま、俺は目の前の何かを切り裂く様にガラテアの大鎌を大きく振り下ろした。大鎌そのまま、空間を切り裂き、俺を空間の裂け目の向こう側へと誘った。

「……………は？ それに、みんなは？」

ガラテアの大鎌を振り下ろした後、この真っ白の空間でマスカレーナ、キスキル、リイラ、小夜丸の姿が見えなかった。

「ッ！」

皆を探すために辺りを見回していると、何も無いと思われたこの真っ白な空間に全く似つかわしくない物体が置かれている事に気が付く。

「悪趣味な事しやがる……」

それは並べられた複数の真空管。

その中には盗まれた俺のシャドール達が収められていた。

この真空管はインフェルノイドと言うカテゴリーのモンスター達と深い関りがあるものであると同時に、シャドールモンスター達とも繋がりが有るものだ。

真空管はいわばエネルギーポットであり、その中に過去のモンスターを捕えその魂を原動力に活動するのがインフェルノイドと言うモンスター達の設定だが、真空管によって魂が囚われたせいで本来転生するはずだったモンスター達の肉体だけが世界のバグとして実体化してしまったモンスター達がシャドールである。

本来の意味で言えばシャドールモンスター達は真空管から漏れ出した残滓の様なものなので真空管に捕えられているのはおかしいのだが、同時にシャドールモンスター達を縛るためのアイテムとしてはこれ以上の物は無いだろう。何故なら、真空管の中には彼・彼女らが失った魂があるとされているのだから。

どういう意図でこんな事をしているのかは分からないが、敵は相当厭らしい奴だという事は分かる。

『賞賛：当機の次元迷彩を突破するか。伊達に精霊を知覚する能力を持つ人間では無い』

「!?」

空間全域に響き渡る俺以外の謎の声。

そいつは俺が真空管の方へ行く事を遮るようにして立ち塞がっていた。

まるでワープしたかの様に突然現れたそいつは俺が人間界への次元移動の際に見たのと同じ姿をしていた。

「デメエ……一体何なんだ？」

『返答：当機の名称はM E | P S Y | Y A。光の創造主により停滞した世界を推し進め、人類の後継種たる創造主による完全な支配を行う一助となるために創られた人攻智能』

自分の出自を誇るように語る鳥の意匠が見受けられるそのモンスターは自身の翼を大きく広げてこちらを威圧する様に振る舞う。

光の創造主、人類の後継種による支配……なるほど。どうやら俺の推測は間違っていないかった訳だ。奴の言う光の創造主とは十中八九ライトニングこと光のイグニスのことだろう。ライトニングに強い影響を受けていると思われるこの精霊が精霊界でのさばっているというのは原作であるV R A I N Sでは無かった状況だ。

だが、それも当然だろう。V R A I N Sにはデュエルモンスターズの精霊に関する話題は全くと言う程出てこなかったのだから。

「……俺のカードを返せ」

『拒否……』

「何でこんな事をする！」

『返答：遙か過去より、デュエルモンスターズには不思議な力があると言われている。特に人間と関りを持った精霊は強い力を持つと言われている。その原理を明らかにするためにサンプルを集める必要があったのである』

「……」

なるほど。だから精霊と交流する人間が使うカードを狙った訳か。精霊と言うだけならサイバース精霊界に無数にいる。だが、人間界にまで現れて交流を交わしている精霊となると限られる。

……そうになると、マスカレーナやE・V・I・L★Twinの二人も狙われていた可能性があったのか。これは俺の想像になってしまいが、俺が人間界に戻る時にマスカレーナや俺が無事だったのはミドラーシユが守ってくれたからかもしれない。精霊として非常に強力な力を持つ彼女が後れを取ったのはそういう理由があったとしても不思議ではない。

こんなイレギュラーがVRAINSの物語の黒幕に同調してストーリーを進めるなんて事があったら未来がどうなるか分かった物ではない。ライトニングは気が遠くなる程の回数のシミュレーションを行う事で疑似的な未来予知を可能としていた。だが、そのシミュレーションは自分が関わる事によって人類を滅ぼしてしまうという結論を出す事になる。

そこに、ライトニングが知らないであろうデュエルモンスターズの精霊と言うデータが加わればどうなる？ ライトニングが関わっても人類は滅ぶ事無く？ 栄えるかもしれない。逆にもっと悲惨な未来を描いてしまうかもしれない。

どちらにしても、イグニスと言うAIが新たな知識を学習する事で、ライトニングと対峙する事になるこの世界の主人公である遊作は原作にない苦境に立たされる事になるだろう。

すれ違いながらも最終的には紙一重のビターエンドとなったこの世界の結末がもっと悪くなってしまいうんて言うのは……受け入れられないな。

こいつは、ここで倒す。

「それにしてもよく喋るな」

『肯定：当機は人工知能。問われた質問には答える様に設計されている』

「ッ！」

ME—PSY—YAの翼にあるサーチライトの光を浴びせられる

と、待機モードだった俺のデュエルディスクが強制的に決闘モードへと変更される。

『補足：そして、当機は人攻智能。人間を滅ぼす様に設計されている』
俺の相手として設定されたのは目の前に居るメサイア。

『起動：マスタールールデュエルモード。標的を排除する』

「……良いだろう。人間には触れたらいけない領域があるって事をAIのテメエに教えてやるよ！」

俺は自分の意思で決闘盤を構え、ME—PSY—YAに相對する。

『決闘!!』

スキル

世良 VS ME—PSY—YA

LP4000 LP4000

先攻を示すランプが灯った俺の決闘盤をチラリと見て、初期の手札である五枚のカードを見る。

さて、どう動くか。

そんな風に考え始めた時、先に動いたのは後攻のはずの相手だった。

『宣言：スキル発動。光の導き』

ライトニング・メーカー

「なあ!? マスターデュエルでスキルを!？」

スキル。それは遊戯王VRAINSにおいてのみ使われた特殊ルールだ。決闘者が事前に設定したスキルを決闘中に一度だけ使用することが出来る。有名なものはやはりPlaymakerのStorm Accessだろう。このようにスキルは一発逆転の一手にも成り得る強力なものだ。しかし、通常スキルは俺が馴染みのあるマスターデュエルでなく、盤面が狭く、Dボードに乗って行うスピードデュエルでのみ使う事が出来る物のはずだった。

確かに作中でもマスターデュエル中にスキルを使う奴は居たが、あれはかなり特殊な例だったはずだ。だが、推定される奴の出自を考えれば分からなくもないか。何故なら、そのマスターデュエル中にスキルを使った数少ない奴とはライトニングの勢力だったからだ。

『効果：決闘中に一度、デッキから『人攻智能ME—PSY—YA』を自身のPゾーンに置く。このスキルで発動したカードは無効化されず相手の効果では破壊されない。その後、相手はデッキからカードを一枚ドロウする』

「サイバース族の……ペンデュラムカード?」

相手のPゾーンに置かれたカードは俺からすると実に違和感のあるカードだった。ペンデュラムカードは遊戯王VRAINSの前作、遊戯王ARC—Vで初登場したカード種であり、比較的新しい種類のカードだと言える。モンスターでもあり、魔法でもあるペンデュラム

カードは破壊されると墓地へは行かず、EXデッキに表側で置くという独特な動きをするカードである。そして、一番の特徴は魔法・罨ゾーンの両端にあるPゾーンに二枚のペンデュラムカードを揃える事で行えるペンデュラム召喚。ペンデュラムスケールの間のレベルのモンスターを手札、EXデッキで表側で置かれたペンデュラムモンスターの中から好きなだけ召喚出来るという大胆な召喚方法だ。

しかし、それもリンク召喚が実装された現代ではEXデッキからのペンデュラム召喚にはEXデッキから特殊召喚する他の召喚方法のモンスターと同様の縛りが設けられた事で弱体化する事となる。それに、魔法・罨ゾーンが三つしかないスピードデュエルにおいてはその内の二つを潰してしまうペンデュラム召喚は非常に使いにくい。

そういったこともあつて遊戯王VRAINSは儀式、融合、シンクロ、エクシーズ、リンク召喚と多数の召喚方法が登場する中、ペンデュラム召喚だけは登場しなかった。

そういった理由から、サイバース族のペンデュラムカードというのは非常に奇妙な存在なのだ。

だが、これで一つ謎が解けた。モンスターカードであり、魔法カードでもあるペンデュラムモンスターであれば、魔法罨を破壊するフェニックスの効果もモンスターを破壊するケルベロスの効果もその立ち位置を入れ替えれば避ける事が出来る。

「P効果は……ッ！」

決闘盤に相手が使ったカードが表示される機能でME―PSY―YAの効果を読んだ俺は絶句する。

『効果開示:このカードがPゾーンに存在する限り、モンスターカード以外のお互いの墓地へ送られるカードは墓地へは行かず除外される』それは『次元の裂け目』の魔法・罨版とも言える効果。

墓地に魔法を溜める必要がある閃刀姫なんかはこのカード一枚で戦略が瓦解するだろう。そして、何より辛いのはこの墓地メタ効果は俺が使うティアラメンツにもぶつ刺さる事だ。ティアラメンツ魔法・罨カードは効果で墓地へ送られた時に発動する効果があるが、ME―PSY―YAが場にある限りティアラメンツ魔法・罨の墓地効果を使

う事が出来なくなった。

「……」

相手のスキルのデメリット効果によって先攻ながら六枚から始める事が出来るが、初っ端から面倒なカードを使われたものだ。

『…当機はモンスターにして魔法。当機は光の創造主によって究極のカードとなるべくして作られたのである』

「聞いてもいない自分の事を自慢気に話しやがる……」

それにしても、究極のカード……ね。

ライトニングの勢力が使うカードで印象的なカードが一枚ある。それはリンク魔法『ジャッジメント・アローズ裁きの矢』。裁きの矢は魔法カードでありながらもリンクモンスターのみが持つリンクマーカを持つ特別なカードとして描かれていた。言ってしまうえば裁きの矢も魔法カードでありながらモンスターカードの特徴を持つカードであると言える。

つまり、同じ様な特徴を持つ『人攻智能ME-PSY-YA』はライトニングが裁きの矢を創造する過程で生まれたカード、という事なのだろうか？

だが、今それは関係ない。

いきなり出鼻を挫かれた形になるが、幸い除外されるのは魔法・罫のみ。モンスターが除外される『次元の裂け目』であればヤバかったが、幸いメインギミックは動かすことが出来る。

手札は『Live☆Twin キススキル』、『Live☆Twin リイラ』、『Evil★Twin イージーゲーム』、『ティアラメンツ・シエイレーン』、『三戦の才』、そして今ドロで手札に加わった二枚目の『Live☆Twin リイラ』。

「俺は手札の『Live☆Twin キススキル』を召喚！」

Live☆Twin キススキル

光属性／レベル2／ATK500

フィールドに現れたのはキスキルのアバターの姿。

デフォルメされた姿の彼女は人をおちよくる様な笑顔でフィールドに現れる。

「Live☆Twin キスキルの効果発動！ このカードが召喚・

特殊召喚に成功した場合、自分フィールドに他のモンスターが存在しなければ手札・デッキから「リイラ」モンスター一体を特殊召喚する！」

Live☆Twinのキスキルとリイラはお互いがお互いをデッキから呼び合う一枚初動のカード。どちらか一人が居ればリンク体であるEvil★Twinのキスキルとリイラの二人を一ターンで場に出すことが出来る。

……ここで止められなければの話だが。

『宣言：スキル発動。光の裁き』
ライトニング・ジャッジメント

「はあ?！」

それは二度目のスキル発動宣言。

これもやはりあり得ない事だ。スキルと言うのは強力な効果を有する故に決闘中に一度しか使うことが出来ない。まあ、作中には二人で一つだからスキルを二回使う奴も居たが……。それでもそいつは同じスキルを二回使うという物であり、異なるスキルを使うというのはインチキも甚だしい。

『効果：一ターンに一度、相手の光属性サイバース族モンスターの効果を無効にする』

「くっ……キスキルの展開が止められた……」

ME—PSY—YAの翼に備え付けられたライトがキスキルを照らすと、効果の発動を中断されて「スンッ……」って感じの顔をしている。

しかも、奴の発言から考えるに、わざわざ一ターン一度と説明しているという事は、このスキルは次のターン以降も使えると考えた方が良さそう。

『……これこそ当機に与えられた創造主の権能の一部』

俺は「お前の創造主でもこんなインチキスキルは使わないぞ!」と叫びたくなる気持ちを堪えてとにかく頭を回すことに集中する。

幸い、キスキルの効果が無効化されただけであり、破壊されたりコントロールが奪取された訳では無い。それならば、モンスターを並べればまだリンク召喚は可能!

「なら、手札の『ティアラメンツ・シエイレオン』の効果発動！ このカードを手札から特殊召喚し、自分の手札からモンスター一体を選んで墓地へ送る。その後、自分のデッキの上からカードを三枚墓地へ送る」

ティアラメンツ・シエイレオン

闇属性／レベル4／ATK1800

俺は手札でダブっている『Live☆Twin リイラ』を墓地に送り、デッキの上からカードを三枚墓地に送る。墓地へ送られたカードは『Evil★Twins キススキル・リイラ』のみ。残り二枚である『壱世壊IIペルレイノ』と『壱世壊を劈く弦声』ティアラメンツ・スクリームは墓地へは行かずに除外されてしまう。

ここで壱世壊を劈く弦声の効果が使えればティアラメンツ罨を構える事が出来たのだが、ME—PSY—YAによってそれは叶わない。

サーチ・攻撃力アップ・妨害を兼ね備えるペルレイノが飛ばされてしまったのも非常に痛い。このカードはティアラメンツカードでは無い為サーチが難しいのだ。

だが、これで俺のフィールドにキススキルを含む二体のモンスターが揃った。

「現れる！ 想いを繋げるサーキット！」

俺の宣言により、空中にリンク召喚を表すマーカーが出現する。

「召喚条件は「キススキル」モンスターを含むモンスター二体！ キススキルとシエイレオンをリンクマーカーにセット！ サイバース世界の華やかな怪盗よ、困難な挑戦チャレンジも100%成功！ リンク召喚！ リンク2、『Evil★Twin キススキル』！」

Evil★Twin キススキル

光属性／リンク2／ATK1100

フィールドに現れたキススキルはそのイラストの通りに余裕を見せる様な笑みを浮かべているが、俺はそれに違和感を感じる。

「キススキル？」

普段ならキススキルの様な精霊付きのカードをフィールドに召喚す

れば彼・彼女達は少なからずこちらにコミュニケーションを取って来るのだが、今回はそれが無い。

『説明…この空間は当機以外の精霊の干渉を許さない。個体名「世良」がいくら精霊と心を通わす者であろうとこの空間ではそれも不可能』
「……」

だから俺がこの空間に来た時に彼女達の姿が見えなくなったのか。精霊とのデュエルをする時はいつも三人娘ティアラメンツやマスカレーナが居てくれたが、今回は俺一人という事で少し心細くある。

『：故に、個体名：「世良」は精霊の力に頼ることは出来ない』

「なめるなよ……。俺は決闘者だ。キスキルの効果！ 自分フィールドに「リイラ」モンスターが存在しない場合、自分の墓地から「リイラ」モンスター一体を選んで特殊召喚する。俺は『Live☆Twin リイラ』を守備表示で特殊召喚！」

Live☆Twin リイラ

闇属性／レベル2／DEF0

現れたのはデフォルメ姿のリイラ。本来であればキスキルの効果でデッキから特殊召喚する事が出来るが、今回はシェイレーンの効果を経由して墓地に送って使う事にした。

「再び現れる、想いを繋げるサーキット！ 召喚条件は「リイラ」モンスターを含むモンスター二体！ キスキルとリイラをリンクマーカーにセット！ サイバース世界の麗しき怪盗よ、届かぬ星☆をその手で奪え！ リンク召喚！ リンク2、『Evil★Twin リイラ』！」

Evil★Twin リイラ

闇属性／リンク2／ATK1100

キスキルと比べれば物静かなリイラではあるが、やはり精霊としての彼女の意思が宿っていないためか一言も喋る事は無くその場に佇んでいる。

「リイラの効果を発動！ 自分フィールドに「キスキル」モンスターが存在しない場合、自分の墓地から「キスキル」モンスター一体を選んで特殊召喚する。並び立て、『Evil★Twin キスキル』！」

Evil★Twin キススキル

光属性／リンク2／ATK1100

俺はリイラのリンク素材として使用したキススキルを蘇生させる。
Evil★Twinの彼女達の蘇生効果は「キススキル」モンスター、「リイラ」モンスターと言う指定のため、リンク体の彼女達もお互いに蘇生しあう事が出来るのだ。この効果を利用する事でEvil★Twinデツキは展開、戦線維持をしていく事になる。

「そして、特殊召喚されたキスキルの効果発動！ このカードが特殊召喚に成功した場合、自分フィールドに「リイラ」モンスターが存在すれば自分はデツキから一枚ドロウする！」

引いたカードは『ティアラメンツ・ハウフニス』。

良い引きだ。運が良ければこれで相手ターンに融合召喚を行うことが出来る。EXゾーンはリイラが使っているが、キスキルのリンク先が空いているため問題は無い。

「俺はカードを1枚伏せてターンエンド」

Evil★Twinイージューゲームを伏せて次のターンに備える。

Evil★Twinの蘇生効果を使っているため俺はこのターンEXデツキから悪魔族しか特殊召喚する事が出来ないため、これ以上何か出来る事は無い。トロイメアモンスター達は悪魔族であるため、『トロイメア・グリフォン』を出すことは出来るが、イージューゲームの事を考えればこのままで良いだろう。

S—F o r c e

『ターンチェンジ：当機のターン。ドローフェイズ。ドロー。スタンバイフェイズ。メインフェイズ1。『闇の誘惑』を発動。カードを二枚ドローし、手札の闇属性モンスター一体を除外。当機は『S—F o r c e 乱破小夜丸』を除外する』

「小夜丸……」

そのカードは先程まで俺に協力してくれていた少女の物だった。

そして、彼女がデッキに採用されているという事はM E — P S Y — Y A が使うデッキは自ずと予想できる。

それはつまり……

『宣言：魔法カード『次元の裂け目』を発動』

「な、なにい!？」

次元の裂け目。このカード自体は俺が知っている限りでも随分昔に登場したカードだ。しかし、このカードが魔法&罨ゾーンに存在する限り、お互いの墓地へ送られるモンスターは墓地へは行かず除外されるという強力な墓地メタ効果は墓地で効果を発動したり墓地からモンスターを特殊召喚する事が多用される現代の遊戯王でこそ猛威を振るっているとも言える。

そして、このカードこそ俺が使われる事を一番危惧していたカードでもある。ここで次元の裂け目の発動を許してしまえばティアラメッツのモンスター効果は使えないし、E v i l ★ T w i n のお互いを蘇生しあう効果も使いにくくなってしまう。

「リバースカードオープン! 『E v i l ★ T w i n イージージェーム』! そして、今効果を使う! 俺はフィールドのリイラをリリースし、キスキルの攻撃力をリリースしたリイラの元々の攻撃力分アップさせる!」

E v i l ★ T w i n キスキル

A T K 1 1 0 0 ↓ A T K 2 2 0 0

「さらに、その効果にチェーンしてキスキルの効果を発動! 自分フィールドに「リイラ」モンスターが存在しないため、墓地から「リイ

ラ」モンスター一体を選んで特殊召喚する。戻れ、Evil★Twin
n リイラ！」

Evil★Twin リイラ

闇属性／リンク2／ATK1100

次元の裂け目の発動にチェーンして発動されたイージーゲームの効果によってリリースされたリイラはチェーン処理の関係によって次元の裂け目の効果が適用されるより前に墓地へ送られる。それによってキスキルによるリイラの蘇生効果を使う事が出来る。

「特殊召喚されたリイラの効果発動！ このカードが特殊召喚に成功した場合、自分フィールドに「キスキル」モンスターが存在すれば、フィールドのカード一枚を対象として、そのカードを破壊する。破壊するのは『次元の裂け目』だ！」

何とかリイラの破壊効果によって次元の裂け目を維持されることは防いだが、こうも早く妨害の一つを使わされるとは思わなかった。

まだ相手の手札は五枚もある事を考えると不安だが、厄介なカードを処理出来たと考えるべきだろう。

俺のフィールドに居るキスキルとリイラはどちらも墓地から特殊召喚されたため、EXゾーンでは無く、メインモンスターゾーンに置かれている。リンクマーカーを余す事無く使えるようにキスキルは俺から見て右側のEXゾーンの手前に、リイラは左側のEXゾーンの手前に配置した。

『了承：ルート変更。手札から『S—Force エッジ・レイザー』を召喚』

S—Force エッジ・レイザー

闇属性／レベル4／ATK1500

「やっぱりS—Forceセキュリティ・フォースか」

突然の次元の裂け目でいきなり驚かされたが、思った通りME—P SY—YAが使うデッキはS—Forceの様だ。ジャステイファイの様子がおかしかった理由も奴による影響を強く受けていたためだったのだろう。

だが、そうと分かれば注意するカードも推測できる。それは当然S

て発動できる。そのモンスターを特殊召喚する。対象は『S—F o r c e 小夜丸』

「俺はさっきの効果で墓地へ送られたメイルウの効果を発動！ 墓地のこのカードを含む融合素材モンスターを自分の手札・フィールド・墓地から好きな順番で持ち主のデッキの下に戻し、その融合モンスター一体をEXデッキから融合召喚する。墓地のメイルウとフィールドのハウフニスをデッキに戻し、融合召喚！」

指定された融合素材は「ティアラメンツ」モンスターと水族モンスター。

メイルウとハウフニスが融合召喚の演出に飛び込む事で新たなモンスターとなる。

「心優しき水底の姫よ、今一度俺に力を貸してくれ！ 融合召喚！
現れる、『ティアラメンツ・キトカロス』!!」

ティアラメンツ・キトカロス

閻属性／レベル5／ATK2300

EXモンスターゾーンに特殊召喚したキトカロスはかつてペルレイノで見た憂いを帯びた表情でありながらも、ステンドグラスの様な装飾が成された剣を持ってE v i l ★T w i nの二人の前で佇む。

「……」

小夜丸が特殊召喚された事でM E — P S Y — Y Aのフィールドにはジャステイファイをリンク召喚するためのリンク素材三体が揃った事になる。しかし、小夜丸はS—F o r c eにおける展開のエンジンだったはず。そんな彼女をリンク素材に使ってしまうだろうか？

蘇生手段が手札にあるなら話は別だが、素直に考えれば小夜丸をフィールドに残すためにもう一段階挟んでジャステイファイのリンク召喚を狙ってくるはずだ。

だが、間に合うか？ ルルカロスの融合召喚を成功させるまでにキトカロスによるティアラメンツモンスターの墓地送りと墓地へ送ったモンスターによる融合効果を発動する必要がある。

だが、どちらにしても俺にはルルカロスの融合召喚を目指さないと
言う理由は無い。

「特殊召喚されたキトカロスの効果発動！ このカードが特殊召喚に成功した場合、デッキから「ティアラメンツ」カード一枚を選び、手札に加えるか墓地へ送る。俺はシェイレーンを墓地へ送る」

『了承…』

(……通した?)

小夜丸の効果はフリーチェーンで発動する事が出来る。だが、奴はキトカロスの効果にチェーンして発動する事はしなかった。

まさか、何かあるのか？ だが、ここで止まる訳にはいかない！

「……ッ！ 、墓地へ送られたシェイレーンの効果発動！ このカードとキトカロスをデッキに戻して融合召喚を行う！」

キトカロスとシェイレーンによる融合召喚が行われる事で、まるでフィールドに居るキトカロスが成長したかの様な一人の女性が現れる。

「世壊の力を受け継ぐ女王よ、漣歌姫の思いを継ぐ女王よ。今ここに君臨せよ！ 融合召喚！ 『ティアラメンツ・ルルカロス』!!」

ティアラメンツ・ルルカロス

水属性／レベル8／ATK3000

現れたルルカロスは手に持つ長剣を構えており、彼女からは敵に立ち向かう強い意思を感じる。

ルルカロスが居てくれれば相手のモンスターを特殊召喚する効果を含む効果を無効にすることが出来る。だが、彼女の力だけではリンク召喚を防ぐことは出来ないのは事実だ。それでも小夜丸をリンク素材に使ってくれるのであれば、仮にジャスティファイの効果でこちらのモンスターを除去して来てもそれ以降の相手の展開を大幅に妨害することが出来るはず。

ティアラメンツの罨カードを引けていない現状ではこれが俺の出来る最大の妨害盤面だ。

『宣言：出現せよ、光に導くサーキット』

「リンク召喚が来るか」

ME—PSY—YAのリンク召喚宣言によって相手のフィールドの頭上にリンクマーカーを示す演出が現れる。

『召喚条件は「S—Force」モンスターを含む効果モンスター三
体。S—Forceエッジ・レイザー、S—Force プラ||テイ
ナ、そして手札の『S—Force レトロアクティヴ』をリンクマ
ーカーにセット』

「手札からリンク素材に！」

『補足：S—Force レトロアクティブは自分フィールドのモン
スターを「S—Force」モンスターのリンク素材とする場合、手
札のこのカードもリンク素材に出来る』

知らなかった！ 手札からリンク素材に出来る物としてコード・
トーカーデッキにおけるコードモンスター、コーダーモンスターが居
る事は知っていたが、まさかS—Forceにも同じ事が出来るカー
ドがあったのか！

『リンク召喚。リンク3、『S—Force ジャステイファイ』』

S—Force ジャステイファイ

光属性／リンク3／ATK2600

ジャステイファイはルルカロスと別のEXゾーン、俺から見て右側
のEXゾーンにリンク召喚される。つまり、このままだとリンク先に
居るキスキルはジャステイファイの効果によって攻撃する時に除外
されてしまうだろう。だが、俺に対抗手段は無い……。

『フェイズ進行：バトルフェイズ。S—Force ジャステイファ
イでEvil★Twin リイラに攻撃。攻撃宣言時、S—Force
e ジャステイファイの効果発動。相手フィールドの効果モン
スター一体を対象とし、そのモンスターの効果をターン終了時まで無効
にする。対象にするモンスターはティアラメンツ・ルルカロス』
「？」

ジャステイファイが投げ放った光の手錠？ の様な物がルルカロ
スの手を捕らえる事でルルカロスの効果は無効化される。

しかし、このタイミングでルルカロスの効果は無効化する事に何の
意味があるんだ？ 後の展開をするにあたってルルカロスの効果を
無効化する必要があるのは分かるが、何故今このタイミングで？

『処理続行：その後、その相手モンスターをこのカードのリンク先とな

る相手のモンスターゾーンに移動できる。ティアラメンツ・ルルカロスのモンスターゾーンを移動』

「何?!」

俺は慌てて決闘盤デュエルディスクの機能を使ってジャスティファイのテキストを思わず読み直してしまう。

「モンスターゾーンの位置変更効果も持っていたのか……」

ジャスティファイはルルカロスを捕らえた手錠の縄を思いきり引っ張る事でEXゾーンに居る彼女はジャスティファイの面前に立たされるかの様にリンク先のメインモンスターゾーンに移動させられる。

ここに来てS—Forceと言うテーマに対する知識がうる覚えだった事を後悔する事になるとは……。

予定ではルルカロスが無力化されたとしてもフィールドには残るはずだったのが、このままではジャスティファイの効果によって除外されてしまう。効果によって墓地へ送られたルルカロスは自身の蘇生効果を使うことが出来るが、除外されてしまったらそれも出来ない。

『宣言：ダメージステップ開始時、S—Force ジャスティファイの効果発動。このカードのリンク先のモンスターを全て除外する。そして、戦闘はそのまま行われ、Evil★Twin リイラは破壊』
「みんなッ! ……うぐう……」

世良

LP4000—(2600—1100)↓LP2500

ルルカロスとキスキルは除外、リイラは戦闘破壊されて墓地へ送られてしまった。これで俺のフィールドのモンスターは空にされてしまった。

『宣言：S—Force 小夜丸の効果を発動。手札から「S—Force」カード一枚を除外して発動。このカードを持ち主の手札に戻し、デッキからS—Force 乱破小夜丸以外の「S—Force」モンスター一体を守備表示で特殊召喚する。当機は手札の「S—Force」カードの代わりに墓地のS—Force レトロアクティヴ

を除外して効果を発動する。S—Force 乱破小夜丸を手札に戻し、デッキから『S—Force ラプスウエル』を特殊召喚』

S—Force ラプスウエル

光属性／レベル6／DEF2500

『宣言：S—Force ラプスウエルの効果を発動。このカードが特殊召喚に成功した場合、「S—Force ラプスウエル」以外の自分の墓地の「S—Force」モンスター一体を特殊召喚する。対象とするのは『S—Force プラ||ティナ』』

S—Force プラ||ティナ

闇属性／レベル6／ATK2200

再び現れたプラティナは今度は攻撃表示であり、バトルフェイズ中に新たに特殊召喚されたモンスターであるため攻撃をする権利がある。

俺のフィールドにはモンスターが居ないため、ダイレクトアタックを受けてしまう。

『戦闘続行：S—Force プラ||ティナでダイレクトアタック』

「があああああ!!!」

世良

LP2500—2200↓LP300

魔法使い族らしいプラ||ティナの攻撃が俺に直接当たると身体中に電撃が走った様な衝撃が巡る。

「あ…………ぐう…………」

精霊とのデュエル特有の衝撃を受け俺は倒れこんでしまう。

そんな事は関係ないとばかりにME—PSY—YAは自分のデュエルを続けていく。

『フェイズ進行：メインフェイズ2。手札から、速攻魔法『S—Force ショウダウン』を発動。当機は手札から「S—Force」モンスター一体を守備表示で特殊召喚する効果を選択。『S—Force グラビティノ』を特殊召喚』

S—Force グラビティノ

光属性／レベル5／DEF1400

『宣言：S―Forceグラビティノの効果発動。デツキからS―Forceグラビティノ以外の「S―Force」カード一枚を手札に加える事が出来る。当機は『S―Force チェイス』を手札に加える。カードを一枚伏せて、ターンエンド』
淡々とデュエルは続いていく。

デュエルモンスターズの精霊として

世良 VS ME—PSY—YA

LP300 LP4000

『失望：カードの精霊と心を通わす人間とは言え、この程度とは』

「うぐう……何……？」

ターンエンド宣言を終えたME—PSY—YAは倒れ伏した俺に目を向ける事もせず独り言を言うかのように話し始める。

『：人間にとって伝説上の存在として認知されているデュエルモンスターズの精霊。それらと言葉を交わし、果ては力の一部を借り受けて行使する事も可能な人間の存在は光の創造主ですら想定出来ていなかった存在だ』

「……」

奴の言う光の創造主、ライトニングは意思があるという特別性があるとはいえ、その根源はAIだ。AIはあらゆる知識を学習し、その知識を完璧に記憶し、臨機応変に適切な知識を活用する事で人間以上のパフォーマンスを発揮する事が出来る。そして、意思があるイグニス達はそれらの知識を自ら発展させる事でこれまで人間が成しえなかった事柄にも対応出来るようになった存在だと言える。

だが、言ってしまうえばそれら全ての根本にあるものは過去に人間達が詳らかにして来た既知の知識に由来しているとも言える。

例えば、イグニス達は人間には解読不可能な独自のプログラム言語を操るらしい。だが、プログラムと言う概念も、そもそも言語と言う概念も元々は人間達が作り上げて来た物だ。人間を超越した新たな生物であるというのならば、それこそプログラム言語なんていう人間の言葉で規定出来る物では無い何かを使っているもおかしくは無いだろう。だからこそ、彼らは人間を超越した新たな生物ではなく、人類の後継種なのだ。

なら、そもそも人間によって伝説、オカルト、解明しようのない物とされた俺の様な存在をイグニスは理解し得るのか？ 恐らくそれは無理だ。

仮に彼らイグニスがデュエルモンスターズの精霊について思いを馳せたとしても、人間と同じように伝説上の存在と結論付けるのではなからうか？

『…光の創造主ですら想定できない存在。それはこの世界にどのような可能性を齎すのか。当機は期待……そう、期待していたのだ』

ここでME—PSY—YAは初めて俺の方へと向き直る。

『……だが、それもこのザマである』

『……』

『…人間と関わった精霊を調べても特筆すべき情報は得られなかった。では、人間と精霊が力を合わせる事が必要な条件なのか？ それも今の状況を鑑みれば、当機の予想を大幅に超える程でもない。このデュエルも既に結果が見えている。であるならば、最早何も期待する物は無い』

ME—PSY—YAは俺に興味をなくしたかの様に再び俺から視線を外す。

『結論やはり、人間は不要である。現在人間界と呼ばれる世界は光の創造主が。そして、精霊界は光の創造主の意思を継ぐ当機が治めるべきなのだ』

『何……勝手な事を……言っているんだか……』

未だ上手く力が入らないながらも何とか立ち上がろうとするが、言う事を聞かない俺の足は膝を着いてしまう。

そこで俺はデュエルが始まる時にアバターが着ている服の胸ポケットに仕舞っておいたガラテアのカードを取り出し、大鎌の姿へと変える。俺はガラテアの大鎌を杖の様に地面に突き立てて身体を預ける事で何とか立ち上がる。

『だが……つまり、お前はこう言いたい訳だ……』

ガラテアの大鎌の力を借り、二本の足でしっかりと立ち上がった俺はME—PSY—YAを睨みつける。

「俺精霊と決闘者が力を合わせればもっとすげえ事が出来るはずなんだ。はずだった……ってな」

『……』

「なるほどなるほど。どうやら俺はお前の事を少し勘違いしていたらしい……」

息を整え、決闘盤を構え直す。ターンはすでにこちらに渡っているため、このまま決闘続行の意思を見せなければサレンダーとみなされてしまう。

「お前は、俺が思ったよりもちゃんとデュエルモンスターズの精霊なんだな。どんな物かはさておき、決闘者との絆もあったんだろう。だがお前は……」

俺は一つの事実を『人攻智能ME—PSY—YA』に突き付ける。「デッキから外された。そうだろうか?」

『…………』

「お前の光の創造主はお前の代わりに新しいカードを採用した。それはお前よりも強いカードか? お前よりもデッキと相性が良いカードか? それとも、お前よりも光の創造主とやらにとって都合の良いカードか?」

人間不要論は光の創造主ライトニングの意思と言う割には自分なりの結論を見つけてから最後の最後に改めて人間は不要だと結論付けている事。これは自分で語っていたように期待していたからだろう。

ME—PSY—YAという精霊とマスターが力を合わせれば自分の代わりに採用されたカードにも劣らないという期待。

それと同時に、諦めも感じる。奴の言う未来で光の創造主とME—PSY—YAで別々の世界を治めると言っている事からも、奴は光の創造主と共に在る事は出来ないと考えている。

俺が思うにME—PSY—YAは決闘者と精霊の可能性、その試金石として俺を見ているのだ。

『:知った様な口を利く』

「ああ、知らないさ」

奴の言う通り、結局俺が語った事も全て俺の想像、いや妄想と言っても良い。実際ME—PSY—YAが何を考えているのかも知らないし、そもそもライトニングがどういう意図でME—PSY—YAを作り出したのかも知らない。妄言と切り捨てられてしまえばそれま

での事だ。

だが、この世界で何だかんだ数々のデュエルモンスターの精霊達と交流を交わして来た俺からすれば、ME—PSY—YAの期待と諦めの在り方はまるで、自身のマスターを求めるただの野良精霊の様にしか見えなかった。

「お前に、一人の決闘者^{デュエリスト}として一つ教えてやるよ」

右手をデツキトップに置く。

「決闘者はデュエルの決着が着くその瞬間まで諦めない！　そして！　そんな決闘者だからカード^{精霊}達も応えてくれるんだ!!　ドロオオオオオオ!!」

ドロカードは『Live☆Twin　キスキル・フロスト』。手札の『三戦の才』と『Live☆Twin　リイラ』を合わせて何とかなるか？

「手札から、『Live☆Twin　リイラ』を召喚！」

Live☆Twin　リイラ

闇属性／レベル2／ATK500

「リイラの効果発動！」

『宣言・Live☆Twin　リイラの効果発動にチェインして『S—Force　ジャステイファイ』の効果を発動。Live☆Twin　リイラの効果を無効にする。モンスターゾーンの移動は行わない』俺はリイラをジャステイファイの正面のモンスターゾーンに置いていたため、移動効果は使わなかった様だ。ジャステイファイの効果によってリイラの効果は無効化され、デツキからキスキルを特殊召喚する事は出来なかった。

「フィールドに「リイラ」モンスターが存在するため、俺は手札から『Live☆Twin　キスキル・フロスト』を^{守備表示}で特殊召喚する」
Live☆Twin　キスキル・フロスト

光属性／レベル2／DEF0

現れたのはLive☆Twin　キスキルの冬衣装バージョン。ちなみに、種族はサイバース族ではなく水族だったりする。

キスキル・フロストは後から追加されたLive☆Twinモンス

ター。このカードが出るまでは通常召喚したキスキルかりイラの効果を止められてしまうとそれ以上動けなくなるが多かったのだが、この別衣装バージョンが出た事で妨害を受けた時のリカバリーが効く様になったのでありがたいカードである。

『宣言・リバースカードオープン。罠カード『S—Force チェイス』発動。フィールドの「S—Force」モンスターの種類の数まで相手フィールドの表側表示のカードを対象として発動できる。そのカードを持ち主の手札に戻す。対象とするのはLive☆Twin リイラとLive☆Twin キスキル・フロスト』

使つて来たか。「S—Force」モンスターの種類の数まで手札に戻すという非常に強力な除去カード。グラビティノの効果でデッキから手札に加えていた事は分かっていたので伏せられていたカードはあれだと予測は出来ていた。

ME—PSY—YAのフィールドにはラプスウエル、プラレティナ、グラビティノ、ジャステイファイの計四種類の「S—Force」モンスターが居る。つまり、最大で四枚のカードを手札に戻す事が出来る。しかし、ここでS—Force チェイスを使ったという事はこちらにリンク素材に成り得るモンスター二体を並べさせたくなかつたからだろう。

だが、そのグラビティノがフィールドに居る事によってS—Force チェイスはまた違った一面を見せる事になる。

『追記：S—Force グラビティノがモンスターゾーンに存在する限り、自分の「S—Force」モンスターの正面の相手モンスターはフィールドから離れた場合に除外される。S—Force ジャステイファイの正面に居るLive☆Twin リイラは除外される』

キスキル・フロストは正面にS—Forceモンスターが居ないモンスターゾーンに置いていたため除外されることは無く、手札に戻って来るがりイラは手札に戻る事は無く除外されてしまう。

だが、これでME—PSY—YAは全ての妨害を使い切った事になる。奴に残る一枚の手札は効果を使った事で手札に戻った小夜丸だ

という事は判明している。

「魔法カード『三戦の才』発動！ このカードはこのターンの自分メインフェイズに相手がモンスターの効果が発動している場合、三つの効果の内一つを選択して発動する事が出来る」

三戦の才は発動するために条件がある代わりに禁止カードである『強欲な壺』の二枚ドロウ、『心変わり』のコントロール奪取、『強引な番兵』のピーピングハンデスと言う強力な効果を使うことが出来る。

さて、どの効果を使うかだが、相手の手札は既に判明しているためハンデスの必要は無い。

ジャステイファイのコントロールを奪うのは悪くは無いが、コントロール奪取をするとジャステイファイはこちらのフィールドではメインモンスターゾーンに置く事になる。そうするとジャステイファイのリンク先に相手モンスターは居ないのでダメージステップ時の除外効果を十全に使うことが出来ない。

となれば、使う効果は一択だ。

「俺は、デッキからカードを二枚……ドロウする!!」

デッキトップから引き抜いたカードを横目で見ると、ドロウカードは『Live☆Twin リイラ・トリート』と『大欲な壺』。

「さらに、手札から速攻魔法『大欲な壺』を発動！」

Evil★Twinとティアラメンツと言う墓地を利用するテーマという事で万が一除外された時のリカバリー用の札として最後まで『異次元からの埋葬』とどちらを採用するか迷ったカードだが、今の状況を考えれば間違いではなかったみたいだな。

「除外状態のルルカロス、Evil★Twin キススキル、Live☆Twin リイラをデッキに戻し、一枚ドロウする！」

ドロウカードは……『死者蘇生』。

Evil★Twinの片割れであるキススキルはEXデッキに戻った。

そして、キーカードは既に墓地に存在している。

挽回のルートは見えた！

「俺は、魔法カード『死者蘇生』を発動！ 墓地の『Live☆Twin

n キススキル』を特殊召喚する！」

Live☆Twin キススキル

光属性／レベル2／DEF0

「特殊召喚されたキススキルの効果を発動！ デツキからLive☆Twin リイラを特殊召喚する！」

『宣言：スキル発動。光ライトニング・ジャッシュメントの裁き』

それは1ターン目の再現だ。光属性サイバース族モンスターの効果を無効化するインチキススキル。だが、流石に三度も食らう訳にはいかない。

一度目は本来スキルが使えないマスターデュエルでのスキル発動と言う事で反応出来なかった。

二度目は一デュエル中に二回目のスキル発動という事で虚を突かれた。

だが、三度目は無い！

「俺もスキル発動だオラア！」

そう叫びながら俺は杖にしていたガラテアの大鎌に備え付けられたコアに紫宵の輝きを灯しながらデュエルフィールドの中央目指して投げつける。大鎌は回転しながら投げられた勢いで刃が地面に深く突き刺さる。

『……………不発？』

「紫宵の輝きを放つガラテアの大鎌はリンク状態ではない決闘者のスキル発動を封じる！」

多分出来るだろうなーと思いつつも勢いに任せて「スキル発動！」なんて大嘘をこいてみたのだが、思った通り奴はスキルの発動をする事が出来なくなったようだ。

一方で、元よりマスターデュエルではスキルを使えない俺には何のデメリットも無い。

「お前のスキルは発動出来なかった。よって、キスキルの効果は通る！ デツキからリイラを特殊召喚！ 現れる、想いを繋げるサーキット！ 召喚条件は「キススキル」モンスターを含むモンスター二体！ キススキルとリイラをリンクマークカーにセット！ リンク召喚！ リ

リンク2、『Evil★Twin キススキル』！」

Evil★Twin キススキル

光属性／リンク2／ATK1100

「Evil★Twin キスキルの効果！ フィールドに「リイラ」モンスターが居ないため、俺は墓地から『Evil★Twin リイラ』を特殊召喚する！」

Evil★Twin リイラ

闇属性／レベル2／ATK1100

こうして再び二人の怪盗がフィールドに並び立った。

「さらに！ Evil★Twin リイラの特殊召喚時、フィールドにキススキルが居る事によって効果発動！ フィールドのカード1枚を対象として発動できる。そのカードを破壊する。破壊するのはグラビティーナ！」

『了承…』

リイラの効果を妨害する手段はME—PSY—YAには無い為、リイラの効果によって奴のフィールドのグラビティーナが破壊される。

だが、俺のメインフェイズはまだ終わらない。

「フィールドのリンクモンスター2体をリリースする事で墓地に存在するこのカードを特殊召喚する！」

『…………』

キススキルとリイラが入れ替わり立ち代わりするフィールドを何も言わずに眺めていたME—PSY—YAは俺の発言に注目した。

「サイバース世界の怪盗。今こそ、摩天の楼閣に注目集めて舞い降りろ！現れる！ 『Evil★Twin キススキル・リイラ』!!」

Evil★Twin キススキル・リイラ

闇属性／レベル8／ATK2200

冠名がEvil★Twinへと変わり、二人で一つのモンスターとなったキススキルとリイラ。Evil★Twinのキススキルとリイラは相方が居る時と居ない時で異なる効果を駆使するモンスターだったが、二人が合わさりキススキル・リイラとなる事で新たな能力を

得る。

「キスキル・リイラの効果発動！ このカードが特殊召喚に成功した場合、相手は自身のフィールドのカードが三枚以上の場合には二枚になるように墓地へ送らなければならない！」

『…』

キスキル・リイラの除去効果は『拮抗勝負』と同じく対戦相手に効果を強制させる効果であり、『RR—アルティメット・ファルコン』の様に他のカードの効果を受けない所謂完全耐性持ちのモンスターも除去する事が出来る。

まあ、墓地に送るカードの選択は対戦相手が行うので大抵は除去したいモンスターを除去できないのだが……今回の様に兎に角相手フィールドのカードの数を減らしたい場合には有効だ。

相手が墓地に送ったカードはプラッティナとPゾーンに置かれていたME—PSY—YA。奴のスキルによってPゾーンに置かれたME—PSY—YAは俺が使うカードの効果で破壊する事は出来ないが、キスキル・リイラの効果であれば除去する事も出来る。

まあ、デュエルモンスターズには破壊以外にも手札やデッキに戻す、除外する、墓地に送る等の除去手段があるのでどうとでも出来るのだが。

兎に角これで相手のフィールドに残ったカードは守備表示のラプスウェルとジャスティファイのみ。思った通りME—PSY—YAは壁となるモンスターを残したな。

「さらに、フィールドに「キスキル」モンスターが存在するため、俺は手札から『Live☆Twin リイラ・トリート』を守備表示で特殊召喚する！」

Live☆Twin リイラ・トリート

闇属性／レベル2／DEF0

キスキル・リイラも当然「リイラ」モンスターとして扱う為、トリートの特殊召喚も可能。

「現れる、想いを繋げるサーキット！ 召喚条件はカード名が異なるモンスター二体！ キスキル・リイラとリイラ・トリートをリンク

マーカードにセット！ リンク召喚！ リンク2、『トロイメア・ケルベロス』！」

トロイメア・ケルベロス

地属性／悪魔族／ATK1600

Evil★Twinnの蘇生効果を使うとEXデッキから悪魔族モンスターしか特殊召喚出来ないという縛りが付く。だが、トロイメアリンクモンスターは全て悪魔族のモンスターであるため問題なく使う事が出来るためEvil★Twinnと相性が良いカード群だ。

『当機のジャステイファイのリンク先にトロイメア・ケルベロスをリンク召喚するか』

「ケルベロスの効果発動！ このカードがリンク召喚に成功した場合、手札を一枚捨て、相手のメインモンスターゾーンの特殊召喚されたモンスター一体を対象とし、破壊する！ ラプスウェルを破壊！」

『了承…』

俺は手札に戻されたキスキル・フロストを手札から捨てる事でケルベロスの効果を発動させる。

ラプスウェルは小夜丸の効果によってメインモンスターゾーンに特殊召喚されたモンスター。つまり、ケルベロスの効果の対象に取ることが出来る。

だが、ケルベロスの効果はこれだけではない。

「さらに、この効果の発動時にこのカードが相互リンク状態だった場合、自分はデッキから一枚ドロー出来る！」

自分のEXゾーンではなく、わざわざジャステイファイの正面にケルベロスをクリック召喚したのはこの追加効果を使うためだ。ジャステイファイの上向きのリンクマーカードとケルベロスの上向きのリンクマーカードによってこの二枚は相互リンク状態となる。

引いたカードは……『星遺物を継ぐもの』。

「はは……」

星遺物の名を冠する通り、このカードはガラテアとも関連する聖遺物テーマのカード。だが、このカードは二枚目の死者蘇生としても使うことが出来る準汎用カード。普段の俺は融合テーマであるシヤ

ドールやティアラメンツだとか、シンクロテーマであるガスタを愛用しているため以前から持っていたカードではあったのだが、余り使う事が無かった。

一方でEvil★Twinはリンクテーマであるためお守り汎用枠として一枚挿していたのだが、俺の選択は間違いではなかったな。「今回は随分お前に助けられたな……」

誰かに聞かせるためという訳でもなく俺は一人呟く。

ガラテアが残してくれた力が無ければサイバース精霊界に拉致された時点で俺は終わってしまっていただろう。そして、デュエルでも……。

「手札から魔法カード『星遺物を継ぐもの』を発動！ 自分の墓地のモンスター一体をフィールドのリンクモンスターのリンク先となる自分フィールドに特殊召喚する。蘇れ！ 『Evil★Twin リイラ』！」

Evil★Twin リイラ

闇属性／リンク2／ATK1100

リイラをケルベロスのリンク先である中央のメインモンスターゾーンに特殊召喚する。

「リイラの効果発動！ 自分フィールドに「キスキル」モンスターが存在しないため、墓地からEvil★Twin キスキルを特殊召喚！」

Evil★Twin キスキル

光属性／リンク2／ATK1100

「フィールドに「リイラ」モンスターが居る事で、特殊召喚したキスキルの効果でカードを一枚ドロウする！」

ドロウしたカードは『壺世壊を揺るがす鼓動』。ペルレイノ戦では大変お世話になったカードだが、今の状況では不要か。

「再び現れる、想いを繋げるサーキット！ 召喚条件はカード名が異なるモンスター二体以上！ リンク2のトロイメア・ケルベロスとEvil★Twin キスキルをリンクマーカーにセット！ 憤怒を越えたその先へ、勝利の先駆けとなって駆け抜ける！ リンク召喚！」

リンク3、『トロイメア・ユニコーン』！」

トロイメア・ユニコーン

闇属性／リンク3／ATK2200

「ユニコーンの効果発動！ このカードがリンク召喚に成功した場合、手札を一枚捨て、フィールドのカード一枚を対象とし、持ち主のデッキに戻す！ 俺が対象とするのはジャスティファイ！」

『了承……………』

「さらに、リイラのリンク先にリンク召喚されたユニコーンは自身のリンクマークカーによって相互リンク状態にあるため、さらに一枚ドロウする！」

ユニコーンの効果を発動するために墓地へ送った『壱世壊を揺るがす鼓動』は効果によって墓地へ送られたのではなく、効果発動のためのコストによって墓地へ送られたため効果を発動する事は出来ない。まあ、出来たとしても今俺の墓地には「ティアラメンツ」罨カードは無い為使えないから関係ない。

これでジャスティファイがフィールドから居なくなった事でME―PSY―YAのフィールドはがら空きになった。

しかし、俺のフィールドに居るリイラとユニコーンの攻撃力の合計は3300であるため相手のライフポイント4000を削り切ることは出来ない。

だが！

「フィールドのリンクモンスター二体をリリースする事で墓地に存在するキスキル・リイラを特殊召喚する!!」

『……………素晴らしい』

Evil★Twins キスキル・リイラ

闇属性／レベル8／ATK2200

本来はリンクモンスターのキスキルとリイラをリリースして特殊召喚する事が想定されたモンスターだったのだろうが、キスキル・リイラはリンクモンスターであれば何でもリリースして特殊召喚する事が出来る。

ユニコーンがその背にキスキルを乗せてやって来た様に見えたが、

気のせいだったろうか？

「自分の墓地に「キスキル」モンスター及び「リイラ」モンスターが存在する限り、キスキル・リイラの攻撃力・守備力は2200アップする！」

Evil★Twins キスキル・リイラ

ATK2200↓ATK4400

「バトルだ!! キスキル・リイラでダイレクトアタック!!」

ME—PSY—YA

LP4000—4400↓LP0

未来のために

『……………当機の敗北』

キスキル・リイラの一撃が決まり、ME—PSY—YAのライフポイントは一気に消し飛ぶ事となった。

デュエルの勝敗が決まった事でシステムによって実体化していたキスキル・リイラは役目を終えたと言わんばかりに消えて行ってしまふ。それに合わせて決闘盤を待機モードデュエルディスクに戻す。

「さて、俺のカードは返してもらおう」

『当機の敗北によって当機は個体名「世良」の行動を阻止する事は出来ない』

俺はぶん投げて突き立てたガラテアの大鎌を回収してからインフェルノイドの真空管の前まで歩いていく。

「帰ってこい」

並んだ真空管の中の一つ。何となくミドラーシユの力が捕らえられていると感じる真空管目掛けてガラテアの大鎌で強く叩くと、その真空管を構成しているガラスが砕け散る。すると、奪われた彼女の力が解放され、俺の影に吸い込まれる様に消えて行った。きつとミドラーシユが回収したのだろう。

それに連鎖する様に残りの真空管も次々と壊れていき、奪われたシャドール達も同様に俺の影の中に帰る様に吸い込まれていく。

『理解…これが決闘者の真価。これがデュエルモンスターズの可能性……………』

「ん？」

俺とのデュエルに負けた事でME—PSY—YAの身体は消滅の過程を辿っていた。

『理解…であるならば、やはり当機にも……………可能性はあるという事』

「お前、何を……………ッ！」

ME—PSY—YAの身体は既に半分以上が消えており、精霊としての奴の時間はもう僅かしか無いというのに、まだ何かするつもりなのか？

『理解：当機自身が……精霊と決闘者の可能性を示す……データとなれば良い……』

「まさか！」

『理解：決闘者の諦めない心。デュエルモンスターの精霊である当機もまた、同じ様に……当機も……光の創造主の……ために……』

ME—PSY—YAの喋り声は機械的な単調な喋りではなく、うわ言を呟く様な震え声だ。

「……もしかして俺、ME—PSY—YAに余計な事を学習させたか？」

『施行：対象アドレスを検索。検索完了。専用回線確立。当機の有するデータを可逆圧縮。イグニスコードによるプロテクトを処置。データアップロード開始……0%……26%……48%……』

ME—PSY—YAから抽出されるデータがどこかへと送信されていく。それは恐らく奴の創造主であるライトニングだろう。このデータを完全に送られてしまったら結局ライトニングに新たな知識を学習させてしまう事になる。

それだけは阻止しなければならない！

「ツッ・ミドラーシユ！」

俺の呼び声を聞いたミドラーシユは即座に俺の影から多数の影系をME—PSY—YAに伸ばしていく。影系はME—PSY—YAの身体中に巻き付き、そのまま縛り上げる。

『施……行中……データ……アップロー……ド率……7……3%……断……』

「……間に合ったのか？」

ME—PSY—YAから発せられる言葉は途切れ途切れになり、とうとう完全消滅の時間が来たのか、ME—PSY—YAによるデータの送信は中断された。奴の姿は完全に消滅し、そこに残ったのは一枚のカードだけだった。

ME—PSY—YAが消えた事でこの真っ白な空間も維持出来なくなっただのか、周囲の空間自体に綻びが見え始める。ガラスが割れる様な音と共に真っ白な景色はここに来る前に居たブリッジヘッドに

あるワープゲートの目の前に立っていた。

「あえ！ ラッセさん!?! いつの間に!?!」

「おやおや？ その様子だと、チャレンジは成功したのかしら？」

「みんな！」

ブリッジヘッドに戻って来た事で、それっきり別れてしまったマスカレーナ、キスキル、リイラ、小夜丸と合流出来たらしい。

真っ白な空間から戻って来た事で彼女達にとっては俺が突然そこに現れた様に見えたのだろう。マスカレーナが酷く驚いている様子が何となく面白い。

「こっちは何事も無かったか？」

「ええまあ。何も無かったと言えば何も無かったかしら？ ラッセ君が居なくなっただけかと思っただら君の影だけがこの場に残ってたのは何かあったと言っても良いのかな？」

「え？ 俺の影だけ？」

「ええ。それはもうまるで影法師の劇の様に地面に映し出された世良さんの影が動く様子で何が起こっているのか何となく分かりましたよ」

何それ、怖い。

リイラと小夜丸が話してくれた衝撃の内容に俺はちよつとビビってしまった。ME—PSY—YAが作り出した空間の中でもちやんと俺の影は存在していたと思っただが、どうやらミドラーシュはデュエル中俺の傍には居なかったらしい。

「どうもラッセさんが消えたと思ったらミドラーシュさんだけはこの場所に取り残されてしまったみたいで、そのままラッセさんの影に成りきって実況してくれましたよ」

「無声映画みたいで中々面白かったわね。まあ、ラッセ君が戻って来る少し前に消えちゃったんだけど」

「そうだったのか」

もしかすると、ME—PSY—YAが作り出した空間には力を失っていた状態のミドラーシュでは立ち入ることが出来なかったのだろう。デュエルが終わってから彼女の力を解放した事でようやく中に

入ることが出来たんだな。

でもまあ、ミドラーシユが間に合ってくれたお陰でライトニングに必要な情報を与える事を防ぐ事は出来……

俺はあの時ME—PSY—YAが呟いていた事を思い出す。

『施……行中：データ……アップロー……ド率……7……3%
……施行……中……断……』

中断……中断？　じゃあアップロードが既に終わっていた73%分の情報は……？

あれ？　これはもしかして……。

……マズイ？

「ラツセさん？　どうかしたんですか？」

突然顔を伏せて黙り込んだ俺を見て不思議に思ったのか、マスカレーナは覗き込むようにして俺の方を見つめて来る。

そうすると当然俺からも彼女の顔が見える事になる。

「？　どうかしましたか？」

そうか……。

勿論彼女の気持ち次第ではあるけど、悪くない選択なのかもな……。

☆

「……う、うーん……立ちっぱなしで足が痛え……」

Caf・Nagiのログインルームの扉を開けると、その向こうにはつい最近見知るようになった二人が居た。

「世良、戻って来た様だな」

「お疲れさん。意外と早かったな。無事に大切な物は取り返せたか？」

「藤木、草薙さん……。ええ、取り返して来ましたよ」

そう言つて俺はしつかりとカードの表面が記入されたシャドール達を二人に見せる。

精霊界に持ち込んだデツキはティアラメンツEvil★Twinnデツキであつたため、実は向こうでシャドールカードがちゃんと元に戻っているかを確認する事は出来なかつた。現実世界に戻つて来てからすぐにサブデツキケースに入れておいたシャドールカードを確認したのは言うまでもない。

「まだ昼前か……」

キッチンカーであるCaf・Nagiの提供窓は閉められており、外の様子は伺えなかつたのだが、チラツと見えた大型モニターの隅にある時計を見る事で今の時刻を確認する事が出来た。

俺の感覚としても精霊界にはもつと長い時間居たと思うが、人間界と精霊界で流れる時間の早さが違う様なのでおかしなことは無い。

「一仕事終えて疲れただろ？ コーヒーでも淹れよう」

「ありがとうございます」

草薙さんがそう言つてくれたのと同時に、緊張が解けたのか我慢出来ずに腹を鳴らしてしまう。そう言えば今日は荒事になるだろうと踏んで朝ご飯を少なめに食べて来ていた事を思い出した。

「ふつ、一緒にホットドッグも出そうか？」

「お願いします……。お金は払うので……」

「気にするな」

草薙さんはコーヒーを淹れるためにカップをもってコーヒーメーカーの方へと向かう。

「なあ、藤木」

「なんだ？」

「お前に……Playmakerに話しておかなきゃならない事がある」

「？」

俺の発言に少し驚く様子を見せる藤木。そして、横で聞いて居た草薙さんも注意を引かれた様だ。

「今回、俺のシャドールカード達を奪つて行つた黒幕なんだが……こ

「いつだ」

「サイバース族の……ペンデュラムモンスター？」

それは先程まで俺がデュエルをしていた相手でもある『人攻智能ME—PSY—YA』のカードだ。

サイバース精霊界にアバターで行った俺は精霊界から物を持ち帰ることは出来ない。それをすり抜けるために一度ミドラーシユに預かってもらってから現実世界でミドラーシユから返して貰う事でこの場にME—PSY—YAのカードを取り出している。

ちなみに、家ではないのでいつもの封印処置が出来ていないので少しだけ不安なのは秘密だ。家に帰ったら予備のスクリューダウンとホットボンドを押し入れから取り出すことを忘れない様にしないといけない。

「こいつは精霊と決闘者の関係に関するデータを集めて自身の創造主に送るためにこんな事をした様だ」

「精霊とデュエリストの関係？」

「まあ、そのデータがどんな物なのか詳しくは俺には分からない。だけど、こいつが言う創造主って言うのは……」

「イグニス！」

「……だろうな。俺は藤木がPlaymakerとして戦った時の事を聞いた。そして、イグニスに由来する精霊が妙な活動をしているのが気になるんだ」

「……まだ……終わっていないと言うのか……」

「そうだ。」

遊作の戦いはまだ終わらない。

もう二か月もすればライトニングが本格的に動き始める。そうなれば鴻上博士が亡くなった事で闇に葬られたロスト事件の真相を彼は知る事になるのだ。

そんな戦いに本来の物語では関わるはずの無かった精霊と言う要素が加わればこの世界がどうなるか分からない。

だから、彼には必要だろう。

精霊と戦うための知識と力が。

「藤木、このカードを受け取って欲しい」

「これは……『I:P マスカレーナ』？」

『じゃじゃーん！ こうしてお話するのは初めてですね、Play maker！ 私の名前はI:P マスカレーナです！』

「なっ！ これは？」

「うお!? これがカードの精霊って奴なのか？ 俺にも見えてるぞ？」

マスカレーナはいつもの精霊体ではなく、デュエルディスクのソリッドビジョンシステムとスピーカーを利用して俺の決闘盤から身体を突き出すようにして疑似的な実体化をしている。それはまるで闇のイグニスであるAiが遊作の決闘盤でしていたように、ガラテアが俺の決闘盤していたのと同じ様だ。

☆

時は戻り、現実世界に戻ってくる前の事。

サイバース精霊界にあるブリッジヘッド。そのワープゲートがある部屋で俺はマスカレーナにあるお願いをした。

「ええ!? 私をPlay makerに渡す!! ……え？ 私捨てられちゃうんですか!!」

「いや、そうは言っていないが？」

俺の発言を聞いたマスカレーナはいつもの海外顔文字みたいな顔ではなく、絵文字のピエンみたいな顔をして瞳をウルウルとさせている。そんな顔をされてしまうと俺としても心苦しいのだが……。

「勿論、マスカレーナが嫌ならそう言ってくれ。だが、今回の事件でサイバース族の精霊が関わっていたとなると、イグニスと関りが深い藤木も同じ様に巻き込まれる可能性が高い……」

当然、遊作が精霊関連の事件に巻き込まれたら俺も協力するつもりだが、何時でも何処でも彼の力になれるとは限らない。そんな時に遊作の傍に信頼できるデュエルモンスターズの精霊が居てくれたら俺も安心できると言う物だ。

それに、遊作が精霊の声を聞く事が出来たならアプローチを掛けていたと彼女が言う程に遊作のデュエルタクティクスは卓越している。サイバース族を操る遊作ならマスカレーナの実力を十二分に発揮させることが出来るだろう。

それに引き換え、散々マスカレーナをデッキに入れてくれと頼まれた俺は最近リンク主体のデッキを余り使っていない事もあつて彼女を使い切れているとは言い難い。今回のデュエルなんか、Evil★TwinのEXデッキから特殊召喚出来るモンスターが悪魔族に限定されてしまう縛りがあつたとはいえ、一度もフィールドに出す場面は無かつた。

意外にもデュエルで活躍する事を楽しんでいる彼女としては面白くないのではなからうか？

実は今回の件が起こる前からそんな事をずっと考えていた。

だが結局の所、彼女にこんな事を頼める一番の理由は……

「どうだろうか？ こんな事をお願いできるのは……マスカレーナしか居ないんだ」

「ラッセさん……」

俺が彼女の事をミドラーシユと同じくらい信頼しているからだ。

彼女との付き合いは精霊の中でもミドラーシユの次に長い。いや、ミドラーシユが俺の前に姿を見せなかつた期間を除けば一番付き合いが長い精霊はマスカレーナだろう。

そんな彼女だからこそ、この世界を託せるんだ。

「……もう、仕方ないですね。ラッセさんがそこまで言うという事は何か理由があるんですよね？」

「ああ。藤木……いや、Playmakerを道半ばで倒れさせる訳にはいかないんだ。世界がヤバイ」

「いやいや、そんなまさか。……流石に冗談ですよね？ ……マジですか？」

俺が現実世界に戻る少し前の僅かな時間。

そんな会話が成された。

☆

『という訳で、ガラテアシステムを応用して私は人間界でも姿を現せる様になったという訳なのです!』

「ガラテアシステム? ガラテアとは、以前世良が連れていたAIと同じ名前だな」

「ん? ああ。彼女もカードの精霊だから……あれ? 言っただけなかつたっけ?」

「聞いていない」

あれ? そうだっけ?

確かに最初遊作にガラテアを見られた時は精霊の話をした所で信じて貰えないだろうと思ってAIと勘違いしたまま話を進めさせてもらったけど、先日精霊の話をした時に一緒にガラテアの事も説明したような気がしたのだが……。してないかも。

「細かい説明は省くけど、ガラテアのニーサン……ニーサン? いや、正確には父親? まあ、兎に角度し難い変態みたいな奴が居るんだが」

「どういう奴なんだそいつは?」

いや本当にね……。何なんだろうねあのニーサンは……。

草薙さんの疑問は至極当然だと思うな、俺も。

「……それで、あいつは精霊であるガラテアを人間世界で疑似的にも実体化出来る様に俺の決闘盤を勝手に弄ったみたいでな、そのシステムを使えばマスカレーナでも同じ様な事が出来るって気が付いたらしいんだ」

『えっへん。私、こっち方面には強いので。Playmakerの決闘盤にもインストールしてあげますよ』

決闘盤の上に立つ様に表示されたマスカレーナは胸を張って自慢している様だが、決闘盤の上立てる様なミニチュアサイズなので何となく締まりが悪い。

本当ならマスカレーナが改修したガラテアシステムはそんな物を使わなくとも精霊と話が出来る俺の傍にずっと居たため目の目を浴

びる予定は無かったそうだが、遊作に渡すと言う話をした時に「そういう事なら」と説明してくれたのだ。

「……ウイルスとか」

『入ってないですよ！』

物静かな遊作に賑やかなマスカレーナと言うコンビは案外悪くないのかもしれないな。それこそ、今まで遊作の傍にはA iが居た訳だし不思議ではないか。

それに、マスカレーナは闇属性のサイバース族モンスターだ。もしかなくても元々二人の相性は悪くないのかもしれない。だけど、マスカレーナがああ位置に陣取っていたらA iが戻って来た時に喧嘩になりそうだな？ まあ、何とか折り合いを付けて貰う事を期待しよう。

「そういう訳で、これから藤木も精霊に関わる機会があるかもしれない。そんな時、マスカレーナが力になってくれるはずだ」

「……分かった。そういう事ならこのカードはしばらく預らせてもらう。そして、全てが本当に終わったら、このカードを世良に返そう」

「……藤木……ああ！」

俺の下へやって来たデュエルモンスターの精霊達はミドラーシユ以外いつも俺から去って行った。

それは彼・彼女達が望むマスターを見つけたから、やりたい事を見つけたから、逆に人間界に興味が無くなったから……。

悲しさはある。寂しさもある。友人との別れはいつも辛いものだ。

それでも、今回はまた会えると言う希望がある。

……ていうか、C a f ・ N a g iに来れば何時でも会えるし、学校でも機会があれば会えるだろう。

俺が生きるこの科学技術全盛のこの世界はこれからも続いていくはずなのだから。

「本当に良かったのか？」

『何がですか？』

「世良の下を離れた事だ」

『ああ、その事ですか。ラッセさんには私の最新型50インチテレビの借りを返して貰う必要がありますので、逃がしはしませんよ？』

「？ 何の話だ？」